

熊本県文化財調査報告 第245集

江津湖遺跡群 健軍京塚下遺跡

一般国道57号熊本東バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

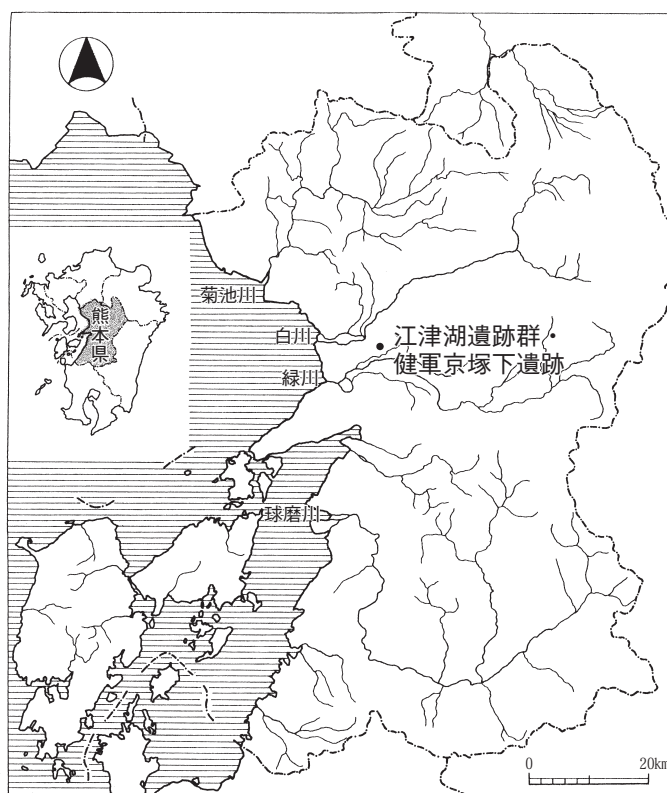
2008.3

熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education, Kumamoto Prefectural Office

江津湖遺跡群 健軍京塚下遺跡

一般国道57号熊本東バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008.3

熊本県教育委員会

序 文

一般国道57号熊本東バイパスは、熊本市東部の主要幹線道路として交通量の増加に伴い、熊本県・熊本市ともに通行車線の増設を国に対し要望していたところであり、その要望に基づき、国土交通省熊本河川国道事務所によって6車線化事業が開始されるに至りました。

ところが、当該バイパスが建設された当時は熊本県教育庁文化課は発足まもなくで、当該事業に対して十分な対応ができておりませんでした。そこで、今回の事業に当たり、把握し切れていない埋蔵文化財を確認し、その保護を図るため、予備調査を実施しました。その結果、中央分離帯に埋蔵文化財が残されていることが分かりました。

そこで、関係部局との協議を重ね、文化財の現地における保護を望みましたが、今回の工事により破壊される箇所については発掘調査を実施し、文化財の記録保存を行うこととなりました。

平成17年6月より調査を開始しましたが、その大部分が現況道路の中央分離帯という極めて特殊な場所での調査となりました。そのため、熊本河川国道事務所には安全対策や表土剥ぎ作業への協力を頂きました。しかし、調査には様々な予想外の事態が発生し、それを克服しながら行いました。その結果、新たな遺跡の発見やこれまでの遺跡の範囲を書き換える成果がありました。

最後になりましたが、協力をいただいた国土交通省熊本河川国道事務所並びに工事関係者の方々、熊本市教育委員会の方々にはお世話になりました。改めて謝辞を申し上げます。

平成20年3月31日

熊本県教育長 柿 塚 純 男

例 言

- 1 本書は熊本県教育委員会が国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の委託を受けて実施した、熊本県熊本市加勢川に架かる江津斉藤橋から県庁通り付近までの間の一般国道57号通称熊本東バイパスの拡幅工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 関係する遺跡名は「江津湖遺跡群」と「健軍京塚下遺跡」である。
- 3 平成16年6月から平成17年4月までの期間、熊本県教育庁文化課が実施した。
- 4 発掘調査にともなう遺構の実測ならびに現地の写真撮影は、坂田和弘・濱田教靖・宮本利邦・洲崎明子が主として行い、一部作業員が補佐した。
- 5 調査区の4級基準点測量、メッシュ杭の設置作業は株式会社十八測量設計に委託した。
- 6 整理作業は平成17年4月から平成18年3月までの1年間、熊本県文化財資料室で実施したが、不備があったため、その後も修正を行った。
- 7 遺物の実測は担当調査員・整理作業員が行った。
- 8 遺構、遺物の製図は調査員・作業員が行った。写真図版掲載の遺物の写真撮影は調査員が行った。

凡 例

- 1 全調査区位置関係図は熊本市発行の2,500分の1の地図をもとに作成した。
- 2 現地での実測図縮尺は原則として、遺構配置図を100分の1、各遺構・土層を20分の1としたが、必要に応じて縮尺を変えた。本書への掲載縮尺は基本的に遺構は50分の1、30分の1とし、図中に縮尺を示した。
- 3 出土遺構には現地で調査区毎に全ての遺構に「S-通し番号」として遺構番号をふったが、本書への掲載にあたっては、調査区毎に遺構種類に分けて遺構番号をふった。
- 4 遺物については、遺構それぞれごとに一連番号とした。遺物の掲載縮尺は3分の1を基本とし、石器は3分の2とし、それぞれ縮尺は図中に表示した。
- 5 出土遺物のうち必要な解説は本文中に記した。種別・形式・法量出土層位等については、巻末の観察表に掲載した。

『江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡』目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査にいたる経過	1
第2節	調査の組織	2
第3節	本調査の方法	2
第4節	調査の概要	3
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	8
第Ⅲ章	江津湖東－Ⅰ区	
第1節	調査の経過と概要	11
第2節	江津湖東－Ⅰ区	13
第Ⅳ章	江津湖東－Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区	
第1節	調査の経過	27
第2節	調査の概要	27
第3節	江津湖東－Ⅱ区	29
第4節	江津湖東－Ⅲ区	33
第5節	江津湖東－Ⅳ区	99
第Ⅴ章	健軍京塚下遺跡	
第1節	調査経過と概要	105
第2節	健軍京塚下－Ⅰ区	109
第3節	健軍京塚下－Ⅱ区	117
第Ⅵ章	総括	141

挿 図 目 次

第1図	江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡調査区位置図	4
第2図	熊本市および周辺地域の地形分類図	7
第3図	I区遺構配置図(S=1/200)	12
第4図	I区1号竪穴建物実測図(S=1/50)	13
第5図	I区1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	14
第6図	I区2号竪穴建物実測図(S=1/50)	15
第7図	I区2号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	16
第8図	I区3号竪穴建物実測図(S=1/50)	17
第9図	I区3号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	18
第10図	I区4号竪穴建物実測図(S=1/50)	19
第11図	I区4号竪穴建物土器集中部実測図(S=1/50)	20
第12図	I区4号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	21
第13図	I区4号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	22
第14図	I区4号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	23
第15図	I区4号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	24
第16図	I区pit・トレンチ・一括出土遺物実測図(S=1/3)(16・17:S=1/2)	26
第17図	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区位置関係図	27
第18図	江津湖東Ⅲ区基準土層図	28
第19図	Ⅱ区遺構配置図(S=1/200)	29
第20図	Ⅱ区1号土壙実測図(S=1/30)	30
第21図	Ⅱ区1号溝実測図(S=1/50)	30
第22図	Ⅲ区遺構配置図(S=1/200)	31・32
第23図	Ⅲ区1号竪穴建物実測図(S=1/50)	33
第24図	Ⅲ区1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	33
第25図	Ⅲ区2号竪穴建物実測図(S=1/50)	34
第26図	Ⅲ区2号竪穴建物貼床除去後図(S=1/50)	35
第27図	Ⅲ区2号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	35
第28図	Ⅲ区2号竪穴建物床下出土遺物実測図(S=1/3)	36
第29図	Ⅲ区3～7号竪穴建物実測図(S=1/50)	37・38
第30図	Ⅲ区3号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)	39
第31図	Ⅲ区3号竪穴建物カマド出土遺物実測図(S=1/3)	39
第32図	Ⅲ区6号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)	41
第33図	Ⅲ区6号竪穴建物カマド出土遺物実測図(S=1/3)	42
第34図	Ⅲ区3～7号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	43
第35図	Ⅲ区3～7号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	44
第36図	Ⅲ区8号竪穴建物実測図(S=1/50)	44
第37図	Ⅲ区8号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)	45
第38図	Ⅲ区8号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	46

第39図	Ⅲ区9号竪穴建物実測図(S=1/50)	48
第40図	Ⅲ区9号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)	49
第41図	Ⅲ区9号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	50
第42図	Ⅲ区10号竪穴建物実測図(S=1/50)	51
第43図	Ⅲ区11号竪穴建物実測図(S=1/50)	52
第44図	Ⅲ区11号竪穴建物実測図(S=1/50)	53
第45図	Ⅲ区11号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	54
第46図	Ⅲ区11号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	55
第47図	Ⅲ区12号竪穴建物実測図(S=1/50)	56
第48図	Ⅲ区13号竪穴建物実測図(S=1/50)	57
第49図	Ⅲ区13号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	58
第50図	Ⅲ区14号竪穴建物実測図(S=1/50)	59
第51図	Ⅲ区14号竪穴建物カマド実測図(S=1/50)	60
第52図	Ⅲ区14号竪穴建物床下土壌実測図(S=1/50)	61
第53図	Ⅲ区14号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	61
第54図	Ⅲ区15号・16号竪穴建物実測図(S=1/50)	62
第55図	Ⅲ区1号掘立柱建物実測図(S=1/50)	63
第56図	Ⅲ区1号掘立柱建物出土遺物実測図(S=1/3)	63
第57図	Ⅲ区2号掘立柱建物実測図(S=1/50)	64
第58図	Ⅲ区2号掘立柱建物出土遺物実測図(S=1/3)	65
第59図	Ⅲ区3号掘立柱建物実測図(S=1/50)	66
第60図	Ⅲ区1号土壌実測図(S=1/30)	67
第61図	Ⅲ区2号土壌実測図(S=1/20)	68
第62図	Ⅲ区2号土壌出土遺物実測図(S=1/3)	68
第63図	Ⅲ区3号土壌実測図(S=1/20)	69
第64図	Ⅲ区4号土壌実測図(S=1/30)	70
第65図	Ⅲ区5号土壌実測図(S=1/30)	70
第66図	Ⅲ区5号土壌出土遺物実測図(S=1/3)	70
第67図	Ⅲ区6号土壌実測図(S=1/20)	71
第68図	Ⅲ区7号土壌実測図(S=1/30)	71
第69図	Ⅲ区8号土壌実測図(S=1/30)	72
第70図	Ⅲ区8号土壌出土遺物実測図(S=1/3)	73
第71図	Ⅲ区9号土壌実測図(S=1/30)	74
第72図	Ⅲ区10号土壌実測図(S=1/30)	74
第73図	Ⅲ区10号・11号土壌実測図(S=1/30)	75
第74図	Ⅲ区11号土壌実測図(S=1/30)	75
第75図	Ⅲ区12号土壌実測図(S=1/30)	76
第76図	Ⅲ区13号土壌実測図(S=1/30)	76
第77図	Ⅲ区1号溝実測図(S=1/50)	77
第78図	Ⅲ区1号溝実測図(S=1/20)	78

第79図	Ⅲ区1号溝実測図(S=1/20)	79
第80図	Ⅲ区1号溝出土遺物実測図(S=1/3)	80
第81図	Ⅲ区1号溝出土遺物実測図(S=1/3)	81
第82図	Ⅲ区1号溝出土遺物実測図(S=1/2)	82
第83図	Ⅲ区2号溝実測図(S=1/50)	83
第84図	Ⅲ区2号溝出土遺物実測図(S=1/3)	84
第85図	Ⅲ区3号溝実測図(S=1/50)	84
第86図	Ⅲ区3号溝出土遺物実測図(S=1/3)	84
第87図	Ⅲ区4～6号溝実測図(S=1/50)	85
第88図	Ⅲ区4号溝出土遺物実測図(S=1/3)	85
第89図	Ⅲ区7号・8号溝実測図(S=1/50)	86
第90図	Ⅲ区7号溝出土遺物実測図(S=1/3)	87
第91図	Ⅲ区8号溝出土遺物実測図(S=1/3)	87
第92図	Ⅲ区9号溝実測図(S=1/50)	88
第93図	Ⅲ区10～13号溝実測図(S=1/50)	89
第94図	Ⅲ区10号溝出土遺物実測図(S=1/3)(5のみS=1/2)	90
第95図	Ⅲ区12～15号溝実測図(S=1/50)	91
第96図	Ⅲ区12号・13号溝出土遺物実測図(S=1/3)	92
第97図	Ⅲ区14号・15号溝土層断面実測図(S=1/50)	92
第98図	Ⅲ区14号溝出土遺物実測図(S=1/3)	92
第99図	Ⅲ区15号溝出土遺物実測図(S=1/3)	93
第100図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図(S=1/3)	94
第101図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図(S=1/3)	95
第102図	Ⅲ区火葬墓出土遺物実測図(S=1/3)	96
第103図	Ⅲ区内出土遺物実測図(S=1/3)	97
第104図	Ⅲ区内出土遺物実測図(S=1/3)(19のみS=1/2)	98
第105図	Ⅳ区遺構配置図(S=1/200)	99
第106図	Ⅳ区1号竪穴建物実測図(S=1/30)	100
第107図	Ⅳ区1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	100
第108図	Ⅳ区1号掘立柱建物実測図(S=1/50)	101
第109図	Ⅳ区1号掘立柱建物出土遺物実測図(S=1/3)	102
第110図	Ⅳ区1号土壙実測図(S=1/30)	102
第111図	Ⅳ区1号土壙出土遺物実測図(S=1/3)	103
第112図	Ⅳ区2号土壙実測図(S=1/30)	103
第113図	Ⅳ区2号土壙出土遺物実測図(S=1/3)	103
第114図	Ⅳ区柵列状遺構実測図(S=1/50)	104
第115図	Ⅳ区柵列状遺構出土遺物実測図(S=1/3)	104
第116図	Ⅳ区検出面直上出土遺物実測図(S=1/3)	104
第117図	健軍京塚下遺跡Ⅱ区基準土層図	106
第118図	Ⅰ区遺構配置図(S=1/200)	108

第119図	I区1号竪穴建物実測図(S=1/50)	110
第120図	I区1号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)	111
第121図	I区1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/30)	112
第122図	I区ピット内出土遺物実測図(S=1/3)	113
第123図	II区遺構配置図(S=1/200)	115・116
第124図	II区1号竪穴建物実測図(S=1/50)	117
第125図	II区1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	118
第126図	II区2号・3号竪穴建物切合関係図(S=1/80)	119
第127図	II区2号竪穴建物実測図(S=1/50)	120
第128図	II区2号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	121
第129図	II区3号竪穴建物実測図(S=1/50)	122
第130図	II区3号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	123
第131図	II区4号竪穴建物実測図(S=1/50)	123
第132図	II区5号竪穴建物実測図(S=1/50)	124
第133図	II区5号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)	125
第134図	II区1号掘立柱建物実測図(S=1/50)	126
第135図	II区2号掘立柱建物実測図(S=1/50)	128
第136図	II区2号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(S=1/3)	129
第137図	II区2号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(S=1/3)	130
第138図	II区3号掘立柱建物実測図(S=1/50)	130
第139図	II区4号掘立柱建物実測図(S=1/50)	131
第140図	II区2号土壇実測図(S=1/20)	132
第141図	II区2号土壇出土遺物実測図(S=1/3)	133
第142図	II区1号・2号溝実測図(平面図:S=1/80・断面図:S=1/40)	135
第143図	II区1号・2号溝出土遺物実測図(S=1/3)	136
第144図	II区3～5号溝実測図(平面図:S=1/80・断面図:S=1/40)	138
第145図	II区3～5号溝出土遺物実測図(S=1/3)	139
第146図	II区内出土遺物実測図(S=1/3)	140
第147図	周辺の遺跡状況図	143

写真図版目次

PL. 1	江津湖遺跡群 江津湖東I区	1号竪穴建物柱検出状況(南から)
	4号竪穴建物一括遺物出土状況	2号竪穴建物完掘状況(北から)
	4号竪穴建物一括遺物復元状態	PL. 3
PL. 2	橋脚1・2トレンチ土層断面	3号竪穴建物検出状況(北西から)
	1区調査区土層断面(南東壁)	3号竪穴建物焼土出土状況(北から)
	1号竪穴建物遺物出土状況(南から)	4号竪穴建物検出状況(北から)
	2号竪穴建物遺物出土状況(北から)	4号竪穴建物遺物出土状況(北から)
	1号・2号竪穴建物切り合い土層状況(南から)	4号竪穴建物遺物集中状況(北から)
		江津湖東I区完掘状況(南西から)

	江津湖東Ⅰ区完掘状況(北東から)	14・15号溝土層断面
PL. 4	1号・2号・4号竪穴建物出土遺物	江津湖遺跡群 江津湖東-Ⅳ区
PL. 5	4号竪穴建物出土遺物	全体遺構検出状況
PL. 6	江津湖東-Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区空撮	1号掘立柱建物検出状況
PL. 7	江津湖遺跡群 江津湖東-Ⅱ区 Ⅱ区完掘状況(北から) 1号竪穴建物完掘状況(北から) 2号竪穴建物検出状況(北から) 2号竪穴建物貼床状況土層断面(東から) 2号竪穴建物貼床除去後状況(北から) 4号竪穴建物検出状況(北から)	1号土壇検出状況 1号土壇断面確認状況 SP-02半裁状況 SP-06半裁状況
	2号竪穴建物カマド状況(北西から)	PL.13 8号カマド・9号竪穴遺物出土遺物
PL. 8	6号竪穴建物カマド状況(南東から) 6号竪穴建物カマド粘土被覆状況 6号竪穴建物カマド袖石状況 6号竪穴建物カマド火床下土壇確認状況 6号竪穴建物カマド完掘状況 8号竪穴建物カマド状況	PL.14 13号・14号竪穴建物出土遺物 1号溝出土遺物
PL. 9	8号竪穴建物カマド完掘状況(西から) 9号竪穴建物完掘状況(西から) 11号竪穴建物状況(西から) 11号竪穴建物カマド状況(南から) 12号竪穴建物発掘状況 13号竪穴建物発掘状況 14号竪穴建物カマド粘土状況 14号竪穴建物カマド粘土土層断面	PL.15 15号溝出土遺物火葬墓出土遺物 PL.16 健軍京塚下遺跡-Ⅰ区・Ⅱ区 PL.17 Ⅰ区遺構溝検出状況 Ⅱ区 1号竪穴建物検出状況 Ⅱ区 1号竪穴建物遺物出土状況 Ⅱ区 1号竪穴建物カマド検出状況 Ⅱ区 1号竪穴建物カマド土層断面
PL.10	土層断面 15号・16号竪穴建物完掘状況 2号掘立柱建物完掘状況 3号掘立柱建物完掘状況 2号土壇完掘状況 3号土壇完掘状況 6号土壇完掘状況	PL.18 2号竪穴建物・3号竪穴建物切合状況 Ⅱ区 2号竪穴建物完掘状況 Ⅱ区 2号竪穴建物貼床除去後状況 Ⅱ区 2号竪穴建物貼床下土層 Ⅱ区 2号竪穴建物カマド土層 Ⅱ区 4号竪穴建物検出状況 Ⅱ区 5号竪穴建物検出状況
PL.11	11号土壇発掘状況 1号溝検出状況 1号溝石出土状況 1号溝土層断面 1号溝完掘状況 2号溝完掘状況 8号溝土層	PL.19 2号掘立柱建物SP半裁状況 Ⅱ区 2号溝完掘状況 Ⅱ区 2号竪穴建物貼床下状況 Ⅱ区 3号掘立柱建物SP半裁 Ⅱ区 竪穴建物貼床除去後状況 Ⅱ区 5号溝遺物出土状況 PL.20 Ⅱ区 3号土壇貝殻ピット 北側壁土層 A-12G付近土層 B17・18G付近土層
PL.12	14・15号溝状況	PL.21 Ⅰ区1号・Ⅱ区1号・2号竪穴建物 出土遺物 PL.22 Ⅱ区3号・5号竪穴建物 2号掘立柱建物 2号溝出土遺物 PL.23 Ⅱ区2号土壇 2号溝出土遺物

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経過

一般国道57号熊本東バイパスは、熊本都市圏の環状道路を形成する道路として、昭和36年に
 都市計画の中に盛り込まれ、その後手直しされながら昭和50年に現在の形の計画となっている。
 計画当時は国道3号及び旧57号（現在の県道熊本菊陽線）の道路混雑が著しかったため、昭和
 60年までに暫定4車線で整備がなされた。しかし、近年の交通事情に鑑み、熊本県・熊本市の
 要望に基づき、国土交通省熊本河川国道事務所が東バイパスの6車線化工事を急遽進めること
 となった。工事は平成14年度に開始し、平成17年度末には完了するという短期集中して行われ
 るものであった。

熊本東バイパス

6車線化

計画が具体化する中で、熊本県教育庁文化課と熊本河川国道事務所との協議の際に、埋蔵文
 化財等の有無について熊本県教育庁文化課への問いかけがあった。熊本東バイパスが建設され
 た当時は、熊本県の文化課自体が発足間もない頃で、この道路事業へ十分な対応ができておら
 ず、今回の工事区間においても埋蔵文化財の有無の確認はもとより、発掘調査もなされていな
 かった。したがって、熊本県文化課として道路下に埋蔵文化財がどれほど残されているか把握
 できていなかった。

このような状況を踏まえ、本事業に係る箇所について、新たに試掘・確認調査を実施し、文
 化財の有無・状況を確認することとなった。工事はすでに着手され、掘削されていた近見・御
 幸横枕間では、工事状況から調査の対象となる層位が失われたものとして予備調査範囲から外
 した。また、産業道路と国体道路が交叉する部分から、県庁通りと交叉する部分については九
 電の地下埋設管があり、実質的に破壊されているものとして調査からはずした。したがって、
 試掘・確認調査の実施範囲は県庁通りから御幸横枕までの間となった。

試掘・確認調査の依頼

熊本河川国道事務所から平成15年7月22日付け国九整熊三工第29号の予備調査依頼を受け、
 平成15年8月18日に最初の試掘調査を実施し、さらに平成15年11月13日付け国九整熊二調第50
 号による依頼を受け、平成15年11月25日～28日に次の試掘・確認調査を実施した。当該地は主
 要幹線道路の中央分離帯であり、しかもほとんどの場所に植栽が行われていたため、予備調査
 はその植栽の合間や設定地点の樹木伐採等によって確保したわずかな範囲で行わざるを得なかつ
 た。そのため、十分に予備調査が実施できたとは言い難い。

試掘・確認調査の実施

調査の結果、すでに工事による掘削や地形的な状況等により遺跡が失われている箇所もあつ
 たが、総数20箇所設定した試掘・確認調査坑（トレンチ）のうち13箇所で見つかった埋蔵文化財の存在を
 確認した。それらをまとめると、従来から所在のわかっていた「江津湖遺跡群」に含まれる部
 分と、その北側に広がる未知の遺跡の存在が明らかとなった。新たに確認した遺跡の名称につ
 いて、熊本市教育委員会と協議した。その結果、新たに確認した部分のうち健軍川付近を地形的
 な境界として、その南側を「江津湖遺跡群」の範囲を拡張し、さらに川の北側については、
 字・小字名から「健軍京塚下遺跡」と新規に命名した。ただし、後者については周囲に遺跡の
 存在を確認できていないため、バイパスの中央分離帯のみを遺跡範囲とした。それについては
 平成15年9月4日付け教文第1513号及び平成16年2月25日付け教文第3245号にて遺跡地図の変
 更を行った。

試掘・確認調査結果

これらの結果に基づき、文化財の発掘調査が必要かどうかの協議を熊本河川国道事務所と協
 議

協議

第I章 はじめに

議を行った。その中で、江津斉藤橋を除く他の調査区が中央分離帯側へ道路拡幅工事であるため、原則的には拡幅部分と盛り土部分のみが調査必要範囲であったが、中央分離帯には道路拡幅に併せて種々の埋設管や施設が設置されること、斉藤橋付近は盛り土によって道路が造られること等により、遺跡が破壊されたに等しい状況となることを確認し、調査対象地の内、必要範囲の全ての地点で本調査を実施することとなった。併せて本調査を実施した場合、調査による交通網への支障や作業員の安全確保が問題として予想されるため、堀囲いの設置などを調査の条件整備の一環として熊本河川国道事務所へその対策を強く要望した。また、調査事務所の設置場所・排土などについても考慮をお願いした。

第2節 調査の組織

本調査体制 【本調査】(平成16年度)

調査責任者 島津義昭(文化課長)、倉岡 博(課長補佐)
調査総括 高木正文(課長補佐兼調査第1係担当)
調査担当 坂田和弘(参事)、濱田教靖(嘱託)、宮本利邦(嘱託)、洲崎明子(嘱託)
調査事務局 吉田 恵(課長補佐)、四元正明(主幹兼総務係長)、杉村輝彦(主任主事)
天野寿久(主任主事)

整理・報告書作成体制 【整理並びに報告書作成】(平成17年度～平成19年度)

調査責任者 梶野英二(文化課長)(平成17～19年度)
倉岡 博(課長補佐)(平成17年度)
江本 直(課長補佐)(平成18・19年度)
調査総括 高木正文(課長補佐兼調査第1係担当)
整理担当 坂田和弘(参事)、濱田教靖(嘱託)
調査事務局 吉田 恵(課長補佐)(平成17・18年度)
宗村士郎(教育審議員兼課長補佐)(平成19年度)
高宮優美(主幹兼総務係長)、塚原健一(参事)
小谷仁志(主任主事)(平成17年度)
高松克行(主任主事)(平成18年度)

調査助言、協力者 【調査助言及び協力者】

平岡勝昭(前肥後考古学会長)
狭川真一(助元興寺文化財研究所)、米村 大(合志町教育委員会)
網田龍生・美濃口雅朗・赤星雄一・岩谷史記(熊本市教育委員会)

第3節 本調査の方法

調査範囲 今回調査を実施する範囲は、最南端の斉藤橋際から県庁通り近くまでの中央分離帯を中心としたもので、総延長が2kmほどに渡った。また、その間「江津湖遺跡群」「健軍京塚下遺跡」
2つの遺跡 の2つの遺跡にまたがっていた。そこで遺跡名により調査区を大きく2箇所に分け、さらに地点ごとのまとまりに合わせて、江津湖遺跡群の4調査区と、「健軍京塚下遺跡」の2調査区に

第4節 調査の概要

分けることとした。江津湖遺跡群については、熊本市での調査が多く行われていたため、それらとの区別を図るため江津湖遺跡群の「湖東地区」という名称にし、調査区の呼称として「江津湖東〇区」とした。そして、調査工程上から一番南の調査区より江津湖東Ⅰ区とし、北上しながらⅡ区、Ⅲ区、Ⅳ区とした。このうち江津湖東Ⅲ区については、調査の工程上一度に実施できなかったため2つに分割し、Ⅲ-1区と2区に分けて調査を行った。健軍京塚下遺跡は同じく、南よりⅠ区・Ⅱ区とした。

調査区の呼称

調査区間が南北に長く延び、将来の周辺の調査状況（熊本市教育委員会調査）との齟齬を避けるため、測量については熊本市の調査で利用している国土座標に基づくこととし、日本測地系の第Ⅱ系よるとした。ところが、測量業務を委託する際にそれが徹底せず、江津湖東Ⅰ区のみが日本測地系第Ⅱ系（旧座標系）によったのみで、他の調査区は世界測地系（新日本測地系）に基づくものとなり、同じ調査者が異なる座標系で調査を進めてしまい、当初の予定を外れてしまったことは調査担当者の誤りとしてここに記しておく。調査区内のグリッド杭もそれによっている。

公共座標

調査区ごとの座標系の齟齬

調査の順番については、橋脚工事の先行する江津齊藤橋の付近から開始し、北上するような工程を組んだ。ただ、その後は調査状況や他の工事との関係を考慮し、任意に調査区をできるだけ北上しながら実施することとした。

調査工程

調査に当たっては、江津湖東Ⅱ区以降は中央分離帯内になるため、熊本河川国道事務所が安全のためのフェンスを設置し、表土剥ぎ作業は、中央分離帯内の作業であることや排土の場外運び出しもあることから、同事務所の工事請負業者の荒木建設が実施することとなった。ただ、調査事務所は安全の問題があるものの作業事務所を分離帯内に設置せざるを得なかった。

調査協力

表土剥ぎは重機による掘削を行ったが、調査期間と工程を考慮し、包含層上面で止めることをせず、遺構の確認できる層まで掘り下げた。その後人力による精査・遺構確認・掘削を行った。遺構の実測作業は調査員が原則として行ったが、作業員の補佐も得た。写真撮影は調査員が必要に応じて行った。また、調査工程上、排土の処理のためベルトコンベアなどの調査機材を導入し、調査の効率化も図った。

調査方法

第4節 調査の概要

調査対象地は先に述べたようにその大半が幹線道路の中央分離帯内であったため、調査区を江津湖遺跡群ではⅠ～Ⅳ区、健軍京塚下遺跡ではⅠ区とⅡ区の区番号を設定して調査を行った。これらのうち江津湖遺跡群のⅡ～Ⅳ区、健軍京塚下遺跡は完全に幹線道路の中央分離帯の内部で、調査区は幅が狭く細長い形態であった。そのため、各遺構も全てが完掘できず、遺跡全体の性格が判明できるというような調査ではなく、いわば長大なトレンチ調査とも言える状況であった。

調査対象地

調査は、工事を優先する江津湖東Ⅰ区から順次終了させていく方針を採ることとした。以下、調査区ごとに発掘調査の経過を簡単に触れていく。

調査方針

まず、最初に本調査に入った齊藤橋際である江津湖東Ⅰ区である。この調査区は本調査に当初に入る予定で調査準備は進めたものの、事務所側と熊本市との事前調整が進んでおらず、6月からの調査開始となった。そのため、一部工事と平行せざるを得ない状況となった。さらに先に確認調査によって調査範囲を設定していた。しかし、加勢川に懸かる齊藤橋を拡幅するた

江津湖東Ⅰ区の調査開始

第I章 はじめに



第1図 江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡調査区位置図

第4節 調査の概要

めに橋脚が立つ予定となっていたが、当該地が熊本市の公園内だったため、事務所と熊本市との協議の遅れにより、確認調査ができておらず、調査開始時にその調査を実施することとなった。調査は橋脚工事に合わせ、橋脚の予定地に対して行った。その結果、河川と台地の境界部分であることは分かったが、明確に調査の対象とする遺構・遺物の確認はできなかつたので、調査範囲から除外した。

公園地内の確認調査

I区の調査は坂田・濱田・宮本の3名で行い途中梅雨時期も重なったが晴天に恵まれる日も多く順調に進み8月初頭に終了した。

I区の調査

I区から約300m離れた江津湖東Ⅱ～Ⅳ区は、幹線道路の中央分離帯内に設けたもので、交差点と歩行者用の通路等により調査区を3箇所の調査区に分断せざるを得なかつたものである。調査区番号を南から江津湖東Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区と設定した。

Ⅲ～Ⅳ区の調査

そのうちのⅢ区はⅡ・Ⅳ区に比較して特段に細長く、さらに排土場の問題もあり、全面を一度に調査するのは不可能と判断した。そのため、南北に長いⅢ区を中央付近で分割し、南側をⅢ-A区、北側をⅢ-B区と調査中に仮り別番号の調査区とし、遺構もそれぞれで番号をふつた。Ⅲ-A区調査時には、Ⅲ-B区を排土置き場とし、Ⅲ-B区調査時にはA区を逆に排土置き場として調査を行った。

調査は遺構の多いことが想定されるⅢ-A区とⅣ区から先行して調査をおこなうこととし、8月中旬に調査を開始した。現地表から検出面までの深さは最も浅い地点で約2mあり、調査区内を南に行けばいくほど旧地形はさらに深く、最も南側ではその差は3mを越える深さとなり、調査区の幅の狭さもあって風も吹かず、日中の猛暑と調査区両脇を一日数千台走る自動車の排気ガスのなか手作業での作業員の皆さんには酷な労働であった。

調査の状況

平成16年の9月末に調査員の洲崎氏が合流したので、10月からⅡ区の調査も開始した。Ⅱ区は面積が狭く遺構もほとんど検出されなかつたこともあり二週間で終了し、Ⅳ区も調査を10月中に終了した。Ⅲ-A区も11月中には調査を終了させ、12月よりⅢ-B区の調査を開始した。バイパス工事の開通予定は来年度ということもあり、年度内に調査を終わらせる必要があつたので、調査は急を要し作業員の皆さんにも頑張っていたいただいたおかげで、Ⅲ-B区の調査は翌平成17年の3月一杯で終了した。また、この間のⅢ-A区とⅣ区の調査は濱田が中心に行い、Ⅱ区とⅢ-B区は洲崎が中心に行った。

調査員の増員

整理作業及び報告書作成は、平成17年度より開始した。本調査の残務が4月までかかつたので、終了後に整理方針を立て、順次作業にかかっていた。ただ、途中で熊本北バイパス関係の本調査を2ヶ月ほど実施したため、作業が足踏み状態となつた。

調査の終了

作業を開始するに当たって、本調査時に不備のあつた部分の修正を行った。図面の修正及び、5月からの本作業の開始に併せて、遺構番号の確認作業を行った。その際、江津湖東Ⅲ区において、調査工程上江津湖東Ⅲ-A区とⅢ-B区とに分けて遺構番号をふつていたが、遺構など連続性を考慮し、新たに遺構番号(S-番号)の振り直しを行った。さらに遺構番号については、本報告書を作成するに当たり、最終的には各調査区毎、遺構の種別毎に最終的な番号を、例えば、「S-〇〇」を「△号竪穴建物」というように変えた。

整理作業

遺構番号の振り直し

整理作業は5月から本式に開始し、遺物の水洗い、注記、接合作業などの1次作業を進めた。作業の節目で遺物の選別を行い、実測作業も随時行っていった。途中、作業上、段取りがうまくいかず、停滞したこともあつたが、適宜作業の効率化を図り作業を進めることができた。一方で2次作業の方は遺構配置図の作成と遺構番号の振りかえなどで多少とまどうことはあつた

整理作業の開始

第I章 はじめに

が、少しずつ作業は進んだ。途中作業員の交代などもあったが、何とか作業は進展した。途中整理作業を主として行っていた濱田が入院するということもあり、作業が停滞したことも事実である。そのように作業を進めていたが、最終的な段階で報告書の完了までは至らなかった。そこで、翌年度も作業を時間外に行ったが、完了せず、平成19年度に印刷費を送り、本報告書を発刊することとなった。

以下に調査時の遺構番号と本報告書における遺構番号の対照表を掲載する。

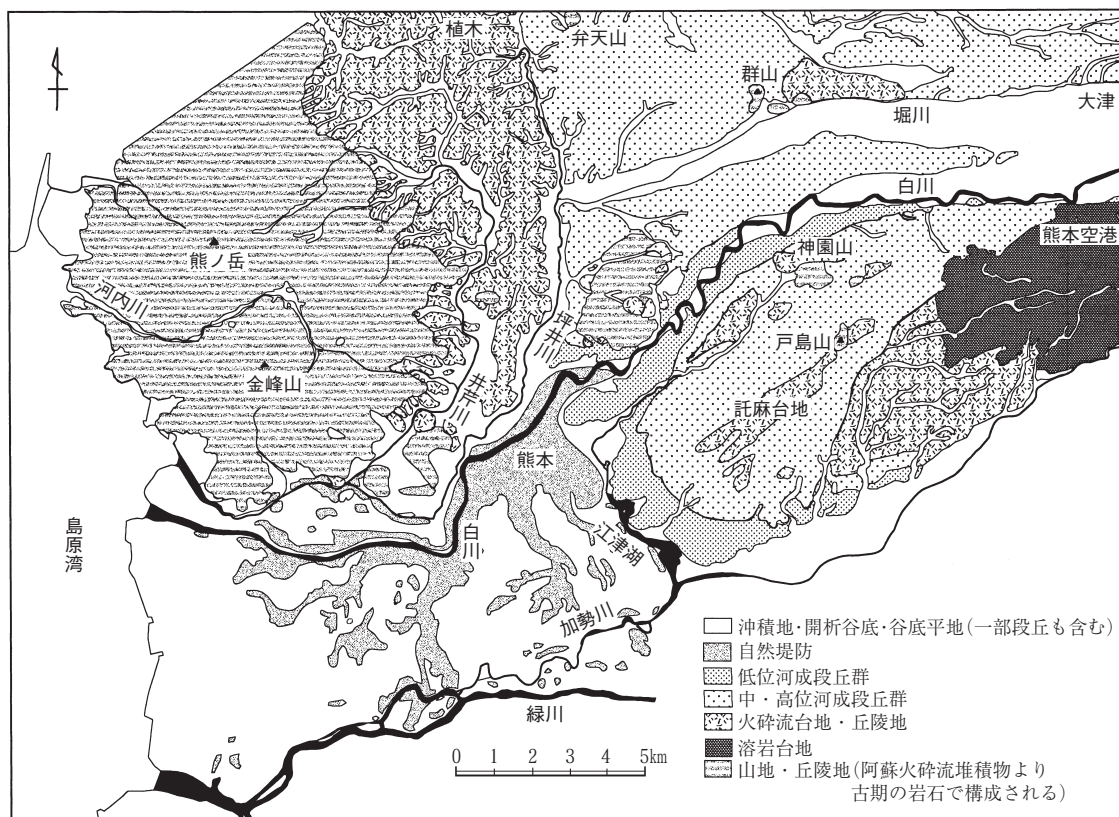
	本調査時	整理時	報告書掲載		本調査時	整理時	報告書掲載
江津湖遺跡群 I区	S-001		1号竪穴建物	III区	S-002		1号溝
	S-002		2号竪穴建物		S-014		2号溝
	S-003		3号竪穴建物		S-015		3号溝
	S-004		4号竪穴建物		S-018-b		4号溝
II区	S-001		1号土壌		S-018-a		5号溝
	S-002		1号溝		—		6号溝
III区	S-017		1号竪穴建物		S-026	S-026	7号溝
	S-001		2号竪穴建物		S-027	S-027	8号溝
	S-003		3号竪穴建物		S-019	S-030	9号溝
	S-004-a		4号竪穴建物		S-012	S-034	10号溝
	S-004-b		5号竪穴建物		S-006	S-035	11号溝
	S-006		6号竪穴建物		S-007	S-037	12号溝
	S-005		7号竪穴建物		S-013	S-036	13号溝
	S-007		8号竪穴建物		S-022	S-038	14号溝
	S-008		9号竪穴建物	IV区	S-001		1号竪穴建物
	S-031	S-024	10号竪穴建物		S-006		1号掘立柱建物
	S-029	S-023	11号竪穴建物		S-002		1号土壌
	S-034	S-025	12号竪穴建物		S-003		2号土壌
	S-024	S-029	13号竪穴建物	健軍京塚下遺跡	S-001		1号竪穴建物
	S-001	S-041	14号竪穴建物	I区			
	S-009	S-043	15号竪穴建物		II区	S-001	
	S-010	S-044	16号竪穴建物	S-002			2号竪穴建物
	S-023		1号掘立柱建物	S-003			3号竪穴建物
	S-012		2号掘立柱建物	S-004			4号竪穴建物
	S-013		3号掘立柱建物	S-010			5号竪穴建物
S-009		1号土壌	S-012			1号掘立柱建物	
S-010		2号土壌	S-013			2号掘立柱建物	
S-011		3号土壌	S-014			3号掘立柱建物	
S-019		4号土壌	S-015			4号掘立柱建物	
S-020		5号土壌	S-011			1号土壌	
S-021		6号土壌	S-016			2号土壌	
—		7号土壌	S-017			3号土壌	
S-025	S-028	8号土壌	S-005			1号溝	
S-016	S-031	9号土壌	S-006		2号溝		
S-018	S-032	10号土壌	S-008		3号溝		
S-021	S-033	11号土壌	S-009		4号溝		
—		12号土壌	S-007		5号溝		
S-002	S-040	13号土壌					

第1表 遺構番号対照表

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第2図）

江津湖遺跡群と健軍京塚下遺跡は阿蘇山を起源にもつ火砕流台地である託麻台地上に位置している。この台地は阿蘇外輪山に端を発し、西に向かってゆるやかに下りながら連続して台地群を形成し、高遊原台地を経て熊本市付近に達してからは託麻台地と呼称されるようになる。調査区は台地の西突端部に位置し、そのすぐ西側では沖積平野である熊本平野が広がっている。平野部との境になる台地縁辺部では、旧白川が数万年前に流路移動を行い、台地を縁取るように流れて加勢川に合流していたようで、その際にできた河成段丘面が台地の縁辺部に連続して観られ、台地と沖積地との境界は、やや分かりづらく、画然と決め難い場所が多い。この河成段丘上は表面のローム層とその下層の阿蘇の軽石や火山礫灰石などからなっており、保水力に乏しく、良好な水系もなかったようである。その証左として、近世以降の土地利用でもほとんどが畑作や陸稲が栽培されていたにすぎない。それに対し、調査区から西にわずか数十メートル下った台地末端部分では阿蘇伏流水が大量の湧水群として噴出し、遺跡で生活が営まれていた当時これが利用されたであろうことは想像に難くない。その一部は現在江津湖として悠々と湖水を湛えている。



※横山勝三「自然編第二章 地形・地質第一節熊本市の地形」『新熊本市 通史編第一巻 自然・原始・古代』熊本市1998より加筆・転載

第2図 熊本市および周辺地域の地形分類図

台地端部

江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡は、現在の江津湖・下江津湖から標高13m前後の台地岸辺部にかけて分布する遺跡である。今回の調査地は健軍周辺から南に伸びる台地上の南端部に立地しており、江津湖東Ⅰ～Ⅳ区の西方にはすぐ江津湖が近接する。地形は全体的に小規模な谷地形を配しながら、南西に向かい緩やかに傾斜していく。健軍京塚下遺跡と、今回調査した江津湖遺跡群湖東地区はその南西に小谷で切られながら延びる丘陵上に形成された遺構の集合体である。

第2節 歴史的環境

江津湖遺跡群は、縄文時代、弥生時代、古墳時代から古代、中世に至る遺跡として古くから知られていた。明治15年の採土工事による箱式石棺発見以降、昭和20年代より遺物の採集・踏査活動が行われ、昭和40年代からは小規模ながら発掘調査が開始されてきており、現在までに上江津遺跡（上江津湖湖底遺跡）、古屋敷遺跡、上ノ門遺跡、泉ヶ丘小学校校庭遺跡、陣内城跡、陳内石棺、水源地遺跡（水源地周溝墓群）、中ノ島遺跡（下江津湖湖底遺跡）、苗代津遺跡、広木遺跡（広木方形周溝墓）の各遺跡が知られている。これらの遺跡には表面採集資料に加えて熊本市教育委員会による複数に渡る調査成果がある。

旧石器時代

旧石器時代の遺物は上江津湖・下江津湖周辺で安山岩製の三稜尖頭器が1点採集されている。また、熊本テルサからもナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代の遺物は、江津湖遺跡群の地点、神水遺跡、健軍遺跡群、健軍神社周辺遺跡群等で確認されている。健軍神社周辺遺跡群では塞ノ神式土器に伴う集石が発見されている。その他の時期の遺物も見られるが、後期後半から晩期前半にかけては遺跡数・出土遺物量が増加し、江津湖遺跡群の他に健軍遺跡群、健軍神社周辺遺跡群等で多くの資料が確認されている。中でも健軍神社周辺遺跡群内の上ノ原遺跡（昭和45年度調査）は遺物の出土範囲が広大であり、当時期の拠点集落であったと想定されている。

弥生時代

弥生時代の遺物は本調査区では確認していないが、早期から前期にかけての資料が他地点の江津湖遺跡群、三王遺跡、良町二石遺跡群、下江津湖周辺の遺跡に認められ、当地域で湧水を利用した初期農耕が展開したと想定されている。中期および後期の資料としては、神水遺跡には近年の発掘調査により、当時期の拠点集落が存在したことが判明してきている。

古墳時代

古墳時代の遺構資料は江津湖遺跡群、国分寺跡、神水遺跡、重富遺跡、山王遺跡、良町二石遺跡等で確認される。江津湖遺跡群および重富遺跡では古式土師器がまとめて出土したことで知られている。

古代

古代には、水前寺廃寺跡、国分寺跡、陳山廃寺跡、神水遺跡、健軍遺跡群、健軍神社周辺遺跡群等、広範囲で確認される。神水遺跡では竪穴住居の検出により当時期の集落が確認され、土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目瓦等8世紀後半～9世紀後半の遺物が出土し、また道路状遺構や大形掘立柱建物も検出され、官衙遺跡としての可能性も想定されている。

中世

中世には、健軍神社周辺遺跡群内での発見例が多く、土師器・須恵器・中国陶磁器・瓦質土器等と共に瓦も採集され、健軍神社の神宮寺の存在が想定されている。健軍神社境内には土塁が残存しており、また現在の泉ヶ丘小学校と水源地が位置する周辺の高台は阿蘇氏系の健軍大宮司の武家としての居城であった陳内城の推定地と考えられている。江津湖遺跡群内では複数地点にて土坑墓の検出が確認されている。

第2節 歴史的環境

以上のように、江津湖遺跡群周辺では旧石器時代・縄文時代からほぼ間断なく人々の生活の痕跡が認められる。熊本市内においても発掘調査事例が多い地域であり、地域の歴史的な様相が明らかにされつつある。

次に文献史料から見た熊本市東部の歴史を述べていく。

文献史料

発掘調査の行われた神水・健軍地区の含まれる熊本市東部の初見は、律令期にまで遡ることができる。平安初頭の承平年中（931～938）に成立し、当時の索引辞書として使われていた漢語辞書である「和名類聚抄」の東急本国郡部によると、当該地域の行政地名として託麻郡が存在していたとある。郡内には酒井・桑原・上嶋・津守・波良・漆嶋・下井・三宅の八郷が含まれ、その郡域は現在の熊本市東部を中心に上益城郡益城町と嘉島町までおよんでいたことが、託麻八郷の詳細な比定から、今回調査の行われた江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡は酒井郷に位置していたと考えられる。託麻郡には奈良時代から平安時代初頭にかけて肥後国府が置かれたとされ、現熊本市国府の白山神社付近からは布目瓦や築地の遺構も一部確認されている。この他にも郡内には国分僧寺や国分尼寺が存在したと推定され、託麻郡の郡寺と考えられている渡鹿廃寺は渡鹿B遺跡であったと考えられている。また郡内には条里が施行されていたとされ、その範囲は現江津湖西岸から川尻の国道3号までといわれているが、当時の地理を復元すると水田にするには地下水位が高く水気の強い範囲もあることから、その全面に条里が施行されていたかはやや疑問点があり、発掘等の今後の調査の成果を待たざるを得ないであろう。律令期の託麻郡について現在確実に読み取れるのはここまでである。律令制の郡司職には本来、大領から主帳までの四等官からなる官僚組織があったとされているが、当郡ではその様な体制も含め郡家や郡司についての人物・名称等も不明であった。

初見

託麻郡

10世紀に入ると託麻郡内には東郷と西郷の区分が見られ始める。これは全国的には9世紀の半ば頃から律令制の郡司制度は根本的な改変を余儀なくされていき、年貢等は郡司ではなく徴収請負人として富豪層が収取するようになる。この富豪層が私領の開発をすすめ、中央の権門・社寺に寄進して、いわゆる荘園制が始まる。この時期に東・西郷の区分ができるのは、それぞれの郷で新たに開発した地域の荘園制の萌芽とみられ、中世的な郷のはしりとして出現したと考えられる。

中世

その後東郷には健軍郷・津守郷・木山郷・布加良郷が、西郷では託麻庄が成立し、さらに託麻庄は安富庄と神蔵庄に分かれ、神蔵庄内には鎌倉初期頃に八王子庄が成立していく。このうち神水・健軍地区は託麻東郷の健軍郷に属していたと考えられ、その後免田を中心とした健軍社領となった。

鎌倉幕府成立後の建久（1190～99）初年頃には、片寄と言われる再編成が行われ、健軍社領二三〇町五反が確定する。その際に幕府執権の北条氏が健軍社領の預所となり、鎌倉中期には健軍社大宮司職は阿蘇庶子家惟盛流に相伝されるようになるが、社領の地頭職は鎌倉末期にも北条泰家のものとなっていることから大宮司職と社領の地頭職は別であったようである。

南北朝期に入ると、地頭職は国の混乱とともに豊後の大友氏と阿蘇大宮司家の間で移り変わりが見られるが、最終的には大友氏が実力で地頭職を回復し、健軍社大宮司職は阿蘇大宮司家が兼ね、社領としては現益城町に在った津守保が、郡内の浮免神田の代わりとなったようである。

近世に入ると神水・健軍地区は竹宮村とよばれ、肥後藩の田迎手永に属し、明和二年（1765）の地引合帳では田六町五反、畑十二町九反とあり、水田より畑作地の方が多い村として記録さ

近世

れている。

近・現代

その後、明治八年（1875）に周辺六ヶ村が合併して健軍村となり、昭和十一年（1935）に熊本市に編入され現在に至っている。

ここまで、今回発掘調査を行った神水・健軍地区の歴史を古代の段階までは託麻郡として、中世以降は託麻東郷・健軍社領を文献史料から読み取れる範囲で述べてきたが、どうしても地域を限定しての史料はここまでであった。

第三章 江津湖東－I区

第1節 調査の経過と概要

今回の調査では一番最初に行った調査区である。すでに書いたように齊藤橋拡幅に際し、橋脚を立てる場所として工事工程上緊急性の高い場所である。地形的には託麻台地の最端部に当たり、熊本平野と接する部分である。そこに台地裾部に沿って加勢川が流れる。

調査経緯
遺跡の立地

この場所はすでに国が取得している場所もあったが、熊本市の公園の一部として利用されている場所でもあった。調査を早くと希望される割には熊本市との交渉が遅れたようで、調査は2004年の5月末になって準備に入らざるを得なかった。調査地点としては今回報告する地点の他に、加勢川にかかる橋脚部分でこれまで熊本市の都市公園内で確認調査ができていない地点の調査も行う必要が出てきた。そこで、まず調査の必要性の有無を確認するため、橋脚に当たる部分の確認調査を実施した。その際、新たに確認調査の依頼を受けず、調査の一環として行った。

確認調査は、今回の工事に係る橋脚は、I区より1mほど低くなった公園内に2脚と河川中に1脚の併せて3箇所あったが、河川内については公園内の結果に応じて行うこととした。まず、最初のトレンチは公園内のゲートボール場で行った。その結果、今回調査を行うI区との地形的な差が明確になった。I区で見られた遺構の形成される層がすでに削平によってなくなり、客土が2mほど盛られて現在地表面となっていた。もう一箇所は川岸の狭い範囲で行った。上面は河川の堆積土によるもので1mほどあり、その下に安定した粘土層が顕れた。そこで遺構・遺物の有無を確認したが、発見できなかった。そこでさらに粘土層を掘り下げていったが、最初のトレンチと同じ土層に到達する時点で河川の水位以下になり、湧水が激しくなったためそれ以上掘削はできなかった。

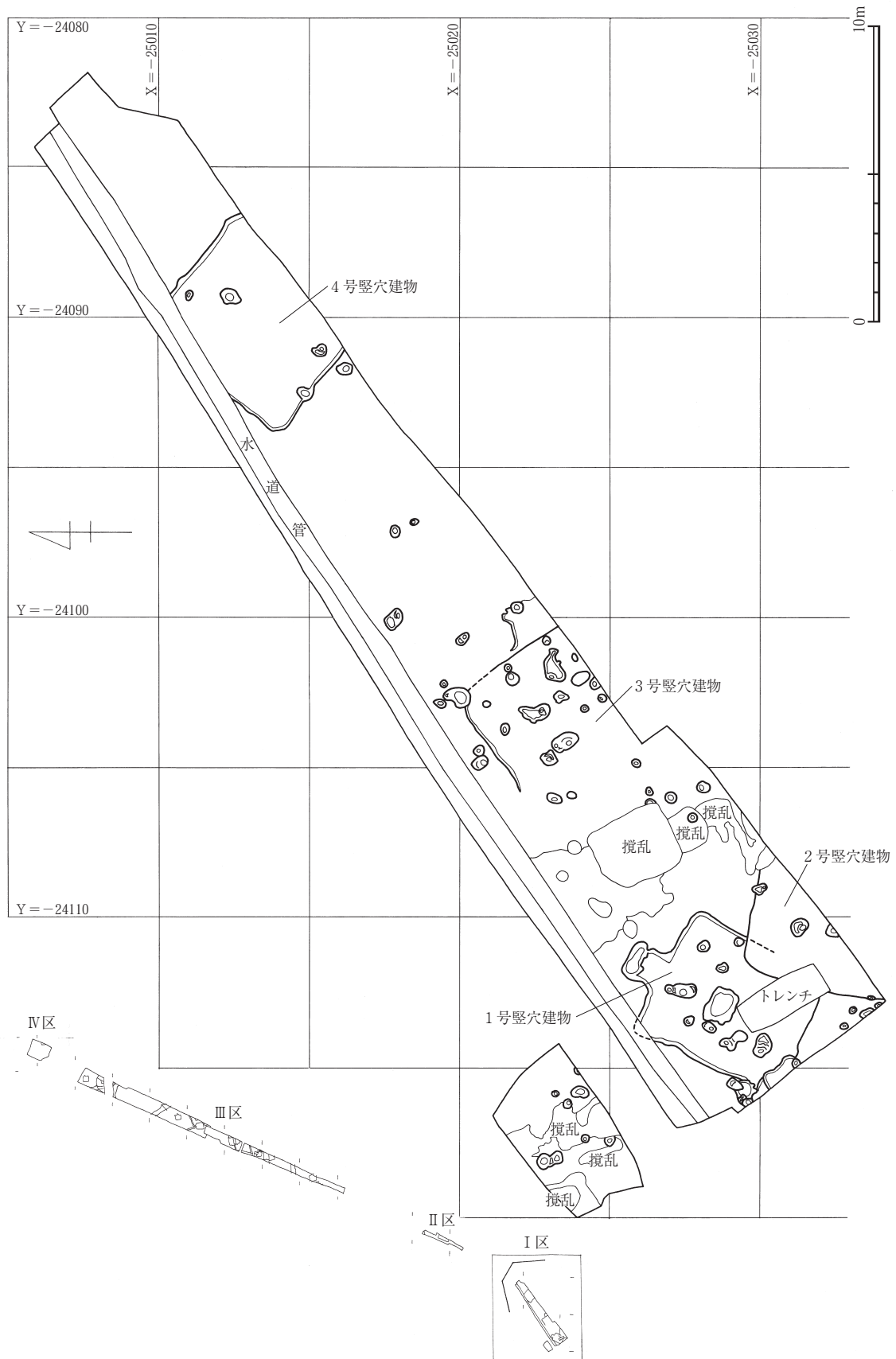
確認調査経緯

これらの調査結果から、今回調査対象としたI区より一段低い場所では遺構は存在しないものと判断し、橋脚工事については着手可とした。

I区の調査は坂田・濱田・宮本の3名で行った。表土剥ぎは排土場を確保しながら行った。客土を1mほど除去した時点で、すぐ遺構の確認層へ至った。小面積ながら、表面の精査を行ったところ、古墳時代の竪穴建物を4棟確認した。調査は、1号竪穴から順次行っていった。中にはかなり削平を受けたためか遺構の輪郭も明確にならないものもあった。その中で、4号竪穴の一角から一括遺物と考えられる遺物の一群が見つかった。

調査の方法

遺構実測図は全体遺構配置図を1/100で、各遺構ごとの平面図は個別図としてはとらず、グリッドの割付図として1/20で作成した。断面図については各遺構ごとに必要数を1/20で作成した。必要に応じて遺構・全体図の撮影を行った。現場作業は8月2日で終了した。その後、埋め戻し作業は文化課でおこなった。



第3図 I区 遺構配置図(S=1/200)

第2節 江津湖東-I区

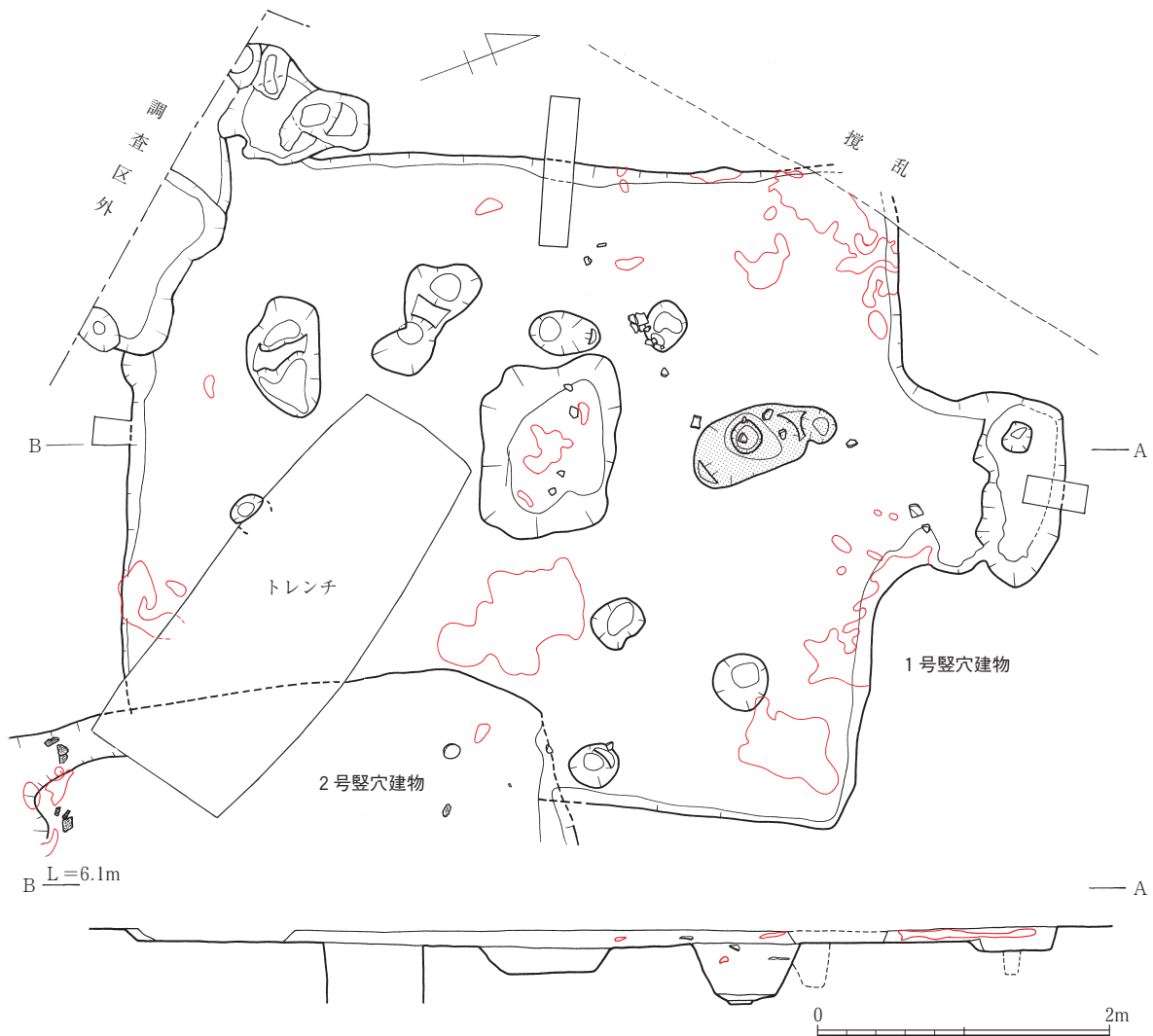
① 竪穴建物跡

1号竪穴建物（第4図）

I区の西端に位置し、2号竪穴建物に東辺を切られる竪穴建物。切り合いは2号竪穴以外に位置と切合関係も西角付近を複数のピット状遺構に切られていた。

平面形態は基本的には方形であるが、その北辺には出っ張る形で小型の土壇が付随しており、竪穴の形態検出時に平面と土層でも注意して観察したが、目視では本体の竪穴との境は認められず、竪穴廃絶時になんらかの理由で掘り込んで埋没時には同時に埋まったものなのかもしれないが、調査時には繋がって検出された。

竪穴の規模は南北辺が5 m10cm、東西辺が4 m40cmで南北に長い長方形を呈し、床面積は規模22.4㎡あり大型の竪穴建物となる。残存深度は6 cmと浅く、方位角度は南北を軸にしての25度であった。床面は貼り床ではなく、そのまま踏みしめられ、硬化面は竪穴床面全体に広がっていた。



第4図 I区 1号竪穴建物実測図(S=1/50)

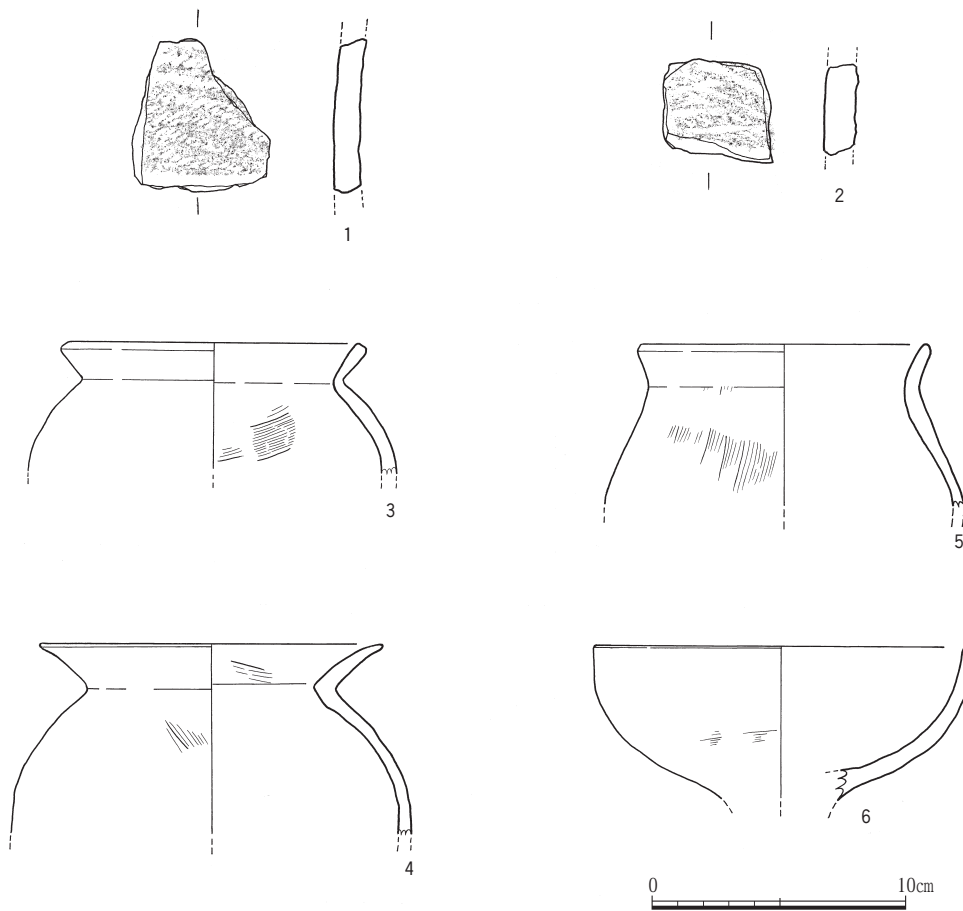
地床炉
規模

竪穴の中央で焼土を伴う地床炉が検出された。規模は東西長辺が1m15cm、南北短辺は90cmで、平面形態はやや不整な東西に長い長方形であった。深さは底面が平坦でなく南側が深くなる形態をしており、浅いところで床面から15cm、深いところは21cmを測った。

また、ピットが竪穴内で数個確認できたが、どれがこの建物に伴うものか不明確であった。ただこの建物規模から2本柱ではないかと考える。炉の南北にあるものがその可能性がある。

出土遺物

出土遺物としては、甕類、高坏などがある。甕は小型のものが多くまた、縄文土器片と思われる小波片が2点出土した。1・2がそれで、外器面には条痕による調整が施される。甕のうち6は内器面はハケメ、外器面にはタタキが施された後ハケメで消そうとしている。6の高坏はやや深めで、椀状を呈する坏部である（第5図）。



第5図 I区 1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

2号竪穴建物（第6図）

切合関係

1号竪穴建物と切り合い関係にある建物で、西側で1号竪穴建物を切っている。建物自体は東側が調査区外となり、半分ほどしか確認できなかった。

竪穴の形態

平面形態は基本的には方形と考えられる切り合いと一部トレンチにより切られているため、不明確である。炭化材と焼土が広く見られることから焼失家屋と考える。炭化材の中には建築材の一部らしきものもあった。東側の調査区境に係る形で炉穴が確認できた。その南側には台石と考えられる石が置かれていた。西側の壁際には細長い石が置かれており、何に利用されたか不明である。台石などがそのまま残されているところから、生活の途中での焼失の可能性が

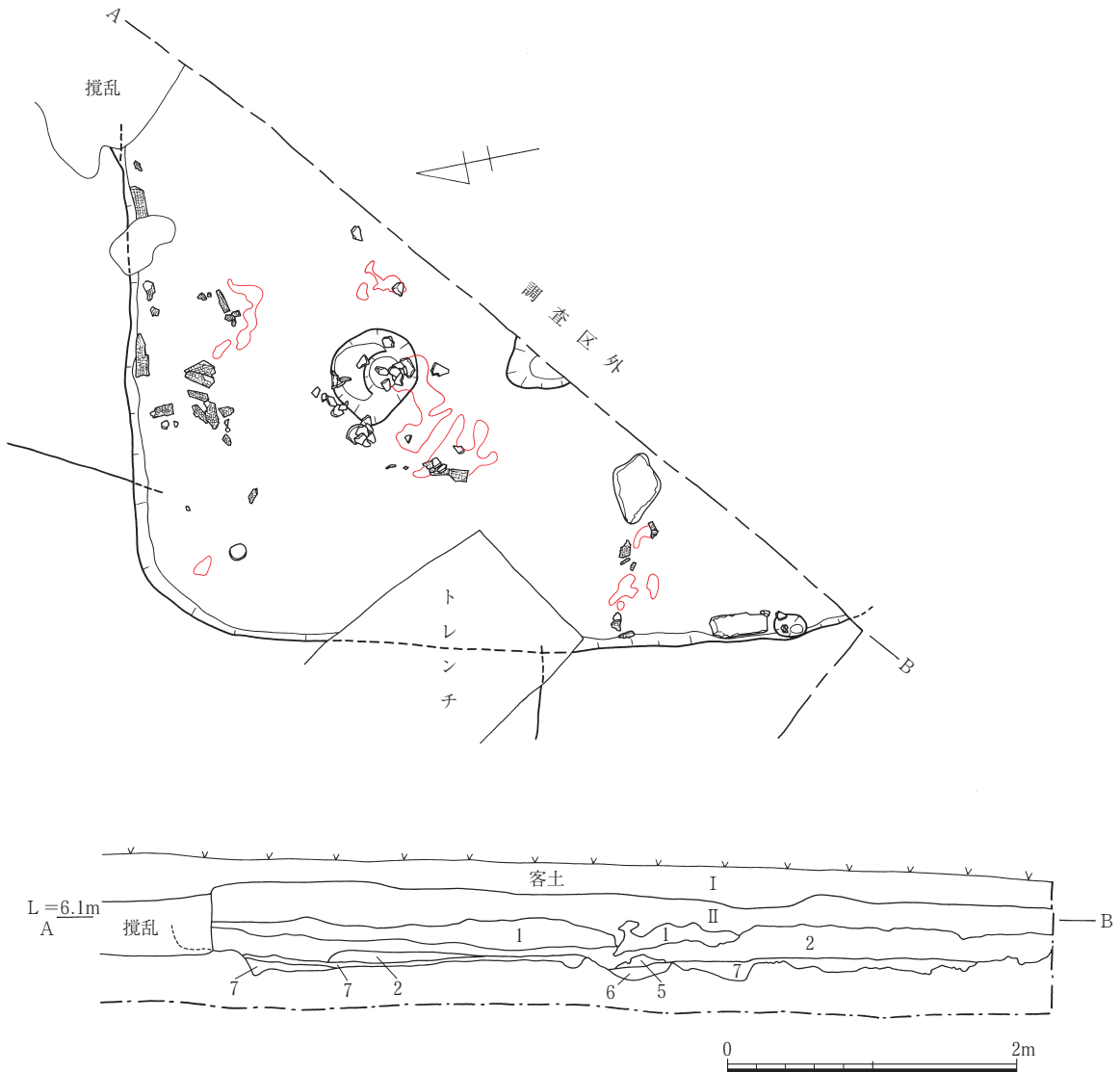
ある。ちなみに炭化材の樹種同定結果では、アカガシ亜属のものがあつた(注1)。

竪穴の規模は残された範囲では南北辺が5mほど、東西辺が4m50cmほどを測る。全体形状が不明なので、明確な平面形態はつかめない。確認できた床面積は11.3㎡あり、1号とほぼ同型の竪穴建物であろう。残存深度は20cmで、1号竪穴よりやや深い。方位角度は南北を軸にしての15度であつた。床面は貼り床ではなく、そのまま踏みしめられ、硬化面は明確ではなかつた。

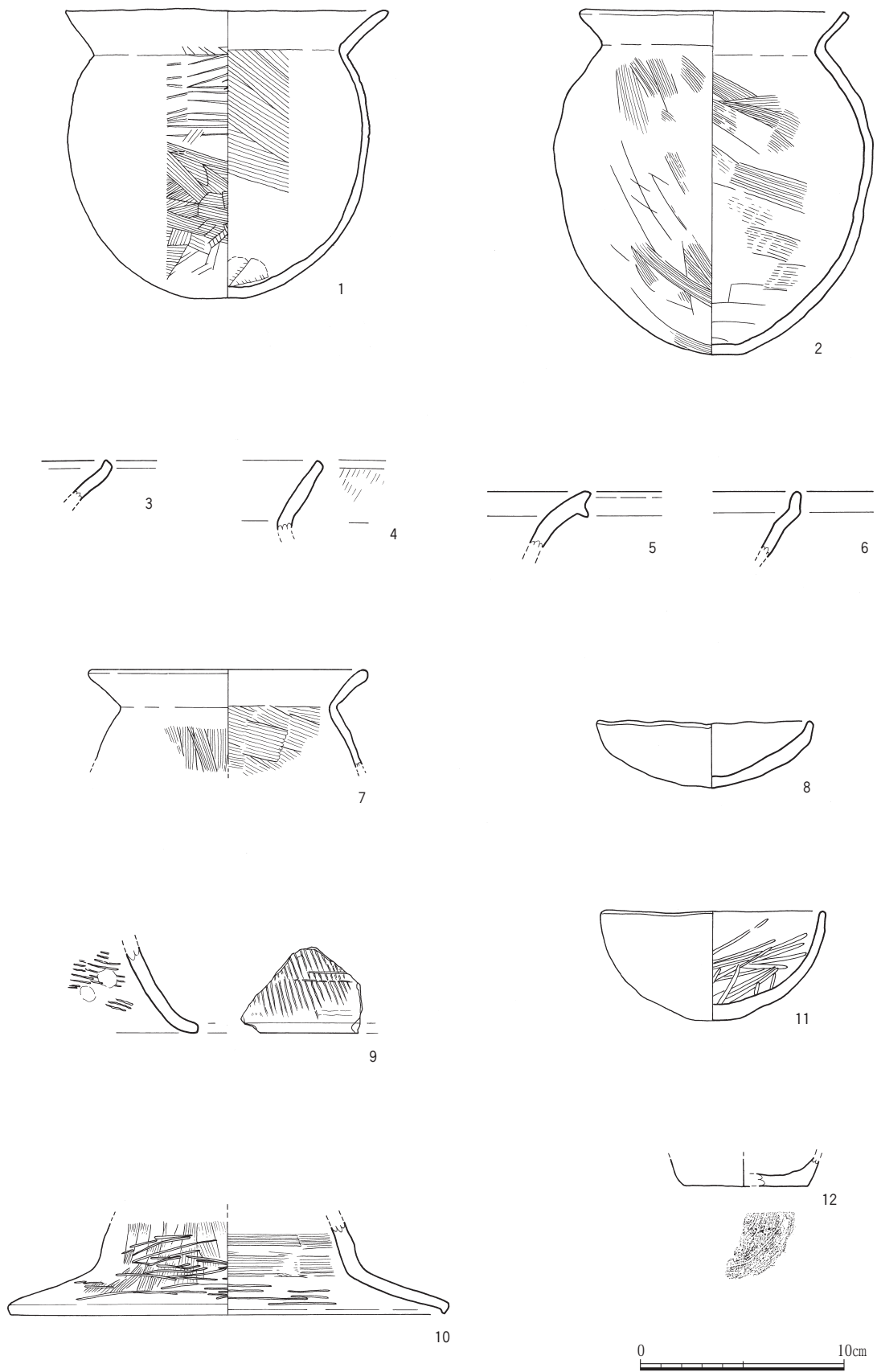
竪穴の地床炉の規模は、観察できた範囲で短辺が50cm、長辺の半分程が30cmであつた。深さは床面から10cmほどを測つた。平面形態はやや不整な長方形であろうか。

柱穴と考えられたのは炉の北側に位置するピットで、上端が60cm、深さ57cmほどのもので、この建物の柱穴として十分であろう。2本柱の建物と想定する。

出土遺物としては、甕・鉢・器台・脚土鉢などがある。1は口縁部が広く開き、球形に近い胴部を持つ在地系甕である。器面調整として外器面にはタタキが施された後、中位から下位にかけては細かいハケメが施される。2と3は同系統の甕で、口唇部を弱くつまみ上げるタイプのものである。2をみると内外器面にともにハケメが施される。外器面は縦方向のハケメで、



第6図 I区 2号竪穴建物実測図(S=1/50)

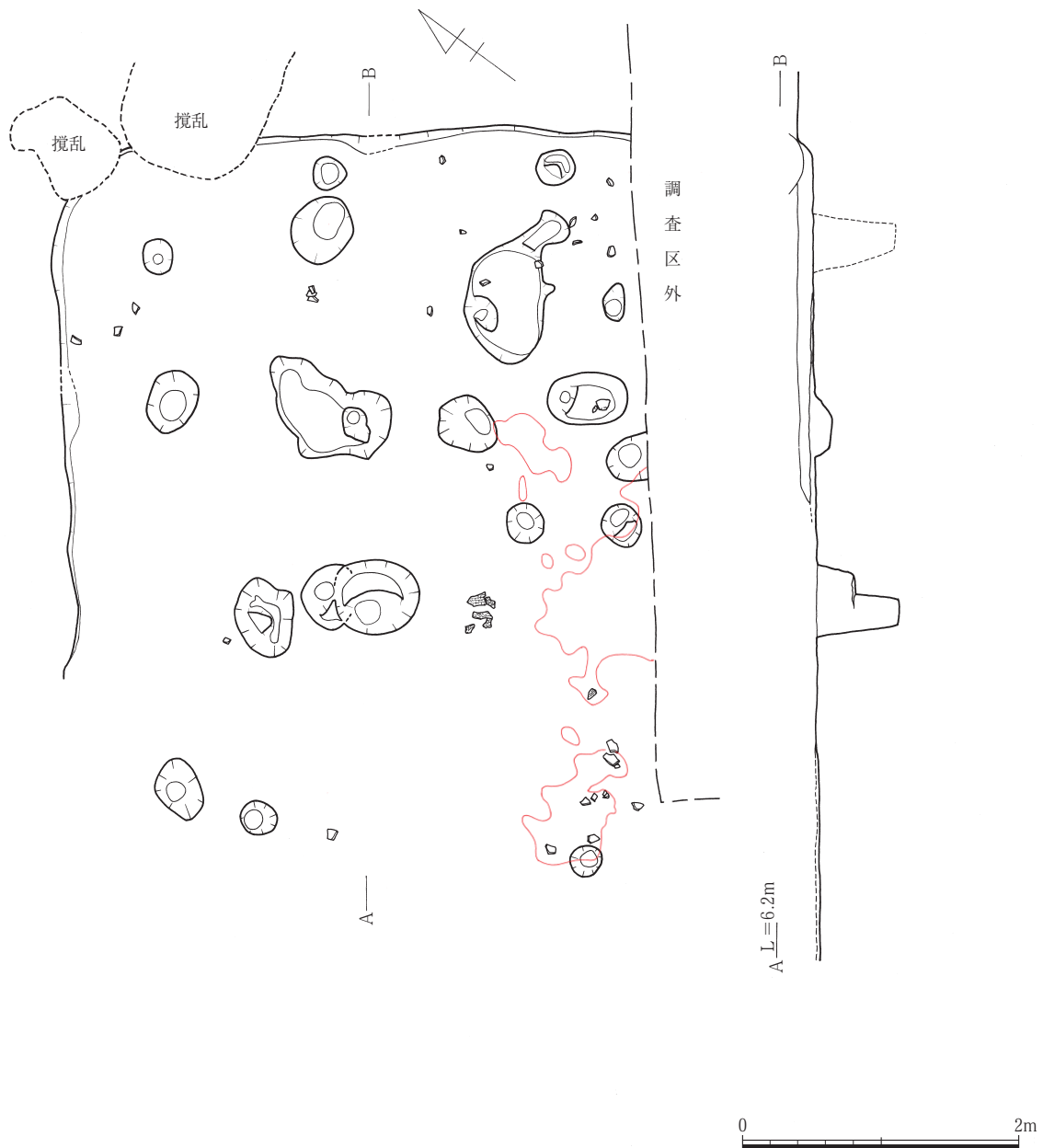


第7图 I区 2号竖穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

底部付近は器壁を薄くするため削られている。内器面は斜め横方向にハケメが施され、底部は工具で押し出している。4は口縁部がやや直線気味に延びるもので、長胴甕の系統である。内外器面にハケメ調整が施される。その他に6・7のような口縁部を持つ壺もあるようである。破片のため全体は不明である。8は浅い皿状の坏としておく。ただ、蓋の可能性もある。9は内外器面を丁寧なミガキ調整で仕上げている。10は開きの大きい高坏の脚部である。11は脚台付鉢の脚部である。接合部から剥離している（第7図）。

3号竪穴建物（第8図）

3号竪穴建物は1号竪穴・2号竪穴から北東方向に約6mほど付近から始まるようである。竪穴の状況遺構はすでに多くの攪乱により削平を受けていたため、立ち上がり自体がほとんどなく、遺物

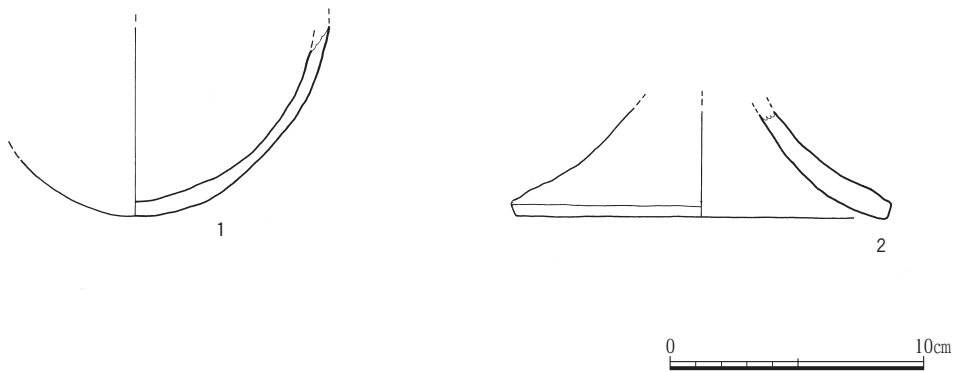


第8図 I区 3号竪穴建物実測図(S=1/50)

や炭化物・焼土等の分布と辛うじて残った輪郭線を追うことで方形の建物を想定できただけである。南西部の壁は不明瞭で、南東部分は調査区外に延びていることから、この遺構の正確な法量は不明である。ただ、この調査区から出土した他の建物とそう大きくは異ならないと考える。確認した範囲では調査区界の壁から北西へ4mを測る。北東～南西の軸は5m前後と推定しておく。確認した中ではこの遺構に伴う炉や柱穴を確実にとらえることはできなかった。この付近でも多くの炭化物や焼土を確認したので焼失家屋の可能性が高い。床面がやや硬化していることから生活の場ではあったようである。埋土はほとんど掘り形として確認できていないので不明確ではあるが、暗褐色のしまりのない土で、炭化物や焼土粒子が混じる。

出土遺物

この遺構の出土状況から、これに伴う遺物はかなり少なく、小破片が多い。図化できたのは2点のみである。床面直上から出土したものの中から選んだ。1は甕の底部である。2は脚の開く高坏の脚部である（第9図）。



第9図 I区 3号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

4号竪穴建物（第10図）

竪穴の位置と形状

この建物は、調査区の北側付近で検出した遺構で調査区の関係から南東側は調査区外に張り出して分からず、北西側は水道管理設の際に破壊されていたため角が不明である。確認のできた範囲からみると、北東～南西が約5.5m、北西～南東は壁から約4mほどが確認できた。建物規模を推定すると、長軸で5.8mほど、短軸で5.6mを測り、面積は約32.5m²ほどになろう。形態的には隅丸のほぼ正方形に近い形である。床面はさほど硬化しておらず、確認面から床面までの深さは16cmほどを測る。

地床炉

地床炉が建物の中央部よりやや西よりの位置に造られていた。長軸で1.6m、短軸で1.1mを測る。平面形はやや方形かかった楕円形である。深さは床面から7cmほどと浅いが、埋土中には焼土・炭化物が多く集中している。

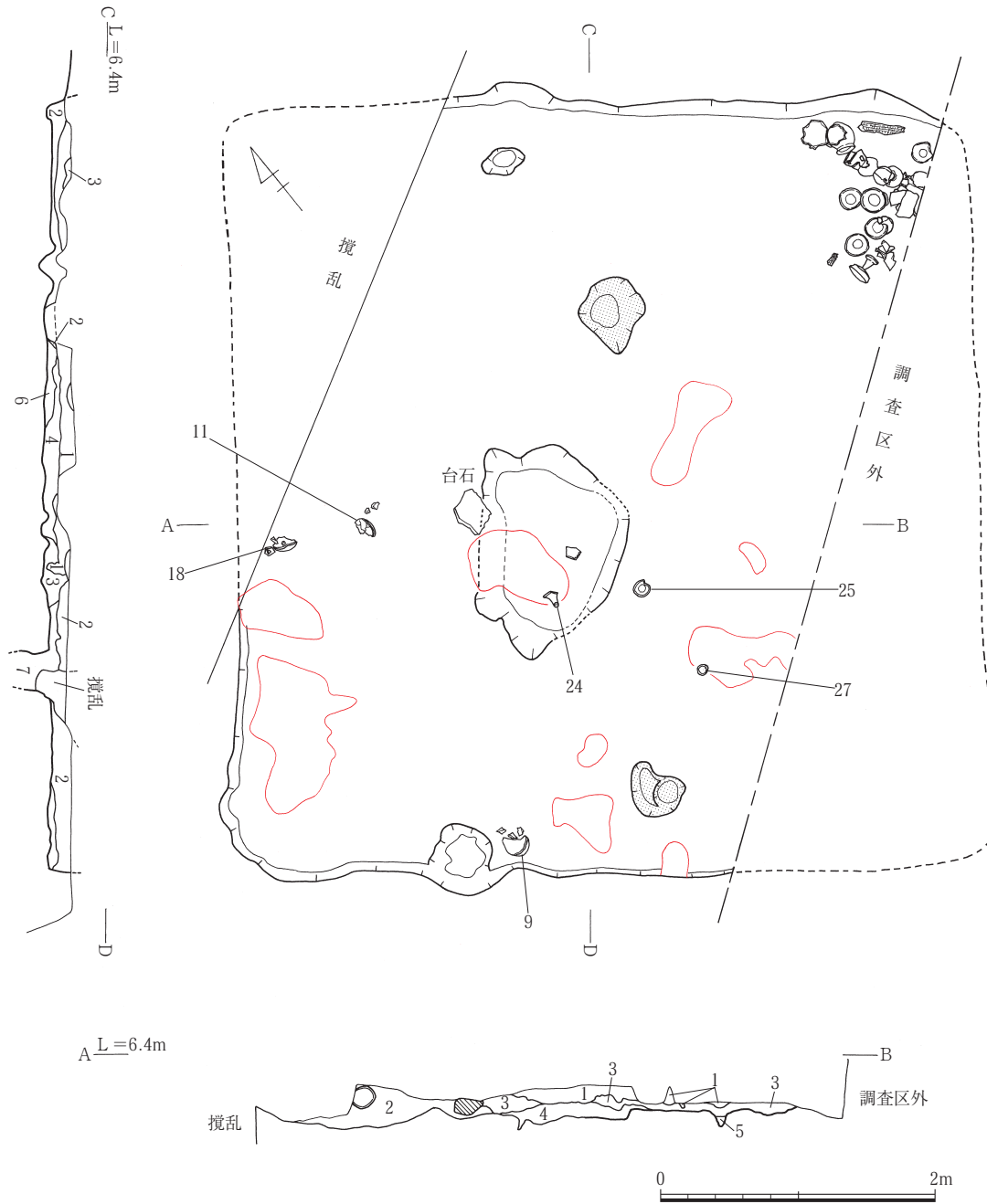
埋土

埋土は基本的に暗褐色の砂質土であるが、中にはかなり焼土や炭化物が含まれていることや、後に記す土器集中域の炭化材の状況を勘案して、この遺構は被災しているものと考えられる。これが意図的か、偶然かで遺物の出土のあり方に影響を与えよう。

柱穴

柱穴については、遺構内部にそれと考えられるものは少ない。そのうち炉が東側に偏るのに対し、ほぼ中央線付近に炉を挟んで1.5mずつ東西方向に位置する2つのピットをこの竪穴建物の主柱穴と考えられる。その一つである東側の穴は不整形な形状で床面から35cmほどを測る。もう一つはかなり壁よりの所にあるが、大きさは先のものに近く、深さも35cmほどよく似ている。

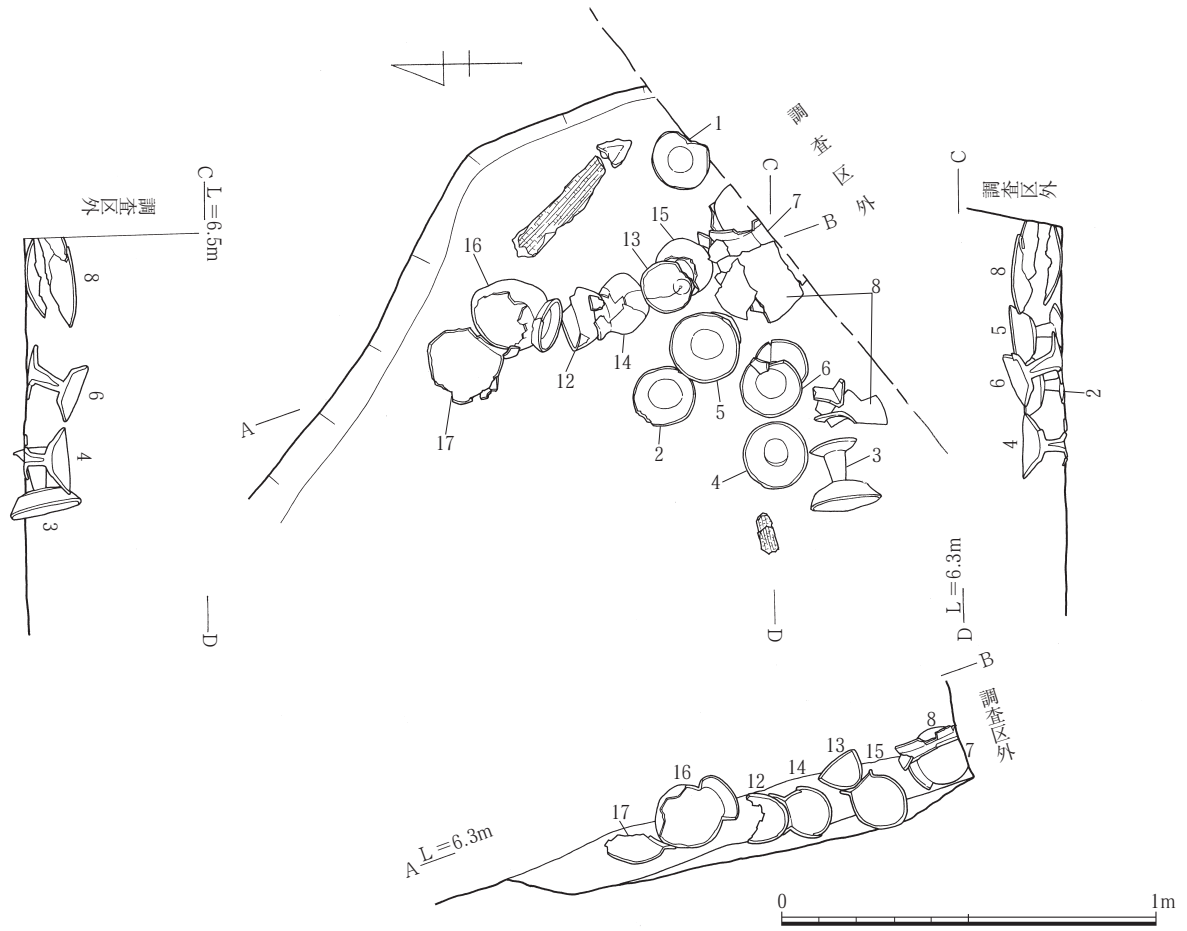
第2節 江津湖東-I区



- 1層：濃黒褐色。ややバサつく砂質土。2～3mmの橙粒子、焼土片を含む。
- 2層：暗褐色。1層に比べやや薄い土色。1層より若干しまるがバサつく砂質土。固いニガ土が少量混じる。
- 3層：褐灰色。2層よりさらに若干しまるが基本的に砂質土。比較的多くのオレンジ粒子を含む。
- 4層：明るい褐色。炉の跡の埋土で、多量の焼土が混じる。
- 5層：暗オリーブ褐色。目の細かな砂。
- 6層：明黄褐色。炉の中心の焼土。
- 7層：やや薄い黒褐色。バサつく砂質土。1層よりもやや多めのオレンジ粒子を含む。

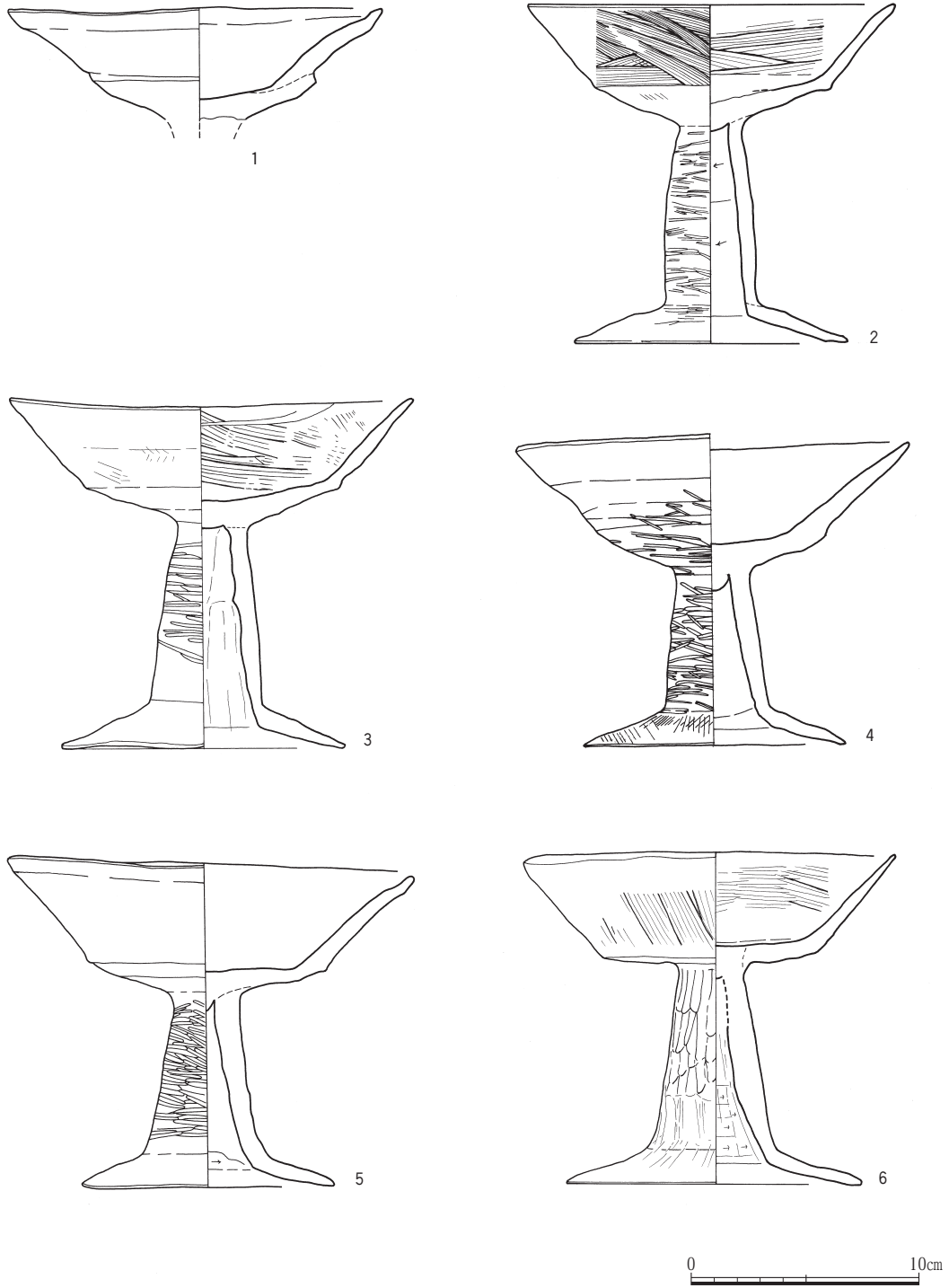
第10図 I区 4号竪穴建物実測図(S=1/50)

次に出土遺物について記す。この遺構で特筆すべきものとして、北東隅に遺物の集中する場 出土遺物
所があったことである（第11図）。ここは遺構の北東隅であるとともに調査区の壁にかかる部
分でもある。そこに甕8点、高坏6点、甌2点、廃絶時のままに残されたように出土した。高
坏はほぼ立った状態で、甕類も並べてあったものが倒れたような状況で顕れた。さらにこれら



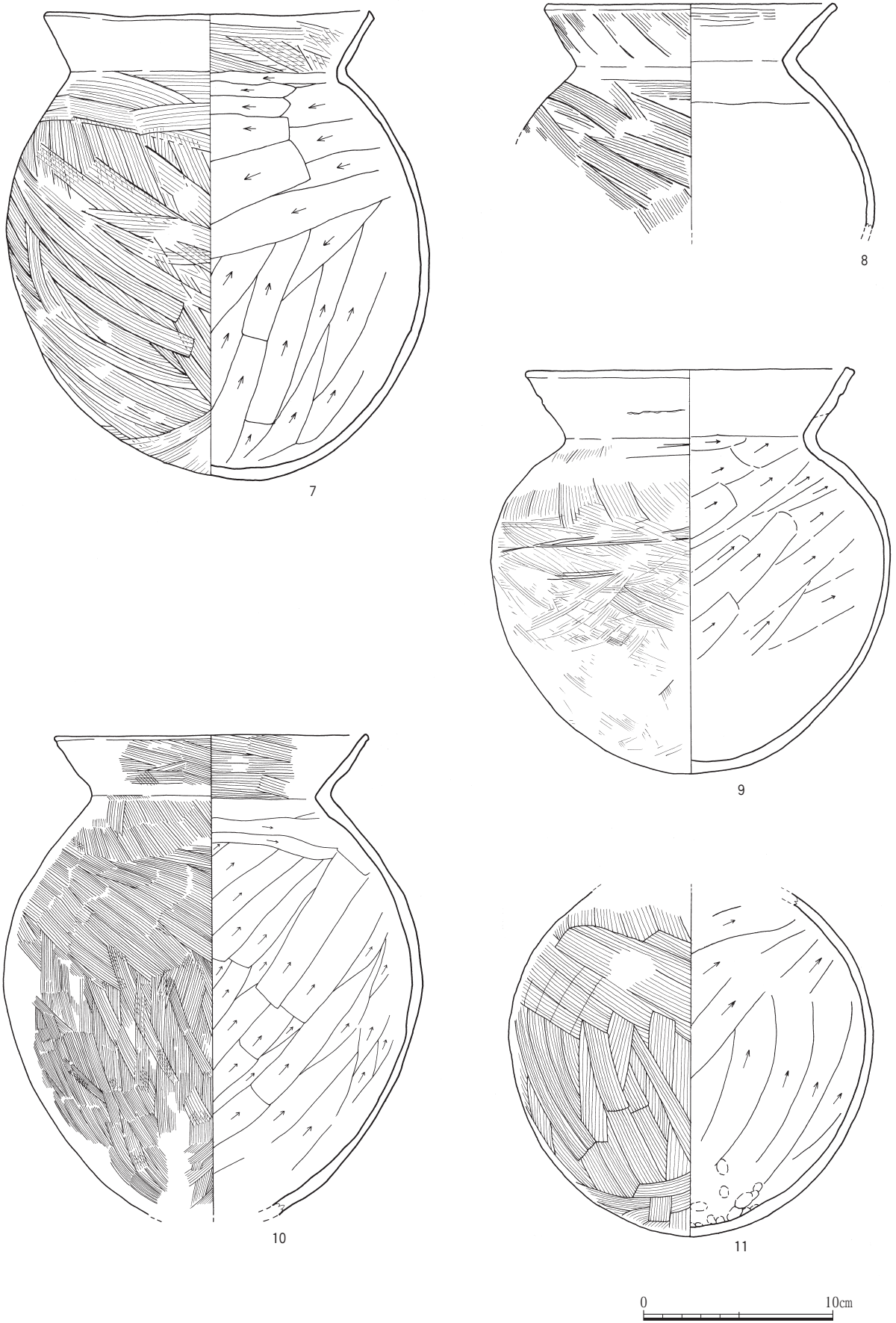
第11図 I区 4号竪穴建物土器集中部実測図(S=1/50)





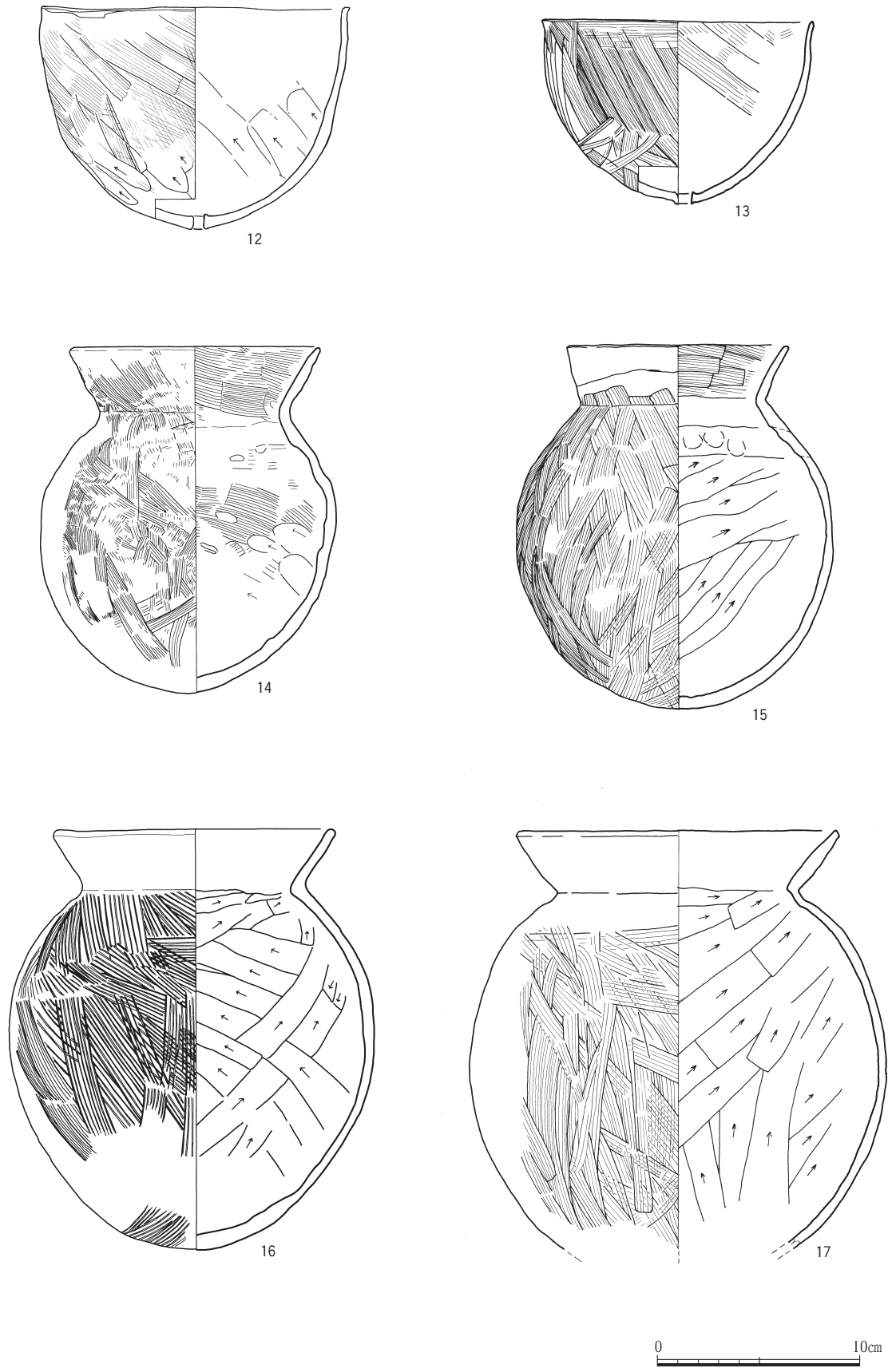
第12図 I区 4号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

のいずれの遺物も熱を受け、部分的に非常にもろくなったり、変色している。土器によっては表面に煤によって木材などの痕跡を残すものもあった。さらに隅にあった炭化材は何か道具の一部と考えられる形状をしめしている。炭化しもろくなっていたため、注意して取り上げたが、途中で破碎した。その材の樹種同定と年代測定を行ったところ、樹種はクスノキで、補正年代で 1840 ± 40 と 1870 ± 40 の数値を得た(注1)。年代的には中間値をとるとほぼ2世紀代となり、土器類の編年上古墳時代前期と考えると、やや古くなりすぎるようである。とりあえず参考までに記す。さらに、この炭化材自体の一方の角に鉄器の刃らしきものがあったので保存処理を

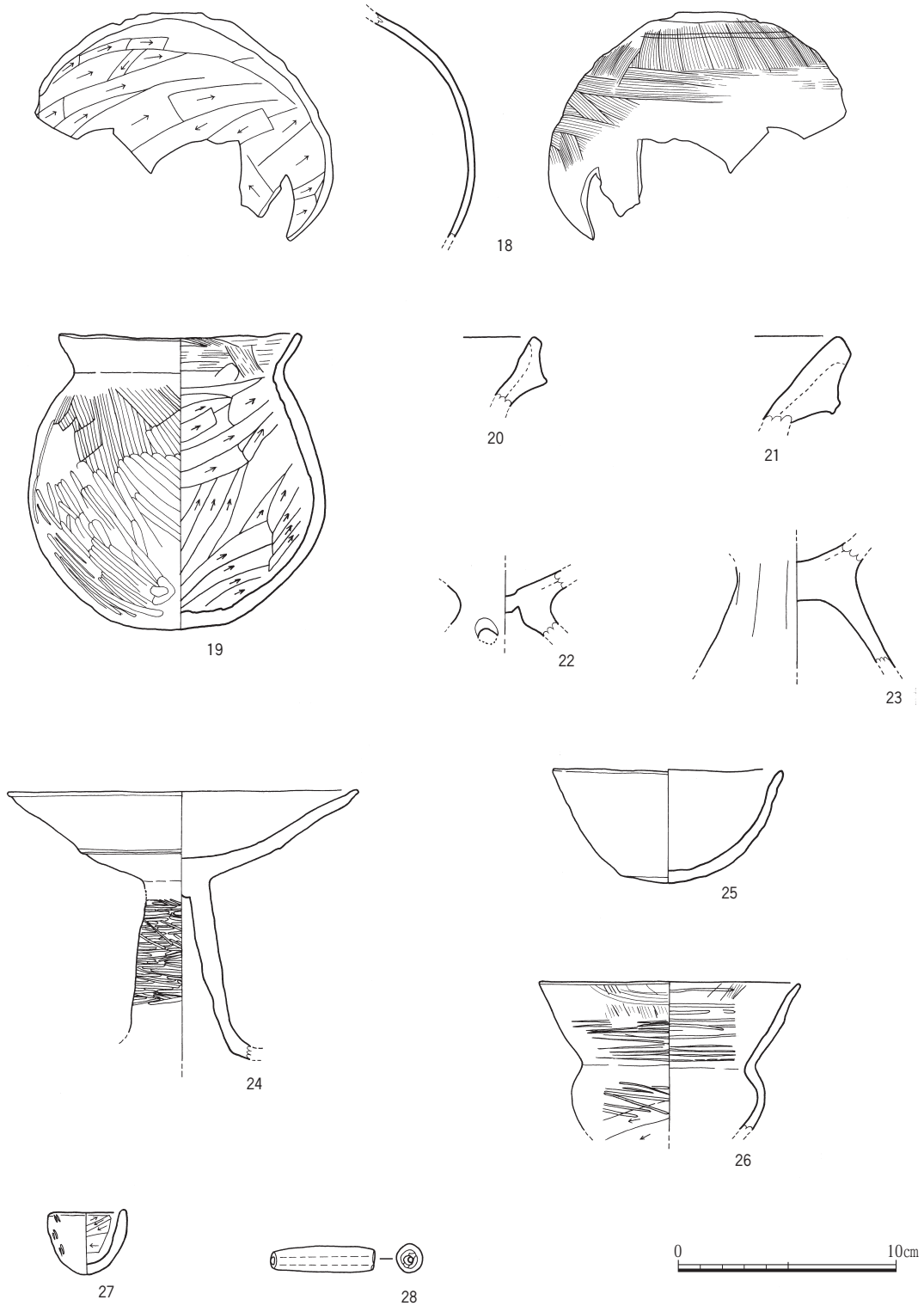


第13图 I区 4号竖穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

第2節 江津湖東-I区



第14図 I区 4号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)



第15図 I区 4号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

兼ねて土落としをしたところ単なる土中の鉄分の集積に過ぎないことが分かった。ただ、形態上は確かに刃部のように見えたので、有機質の刃部様のものに何らかの要因で鉄分が集積し、その痕跡だけが残ったものとも考えられる。

次に出土した土器類について、今少し詳細に記す(第12~15図)。

土器集中部

まず、土器集中部のものについてみる。完形品に近いものがほとんどであるが、破碎し

たものもある。調査時にかなり丁寧に掘り下げ、遺物の採集にも気をつけたにもかかわらず、整理の段階で最終的に完全な形にはならなかったことから、単純に火事によって焼け落ちた家に遺物が原位置に残されていた状況を示すものではない可能性がある。当初は焼失家屋に残され、当時の煮炊具、供献具を示す一括遺物ととらえていた。しかし、整理作業の過程で上記のようなことが分かってきたので、生活の場で破損したものを一括して遺棄したものとも考えられるし、高坏は完形が多く立てて並べてあるところから、住居遺棄に際しての儀礼として、家屋の焼却前に行われた何らかの行為の結果として置かれていた可能性も考えられる。たまにはあるが、明らかに家屋の廃棄時に高坏や土器類を意図的に配置したと考えられる例がある。

1～6の高坏のうち、坏部だけの1の他は2～5がかなり共通的な特徴を持つ。坏部は上半部が緩やかに直線的広がり、下部は狭まるものの割と広い。脚筒部は長さの差はあるが細長くなり、中ほどで膨らむ傾向にある。脚裾部は短く、接地面により近くなる。脚部は横方向のミガキで丁寧に調整され、坏部まで及ぶものもある。坏部の内面はハケ目後にナデが施されている。6も形態的に近いが、脚部は縦方向のヘラケズリがなされる。1はやや古い傾向があり、坏部の下部が狭く、急激に上半部が開く。

甕は7・8・9・16のように口縁部が直線的に開き、口唇部が角張り、胴部が倒卵形を示すもの、それと同じ大きさながら、口縁部が短くやや中間が膨らむもの、前記よりやや小ぶりでも口縁部がやや反り気味で器形全体に対して口縁部の比率の大きいものの3種類に分かれそうである。大部分のものが外器面は縦方向のハケメで調整され、内器面は、器形は薄く5mmほどになるまでケズリ調整がなされる。14だけは内器面にハケメが残り弱いケズリがなされる。

甗としたものにはやや深めの鉢形土器の底部に焼成時に一つ穴が穿たれた12・13がある。これらの甗は14・15の小型甕の上部に置かれたような状態で出土している。また、この他に19は形態的には下ぶくれした小型の甕であるが、底部近くの横に、焼成後に一つ穴が穿たれている。これも19の甕に乗ったような状態で出ている。

集中部以外にもこの遺構から遺物が出土している。20・21の二重口縁の壺口縁、22の脚部に穿孔された坏片、23の脚台付き甕と思われる脚部、25の小型鉢、24は先の高坏と同類のもの、26は口縁部が屈曲する小型丸底壺、ミニチュア鉢、土錘などが出土している。

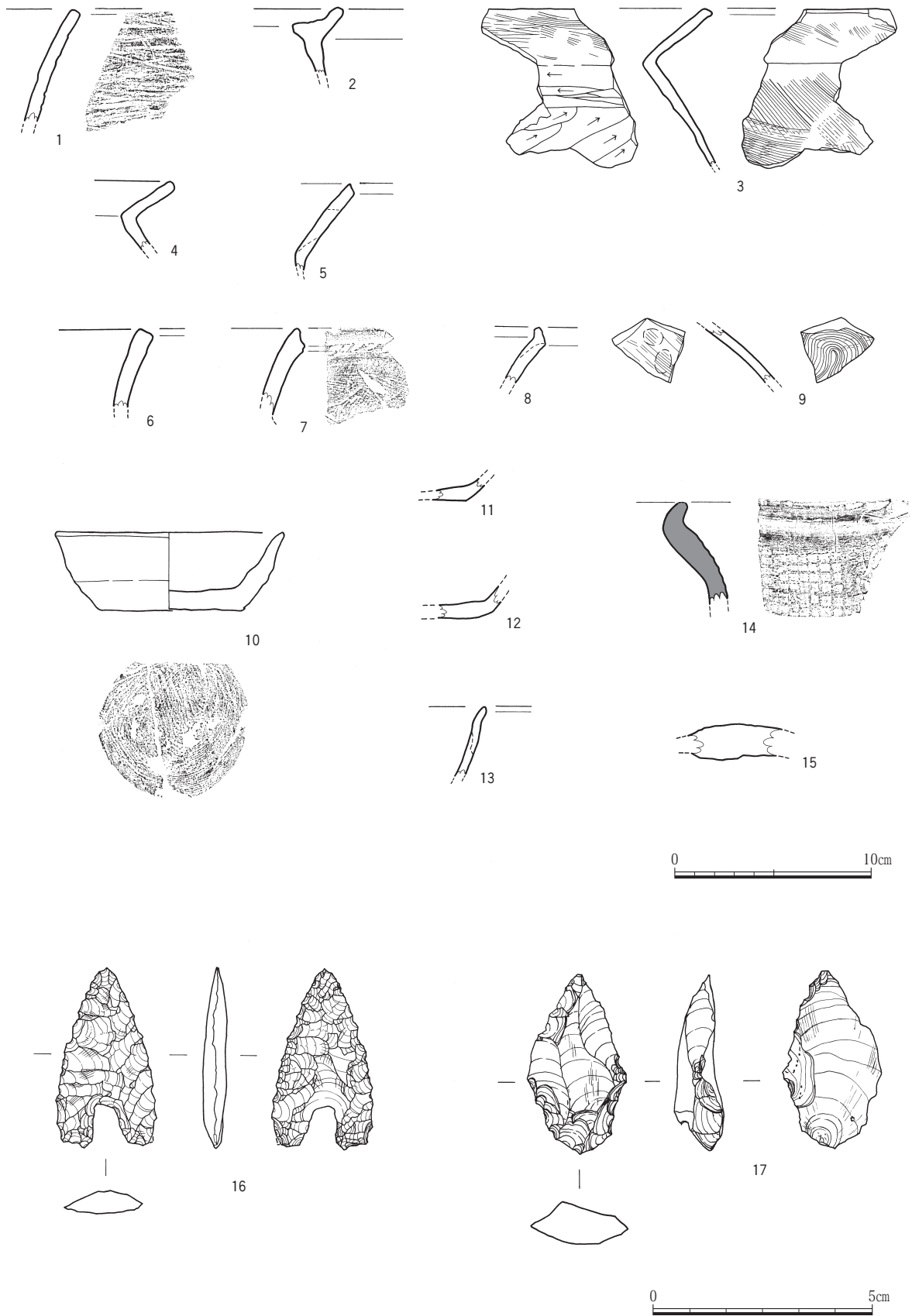
ピット・トレンチ・攪乱他調査区内出土遺物（第16図）

この調査区から出土した遺物のうち主ものを上げる。

1は後晩期の条痕調整の土器、2の弥生中期かと思われる口縁部、7の刻み目のある壺型土器、9は外器面に流水文を持つ弥生中期の壺のように古手の遺物がある。一方、10や14などのような中世に属する遺物も出土している。

石器として、16は石鏃である。縦長で基部の抉りの深いものである。17はナイフ形石器と考えた黒曜石製の石器である。基部は両側辺から調整がなされ、刃部の左面には剥離調整されている。残念ながら攪乱からの出土である。調査終了間際にトレンチをいれて旧石器の有無を確認したが、検出できなかった。

注1) パリノ・サーヴェイ株式会社「江津湖遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析委託業務報告」（2007年3月）の成果報告による。



第16図 I区 pit・トレンチ・一括出土遺物実測図(S=1/3)(16・17:S=1/2)

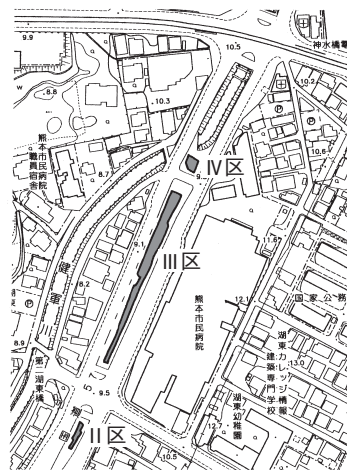
第IV章 江津湖東－II・III・IV区

第1節 調査の経過

江津湖東－II・III・IV区は、湖東I区からII区までも北東方向に約300m離れて位置する一般国道の中央分離帯内である。3区を合わせると260m程の細長い調査区になる。調査区を3区に分けたのは現況道路の交差部分や、歩行者用横断部分、歩道、さらには信号機の設置箇所があったため、調査対象地からはずさざるを得なかったからである。その三箇所に対して南から江津湖東II・III・IV区と区番号を設定した。そのうちのIII区については先に記したようにその中央付近で分割し、南側をIII-A区、北側をIII-B区として、調査中の仮番号を付けた。そして、8月中旬にIII-A区とIV区から調査を開始した。

調査は重機を使用して表土を剥ぎ、その後作業員による人力で遺構検出を行った。現地表から検出面までの深さは最も浅い地点で約2mあり、調査区内を南に行けばいくほど旧地形はさらに深く、最も南側ではその差は3mを越える深さとなった。この深さと調査区の幅の狭さもあって風も通らず、日中の猛暑と調査区両脇を走る自動車の排気ガスのなかの手作業で作業員の皆さんには酷な労働であった。

10月にはII区も調査を開始した。10月中にはIV区の調査を終了した。III-A区も11月中には調査を終了させ、12月よりIII-B区の調査を開始した。III-B区の調査は年度末の年3月一杯までかかり、実測のみが翌年度4月までかかって終了した。



第17図 II・III・IV区
位置関係図

調査経緯

第2節 調査の概要

この3箇所の調査区は、洪積台地である託麻台地上の南西突端部分に位置する。周辺は今回の調査原因でもあるバイパス機能の発達した国道57号線が貫通していることもあって広く市街地化し、場所によっては1～2m前後の起伏のある箇所もあるものの概ね平坦ないわゆる人工的な地形と景観を呈している。調査区周辺の現在の標高は9m前後を測り、非常にゆるやかながら西と南方向に向かって下る地形をしている。調査区内で当時の微地形を見てみると、II区の遺構確認面の標高が7.5mほどであるのに対し、III区の遺構確認面では南側で7mほど、北東方向へ向かうにつれて標高が8mほどまで高くなり、IV区ではさらに8mを越えていた。現在のII区とIII区間の調査対象外部分をみると、地形はやや浅い谷状地形となり、II区側からIII区南側になる。それを挟んで、IV区方向へは徐々に高くなっていく状況が分かる。ただ、非常に細長い調査区のため実際の微地形がこのとおりであるかは不明である。

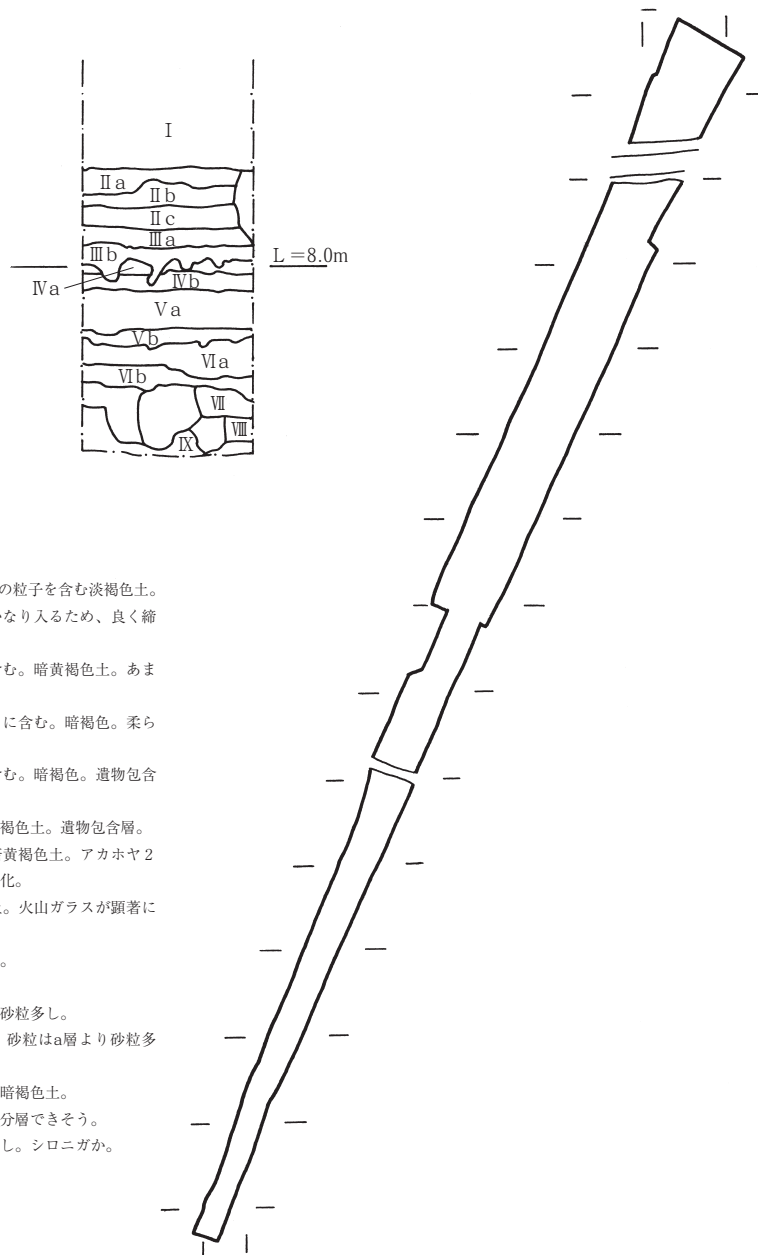
まず、II区の調査では顕著な遺構が見られなかった。遺構面が現地表面と近く、攪乱や樹痕が多く、土壇1基と溝状遺構1条がわずかに確認されただけであった。ただ、柱穴の可能性もあるピットもあり、非常に狭小な調査区であるということから、この周囲に遺構が存在する可能性は否定できない。

遺跡の立地

II区の状況

Ⅲ区の状況 Ⅲ区は非常に遺構が濃密に分布し、竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡3棟、土坑13基、溝状遺構15条、ピット群多量を検出した。遺物も縄文、古代、中世と幅広い時代に渡って出土した。詳細は本文に譲るが、遺構分布はやや偏りがあり、調査区内の南側2/3に集中し、空間地と溝などを置いて北側でまた竪穴建物などが現れ始める。また、土坑のうちのいくつかは出土遺物こそないものの掘り込まれた層や埋土の状況から時代的に古代より古い遺構と考えられる。層的には縄文時代のものの可能性がある。このⅢ区で、とらえた標準土層が第18図である。今回の遺構確認面の下に暗褐色層があり、その層からの掘り込みが落とし穴状の土壌としてとらえることができる。

Ⅳ区の状況 Ⅳ区はⅢ区との間が10mほどと狭く、遺構の検出状況はⅢ区北側と似た状況にある。調査範囲の狭さによるが、検出した遺構は少なく、竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、土坑2基、柵列状遺構1条である。それも完全に遺構が残っているのではなく、ほとんどが調査区外に延びていた。



- I層：客土。
- IIa層：赤橙色のφ1mm~0.5mmの粒子を含む淡褐色土。上層から染みこみがかなり入るため、良く締まる。
- IIb層：赤橙色粒子を多量に含む。暗黄褐色土。あまり締まっていない。
- IIc層：赤褐色の粒子がまばらに含む。暗褐色。柔らかい。
- IIIa層：赤橙色粒子を僅かに含む。暗褐色。遺物包含層。
- IIIb層：あまり締まりのない黒褐色土。遺物包含層。
- IVa層：あまり締まりのない暗黄褐色土。アカホヤ2次堆積を含むか。土壌化。
- IVb層：良く締まる暗黄褐色土。火山ガラスが顕著に見られる。
- Va層：良く締まる明黄褐色土。
- Vb層：良く締まる暗褐色土。
- VIa層：粘性の強い明褐色土。砂粒多し。
- VIb層：粘性の弱い明褐色土。砂粒はa層より砂粒多い。
- VII層：砂粒多く入り締まる。暗褐色土。
- VIII層：暗褐色粘質土。さらに分層できそう。
- IX層：明褐色粘性土。砂粒多し。シロニガカ。

第18図 江津湖東Ⅲ区基準土層図

第3節 江津湖東－Ⅱ区

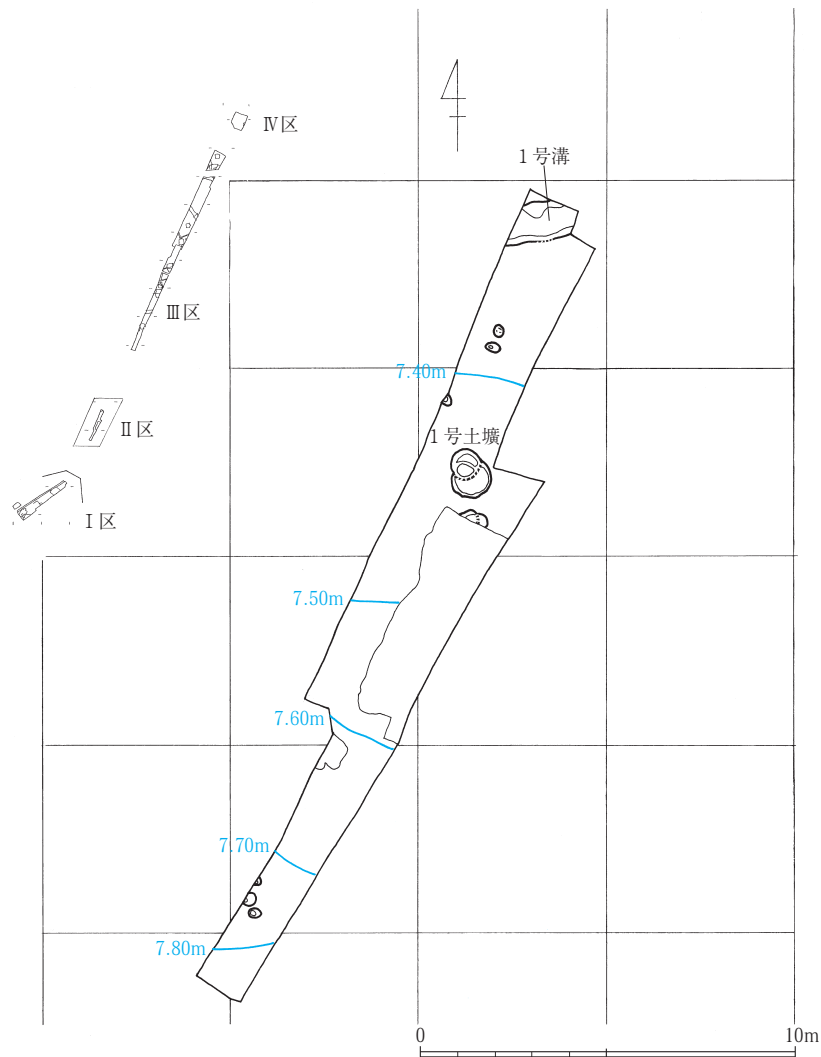
(1) Ⅱ区の概要 (第19図)

江津湖東Ⅱ区は、国道57号線沿いにⅢ区より交差点をはさんで77m南に位置した細長い調査区である。その位置が国道の交差点と交差点の間のために調査区は狭く、さらに遺構面までの深さが地表より2m近くもあるため、調査区の法面の角度もゆるやかに設定しなくてはならず、結局、その調査面積は約57m²と小規模な範囲となった。その他にも調査区中央には昭和50年代の東バイパス開通に伴う工事によって、平面が5.8m×1.7mの四角形の大きな攪乱が掘り込まれ、さらに調査範囲を縮小させていた。

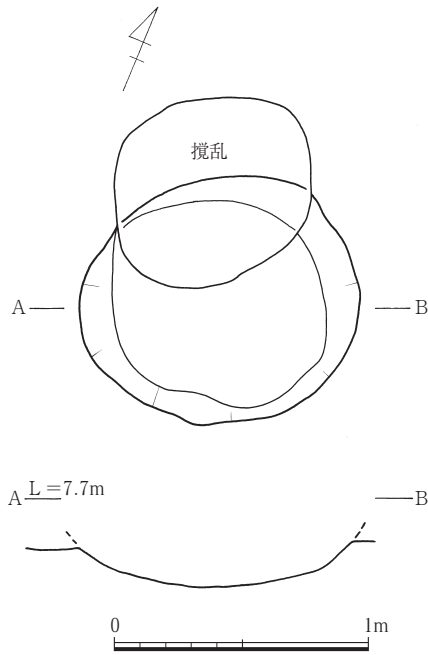
位置
狭い調査区

Ⅱ区で検出された遺構は土壇1基、溝状遺構1条、ピット状遺構6つのみで、他にピット状に土色の違いが多数検出されたが、完掘すると樹痕であることが確認され遺構ではなかった。遺物は各遺構と検出面直上から土師器片が数点出土していたがいずれも図化できる物ではなかった。

検出遺構



第19図 Ⅱ区 遺構配置図(S=1/200)



第20図 Ⅱ区 1号土壙実測図(S=1/30)

(2) 土壙

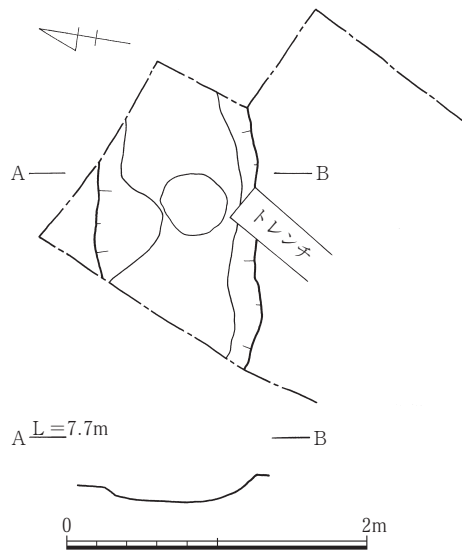
1号土壙(第20図)

Ⅱ区の中央付近に位置する。その北西側は現代の攪乱によって全体の約1/4が削られていた。平面形態は方円形で、断面は底面が中央に向かって深くなる皿状で、壁はやや鋭く立ち上がる形態をしていた。規模は東西辺が1m、南北辺が1m10cmである。深さは最も深いところで検出面から15cmを測った。方位角は攪乱による破壊のため不明。

遺物は小破片も含め1点も出土しておらず、何のために掘られた土壙であったのかは不明。

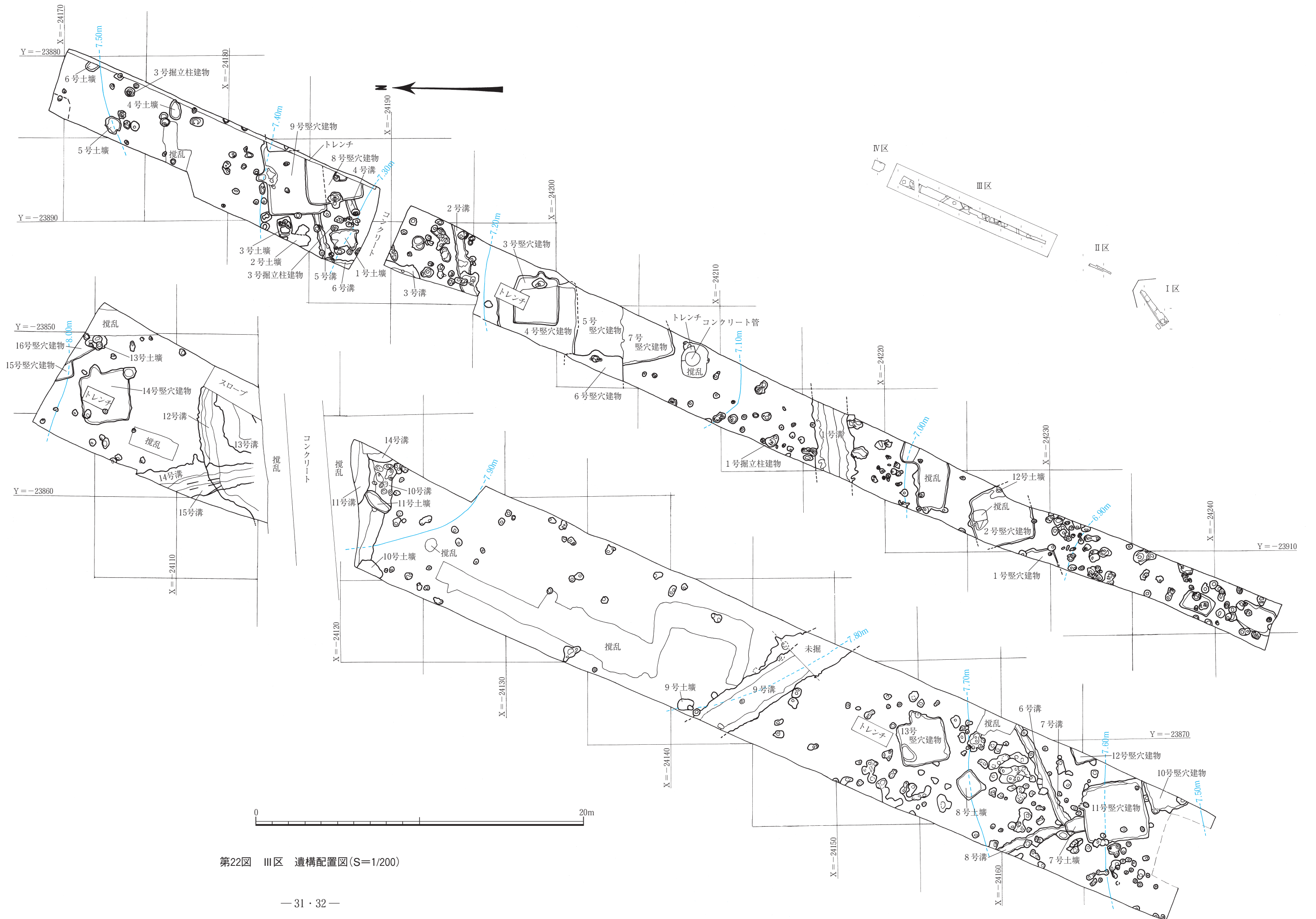
(3) 溝状遺構

1号溝(第21図)



第21図 Ⅱ区 1号溝実測図(S=1/50)

Ⅱ区の北端で平面が東西方向に延びる形で検出された。検出された長さは2m分だけで、方位角は東西を軸にしての9度であった。規模は幅が1m8cm前後で、深さは検出面から9cmを測り、断面形態は底面が中央に向かってやや深くなり、壁がゆるやかに立ち上がる半円形を呈していた。遺物は破片も含め1点も出土しなかった。



第22図 III区 遺構配置図(S=1/200)

第4節 江津湖東－Ⅲ区

Ⅲ区の概要

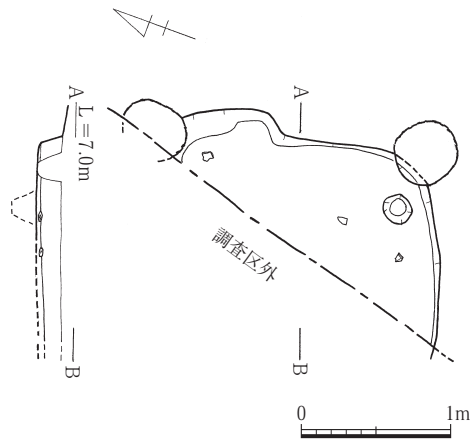
今回の発掘調査によって判明した江津湖東Ⅲ区の旧地形は、北から南にゆるやかに下がる地形をしていた。Ⅲ区北端の最も標高の高い地点の標高は8.0m、南端の最も低い地点は6.9mを測り、その差は1.1mであった。Ⅲ区より南に位置するⅡ区の検出面の標高が7.7mで、標高がⅡ区では若干上がっていることから、旧地形はやや起伏があったことが判る。またⅢ区の現況は道路であるが、その前は畑地であったようでⅢ区のうち北側から約2/3近くが畑地造成によりやや削平を受けていた。

Ⅲ区で検出された遺構は、奈良時代の竪穴建物跡が16棟、掘立柱建物跡は3棟、土壇は13基、溝状遺構は15条であった。他に柱穴状のピットが約350箇所検出され、このうち掘立柱建物跡に関しては、調査中に現地での目視によりその並びが確認されたピットのみを掘立柱建物の柱穴跡と認め、調査終了後に記録した図面から復元できたピットの並びについては今報告からは割愛した。

②竪穴建物跡

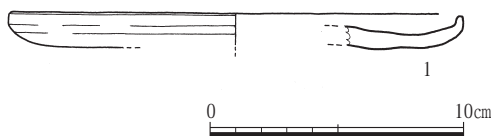
1号竪穴建物（第23図）

Ⅱ～Ⅳ区内で検出した竪穴のうち最も南に位置して、2号竪穴の西辺に平行して隣接する竪穴建物。遺構全体のうち大部分が調査範囲外に外れており、検出当初は土壇と想定して掘り下げを始めたが、完掘すると壁の立ち上りと硬化した床面が現れたので竪穴建物であることが判明した。



第23図 Ⅲ区 1号竪穴建物実測図(S=1/50)

残存していた部分での規模は、南北辺2m20cm以上、東西辺は1m70cm以上、検出面からの深さは15cmを測った。床面積及び方位角といった遺構全体の規模やカマドの有無は検出された範囲からは判らず平面形態は方形か長方形と想定される。竪穴角付近の床面でピットが1つだけ検出されているが、その規模・位置から竪穴に伴う柱穴ではないと考えられる。



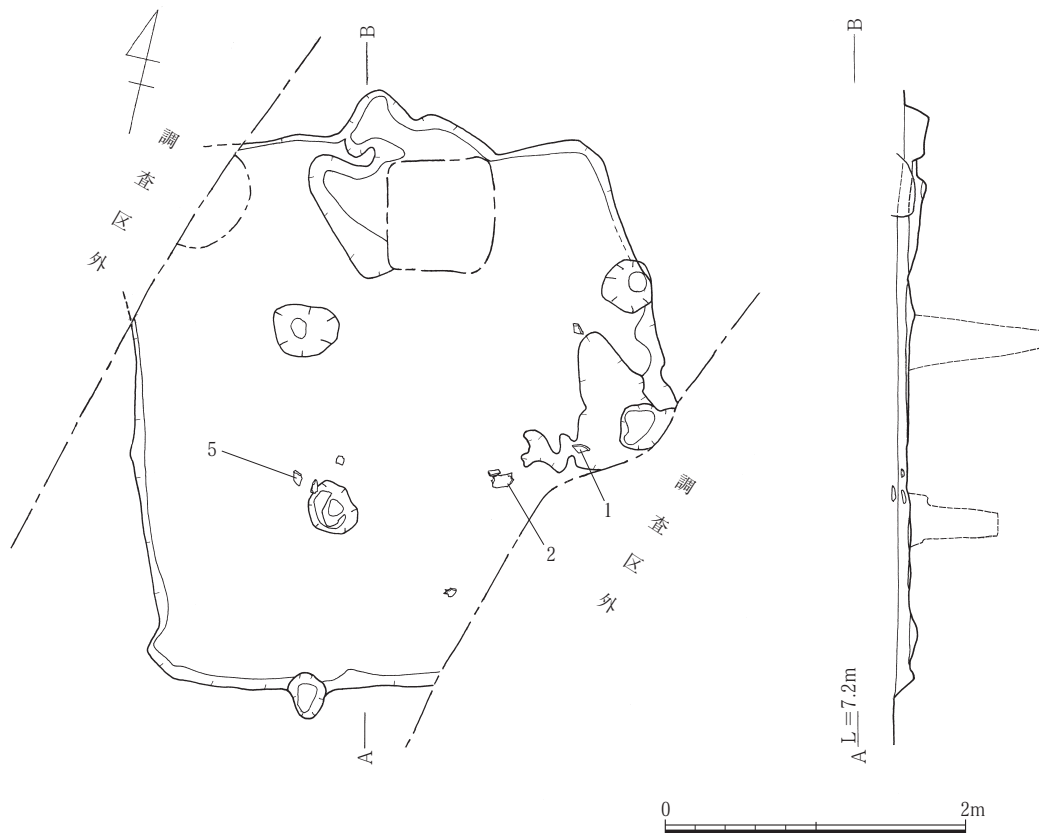
第24図 Ⅲ区 1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

竪穴の埋土は、ややバサつく黒褐色の単一層で分層はできなかった。

遺物は、土師器片が数点出土したが、図化できたのは1の、高坏の坏部の1点のみであった。出土位置は床面直上であったが、時期は特定できなかった（第24図）。

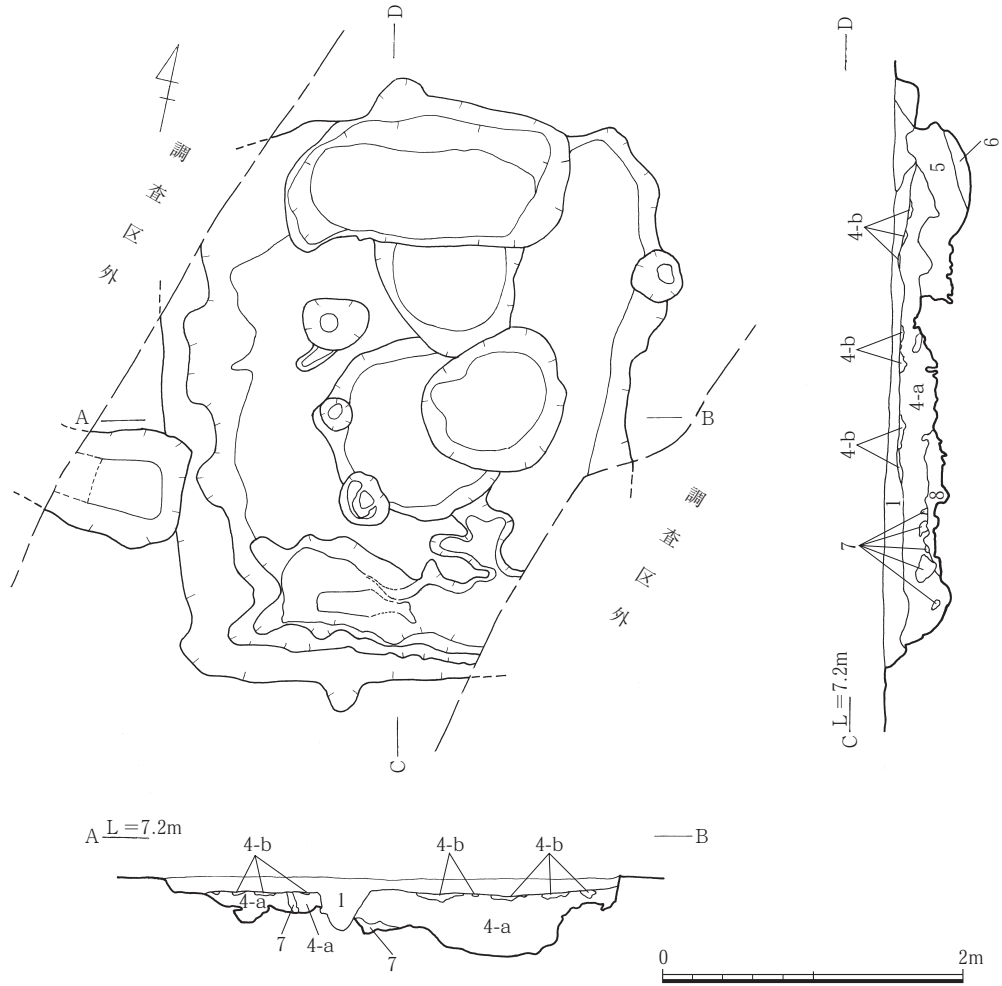
2号竪穴建物(第25図)

- 位置と形態** 1号竪穴の東に平行して隣接する竪穴建物。竪穴の西角と東角は調査区外に延びていたが、検出された部分から平面形態はほぼ方形をなしていることが判る。
- 規模** 規模は南北辺3m80cm、東西辺は3m60cmで、床面積は13.7m²の中型に分類される。検出面からの深さは23cmを測り、竪穴の方位角は南北を軸にしての西に15度であった。柱穴は竪穴の中央の西寄り2本とその対面側の東壁際で1本検出された。この3本の形態から竪穴東南角の調査区外にもう1本存在していたことが考えられ、合わせて4本柱構造の上屋を持つ建物であったと想定される。
- 柱穴**
- カマド** カマドは北辺でわずかに外側に張り出す形で造り付けられていたが、カマドの内側は現代の攪乱によって床面を突き抜けて大きく破壊されており、周辺にも側壁の粘土や遺物も残っていなかったため、カマドの詳細は判らなかった。
- 貼り床** 床面は貼り床が施され、硬化面は床面全体に広がっていた。この硬化面を削り取りさらに床面下の埋土を除去すると、最下面で第26図のような数基の土壇が掘り込まれていることが確認された。これ等の土壇は竪穴中央付近で切り合うように検出され、平面形態はほぼ円形を呈し、深さは最も深い地点で貼り床面から47cmを測った。最初の竪穴掘削時に掘り込まれた土壇と考えられるが、いずれの土壇からも遺物は出土しておらず、土層も床面下埋土と目視では差はなく、結局その掘削目的は不明であった。
- 土壇**

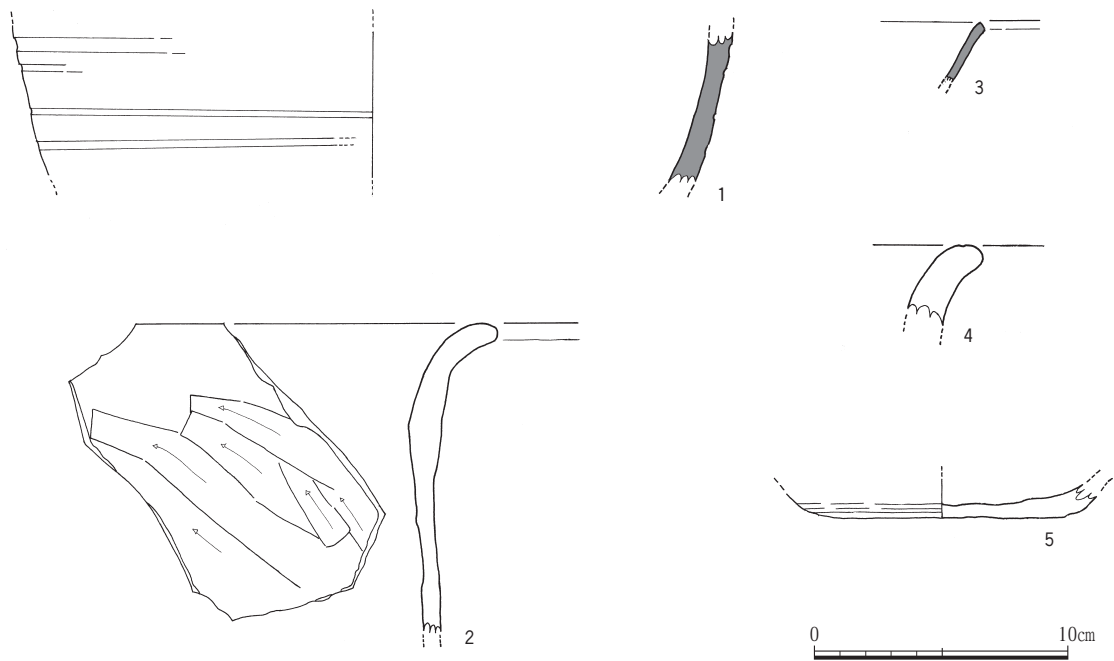


第25図 Ⅲ区 2号竪穴建物実測図(S=1/50)

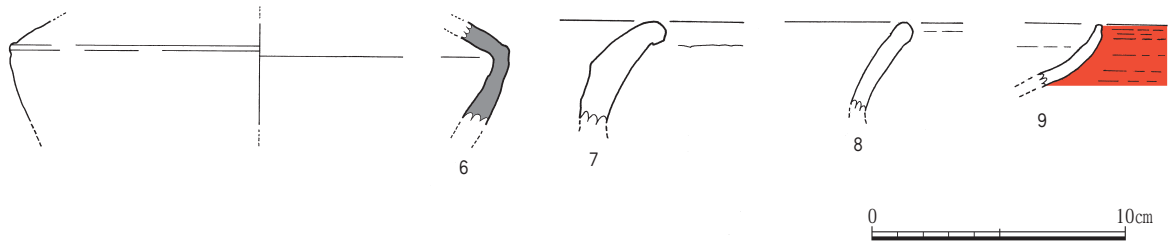
第4節 江津湖東-Ⅲ区



第26図 Ⅲ区 2号豎穴建物貼床除去後図(S=1/50)



第27図 Ⅲ区 2号豎穴建物出土遺物実測図(S=1/3)



第28図 Ⅲ区 2号竪穴建物床下出土遺物実測図(S=1/3)

土壌

土壌1はカマドの直下に掘りこまれており、平面形態は東西に長い長方形を呈し、断面は半円状に窪んで底面は平坦ではなかった。カマド基底面からの深さは最も深い地点で40cmを測り、土壌内の埋没土層は上下に分層できて、両層共にカマドのあった北壁方向から斜めに堆積していた。土壌内から遺物・焼土・粘土片の出土は無かった。

出土遺物

遺物は竪穴床面上と床面下に分かれ、それぞれから土師器と須恵器片が出土した。しかし出土数は少なくいずれも小さな破片のまとまりなく散在した状況での出土で、竪穴の廃絶時期を特定できるには至らなかった(第27・28図)。

3～7号竪穴建物(第29図)

切り合う竪穴建物

3～7号竪穴建物はⅢ区の中央やや南寄りの直径10mの範囲内で集中的に検出された。この五つの竪穴は重複して切り合っており、さらにこの付近は調査区の幅が約4mしかなく、そのため5棟のうち4棟の竪穴の一部は大きく調査区外に外れ、かろうじて全体が調査区内に収まっていたのは3号竪穴のみであった。このように遺構全体が検出できず、さらに重なり合っているのは的確に掘り下げての調査は困難を極めた。そして、3～7号竪穴の内面からは多くの土器片が出土したが、その大半は竪穴床面より10cm以上高い位置から出土し、時期も9世紀中葉で、これをそのまま信用すると江津湖東Ⅱ～Ⅳ区内で検出された他の竪穴の時期と1世紀近くの違いが生じてしまうことになる。竪穴を切る形での土壌等は確認できなかったが、これ等の土器が竪穴に伴うとは考えにくく、3～7号竪穴の廃絶後のかなり時間の経過した後に廃棄された遺物と考えられる。

3号竪穴建物(第29図)

位置

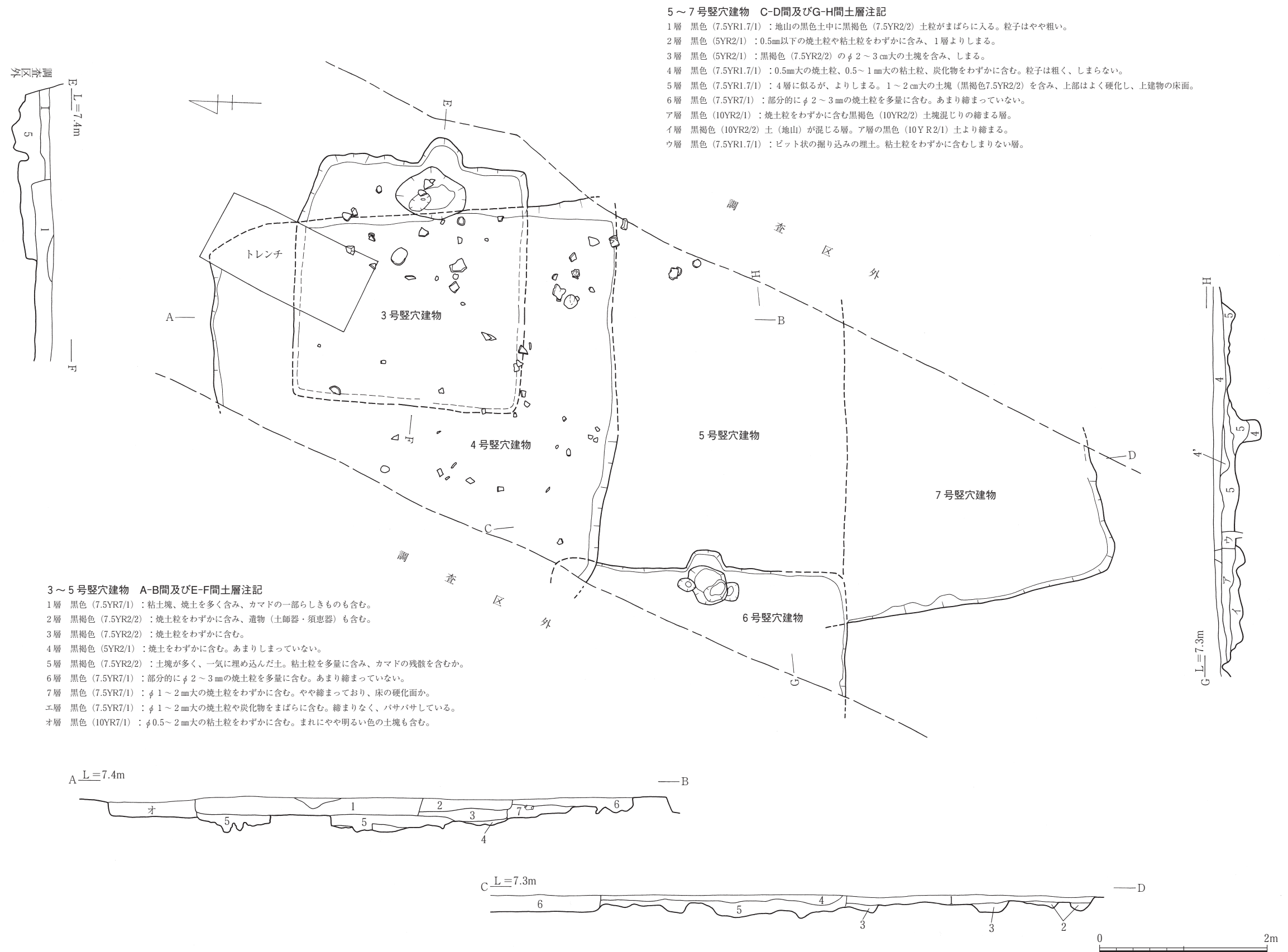
3～7号竪穴建物のうち北端に位置し、最後に掘りこまれた竪穴建物。

規模と構造

規模は東西長辺2m90cm、南北短辺2m70cmで、平面形態はやや東西に長い長方形を呈していた。床面積は約8㎡で小型竪穴に分類される。検出面からの深さは約17cmと深く、東西を軸にしての方位角は5度であった。床面は貼り床が施され、硬化面は床面全体に広がっていた。床面から柱穴は1基も検出されず、無柱穴の上屋構造であったようである。

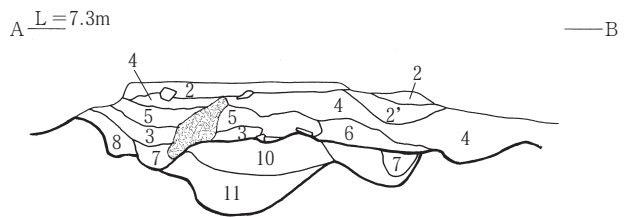
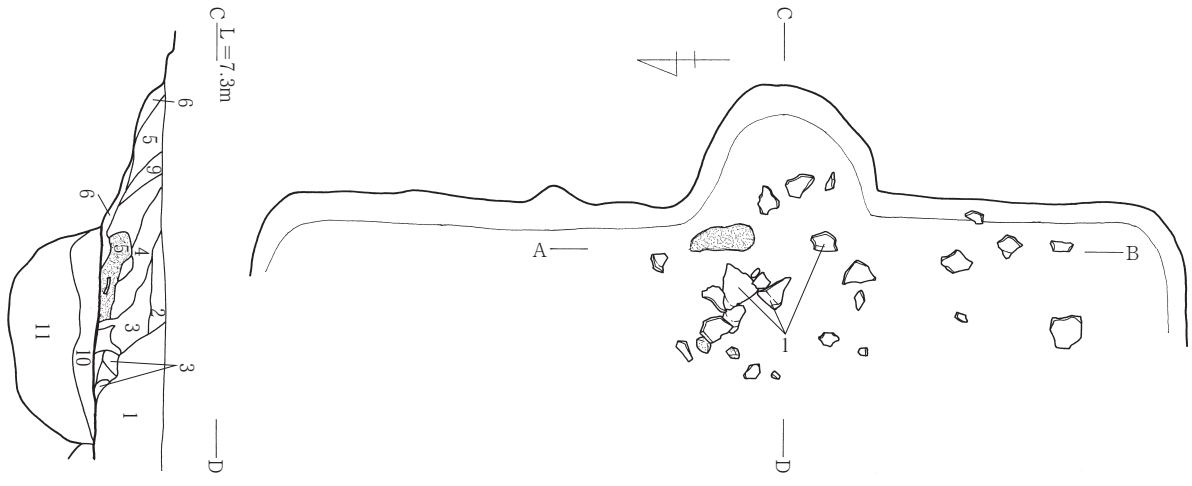
カマド

カマドは東辺中央に煙道が外側に張り出すように残存していたが、その周辺には壁面や天井の粘土は残っておらず、炭化片や灰もまとまらずには検出されず少量が層中に混ざるのみで、焼土も塊ではあったが基底面には張り付いておらず、層中に浮かび上がって検出された。カマド残存部の層位は第Ⅰ図に示しているように奥壁の方から徐々に埋められていることが確認され、これ等のことから竪穴廃絶後に人為的に破壊し埋め戻されたと考えられる。しかしカマド廃絶祭祀を明確に窺わせる痕跡は確認できなかった。

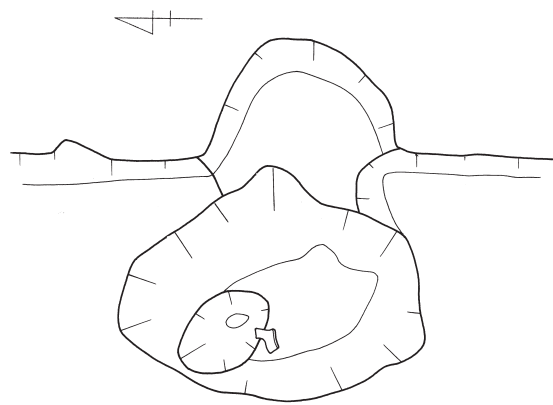


第29図 III区 3～7号竪穴建物実測図(S=1/50)

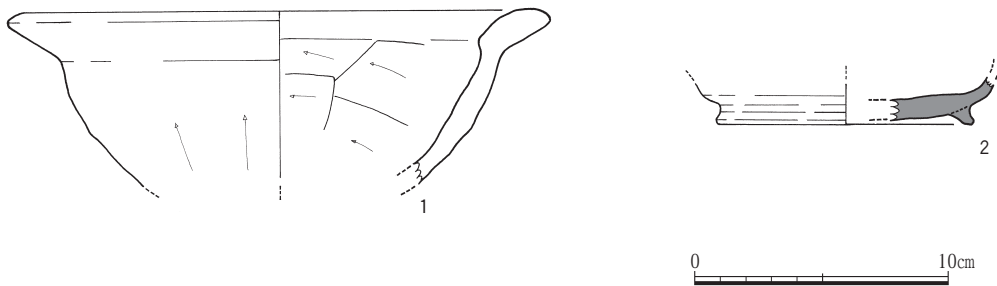
第4節 江津湖東-Ⅲ区



- 1層：3号竖穴の埋土。黒色 (7.5YR1.7/1)。焼土粒をまばらに含み、しまりはない。竈近くでは粘土粒子も見られる。
- 2層：黒褐 (10YR2/2)。焼土粒子、粘土粒をわずかに含む。ややしまった土
- 2*層：黒褐 (10YR2/2)。5層の状況に似るが、ややしまる。竈の破壊により移動した土の可能性あり。
- 3層：黒褐 (7.5YR2/2)。粘質土で、焼土、粘土をほとんど含まないよくしまる土。
- 4層：黒 (7.5YR2/1)。大き目の粘土粒をわずかに含み、あまりしまりはない。粘土粒子もわずかに含む。
- 5層：黒褐 (10YR2/2)。焼土粒を多量に含み、しまりはない。焼土・灰の混じる竈の土。
- 6層：黒 (5YR1.7/1)。灰を主とするもので、しまりがなく軟らかい。
- 7層：黒 (5YR1.7/1)。焼土・灰を含む土でしまりはなく軟らかい。
- 8層：黒褐 (10YR2/2)。焼土・粘土粒をごくわずかに含み、しまっている。
- 9層：黒褐 (10YR2/3)。焼土粒をほとんど含まず、しまりはない。
- 10層：黒 (7.5YR2/1)。よくしまった土で一部に焼土粒入る。粘土粒が入る部分もある。
- 11層：黒 (7.5YR2/1) と黒 (5YR1.7/1) の混合土であまりしまっていない。焼土・粘土ともほとんど含まない。



第30図 Ⅲ区 3号竖穴建物カマド実測図(S=1/20)



第31図 Ⅲ区 3号竖穴建物カマド出土遺物実測図(S=1/3)

カマド直下の土坑 カマドの直下には土壌が掘り込まれていた。平面形態はやや歪んだ長円形を呈し、断面は半円状で底部がやや凸凹していた。深さは竪穴床面から最も深い地点で25cmを測った。土壌内の埋土は上下に分層でき、上層である10層は下層である11層に比べ薄く硬く締まり、11層は締まりがなかった。土壌内部からは土師器甕の胴部片が1点だけ出土したが実測できるほどの大きさではなかった。

出土遺物 3号竪穴の範囲内からは土器片が多く出土したが、前述したように3号竪穴に伴う遺物ではなく、3号竪穴から確実に出土した遺物と言えるのはカマドの基底面で焼土や灰と混ざって出土した次の2点のみで、1は土師器鉢で外面に煤が付着し、2は須恵器の高台付坏であった(第31図)。

この竪穴の廃絶時期は、それを窺わせる土器が1点のみしかなく断定はできないが、2の須恵器高台付坏の形態からみて8世紀前葉～中葉と推定される。

4号竪穴建物(第29図)

切り合い関係 3～7号竪穴の切り合いの中で、南辺は7号を切り、西辺で6号、北辺を5号に切られ、東辺は調査区外に延びている竪穴建物。実質残存していた壁は南辺のみで、これ以外は角も含めて残っておらず、そのため竪穴の平面・規模共にその詳細は不明であった。しかし、残存していた範囲での床面積は11㎡あり、そこから想定すると竪穴の規模は中型以上に分類される。残存深度は9cmを測り、床面下は貼り床を施され、硬化面は竪穴の中央付近に広がっていた。また床面から柱穴は検出されなかった。

埋土 埋土は貼り床上と床下のそれぞれ1層で、両層共に黒色土であったが、床上層はバサバサしてしまりが無いのに対し、床下層はよくしまっていた。

出土遺物 4号竪穴からは破片で多くの土器が出土したが、前述したように4号竪穴に伴う土器ではなく、この竪穴の廃絶時の遺物は出土しなかった。

5号竪穴建物(第29図)

切り合い関係 南辺で4・6号竪穴を切り、東辺から中央部を3号竪穴に切られ、西辺は調査区外に延びていた。また、北東角付近を試掘時のトレンチに大きく削り取られている。

平面形態はやや歪んだ方形で、規模は南北辺4m70cm、東西辺4m20cm以上で、床面積は残っていた範囲だけで12.5㎡あり大型に分類される。床面は、複雑な遺構の重なり合いのためか硬化面の範囲が不明瞭で、しかもその高さが竪穴内の位置によって違っていた。これは大型に見えた竪穴であったがこの竪穴内で確認していない遺構と切り合っている可能性があり、本来このような場合は、これらの硬化面は全て除去して床面下の調査を行い遺構の切り合いを確認すべきだが、調査期間がどうしてもせまってお掘り下げての調査をできなかった。このようにこの5号竪穴の全てが間違いとは思えないが、報告に耐えない調査となってしまう、調査期間や調査範囲の問題があったとはいえ、全ては調査員の能力不足から発した問題と考えている。

カマド カマドは調査した範囲からは検出されず、竪穴の埋土は余りしまりのないバサバサした黒色土の単一層で、層中には焼土(0.5mm大)・炭化墨片・粘土(0.5～1mm大)が粒子状に少量含まれていた。

出土遺物 5号竪穴からは破片で多くの土器が出土したが、4号竪穴同様に5号竪穴に伴う土器ではなく他に確実に5号竪穴に伴う遺物は出土していない。

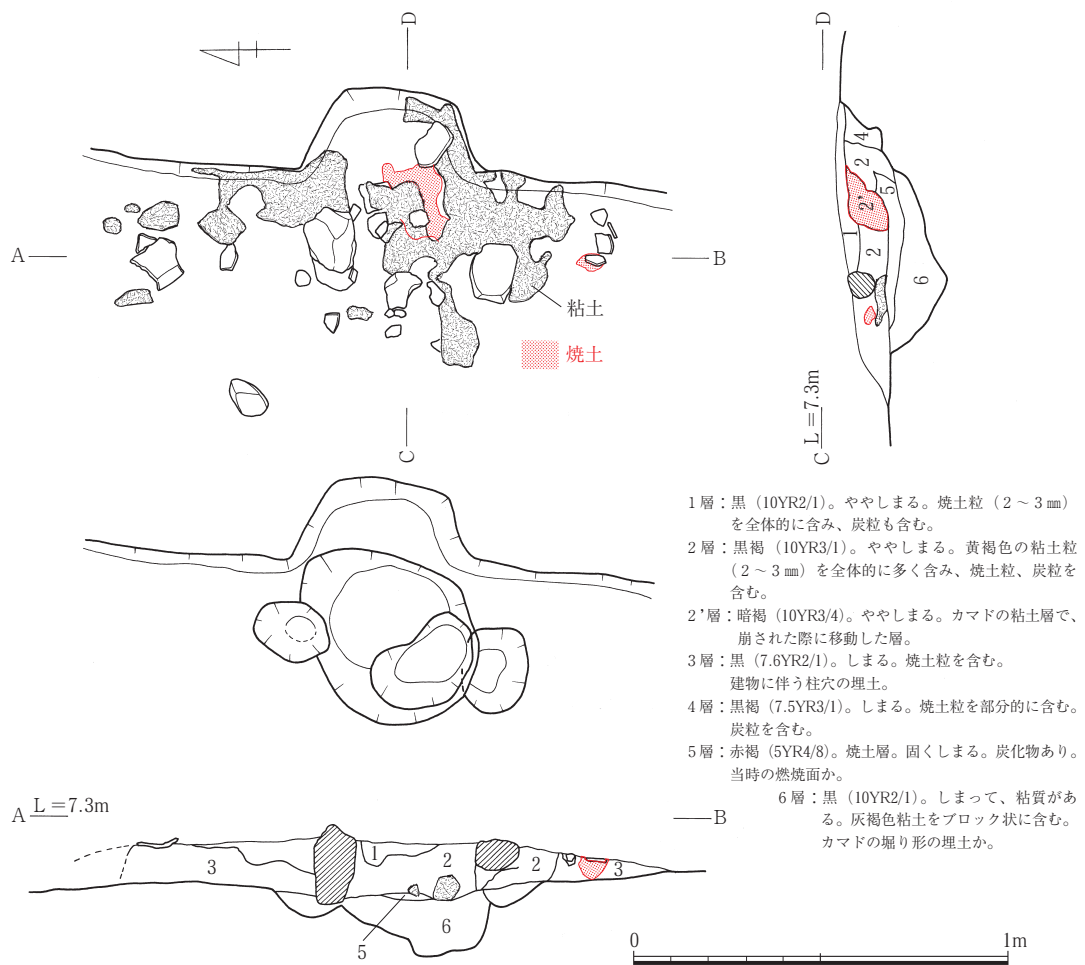
6号竪穴建物(第29図)

4号竪穴の西辺を切り、北東角を5号竪穴に切られる竪穴建物。その大半は調査区外に及び切り合い関係
ており、検出されたのはカマドの在る東辺のみで、そのため平面形態・規模・方位角・柱穴の
有無のいずれも不明である。床面は貼り床ではなく、そのまま踏み締められ、検出面からの深
さは5cmであった。

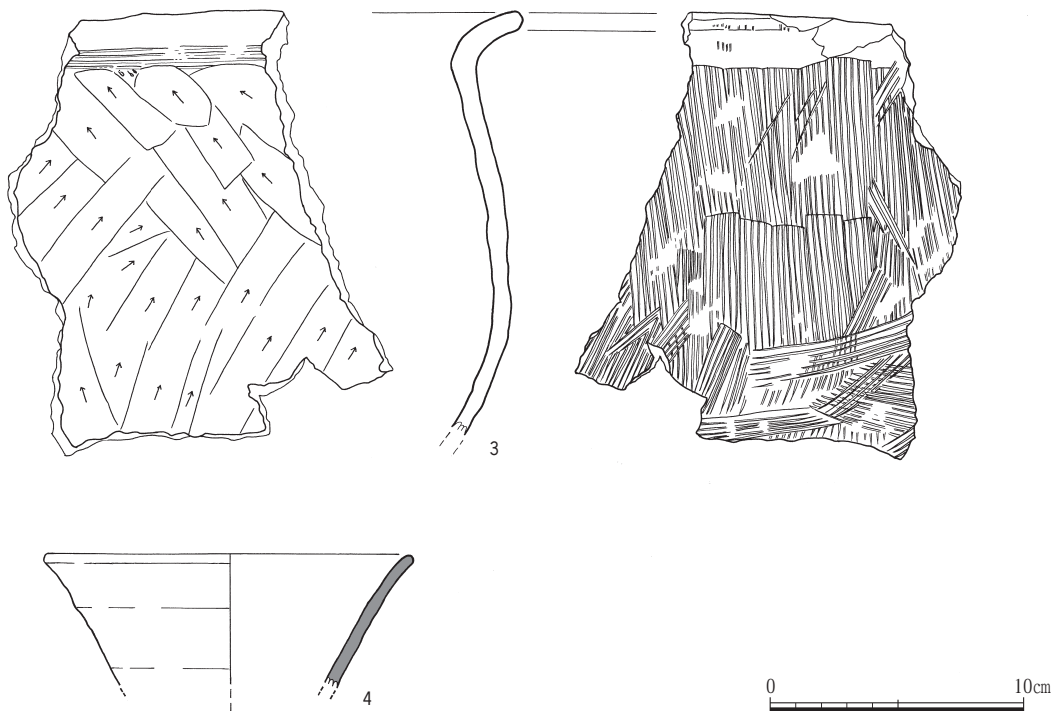
東辺のカマドは平面で台形状に張り出す形で造り付けられていた。このカマドの壁や天井構
造は崩落していたものの遺存状況は比較的良好で、両袖には軽石製の支柱が立った状態で検出
され、基底面ではカマド使用時の被熱面である焼土がそのまま残存し、周辺には崩れた粘土片
が土器片と混ざりながら残っていた(第32図)。

カマド直下にはほぼ円形の土壇が掘り込まれていた。規模は一辺が40cm×45cmで、断面は台
カマド直下の土壇
形状で底面は凸凹した不整形を呈し、最も深いところで基底面から19cmを測った。埋土は締ま
る粘質の黒色土の1層で、灰褐色の粘土がブロック状に混ざり、遺物片も出土していたが実測
のできる大きさではなかった。

6号竪穴に確実に伴う遺物は、崩落したカマドの粘土に混じって破片で出土した土器片で、
土師器と須恵器がそれぞれ1点ずつ出土していた。3は土師器甕の口縁～胴部で胴部中ほどに
煤の付着と黒斑が認められた。4は須恵器碗である。この2点から6号竪穴の廃絶時期を求めた
いが、第33図にしめしている土器からは、その時期を特定することはできなかった。



第32図 Ⅲ区 6号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)



第33図 Ⅲ区 6号竪穴建物カマド出土遺物実測図(S=1/3)

7号竪穴建物（第29図）

切り合い関係 3～7号の切り合う竪穴のなかで、南端に位置する竪穴建物。北辺を4号竪穴に切られ、東辺は調査区外に延びていた。

規模 規模は、南北辺3m30cm以上、東西辺は1m50cm以上で、残存していた範囲での床面積は9㎡以上あり、このことから規模分類は中型以上の竪穴建物と推定されるが、平面形態は方形なのか長方形なのか判らなかった。残存深度は5cmと浅く、床面下は貼り床ではなく固く踏みしめられて、硬化面は床面全体に広がっていた。柱穴は検出されず、カマドも無かった。

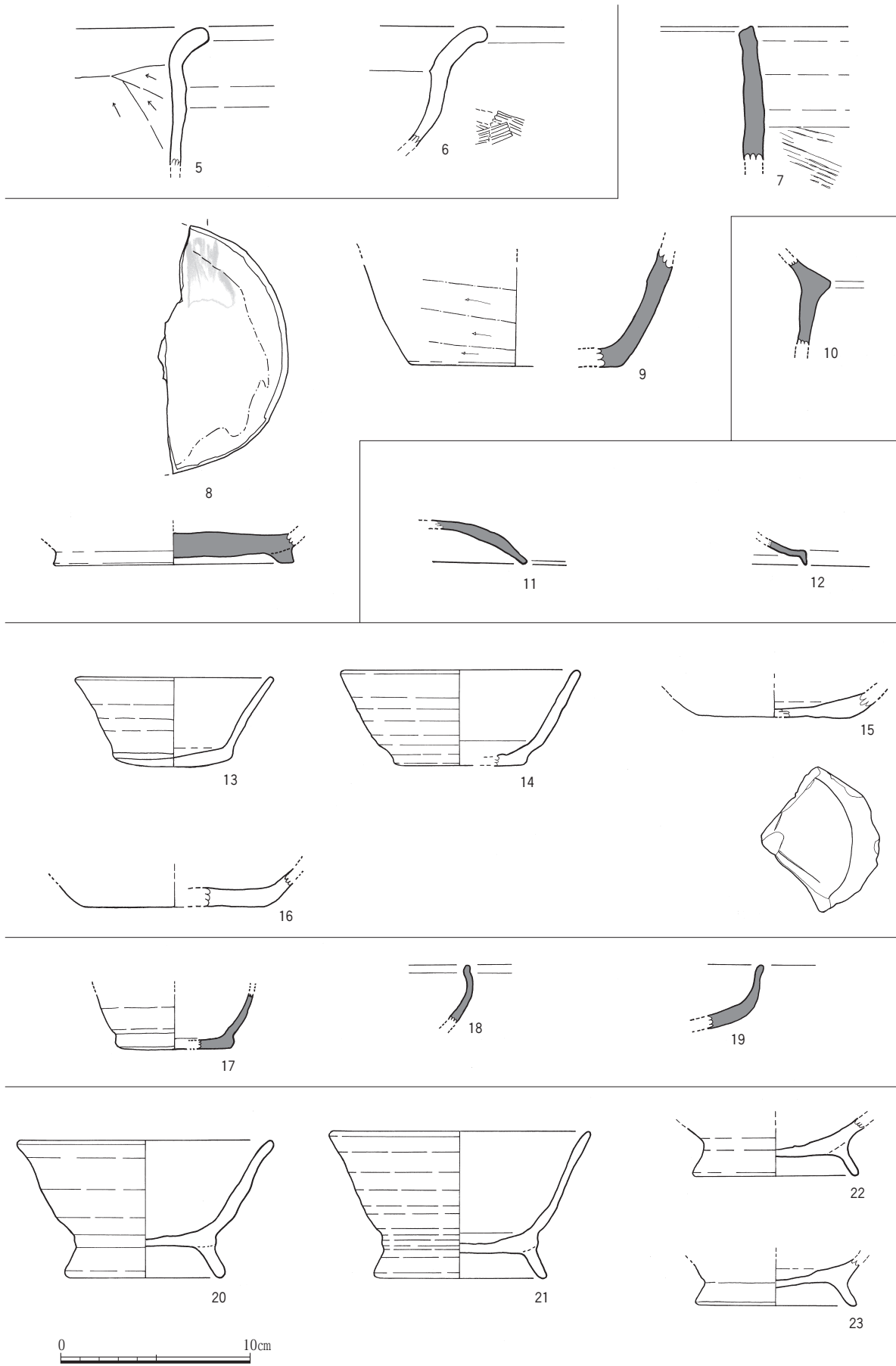
埋土 埋土は黒色土の単一層で層中には黒褐色土が粒子状に含まれていた。遺物は破片も含め1点も出土していない。

3～7号竪穴出土遺物（第34・35図）

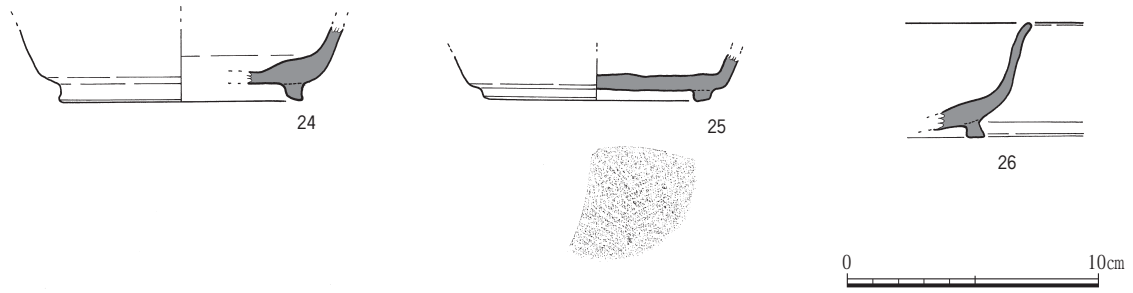
出土遺物 3～7号竪穴建物の冒頭で述べたように、竪穴とは別遺構としては平面での検出は確認されなかったが、竪穴内から出土した時期の明らかに違う土器群をここでは報告しておく。

まず、土師器と須恵器の両方が出土しており、特徴としては実測できた22点のうちの14点は坏もしくは高台付坏であった。煮炊き用の甕や鍋は5と6の1点ずつ、鉢は須恵器で7と9の2点、壺も須恵器で8と10、このうちの8は高台付で底部のみの出土であったが、その径が12.6cm以上あることから坏ではなく壺の底部と判断され、またこの壺底部の内面には墨の摺った痕跡があり廃棄後に転用硯として使用していることが判明した。坏蓋は11と12の2点である。この組成は良好な一括出土ではないため、当時のセット関係の資料としては当然ながら参考資料に留まる土器群であるが、破片での出土のわりに数点がほぼ完形となる坏や転用硯が出土していることからここに報告した。

第4節 江津湖東-Ⅲ区



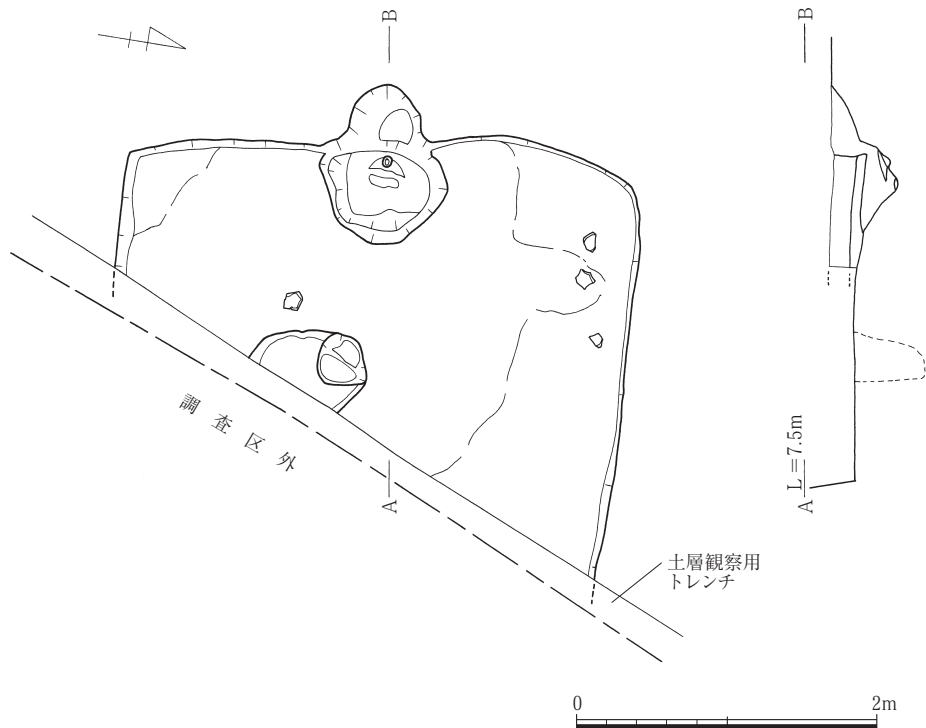
第34図 Ⅲ区 3～7号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)



第35図 Ⅲ区 3～7号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

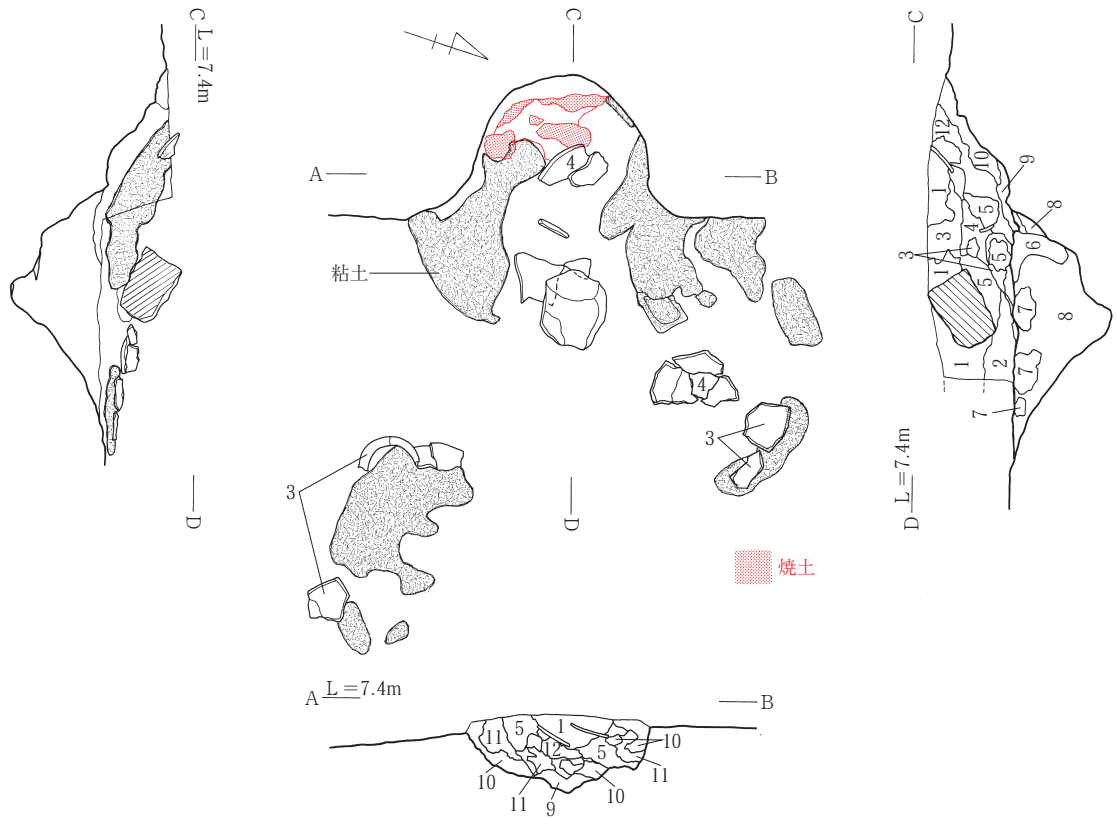
8号竪穴建物 (第36図)

- 位置と状況** Ⅲ区中央付近を東西に横断するコンクリート製水路の北側に位置する竪穴建物。全体のうち東半分は調査区外に延びて全掘はできず、また北側の9号竪穴を大きく切っていた。
- 規模** 規模は南北辺が3 m50cm、東西辺は2 m80cm以上、床面積は残存していた範囲で10㎡以上あり、平面形態は方形の小型竪穴建物と推定される。検出面からの深さは約19cmを測り、方位角は東西を軸にしての7度であった。床面は貼り床ではなくそのまま踏みしめられ、硬化面は竪穴中央部からカマド付近にまで広がっていた。
- 床面**
- ピット** ピットが竪穴の中央部で土壌と切り合いながら一つだけ検出され、その深さは床面から45cmを測り、平面形態もやや不整形ながらほぼ円形で柱穴には申し分のない掘り方であった。しかし、土壌と切りあっている事とピットの8 cm東は調査区外となることから、8号竪穴とは別の遺構に構成される柱穴の可能性も有り、必ずしもこの竪穴に伴う柱穴とは断定できなかった。
- カマド** カマドは竪穴西辺で大きく突き出る形に検出された。周辺には崩落した壁や天井部の粘土片

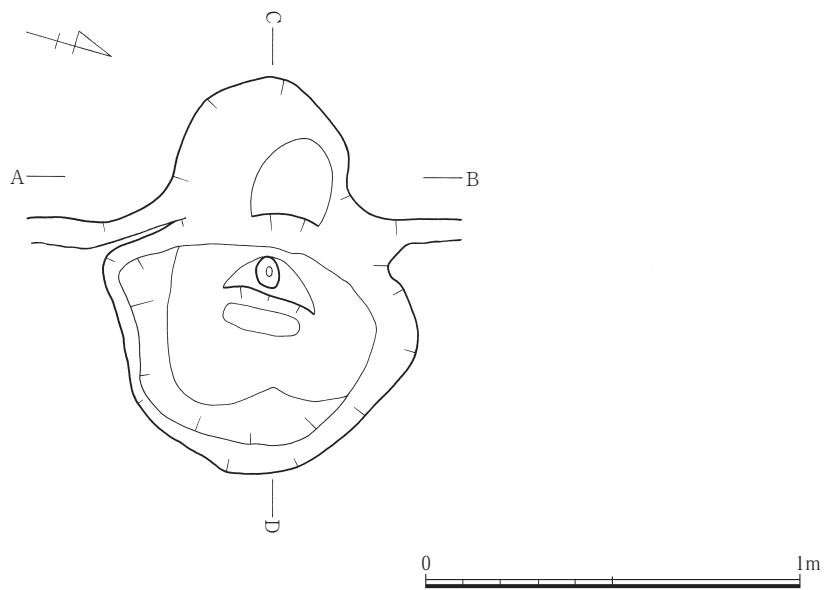


第36図 Ⅲ区 8号竪穴建物実測図(S=1/50)

第4節 江津湖東-Ⅲ区



- 1層：オリーブ黒 (5Y3/1)。バサバサした砂質土。極少量焼土粒子が混じる。
- 2層：やや濃い黒褐 (10YR3/1)。1層より土色がやや濃くなり、土質もややしまる。焼土粒子、炭化物片、灰等少量混じる。
- 3層：にぶい黄 (2.5Y6/3)。固くしまる粘土。カマド側壁の一部か。
- 4層：明るい黄 (2.5Y8/6)。焼けた粘質土。乾いておりバサバサした粒子状。側壁の一部か。
- 5層：褐灰 (10YR4/1)。バサバサした粘質土。2層よりやや多くの焼土、灰、炭化物粒子を含む。
- 6層：薄い黒褐 (2.5Y3/1)。ややしまる粘質土。部分的に多量の灰と少量の焼土片・炭片を含む。
- 7層：灰黄 (2.5Y6/2)。しまる粘質土。貼り床土と想定される。
- 8層：黄灰 (2.5Y4/1)。ややしまる砂質土。
- 9層：褐灰 (10YR5/1)。ややしまる粘質土。
- 10層：やや濃い灰白 (10YR7/1)。粘質土。
- 11層：5層に10層の粘質土が混じりこんだ層。



第37図 Ⅲ区 8号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)

と焼土片が土器片と共に出土し、さらにこの中には砂岩質の礫も数点含まれていた。この礫はコブシ大から人頭近くの大きさがあり、それぞれに成形が施され片面が焼けていることから、カマドの壁面に使用されていたようである。また、土層図である第37図からも判るようにカマド基底面の直上には炭化物の層が約3cmの厚みで広がり、その上に焼土を粒子状に多く含んだ層や天井部の一部と考えられる層が積み重なっていることから、このカマドは上から押し潰す形で破壊されたことが想定される。

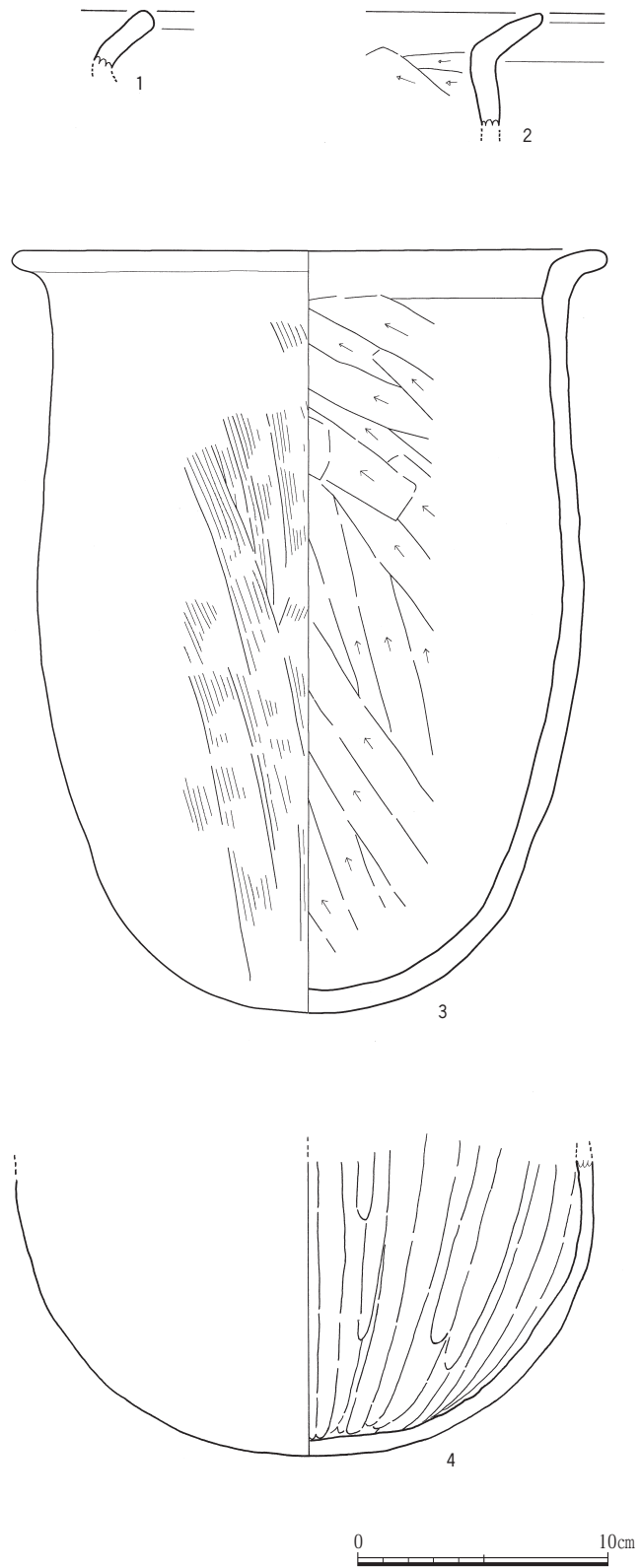
カマド直下

カマドの直下にはやや大きめの土壌が掘りこまれていた。平面形態はやや不整形な楕円形を呈し、規模は南北80cm、東西60cmで、断面はすり鉢形であった。床面から最も深い地点は20cmを測り、内部から遺物の出土は無く、埋土はやや締まる砂質の黄灰色土の1層であった。そして、この土壌の直上であるカマド基底面には硬化面が検出されていることからこの土壌がカマド使用時には塞がっていたことが判り、基底面の防湿効果を考えて掘られた土壌であったと想定される。

埋土

出土遺物

堅穴の埋土は、パサパサしたオリーブ黒の砂質土の1層のみで、遺物は日常雑器である土師器甕しか出土しておらず、1・2は口縁片で、4は底部片、3は半完形に復元できた。このうち、3・4はカマド周辺の



第38図 Ⅲ区 8号堅穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

崩落したカマド粘土片に混ざって出土していた。

この堅穴の廃絶時期は、土師器甕しか出土していないため細かな時期区分には検討を要する点があるが、8世紀中葉から9世紀初頭と考えられる（第38図）。 **時期**

9号堅穴建物（第39図）

Ⅲ区中央付近で8号堅穴の北に位置する堅穴建物。多くの遺構と端で切り合う形で検出され、南辺を8号堅穴に、東辺で未掘の堅穴を切り、西辺では2号掘立柱建物と切り合っており、南東角は調査区外に延びていた。 **切り合い関係**

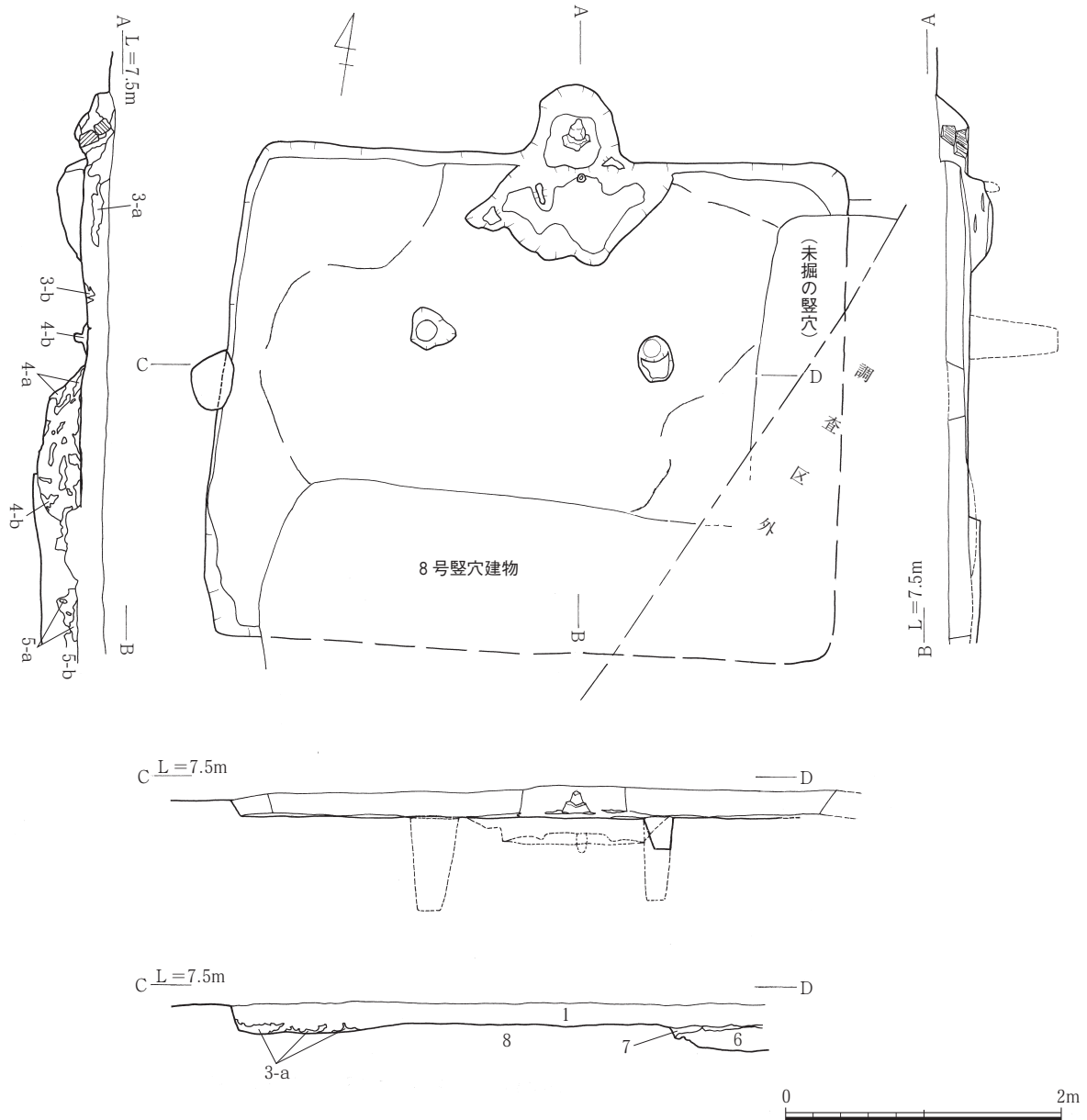
規模は東西辺が4m50cm、南北辺が3m60cmで、平面形態はやや東西に長い長方形を呈し、床面積は約16㎡の中型に分類される。検出面からの深さは20cmを測り、方位角は南北を軸にしての5度であった。床面は貼り床ではなく、そのまま踏みしめられ、硬化面の範囲はカマド前から西壁にまで近接しており、これは堅穴の出入りが西壁側に在ったことを示している。床面下の状況を確認するために南北方向の図中A-Bライン沿いに幅15cmのトレンチを設定し掘り下げると、堅穴中央付近の硬化面下で1基のみ土壌が掘り込まれていたことが土層から判明した。その後硬化面を剥ぎ取って平面での土壌全体の把握を行いたかったが、調査日程上どうしても無理で、なんの目的で掘られた土壌であったかは判明しなかった。 **規模**
硬化面の範囲

柱穴は堅穴中央より北に偏った位置から2本並んで検出された。対面側に当たる南側からも2本の柱穴が検出される4本柱と想定していたが、南側で柱穴は検出されず4本柱構造の2本分が省略されたような形になった。しかし検出された北側の2本の柱穴の位置から考えると、このまま2本柱の構造とは考えがたく、北側の2本は柱穴を掘り南側の2本は床に直接立てた本来4本柱の構造の上屋であったものと推定される。 **柱穴**

カマドは北辺中央で奥壁が大きく飛び出す形で造りこまれていた。周辺には崩落したカマドの天井部や壁面の粘土と焼土が土器片と共に出土し、基底面中央には高さ約22cm、幅11cmの台形状のレキが設置された状態で出土した。レキの表面は激しく被熱して赤く変色し、形が台形状であることから生活時から動かずに安定して座っていたようである。その形態からカマド天井部もしくは煮炊きした甕を支えるために設置していたレキであったようである。これ等を記録した後に丁寧に除去し基底面まで下げ丁寧に精査すると、奥壁側で直径が5cm、深さが16cmの筒状の小穴が検出された。この形態の小穴は8号堅穴のカマド基底面にも見られ、何らかの共通した目的があったものと考えられるが、明確には判明しなかった。また、基底面には在るはずの焼土が検出されず、カマド直下に土壌が掘り込まれていることから、カマド使用中に度々この土壌を掘り返して、土の入れ替えを行って被熱面を壊していたために奥壁のような被熱面が形成されなかったものと推定される。 **カマド**

カマド直下の土壌は、土層の観察からもカマドの設置に先立って事前に掘られていたことが判り、これも8号堅穴のカマドと同様に防湿効果目的で掘ったものであろうと想定される。平面形態はやや不整形ながら半円形を呈し、規模は東西約1m20cm、南北は70cm、断面形態は底の深い皿状で、深さは最も深いところで床面から22cmを測った。内部から遺物は出土しておらず、土層はやや締まる砂質の黒色土が1層であった。 **カマド直下**

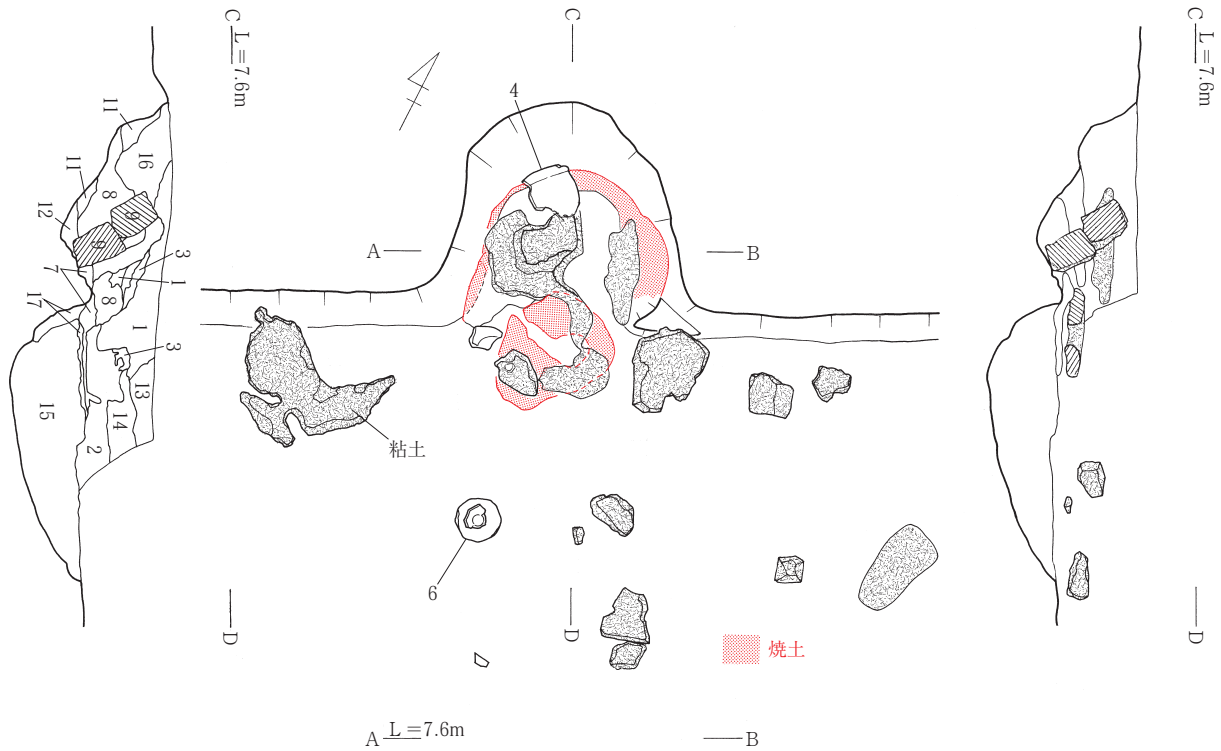
遺物は、土師器と須恵器が出土している。1は高台の付かない須恵器坏、2は土師器の鉢口縁片で残存部から口径を復元することができた。3は須恵器盤の口縁片と考えられるが、残存部分が小さすぎるので断定はできない。4～6はカマドの周辺から出土した土器で、4は土師 **出土遺物**



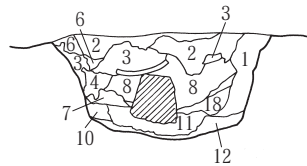
- 1層：黒褐 (2.5Y3/1)。全体的にバサバサした砂質土に径2～3mmの黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土が部分的に入る。径5mm程の明るい (5YR7/8) の粒子を多数含む。
- 2層：黒褐 (2.5Y3/1)。1層とほぼ同じ土質。
- 3a層：暗灰褐 (2.5Y5/2)。やや硬い粘質土。
- 3b層：鈍い黄褐 (10YR3/4)。粘質土にやや砂質土が混じる。地山に砂質土が混じったもの。
- 4a層：黄灰 (2.5Y4/1)。固くしまった粘質土。
- 4b層：褐灰 (10YR4/1)。バサバサした砂質土。明黄褐色の粒子 (径約5mm) が極少量混じる。
- 5a層：黄灰 (2.5Y4/1)。しまった粘質土。4a層ほど締まっていない。
- 5b層：褐灰 (10YR4/1)。バサバサした砂質土。褐色粒子は含まず。
- 6層：オリブ黒 (5Y3/1)。バサバサした砂質土に粘質土 (褐灰) や明黄褐色粒子が含まれる。平面の切り合いから貼り床ではなく別遺構の埋土。
- 7層：オリブ黄 (5Y6/3)。ややしまった粘質土。硬化面の一部。
- 8層：地山

第39図 Ⅲ区 9号竪穴建物実測図(S=1/50)

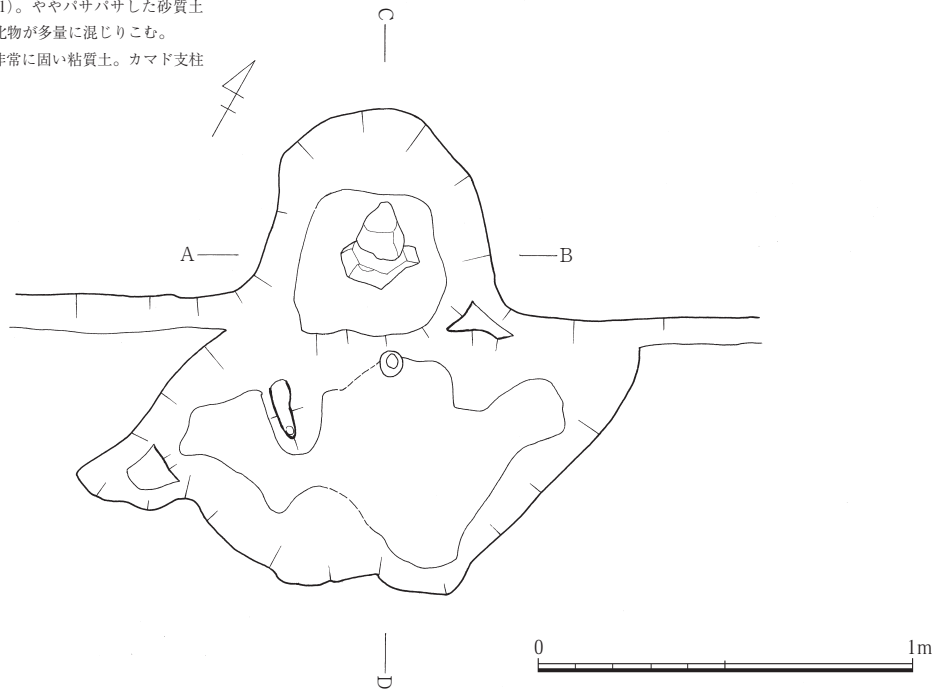
第4節 江江湖東-Ⅲ区



- 1層：灰黄褐 (10YR4/2)。やや固い粘質土。
粒子状の焼土や崩れた3層の土がやや混じる。
- 2層：黒褐 (2.5Y7/3)。ややバサバサした砂質土。
カマドの崩落時に混じったと考えられる。
- 3層：浅黄 (2.5Y7/3)。やや固い粘質土。極少量の焼土
粒子が混ざる。崩落したカマドの天井部の土か。
- 4層：橙 (5YR6/8)。焼土層
- 5層：褐灰 (7.5YR4/1)。ややバサバサした砂質土。
- 6層：褐灰 (7.5YR4/1)。5層の土にやや多量の焼土が
混じる。
- 7層：灰 (10Y5/1)。灰層。
- 8層：オリーブ黒 (5Y3/1)。ややバサバサした砂質土
層に焼土、灰、炭化物が多量に混じりこむ。
- 9層：浅黄 (2.5Y7/4)。非常に固い粘質土。カマド支柱
か。



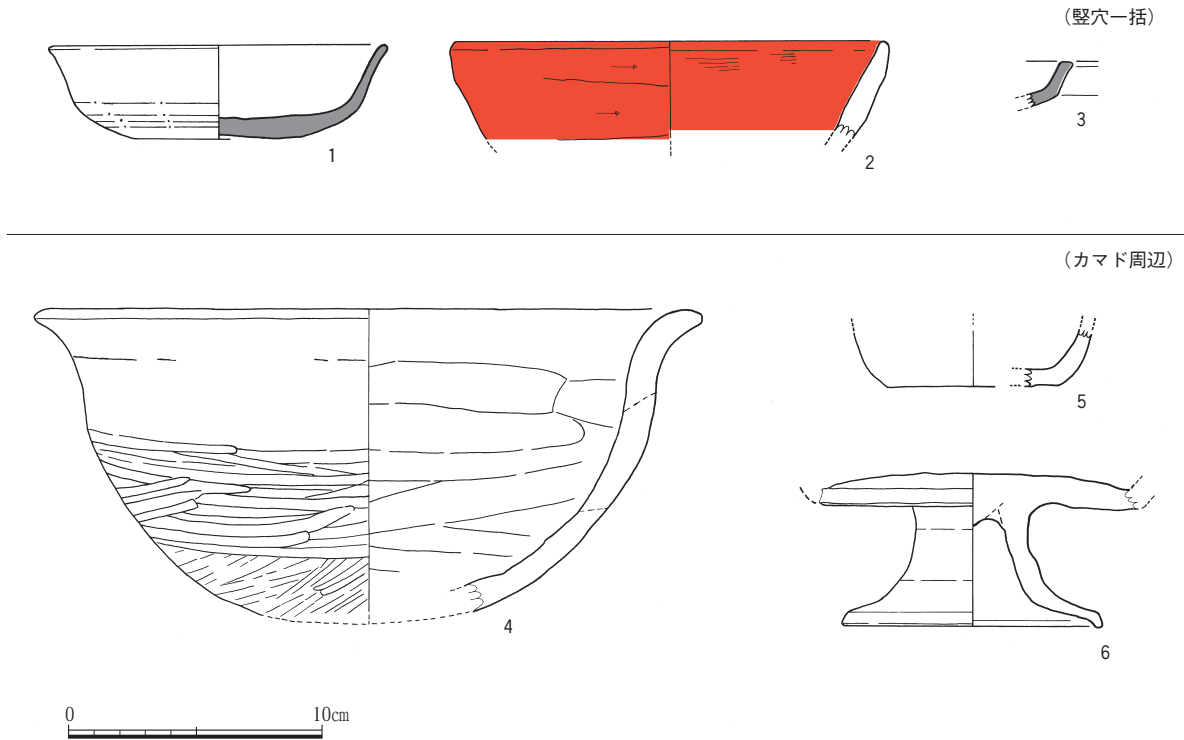
- 10層：黄褐 (2.5Y5/3)。粘質土。
- 11層：やや濃い黄灰 (2.5Y4/1)。ややしまる。
砂質土に炭片や焼土片が少量混じる。
- 12層：黒 (10YR7/1)。ややしまる砂質土。
- 13層：8号堅穴土層を参照。
- 14層：8号堅穴土層を参照。
- 15層：黒 (10YR2/1)。全体的にややしまる砂質土。
特に固くしまる部分がある。
- 16層：オリーブ黒 (5Y3/1)。ややしまる砂質土。
- 17層：灰を主とするが、焼土も混ざり合う層。



第40図 Ⅲ区 9号堅穴建物カマド実測図(S=1/20)

器鉢、崩落した粘土に混じって出土し、外面には黒い煤が付着していた。煮炊き用に使用した土器であろう。6は口縁から体部を欠いた土師器高坏で、カマド前の床面直上でひっくり返った状態で出土していた。なんらかのカマド廃絶祭祀の一環であろうか。5は土師器の小型壺底部片で、これも崩落粘土に混じって出土していた（第41図）。

この豎穴の廃絶時期は、1の須恵器坏と6の土師器高坏の形態からみて、8世紀前葉～中葉にあたと推定される。



第41図 Ⅲ区 9号豎穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

未掘の豎穴建物（第39図）

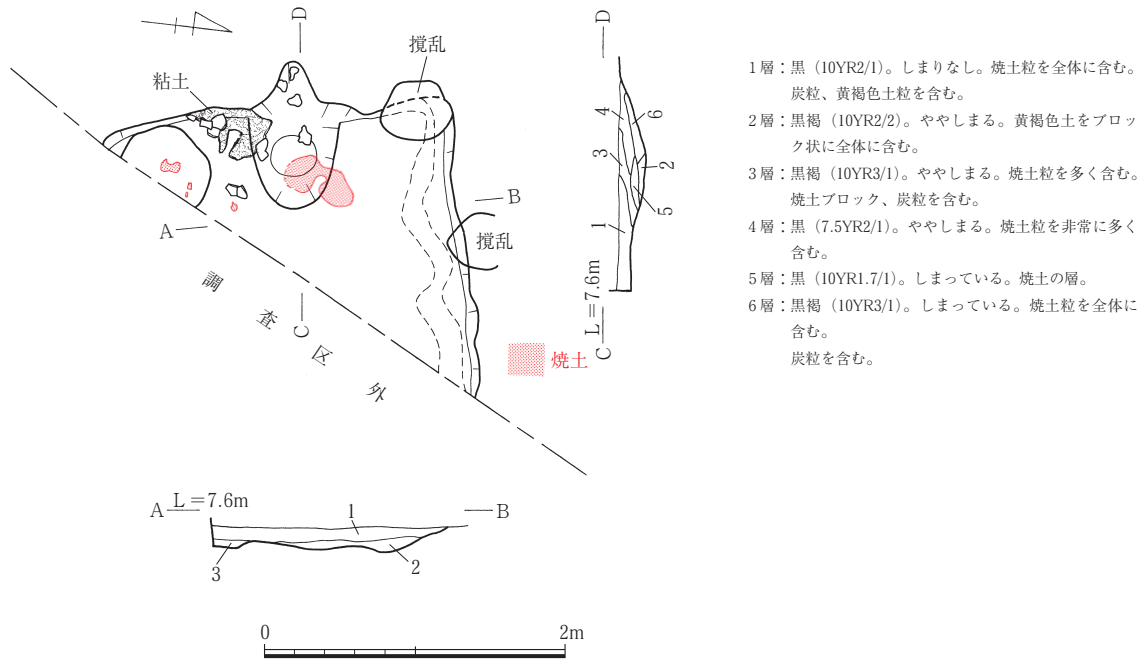
未掘の豎穴建物 9号豎穴建物の東辺付近で検出された豎穴。全体のうちの大半が調査区外で、検出された範囲も9号豎穴に切れ、9号豎穴の完掘後に確認された遺構である。そのためこの遺構自体を完掘する期間がとれなく、具体的なことも判らず、この遺構に伴う遺物も出土していない。

10号豎穴建物（第42図）

位置 Ⅲ区中央やや北寄りで11号豎穴に平行する位置で検出された豎穴建物。全体のうち東南側の半分近くが調査区外に延びていた。

規模と構造 規模は、南北辺が2m35cm、東西辺は2m以上で、床面積は不明。平面形態は方形と推定されるが規模分類は不明。方位角は東西を軸にしての南に8度、残存深度は9.5cmであった。床面は貼り床を施し、硬化面は床全体に広がっていた。床面下の埋土はさほど厚くなく、床面から5cm程の深さであった。

土壌 豎穴内面から柱穴は1基も検出されなかったが、南西角で円形の土壌が床面から掘り込まれていた。南東側が調査区外に延びているため全掘はできていないが、その規模は直径で65cmを測り、床面からの深さは38cmで、断面形態は深鉢状の底面は平坦であった。内部から遺物は出



第42図 Ⅲ区 10号竪穴建物実測図(S=1/50)

土しなかったが、土壌直上の床面と同じ高さで焼土の固まりが検出していることから竪穴廃絶時はこの土壌は閉じていたことが判る。しかし何のために掘られ使用された土壌なのかは不明であった。

カマドは竪穴西辺の中央で奥壁がやや飛び出す形で検出され、その周辺には崩落したカマドの上部構造である側壁や天井部の粘土が土器片と共に散乱していた。奥壁は平面で三角形に削られ、その断面はゆるやかに底面から上方に延びていることから煙道の跡と考えられる。壁面から30cm程前方に離れた位置の基底面からカマド使用時の被熱面である焼土が検出された。カマドの直下には土壌が縦長で長円形に掘り込まれていたが、非常に浅く断面は皿状を呈し、深さは床面から9cmを測るが、そのうちの6cmは被熱面の断面であって、他の竪穴のカマド直下のような土壌はなかった。

カマド

遺物は小破片で数点出土したが実測に至る破片はなかった。

出土遺物

11号竪穴建物 (第43図)

10号竪穴に平行に隣接する竪穴建物。ピット状遺構にカマドと西壁を切られ、11号竪穴自体は7号土壌を切っていた。

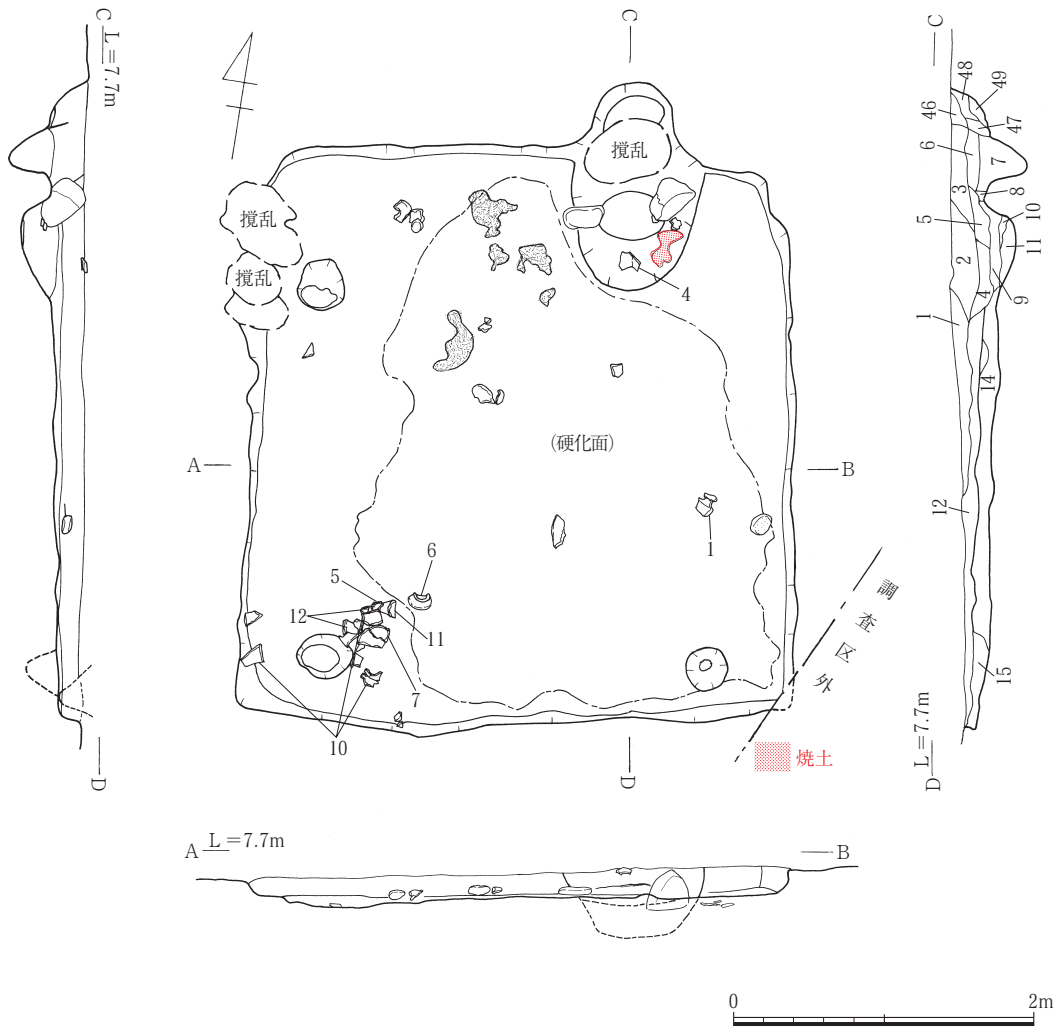
形状

規模は、南北辺4m10cm、東西辺が3m60cmの、やや南北に長い長方形を呈し、床面積は14.5㎡で大型に分類される。検出面からの深さは9cmで、南北を軸にした方位角は8度であった。床面は貼り床を施しており、硬化面はカマド前から南辺にまで広がっており、建物の出入り口が南側にあったものと想定される。柱穴は竪穴の北東角以外の3つの角付近で、それぞれ1基ずつ検出され、3本柱構造の上屋建物であった。

規模と構造

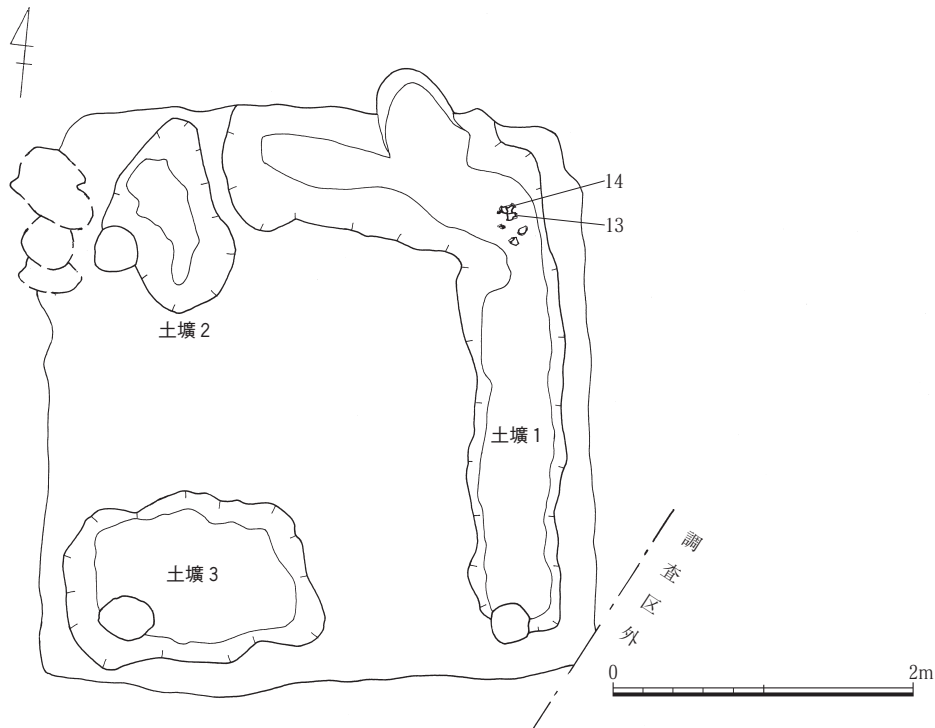
竪穴の埋土はやや複雑に堆積し、水平堆積している部分もあるが第43図でみると遺構同土が切り合う様な土層を呈し、カマドを切るピットの層である6・7層の直上の1～3層はピット層をさらに切るように検出されており、このことから平面では判明しなかったが、この大型の

埋土



- 1層：黒 (10YR2/1)。しまりなし。炭粒、土器粒、黄褐色土粒を含む。
- 2層：黒褐 (10YR3/1)。1層よりしまっている。土器粒、炭粒を全体に含む。
- 3層：黒褐 (7.5YR3/1)。しまっている。炭粒、土器粒を全体に含む。黄褐色土をブロック状に含む。
- 4層：黒 (10YR2/1)。しまっている。焼土粒、炭粒を全体に含む。黄褐色土粒を多く含む。
- 5層：黒 (7.5YR2/1)。しまっている。焼土粒、炭粒を含む。黄褐色土をブロック状に含む。
- 6層：黒 (10YR2/1)。しまっている。黄褐色土粒を多く含む。焼土粒を含む。
- 7層：黒褐 (10YR3/1)。しまっている。焼土粒を非常に多く含む。黄褐色土をブロック状に含む。
- 8層：黒 (10YR2/1)。しまっている。焼土粒をわずかに含む。
- 9層：黒 (7.5YR2/1)。焼土の層。焼土粒を非常に多く含む。炭粒、黄褐色土粒を含む。
- 10層：黒褐 (7.5YR3/1)。灰土。しまりは弱い。
- 11層：黒 (10YR2/1)。しまりない。部分的に黄褐色土粒、焼土粒を含む。
- 12層：黒 (10YR1.7/1)。しまりない。黄褐色土を全体に小さなブロック状に含む。炭粒、土器粒を含む。
- 13層：黒 (10YR2/1)。しまっている。黄褐色土をブロック状に多く含む。
- 14層：黒褐 (10YR2/2)。硬化面。黄褐色土をブロック状に非常に多く含む。
- 15層：黒 (7.5YR1.7/1)。ややしまっている。黄褐色土をブロック状をわずかに含む。
- 46層：黒褐 (7.5YR2/2)。しまっている。竈を構成していた粒を多く含む。
- 47層：黒褐 (10YR3/2)。しまっている。焼土粒全体を含む。
- 48層：黒褐 (10YR2/2)。しまっている。焼土粒を非常にわずかに含む。
- 49層：黒褐 (10YR2/3)。しまっている。粘質がある。黄褐色土粒を部分的にわずかに含む。

第43図 Ⅲ区 11号竪穴建物実測図(S=1/50)



第44図 Ⅲ区 11号竪穴建物実測図(S=1/50)

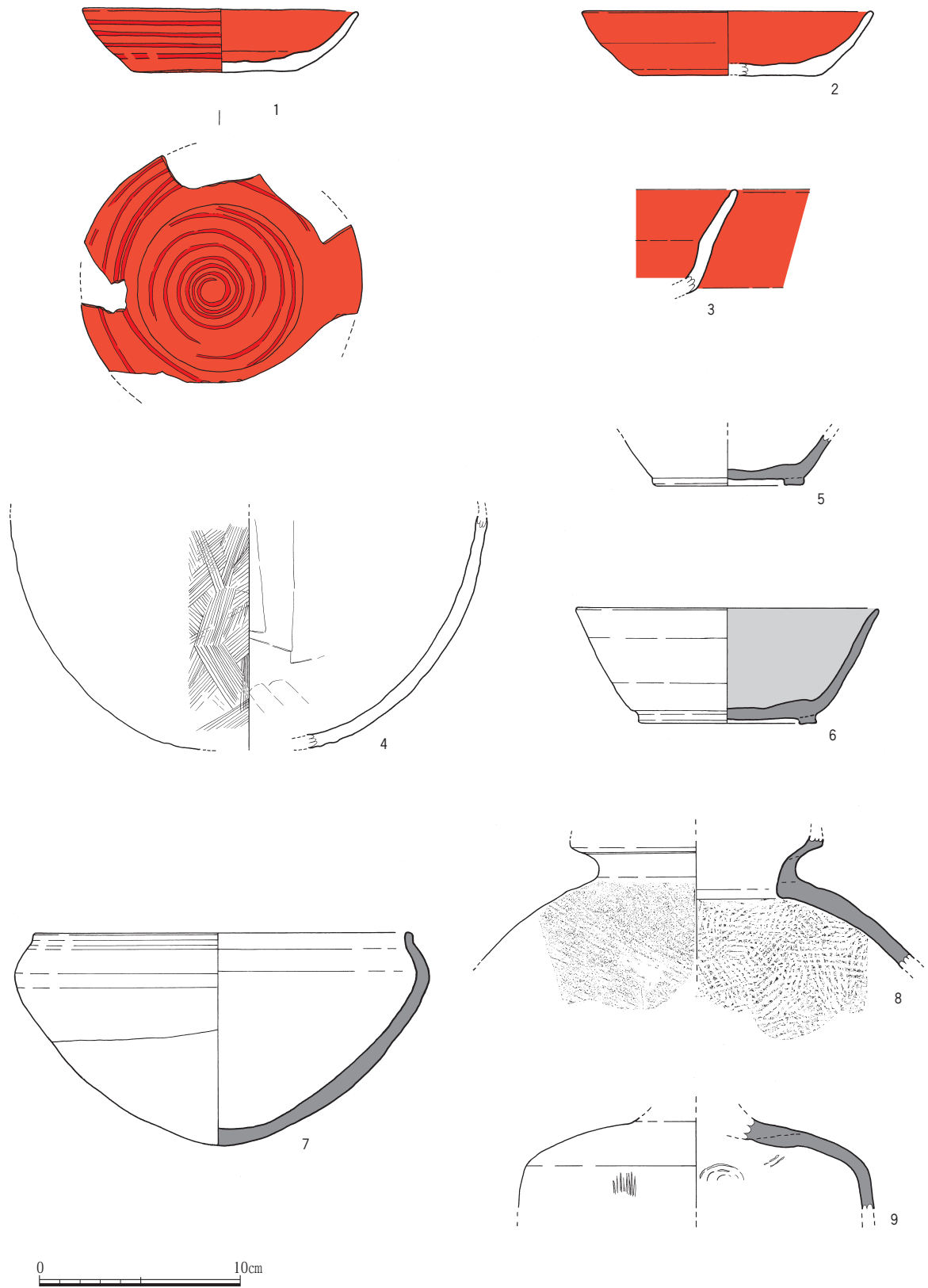
竪穴である11号竪穴内にもう一回り小さい竪穴ないし遺構に切られている可能性も想定され、
 そのためこの様な複雑な土層になったと考えられる。

床面下には三つの土壙が確認された。いずれも床面検出の際には閉口していたが、土壙2の
 みは硬化面の範囲から外れている事から生活時には開口していた可能性もある。またどの土壙
 も各柱穴に沿うように掘りこまれていた。遺物は土壙1から2点の土師器片が出土し、14は口
 縁に灯明の痕が残り、13には全体に赤色顔料が塗布され体部内外面に暗文状のヘラミガキが施
 されていた。

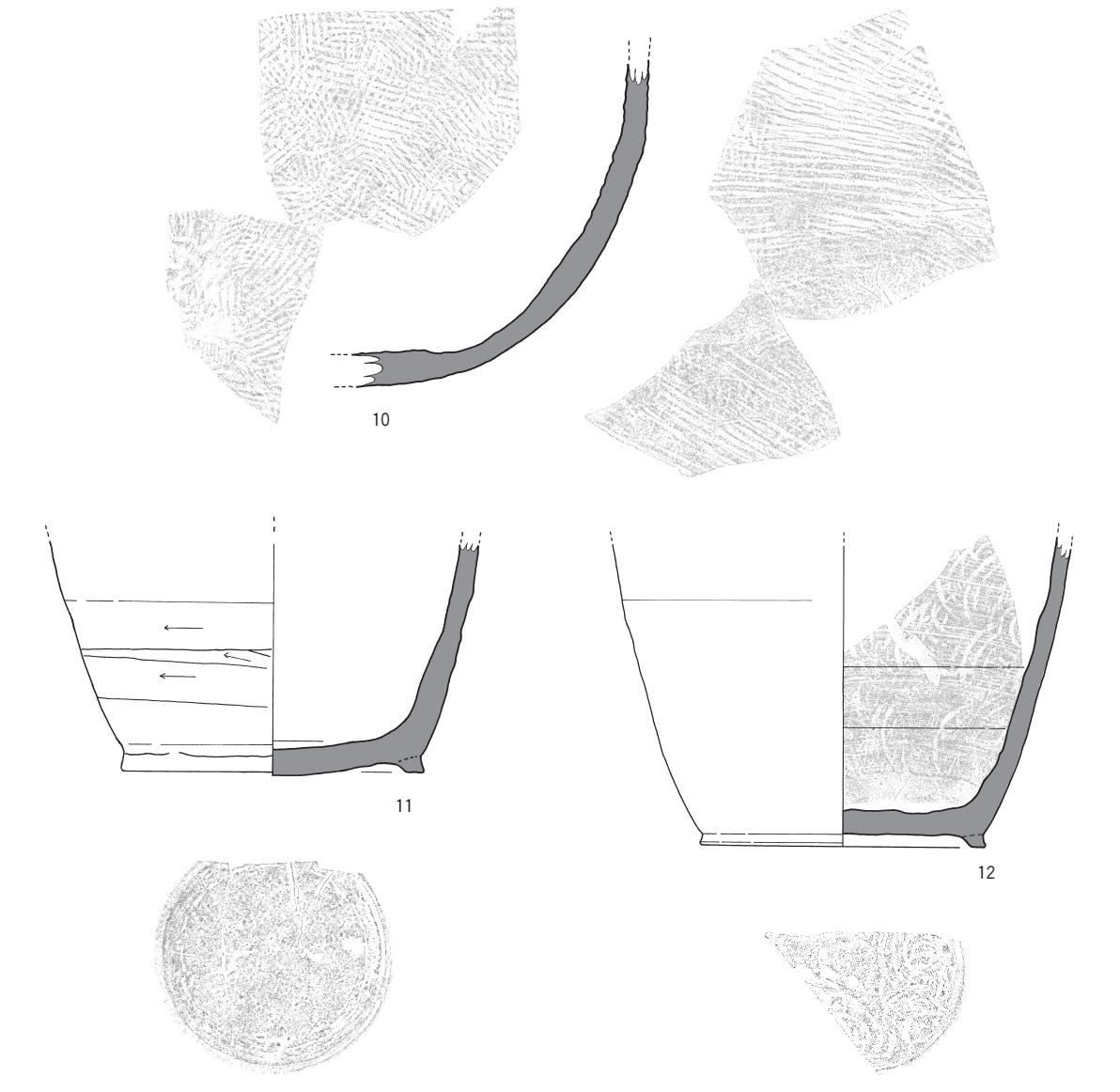
カマドは北辺の東寄り外側に張り出す形で検出された。煙道部付近を後世のピット状遺構
 が大きく切って破壊していたが、それ以外は比較的良好な状況で残存し、天井部や側壁の粘土
 は崩落してカマドの周辺に散在していたが、カマドの両袖には支柱石がそのまま残り、カマド
 基底面には生活時に出た灰が層をなして残っていた。被熱面である焼土は固まりとしては残っ
 ていなかったが、粒子状に周辺の埋土に多く混じりこんでいた。

カマドの直下には土壙1とは別の土壙が掘り込まれていた。カマドと同様にその北側部分を
 ピットに破壊されていたが、残存した範囲から平面形態はやや南北に長い長円形だと判り、断
 面は半円形を呈し底面はほぼ平坦で、深さはカマド基底面から15cmを測った。この土壙もカマ
 ド基底面の防湿効果を目的に掘られたものと考えられ、生活時には度々土の入れ替えが行われ
 たために基底面に被熱面である焼土が残存していなかったであろう。

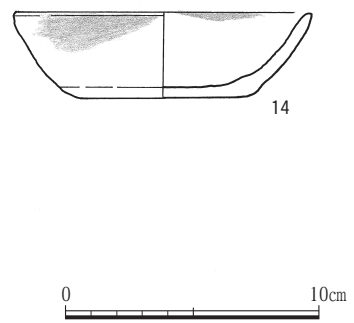
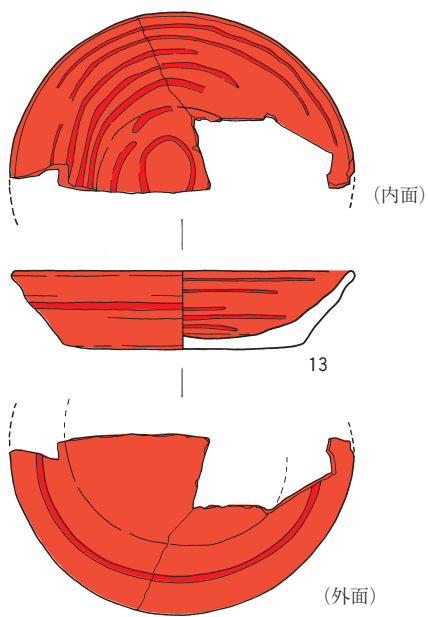
遺物は南西角の柱穴周辺に集中して出土し、11号竪穴出土の土器は他の竪穴出土土器に比べ
 須恵器が多く、実測できた全14点中8点は須恵器で、大型の破片が多かった。1と2は土師器
 片で1は体部外面と底部に暗文状のヘラミガキが施され、2の口縁には帯状に薄い煤が付着し
 ていた。



第45图 Ⅲ区 11号竖穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

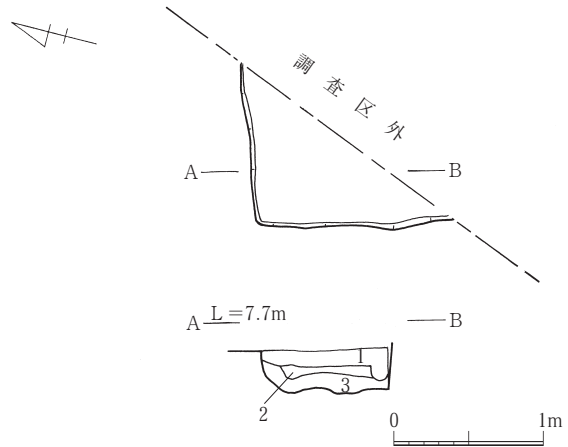


(11号竖穴床下土壙1出土遺物)



第46図 Ⅲ区 11号竖穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

竪穴廃棄時期 この竪穴の廃絶時期は、暗文状ヘラミガキのある土師器坏と5・6の須恵器高台付坏、そして須恵器壺の形態から8世紀後葉～9世紀前半にあたと推定される(第45・46図)。



位置関係 11号竪穴の東に1.5m程離れた位置で平行するように検出された竪穴建物。その大半が調査区範囲外に延びているため、その平面形態・床面積・方位角・カマドの有無等は不明である。

- 1層：黒(10YR2/1)。しまりなし。
黄褐色土粒をわずかに含む。炭粒、土器粒を全体に含む。
- 2層：黒褐(10YR2/2)。硬化面。
黄褐色土をブロック状に多く含む。
- 3層：黒褐(10YR2/3)。しまっている。
黄褐色土をブロック状に含む。

残存していたのは竪穴の北西角付近の南北辺が1 m30cmと、東西辺1 m20cmのみで、内面から柱穴は検出されなかった。床面は貼り床ではなくそのまま踏み締められ、硬化面は検出された範囲では全体に広がっていた。遺物は破片も含めて1点も出土していない。

第47図 Ⅲ区 12号竪穴建物実測図(S=1/50)

位置 12号竪穴と9号溝のほぼ中間に位置する竪穴建物。

カマド直上状況 カマド直上を竪穴廃絶以降のピットに切られていたが、これ以外に切り合う遺構は無かった。

規模と形態 規模は、南北辺が2 m85cm、東西辺は2 m65cmで、平面形態は方形であった。床面積は7.6㎡の中型に分類される。東西を軸にした方位角は南に8度で、検出面からの深さは約17cmとやや深かった。床面は貼り床ではなく、そのまま踏みしめられ、硬化面の範囲は竪穴中央から西辺に近接して広がっており、この西辺に竪穴の出入り口があったと考えられる。内面から柱穴は全く検出されておらず、無柱穴の上屋であった。

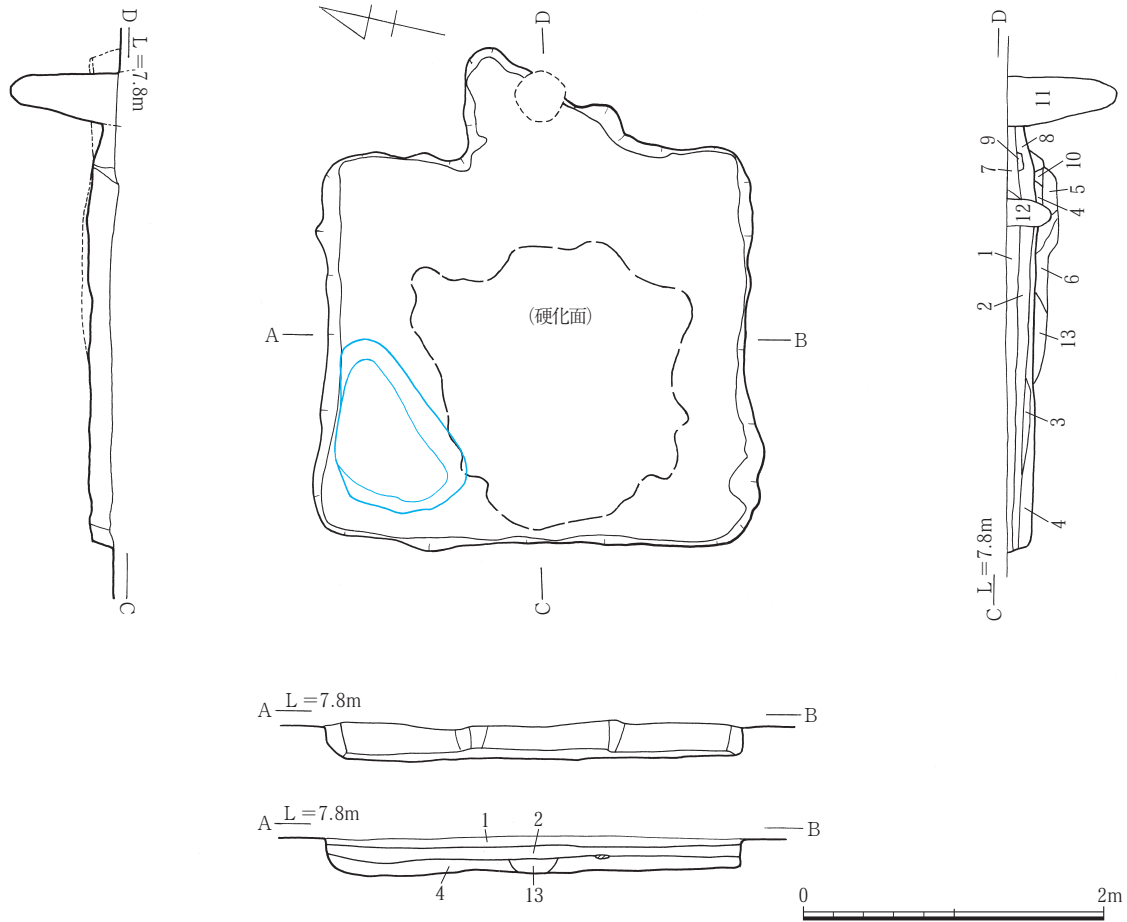
土壌 竪穴北辺の中央寄りで土壌が検出されている。平面形態は不整な長円形を呈し、その規模は、東西長軸1 m20cm、南北短軸は80cmで、床面からの深さは約12cmを測り、内面からは黒曜石製の石鎌が1点出土した。この土壌は竪穴中央で硬化面と若干被っており、その大半は硬化面をさけるように掘りこまれているので、床面検出時は閉じた状態であったが、生活時の一時期は開いた状態であった可能性もある。

カマド カマドは東辺を大きく削る形で検出されたが、後世のピットにより著しい破壊を受けており、粘土や焼土は極少量が残るのみであった。カマドが在ったことは残存形態と粘土片が残っていたことにより判明し、遺存状況は非常に悪かった。

出土遺物 竪穴内から遺物は、土師器と須恵器と他に11は土錘、12は鉄器で刀子の先端が出土した。また、須恵・土師器はいずれも小破片での出土で、そのうち5の須恵器坏のみ竪穴最下層の4層から出土したが、これ以外の土器片は竪穴最上層の1層からの出土であった(第49図)。

埋土 土層はほぼ水平堆積しているが、土器がいずれも小破片で、ほとんどが最上層から出土していることから、竪穴廃絶後に土砂が自然に堆積し、2層までが埋まった時期にゴミ捨て用の穴

第4節 江津湖東-Ⅲ区

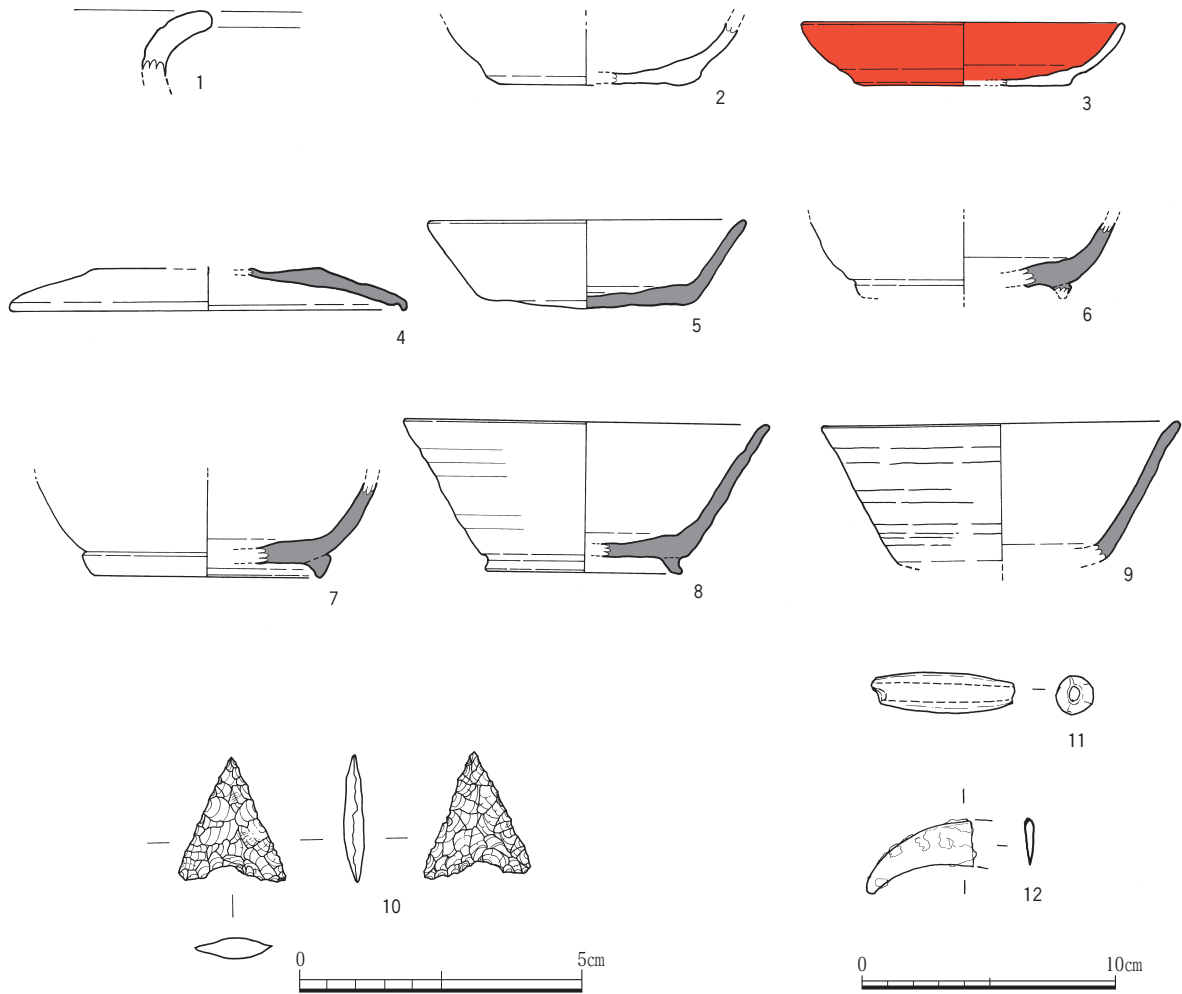


- 1層：黒 (10YR2/1)。しまりなし。土器粒、炭粒を全体にわずかに含む。
- 2層：黒 (7.5YR2/1)。しまりなし。土器粒をわずかに含む。黄褐色土をブロック状にわずかに含む。
- 3層：黒褐 (10YR2/2)。ややしまっている。土器粒を含む。焼土を多く含む。
- 4層：黒褐 (7.5YR3/1)。硬化面。土器粒を全体にわずかに含む。黄褐色土をブロック状に含む。
- 5層：黒褐 (10YR2/2)。しまりなし。カマドの掘り込みか。土器粒をわずかに含む。
黄褐色土をブロック状に含む。
- 6層：黒褐 (10YR2/3)。しまっている。カマド掘り込みか。土器粒をわずかに含む。
- 7層：黒褐 (7.5YR2/2)。しまりなし。カマド崩壊時に生じた層。焼土をブロック状に多く含む。炭粒を含む。
- 8層：黒褐 (10YR2/2)。しまりなし。焼土、黄褐色土を含む。
- 9層：黒褐 (7.5YR2/2)。しまりなし。焼土粒を多く含む。炭粒を含む。
- 10層：黒 (10YR2/1)。しまりなし。焼土をブロック状に含む。
- 11層：黒 (10YR1.7/1)。しまりなし。黄褐色土粒を含む。焼土粒を極わずかに含む。
黄褐色土をブロック状に部分的に含む。
- 12層：黒褐 (10YR2/2)。しまりなし。黄褐色土粒を含む。
- 13層：黒 (10YR2/1)。しまりなし。土器粒を含む。黄褐色土をブロック状に含む。

第48図 Ⅲ区 13号竪穴建物実測図(S=1/50)

として使用され、その際に廃棄された遺物である可能性も考えられる。よって竪穴の廃絶時期は、明確には不明であるが、出土土器の時期は8世紀前葉～中葉の遺物であった。

出土遺物の時期



第49図 Ⅲ区 13号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

14号竪穴建物（第50図）

切り合い関係 Ⅲ区の北端付近で検出された竪穴建物。南東の角を焼土壌である12号土壌に切られ、北西の角付近を数基のピット状遺構に切られていた。また、竪穴のほぼ中央を試掘時の不用意なトレンチによって大きく削り取られていた。

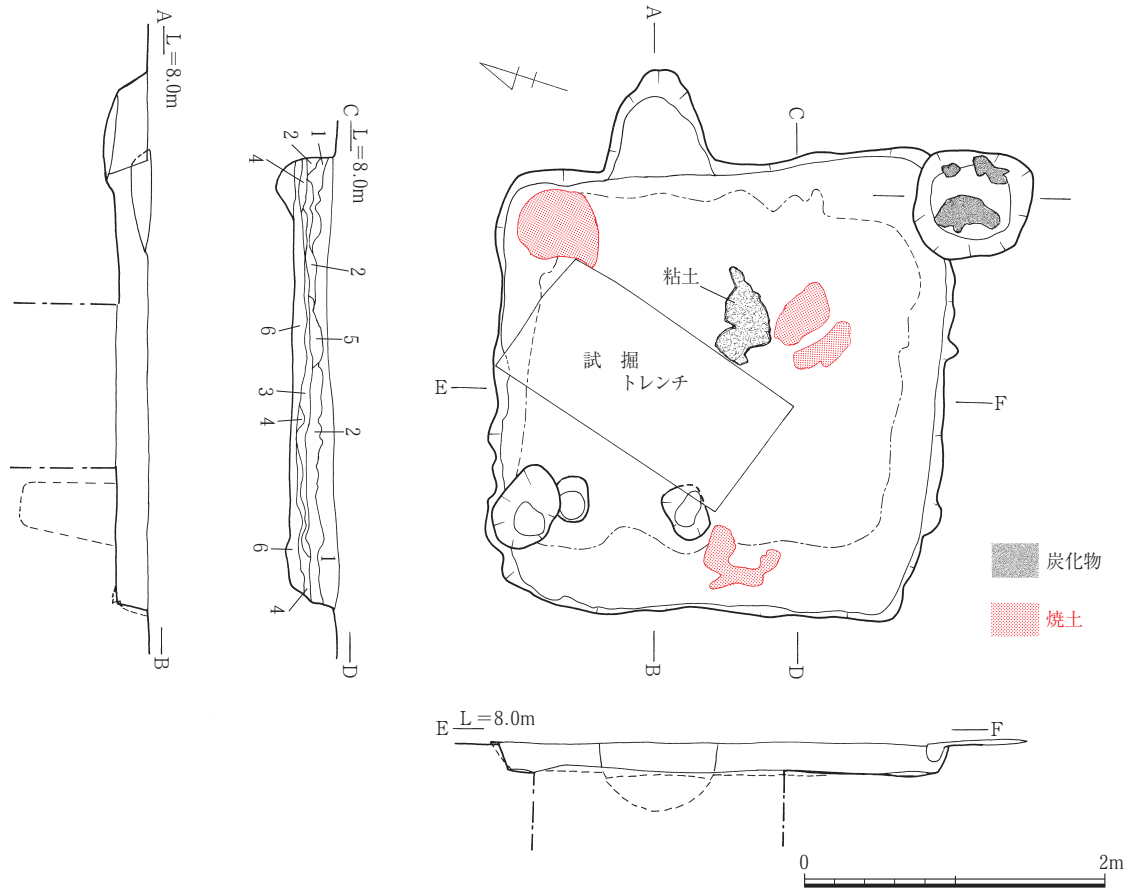
規模と形態 規模は、南北辺が3m、東西辺も3mの、ほぼ正方形の平面形態を呈し、床面積は9㎡の中型に分類される。方位角は東西を軸にしての10度で、検出面から床面までの深さは20cmを測った。床面から柱穴は一つも検出されなかったが、竪穴の中央を試掘時のトレンチによって大きく削り取られているので全くなかったかは不明。床面は貼り床ではなく、そのまま踏みしめられ、硬化面は中央部から外側に均等に広がっていた。この硬化面を剥ぎ取り丁寧に精査すると、竪穴西辺と南辺の床面下で14号竪穴より一回り小規模の竪穴が検出された。このことから14号竪穴は立替が行われたようであるが、その詳細は解らなかった。そして、床面下からは別に3基の土壌が検出された。土壌内から遺物は1点も出土せず、またこの土壌が立替前もしくは立替後の竪穴に伴う遺構であるのかも判明しなかった。

床面

床面下土壌

カマド カマドは、東辺の北東角寄りで壁面を大きく張り出すように検出された。周辺には崩落したカマドの天井部や壁面の粘土が土器片と共に出土し、これ等を記録後に丁寧に除去するとカマ

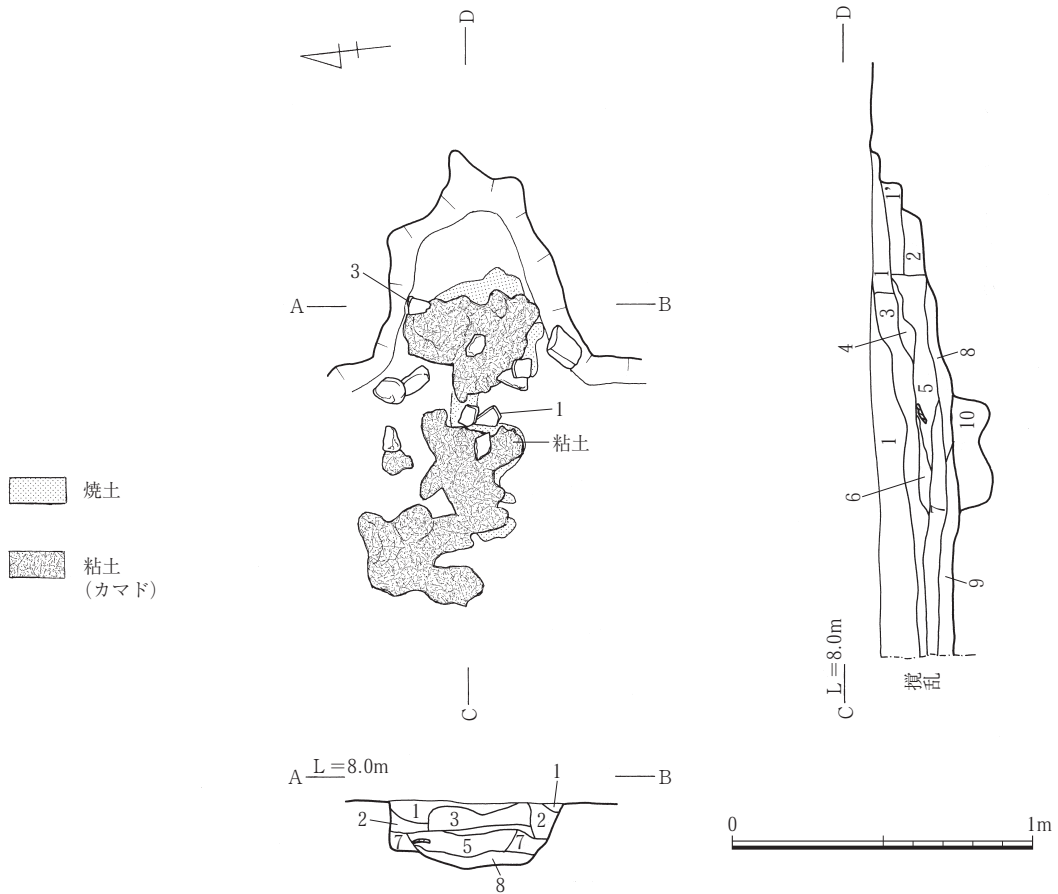
第4節 江津湖東-Ⅲ区



- 1層：黒 (7.5YR2/1)。しまりなし、黄褐色土をブロック状に含む。
焼土粒、炭粒を全体に含む。
- 1'層：黒褐 (7.5YR2/2)。しまりなし、黄褐色土をブロック上に含む。
- 2層：黒 (10YR2/1)。しまりなし、黄褐色粒をわずかに含む。
焼土粒、炭粒を全体に含む。
- 3層：黒褐色 (7.5YR3/1)。硬化面。黄褐色土をブロック状に含む。
- 4層：黒 (7.5YR1.7/1)。ややしまっている。黄褐色粒を含む。
立て直す際の整地層と考えられる。
- 5層：黒 (7.5YR3/2)。粘土層。カマド崩落の際に生じた層と考えられる。
- 6層：黒褐 (10YR2/2)。硬化面。最初の硬化面と考えられる。
黄褐色土をブロック状に含む。



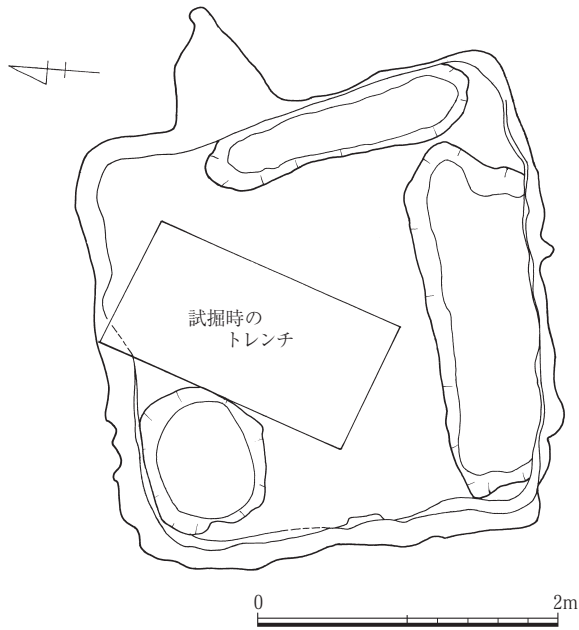
第50図 Ⅲ区 14号竪穴建物実測図(S=1/50)



- 1層：黒 (7.5YR2/1)。焼土粒を多く含む。締まりがある。
- 2層：黒 (7.5YR2/1)。焼土塊、粘土塊含む。締まりは弱い。
- 3層：褐灰 (7.5YR4/1)。焼土粒含む。
- 4層：黒褐 (10YR2/2)。締まりなく、焼土粒含む。
- 5層：暗褐 (10YR3/4)。焼土層。締まりなく、炭化物・遺物を含む。
- 6層：黒褐 (10YR3/1)。締まりなく、焼土、土器粒を含む。
- 7層：黒褐 (10YR2/3)。締まりなく、焼土をブロック状 (3~4mm) に含む。
- 8層：黒 (10YR2/1)。締まっている。粘質があり、灰土・焼土をブロック状 (3~4mm) にわずかに含む。
- 9層：黒褐 (10YR2/2)。硬化面。住居土層断面の6層に当たる。
- 10層：黒褐 (7.5YR2/2)。締まりなく、黄褐色土をブロック状に含む。



第51図 Ⅲ区 14号竪穴建物カマド実測図(S=1/50)

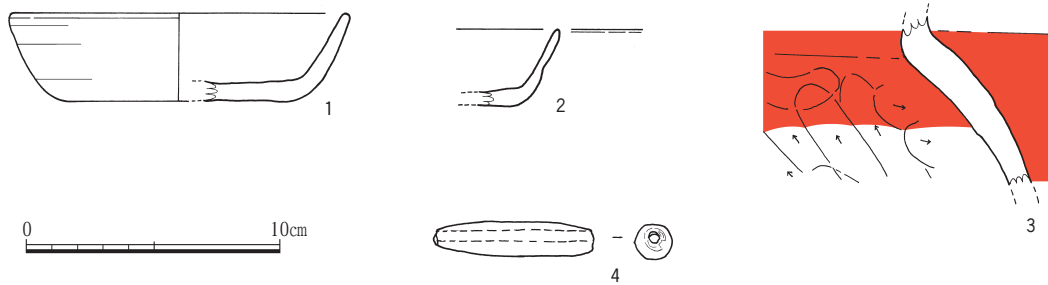


第52図 Ⅲ区 14号竪穴建物床下土壌実測図(S=1/50)

ト使用時の被熱面である焼土が検出された。

14号竪穴から出土し、実測にまで至った遺物は4点のみでそのうち1と3の2点はカマドの崩落粘土に混ざって出土した土器片であり、出土遺物の量は少なかった。そのためこの竪穴の廃絶時期を示す根拠が少なく明確には判らなかった。

出土遺物



第53図 Ⅲ区 14号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

15号竪穴建物 (第54図)

16号竪穴建物と共に江津湖東Ⅲ区で最も北に位置する竪穴建物。遺構全体のうち大半が調査範囲外になり、検出されたのは竪穴の南西角のみである。

切り合い関係

竪穴の角のみの検出であったため、その形態、床面積、方位角度、規模分類等は判らなかった。残存深度は約20cmを測り、床面は検出された範囲で、貼り床ではなくそのまま踏みしめられていた。

遺物は破片も含め1点も出土していない。そのため、この竪穴の廃絶時期も不明。

出土遺物

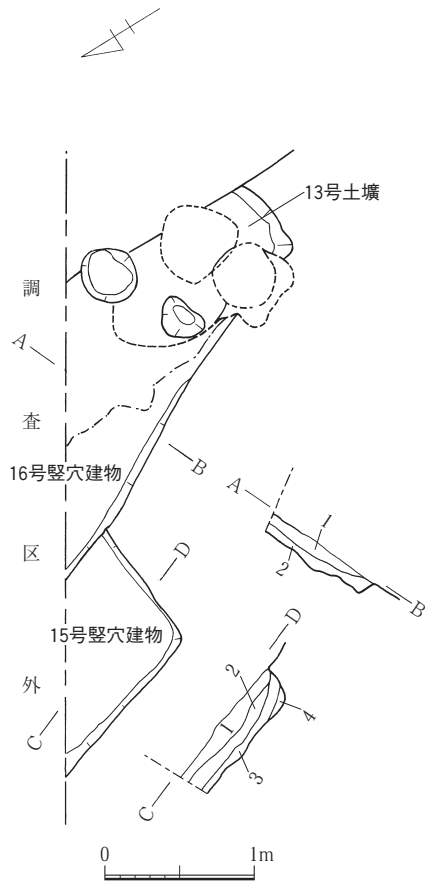
16号竪穴建物 (第54図)

Ⅲ区で最も北に位置する竪穴建物。15号竪穴同様にその全体の大半は調査範囲外に延び、検出されたのは竪穴の南西角周辺のみであった。また、その範囲も昭和の水路による破壊と、竪穴廃絶後の土壌やピットに切られている部分が多かった。

出土状況

残存していた規模は、南北辺が2 m80cm以上、東西辺は1 m20cmで、これだけを観ると、床面積は不明だがすべて検出されれば大型の竪穴であった可能性もある。床面は貼り床を施して

規模・形態



16号竪穴建物埋土

1層：黒褐（7.5YR3/1）。しまりなし。黄褐色土粒を全体に含む。土器粒をわずかに含む。

1層：黒（10YR2/1）。しまりなし。黄褐色土粒を全体に含む。

2層：黒（7.5YR2/1）。しまりなし。黄褐色土をブロック状（2～3mm）にわずかに含む。



第54図 Ⅲ区 15号・16号竪穴建物実測図(S=1/50)

柱穴

出土遺物

おり、硬化面は竪穴の中央から南西角に向けて広がっていた。ピットは2つ検出され、そのうちの柱穴1は深さ・掘り方・位置共にこの竪穴の支柱穴の1つであったとも考えられるが、その深さが床面から14cmしかなく調査範囲外に近いこともあって断定はできない。遺物は土器の小破片が数点出土したが、実測できる破片はなかった。

②掘立柱建物跡

掘立柱建物の概要

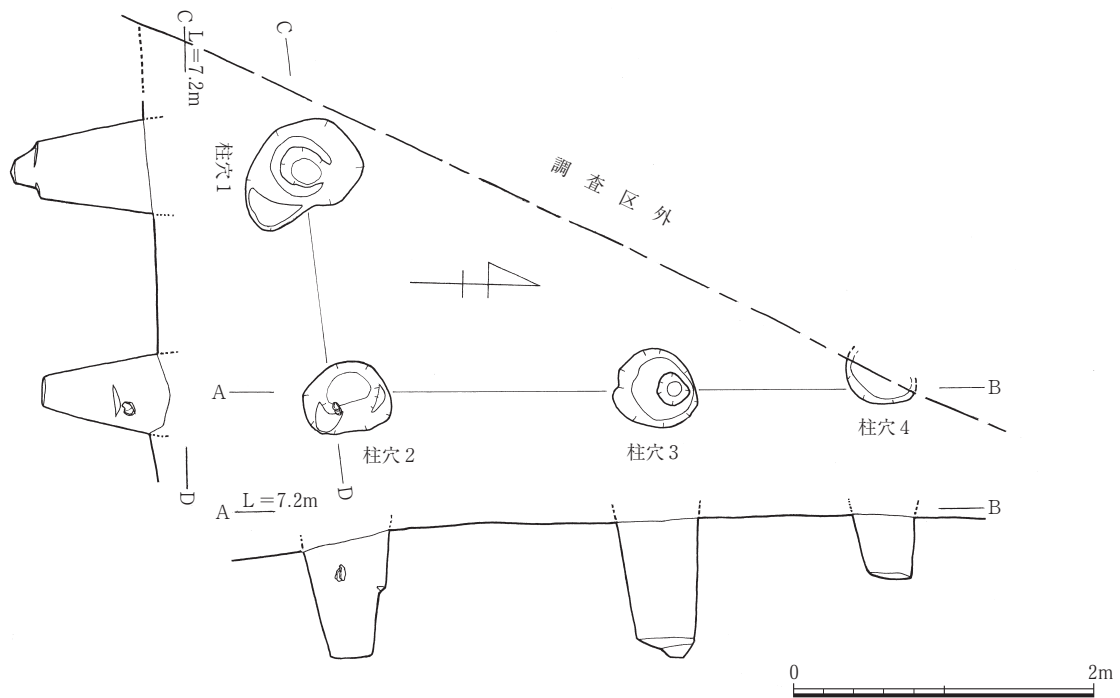
江津湖東Ⅲ区で掘立柱建物は3棟検出された。いずれも全面調査できた訳ではなく、建物の半分もしくは1/3程度ではあった。そして1号と3号掘立はほぼ同方向の建物であるのに対し、2号掘立だけは方向が違い、さらに9号竪穴と切り合い、柱穴の大きさも2号掘立のみ小規模で、1・3号掘立と時期が違うことが想定される。また他に多数のピット状遺構が検出されており、建物の並びにこそならなかったものの、検出された1～3号掘立柱建物以外にも建物が多数あったと想定され、調査区の幅が狭いために建物としては並ばなかったであろう。

1号掘立柱建物(第55図)

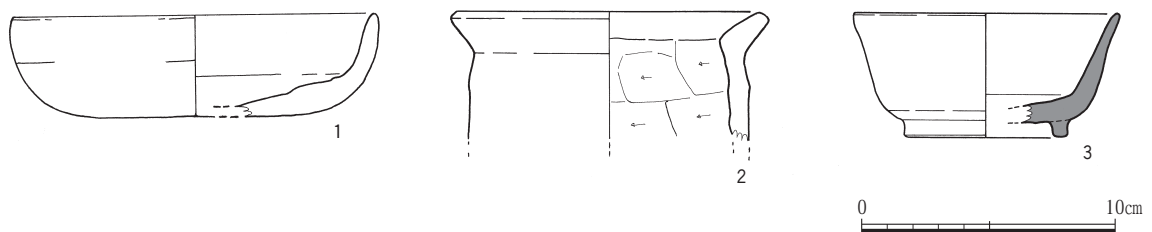
1号溝の2m50cm真北に位置し、梁間が1号溝に平行するように検出された掘立柱建物。建物位置全体のうち西側の2/3近くが調査区外に外れていた。

建物の形態は、梁間2間以上桁行2間以上が確認され、南北方向棟の長方形と想定される。形態東柱の有無は不明で、方位角は南北軸での4度を指した。寸法は南北方向が3m60cm以上、東西方向が2m20cm以上検出され、その範囲での床面積は4㎡以上となる。検出された4本の柱穴の平面形態はどれもほぼ円形を呈し、その径は50~75cm未満とバラつきがあった。深さも多少バラつきがあり最も浅いもので50cm、深いものは1m10cmを測った。柱痕は検出時の平面と半裁しての土層から確認作業を行ったが認められなかった。しかし柱穴1と3の基底面より径15~20cmほどの円形柱の痕跡が認められたことから直径20cm程の柱が想定される。

柱穴の埋没土層は、各柱穴同じの黒褐色土で硬く締まり、層中に1~5mmの黄色粒子を含む柱穴埋土土層土質であった。



第55図 Ⅲ区 1号掘立柱建物実測図(S=1/50)



第56図 Ⅲ区 1号掘立柱建物出土遺物実測図(S=1/3)

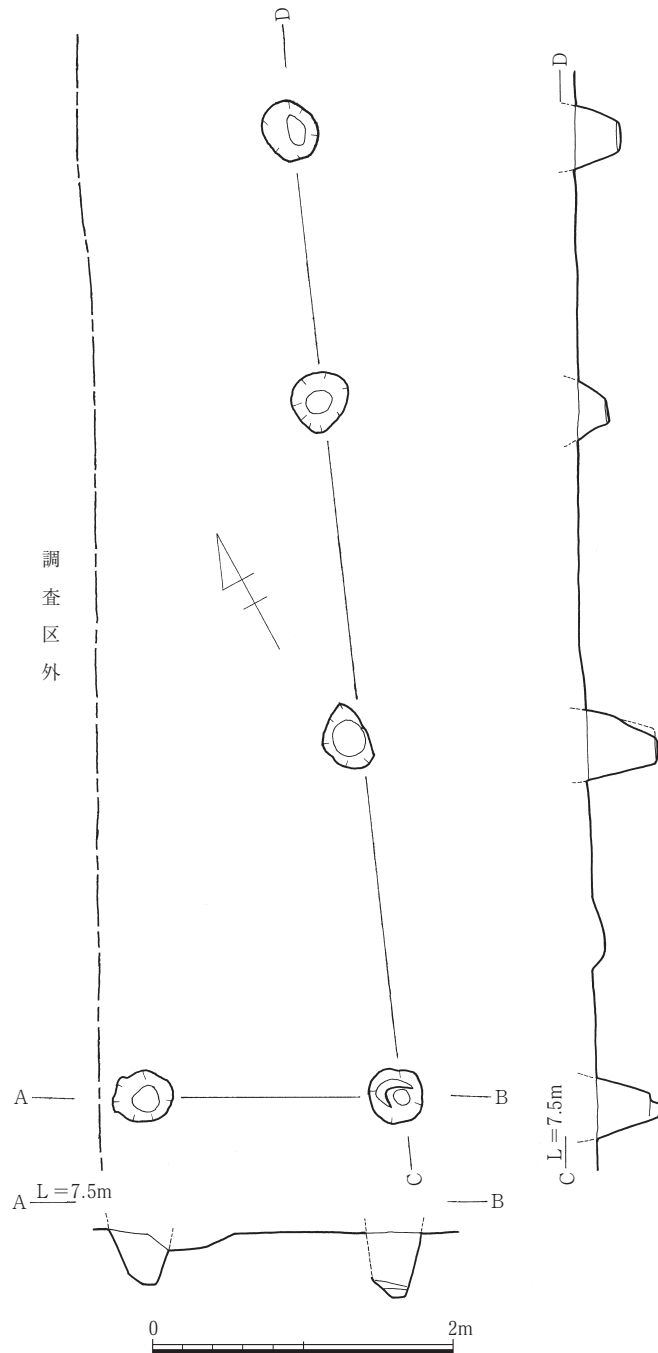
出土遺物 遺物は、柱穴1から土師器が1点、柱穴2から土師器と須恵器のそれぞれ1点ずつ出土した。そのうち2は土師器小型甕で内面を削るが、器壁が厚く外面には使用時の煤が付着している。建物の時期は土器が3点しか出土していないが、1の土師器坏と3の須恵器高台付坏の形態から、8世紀中葉と想定される。

2号掘立柱建物（第57図）

位置と切り合い関係 Ⅲ区中央付近の東西に横断するコンクリート製水路の北に位置する掘立柱建物。建物全体のうち東半分が調査区外に外れていた。建物の外側では9号竪穴1号土壇と切り合い、内面では2号・3号土壇と5号溝と切り合っている。

形態 形態は、梁間2間以上桁行3間が確認され、南北方向棟の長方形であった。方位角は南北を軸にして20度で、Ⅲ区内で確認された掘立柱建物に同角度の建物は無かった。束柱は無い側柱建物である。建物の寸法は、桁行の南北長辺が6m90cm、梁間の東西短辺が2m20cm以上、残存していた床面積は15㎡が確認でき、これを基に調査区外の部分も推定すると、建物全体で30㎡前後の床面積が想定され、中型の建物に分類される。

柱穴 掘立柱建物に構成される柱穴として検出された5本の柱穴の平面形態はいずれも円形で、その径は平均で35~40cmを測り、深さはバラつきがあって、

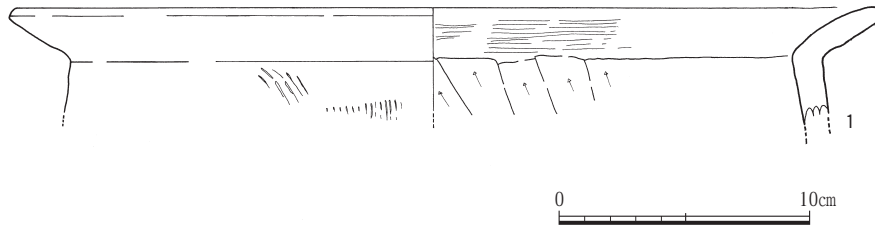


第57図 Ⅲ区 2号掘立柱建物実測図(S=1/50)

最も深い柱は検出面から45cmで、浅い柱は20cmであった。柱痕はいずれの柱穴からも確認できていない。埋土はいずれの柱穴も黒色のパサパサした砂質土に若干の粘性が混ざる単一層のみであった。

遺物は土師器甕の口縁片が1点のみで、この建物の時期も判明しなかった。

出土遺物



第58図 Ⅲ区 2号掘立柱建物出土遺物実測図(S=1/3)

3号掘立柱建物(第59図)

9号竖穴と11号竖穴のほぼ中間に位置する掘立柱建物。建物全体のうち約1/2が調査区外に外れていた。建物の北側には隣接するように5号土壙が掘りこまれ、内面では4号土壙と切り合っていた。

位置

形態は、梁間2間以上桁行3間以上が確認され、南北方向棟の長方形と想定される。方位角は南北を軸にして東に4度を差し、1号掘立柱建物の方位角度と完全に一致している。また、束柱は無く側柱建物であった。寸法は、桁行の南北長辺が6m、梁間の東西短辺が3m30cm以上で、残存していた床面積は10m²が確認でき、これを基に調査区外の部分も推定すると、建物全体で25m²前後の床面積が想定され、中型の建物に分類される。

形態

検出された5本の柱穴の平面形態は柱穴1が調査区端に位置していたためトレンチでその上部を削ってしまっており掘り方が判らず、柱穴2はやや南北に長い長円形で検出され、この柱穴1と2を除く3本は円形で、その径は概ね55~65cm内であった。深さは柱穴の最底面の標高が、柱穴3のみ6m84cmと深く、これ以外はいずれも6m65cm前後とよく揃っており、柱痕は検出時の平面と土層からは確認できなかったが、すべての柱穴の基底面より径15~20cmほどの円形柱の痕跡が認められた。

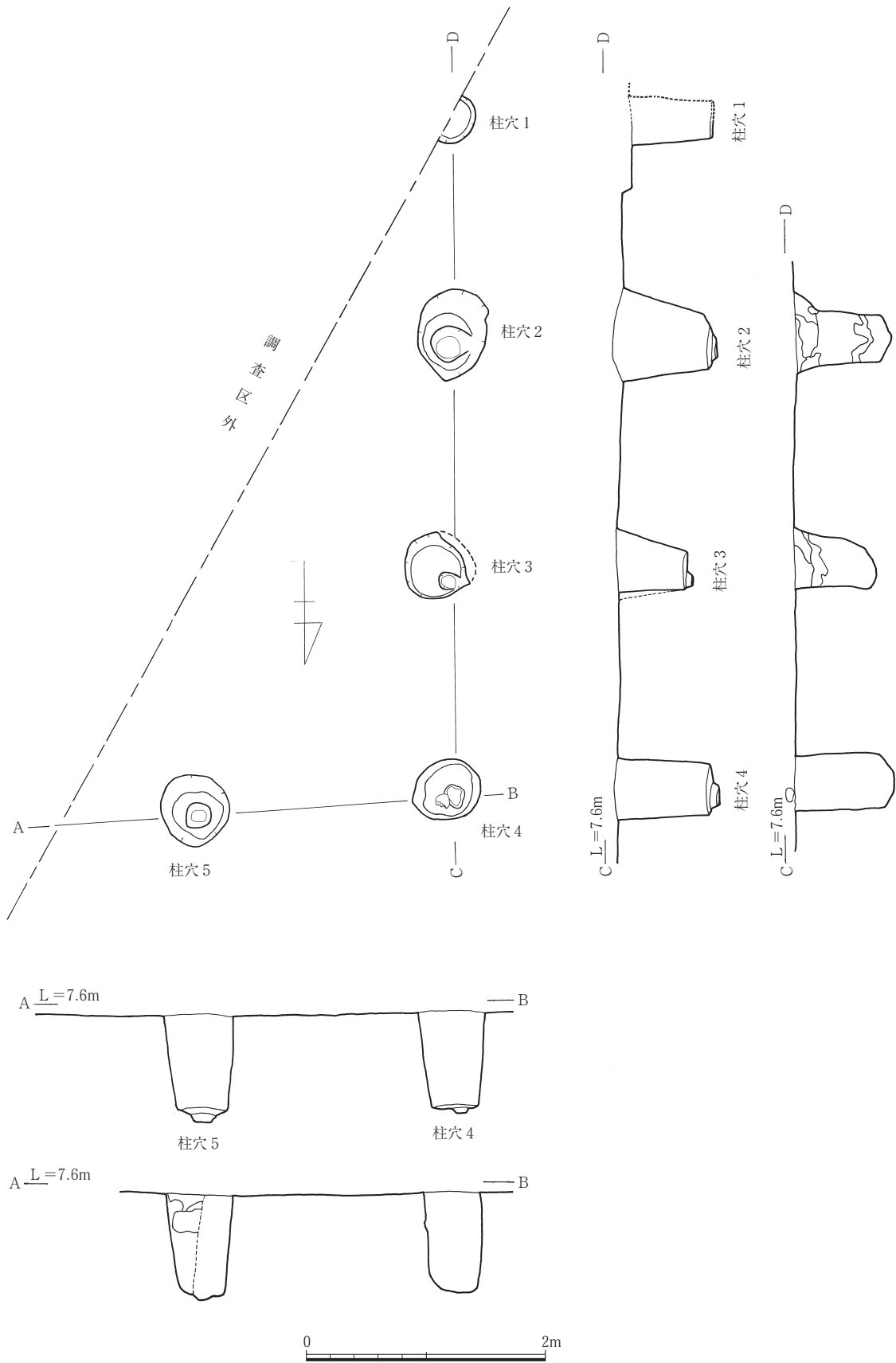
柱穴

柱穴の埋没状態は、第59図で示しているように、柱穴4のみ単一層だが、4以外の柱穴の土層は縦ではなく横に混ざり合った土層をしており、これはこの建物の廃絶後、柱を抜き取って埋め戻していることを現していると想定される。

柱穴埋土

遺物は、土器の小破片は数点出土しているが、どれも図示できないほどの細片であった。よってこの掘立柱建物の具体的な時期は判らないが、建物の方向が1号掘立柱建物と一致していることから、同時期であろうことが考えられる。

出土遺物



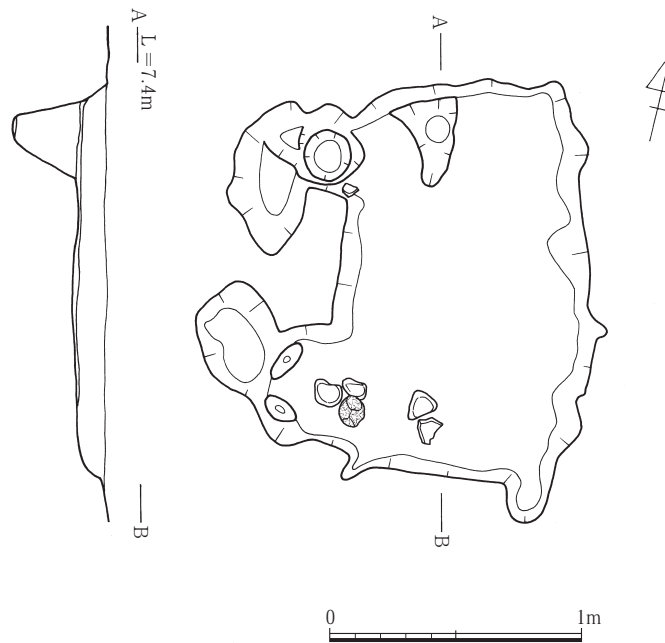
第59图 Ⅲ区 3号掘立柱建物実測図(S=1/50)

③土壙

1号土壙 (第60図)

8号竪穴の西側に位置する土壙。平面形態は西辺をピットに切られてやや不整な形であるが、位置本来は長方形であったと想定され、規模は南北長辺1m60cm、東西短辺は1mであった。断面形態は底面がほぼ平坦で壁面が斜めに上がる逆台形で、深さは検出面から13cmと浅く、方位角は南北長軸での6度であった。

埋土は単一層でパサつく暗オリーブ色土であった。遺物は格子状タタキの施された須恵器甕の胴部小片が出土しているが図化に耐えうるものではなく、他に土壙の南西隅からコブシ小の大きさの焼けた礫石が出土している。

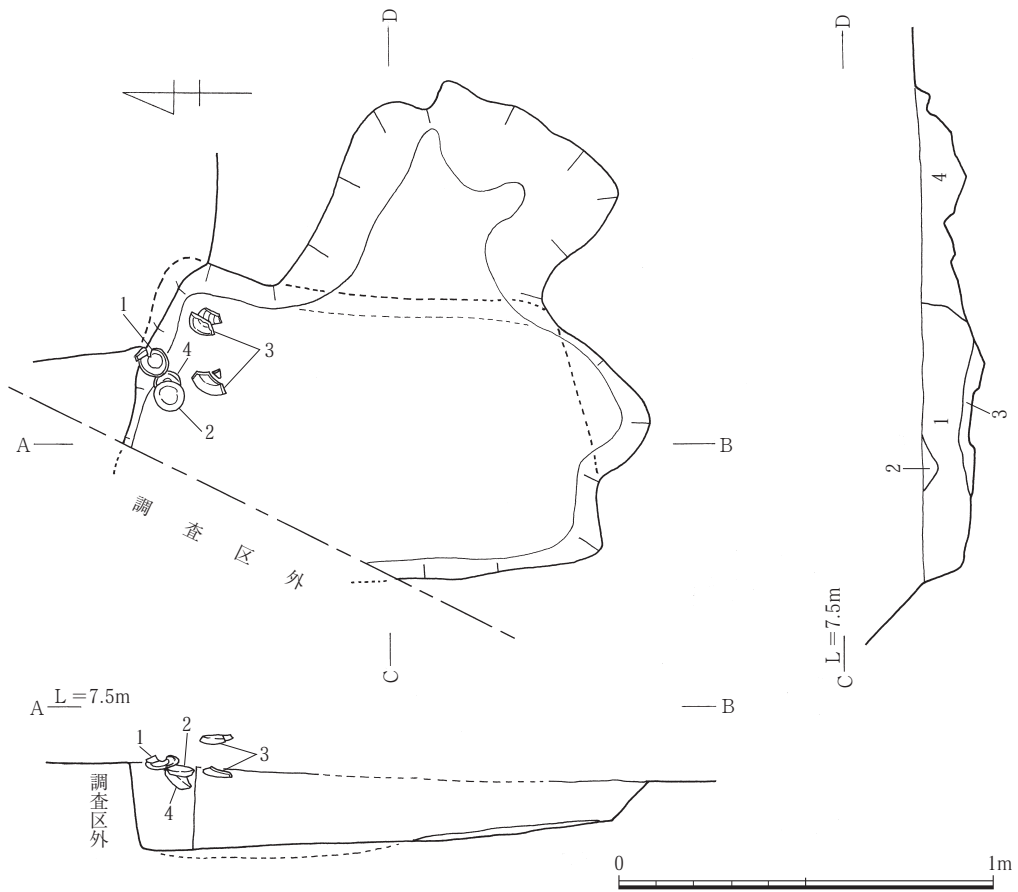


第60図 Ⅲ区 1号土壙実測図(S=1/30)

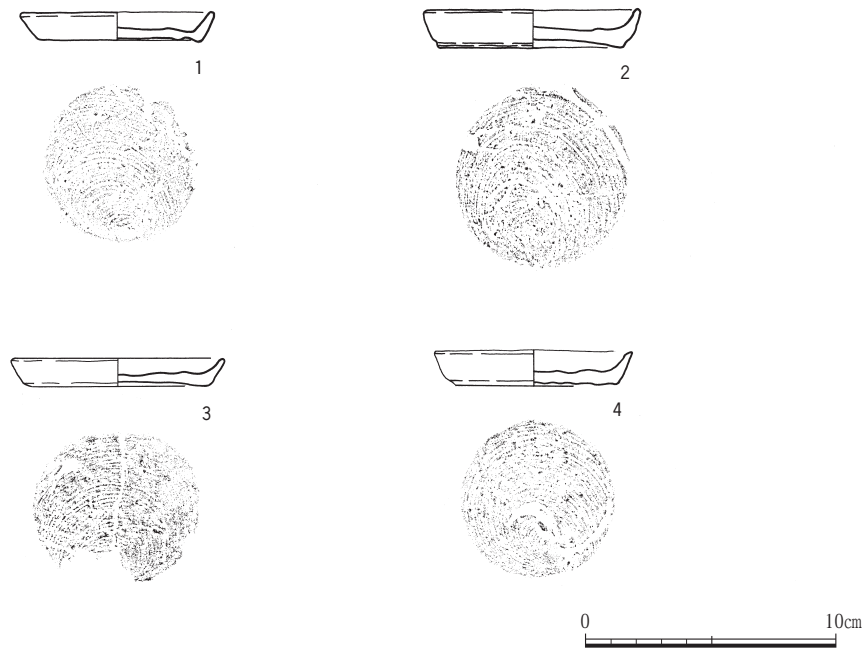
2号土壙 (第61図)

9号竪穴の西に位置する土壙。3号土壙を北東の角で僅かに切り、東辺を樹木痕に大きく崩されている。位置と規模平面形態は南北方向にやや長い長方形をなし、断面形態は逆台形をしているが、底面が南辺から北辺にかけてゆるやかに傾斜している。規模は南北長辺を1m22cm、東西短辺が76cm、検出面からの深さは10cmを測り、方位角は南北長軸の2度であった。

埋土は3層に分かれていたが、土壙内の大半は第2層が占め、どの層もパサつく黒褐色土であったが、1と3層は2層に比べ若干硬く締まり、層中に木片等の木棺の痕跡は認められなかった。遺物は土壙の北辺付近の検出面の高さで底部糸切り離しの土師質小皿が4点出土し、いずれもほぼ完形に近い状態で出土し、1点だけ斜めに傾いていたが、他はほぼ水平に近い形で出土していた (第62図)。また、この土壙は平面で検出した時点でその形態から土壙墓の可能性が想定されたので、掘り下げは慎重に行なったが、骨片等は全く出土しなかった。しかし、その形態と北辺寄り出土している土師質小皿が出土していることと隣接しての3号土壙が在ること、さらには江津湖東-Ⅲ区の西隣に広がる神水遺跡でも中世の土壙墓が検出されていることから、この



第61図 Ⅲ区 2号土壤実測図(S=1/20)



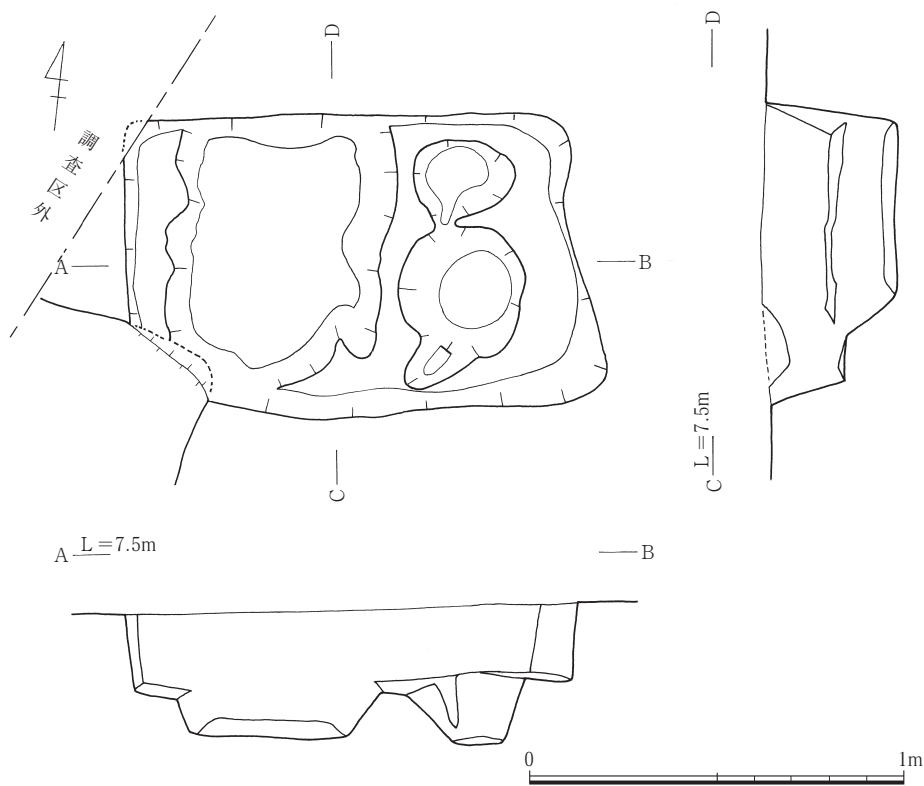
第62図 Ⅲ区 2号土壤出土遺物実測図(S=1/3)

付近に10世紀以降、土壙墓群が配置され、2号土壙が墓であった可能性は非常に高いといえよう。

3号土壙（第63図）

2号土壙の北東に近接して位置し、南西角を切られている土壙。平面形態は東西に長い長方形を呈し、断面は逆台形状をしているが、底面は階段状の掘り込みと小規模のピットでかなり凸凹している。規模は東西長辺1 m20cm、南北短辺80cm、検出面からの深さは平均で22cm、最も深い地点は38cmを測り、方位角は東西長軸の6度であった。

埋土はオリヅ黒の単一層で、土質は全体の80%が強く締まり、残りの20%程は余り締まらずにパサパサし、その両方の土が混ざり合う土質であった。遺物は破片も含め1点も出土していない。規模・形態共に2号土壙と良く似ており、こちらも土壙墓である可能性は高い。



第63図 Ⅲ区 3号土壙実測図(S=1/20)

4号土壙（第64図）

3号掘立柱建物の内側に位置する土壙。平面形態は東西に長い長円形を呈し、西辺の一部が現代の攪乱によって崩されていた。規模は東西長辺が1 m14cm、南北短辺で65cm、断面は底面が皿状に中央に向かって深くなり、検出面からの深さは最も深い所で14cmを測った。方位角は東西長軸の5度であった。

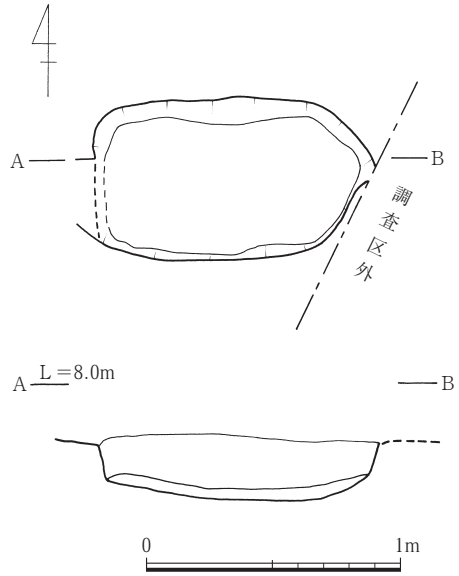
埋土は黒色の単一層で、土質はしまりがなくパサつき、層中に2 mm前後の焼土粒子と炭化物片を少量含んでいた。遺物は破片も含め1点も出土しておらず、遺構の時期は不明。しかし5号土壙と同じ埋土をしており同時期である可能性もある。また土壙としての用途を考えると3号掘立との関連も想定されたが、この3号掘立も全面検出されていないので明確には解らない。

5号土壙（第65図）

位置と形態 3号掘立柱建物の北西角外側に隣接する土壙。平面形態は部分的に内側に入り込む不整な円形を呈し、断面形態は南壁で鋭く立ち上がるが北壁では底面からゆるやかに上がっている。規模は南北辺が1m10cm、東西辺96cm、検出面からの深さは11cmを測った。

埋土 埋土は、パサパサした締まりのない黒色の単一層に、2mm程のオレンジ色の焼土粒子と粘質の暗褐色粒子を極少量含んでいた。

出土遺物 遺物は礫が1つと高台付坏が内底面を下に向けて水平に出土している。5号土壙の埋没時期は、第66図の高台付坏の高台の位置と高さから8世紀後葉と考えられる。



第64図 Ⅲ区 4号土壙実測図(S=1/30)

6号土壙（第67図）

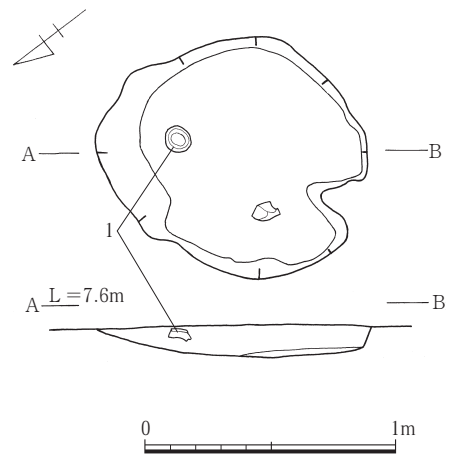
位置 Ⅲ区の中央付近に位置し、全体のうちの半分ほどが調査区外に延びる土壙。

平面形態と規模 平面形態は隅丸長方形と想定され、深さは検出面から64cmと底が深く、断面は底面がほぼ平坦に対して、壁面で急激に立ち上がっている。規模は検出された範囲で東西辺が66cm以上、南北辺は64cmで、方位角は東西を軸にして40度であった。

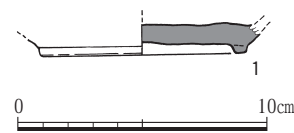
土層 埋没土層は大きく3層に分かれ、どの層も非常に固く締まり、層によって若干の量の違いはあるが、いずれの層からも光を反射する微粒子を極少量含んでいた。

切り合い関係 6号土壙は8号竪穴と9号竪穴の切り合いを観察するためにⅢ-a区の東壁にトレンチを設定した際に調査区基盤V層の断面で確認されており、そこから周囲をV層まで掘り下げて平面で検出した土壙で、明らかに他の遺構と検出層の違う土壙であった。

出土遺物 遺物は土壙内から出土していないが、時期も違うことが容易に想定され、形態も平面での規模に対して深すぎる点から、墓の可能性を考えるよりも、底面に杭痕跡は確認できなかったが落とし穴遺構である可能性の方が高いであろう。

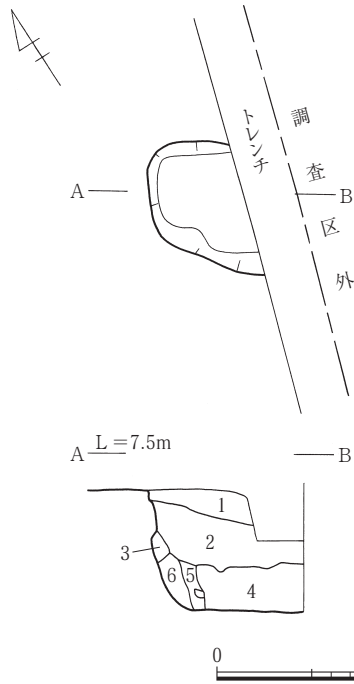


第65図 Ⅲ区 5号土壙実測図(S=1/30)



第66図 Ⅲ区 5号土壙出土遺物実測図(S=1/3)

第4節 江津湖東一Ⅲ区



- 1層：黒褐 (7.5YR3/1)。しまりが強くかなり硬い。
非常に細かい黄土色の粒子とガラス質の微粒子を全体的に含む。
- 2層：黒 (7.5YR1.7/1)。1層と同様にしまりが強く硬い。
含まれる微粒子も1層に同じ。
- 3層：黒褐 (7.5YR2/2)。1、2層に比べ、ややしまりが弱い。
ガラス質の微粒子は若干少ない。
- 4層：黒褐 (10YR2/2)。1、2層と同じ程度にしまる。
極わずかにガラス質の微粒子を含むが、全体的には混じりの少ない黒褐色層。
- 5層：黒褐 (10YR2/2)。しまりがなくサラサラとした層。褐色土が混じり込む。
- 6層：褐 (10YR4/4)。5層と同様にサラサラとしてしまりがなく。
褐色土をブロック状に含む。

第67図 Ⅲ区 6号土壌実測図(S=1/20)

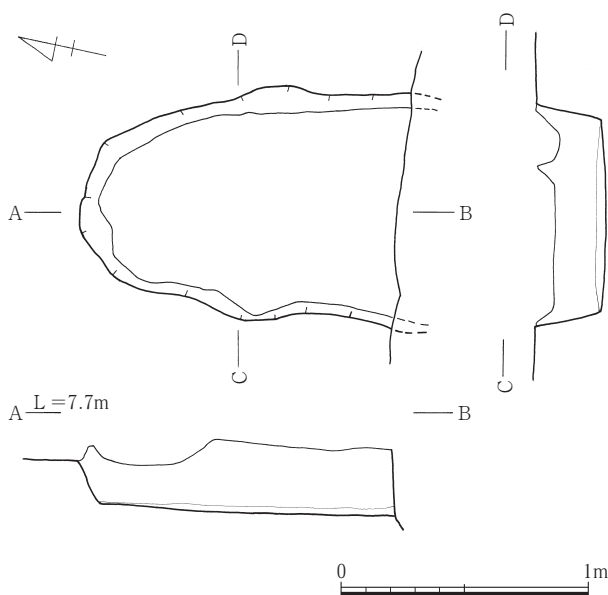
7号土壌 (第68図)

11号竪穴の北側で切られ、北東から南東方向の7号溝と南北方向に延びる8号溝が交差する位置で両溝跡に切られる形で検出された土壌。その1/3もしくは半分近くが11号竪穴によって消失していた。

切り合い関係

平面形態は溝や竪穴に切られているためやや不整な長円形を呈し、断面は底面が中心に向かって若干深くなっているがほぼ平坦で、壁が急に立ち上がる形態をしていた。規模は南北長辺が

平面形態



1 m25cmの、東西短辺は90cmで、深さは検出面から26cmを測り、方位角は南北を軸にして15度であった。

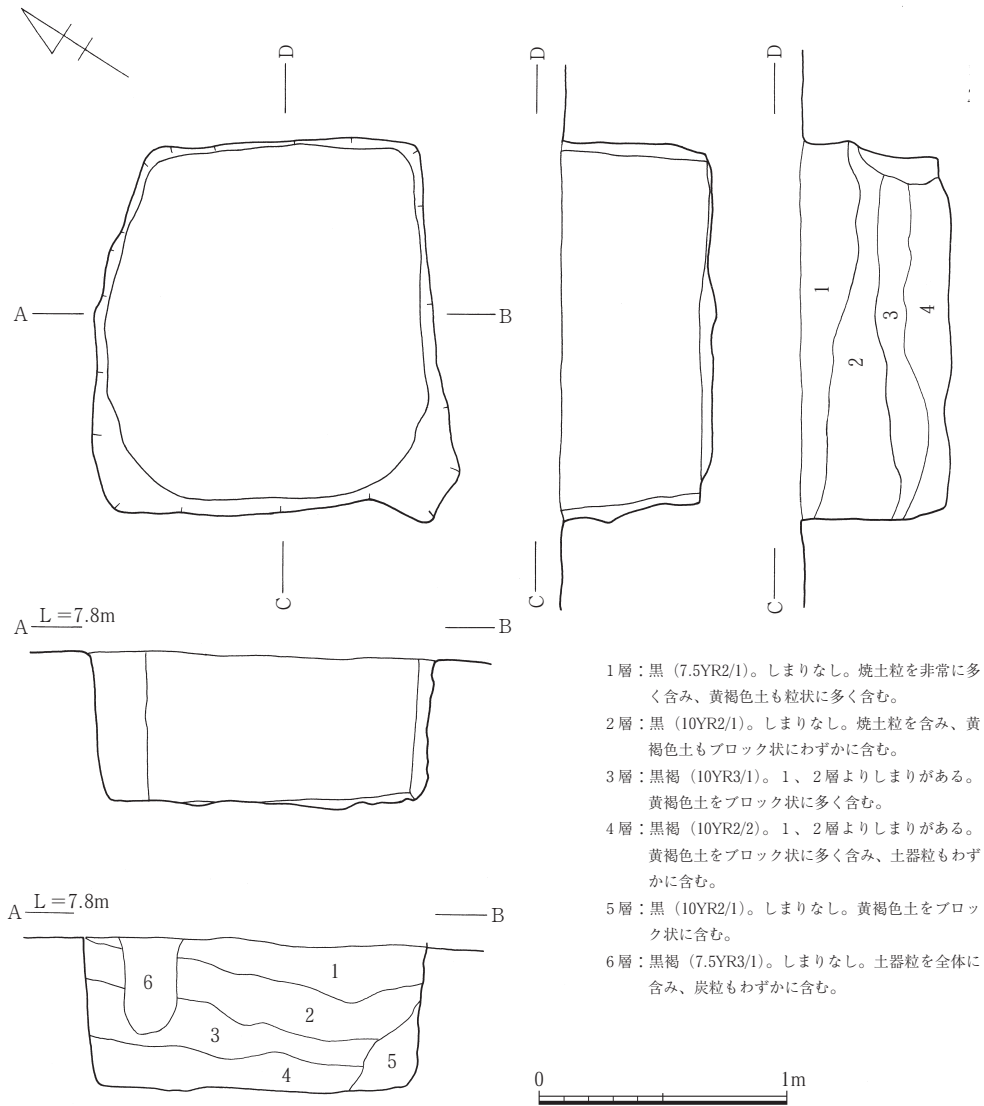
この7号土壌は8号溝の延長上に位置することから、検出当初は8号溝の一部と認識しており、8号溝の完掘後にその形態から土壌が掘りこまれていたことが確認された。そのため7号土壌としての土層観察はしておらず、土層図も実測していなかった。

8号土壌との関係

遺物は破片も含め1点も出土しない。

出土遺物

第68図 Ⅲ区 7号土壌実測図(S=1/30)



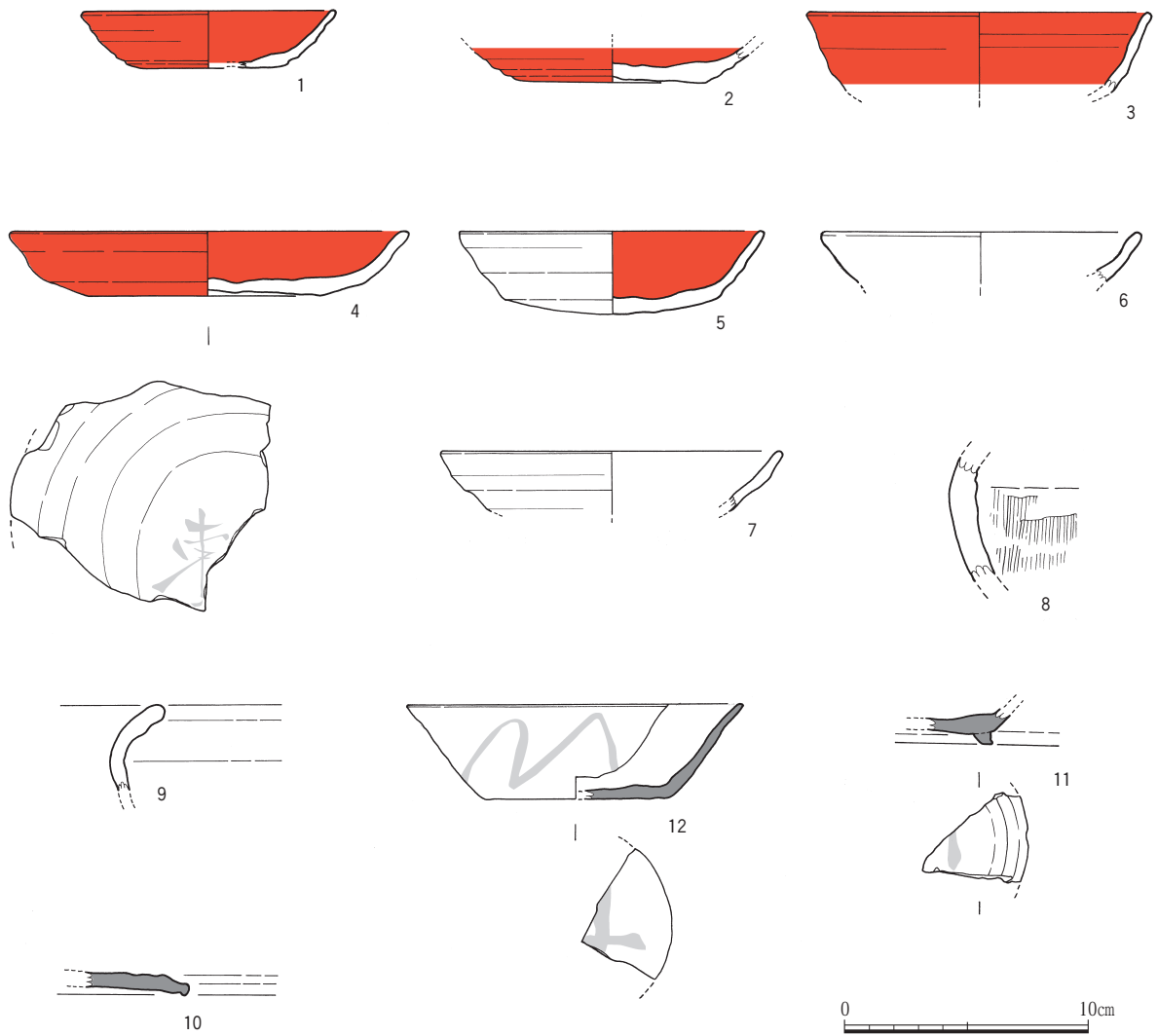
第69図 Ⅲ区 8号土壌実測図(S=1/30)

8号土壌 (第69図)

位置と形状 13号竪穴より1 m30cm南西に位置した土壌。平面形態は西辺に対し東辺で幅がやや広がる方形。断面は底面がやや凸凹するがほぼ平坦で壁も垂直に立って箱型を呈している。規模は東西辺が1 m48cm、南北辺は1 m34cm、検出面からの深さは60cmを測り、方位角は東西を軸にして40度であった。

土層 土層は5層確認されているが、そのうちの第5層は埋まる際に地山の土が混ざりこんだ層で、これを除いた4つの層は1・2層を上層、3・4層は下層と、上下の2つに分けることができる。上層とした1・2層は黒色土でしまりが無いのに対し、下層の3・4層は黒褐色の硬くしまる土質で、明確な層位の違いが認められる。

出土遺物 遺物は多く出土し、1～7は土師器の坏でそのうちの1～4には全体に赤色顔料が塗布されていた。8は土師器の壺の頸部片で、9は土師器甕の口縁片、10～12は須恵器で、10は坏蓋、11は高台付坏の外底面には墨書がなされていたがなんと書かれていたかは不明。12の坏も体部



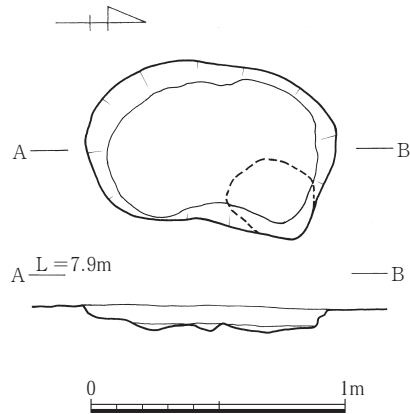
第70図 Ⅲ区 8号土壙出土遺物実測図(S=1/3)

と底面の外側に墨書がなされ、体部の墨書は記号を現し、底面は文字と思われるが具体的な表 墨書土器
 記は不明である。出土した遺物はすべて上層である1・2層から破片で出土していた。このこ
 とは土壙の当初の使用目的を終え、下層までが自然埋没した後、いわゆるゴミ穴として廃棄目
 的に使用していたと想定される。では当初はなんのために掘り下げたのかを考えると、その壁
 も垂直に立ち上がって箱型に掘り下げていることから、土取りなどの何らかの目的をもって掘
 られたと考えられるが具体的な用途は結論としては不明であった(第70図)。

9号土壙 (第71図)

位置 9号溝の北に位置する土壙。平面形態は南北に長い隅丸長円形、断面は底面がやや凸凹するが浅い皿状をしている。規模は南北長辺が1m、東西短辺は64cm、検出面からの深さは8cmと浅く、方位角は東西を軸にして10度であった。

埋土 埋土はパサつくしまりのない黒色土の1層で、遺物は破片も含め1点も出土しなかった。



第71図 Ⅲ区 9号土壙実測図(S=1/30)

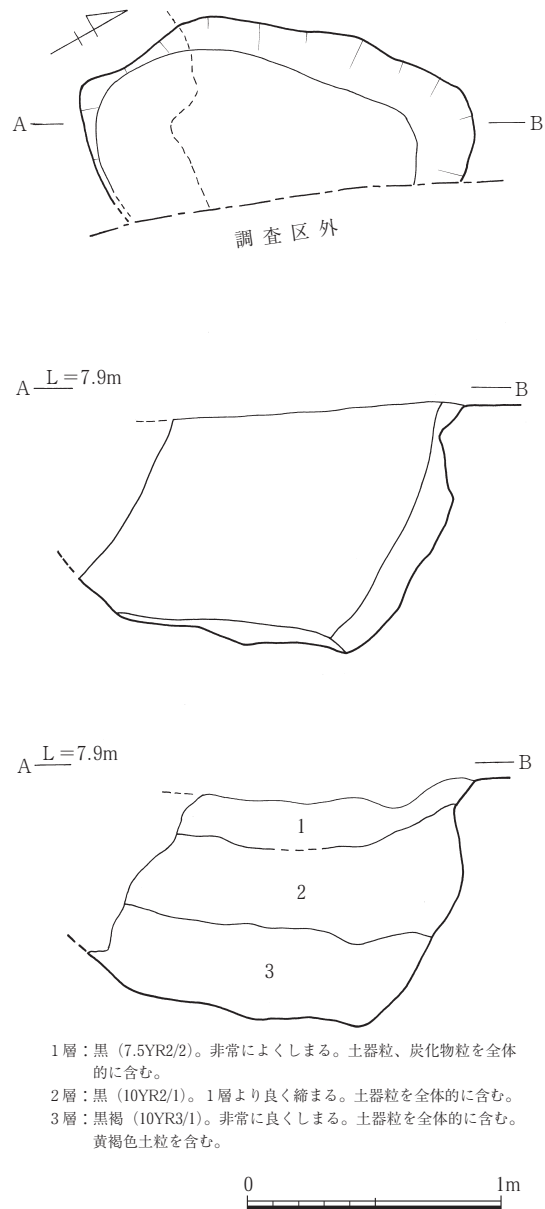
10号土壙 (第72図)

位置 Ⅲ区北端付近の調査区を東西に横切り合い関係 断するコンクリート製水路の南側で、10号溝にその1/3近くを切られて検出された土壙。

平面形態 平面形態は南北に長い隅丸長方形

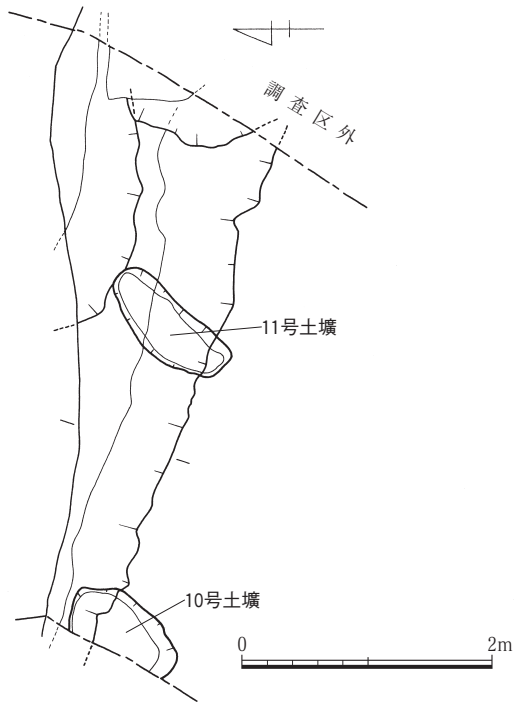
規模 で、断面は底面が北辺から南辺に傾斜していた。規模は南北長辺が1m58cmの、東西辺は調査区外に延びているため不明。検出面から底面までの深さは最も深いところで95cmと深かった。方位角は南北を軸にしての31度であった。

出土遺物 遺物は破片も含め1点も出土していない。埋土は3層に分かれ、どの層も非常によく締まっていた。この土壙は検出面から底面までが深いその形態と埋土の状況が6号土壙とよく似ていた。



1層：黒 (7.5YR2/2)。非常によくしまる。土器粒、炭化物粒を全体的に含む。
 2層：黒 (10YR2/1)。1層より良く締まる。土器粒を全体的に含む。
 3層：黒褐 (10YR3/1)。非常に良くしまる。土器粒を全体的に含む。黄褐色土粒を含む。

第72図 Ⅲ区 10号土壙実測図(S=1/30)



第73図 Ⅲ区 10号・11号土壌実測図(S=1/30)

11号土壌 (第74図)

Ⅲ区北端付近のコンクリート製水路の南側に位置し、10号溝に全体の1/2近くを切られて消失している土壌。

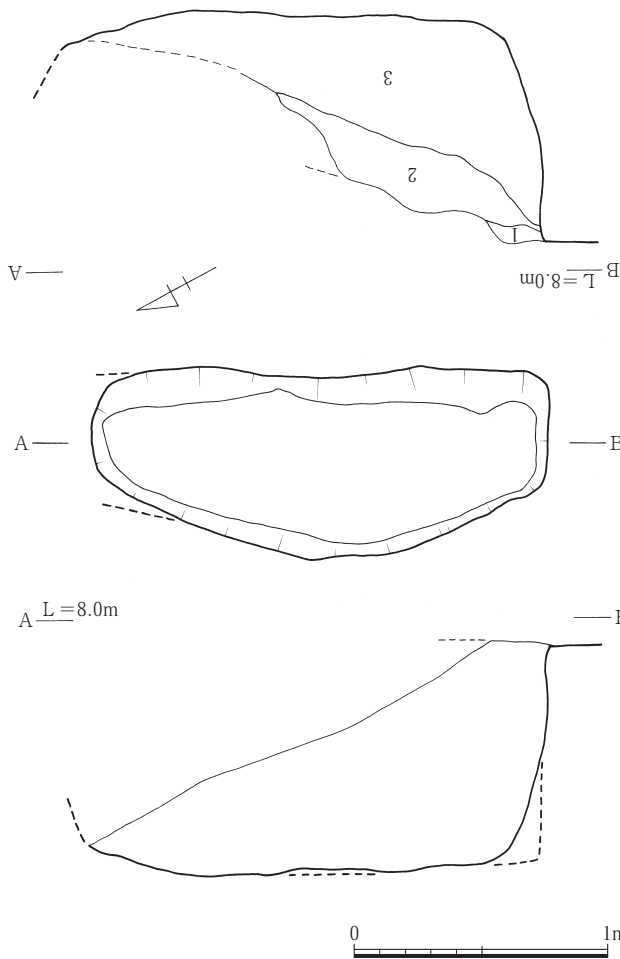
位置

平面形態は南北に長い隅丸長方形で、検出面から底面までの深さが95cmと深く、底面はほぼ平坦であった。規模は南北長辺が1 m58cmの、東西辺は調査区外に延びているため不明。方位角は南北を軸にして31度であった。

平面形態

遺物は破片も含め1点も出土し、埋土は3層確認され、その特徴も含めて10号土壌とまったく同じであった。10号土壌とは形態、方向、土層共に非常に似ていることから同時期に共通の目的をもって掘りこまれた関連性のある遺構と考えられる。

出土遺物



- 1層：黒褐 (7.5YR2/2)。非常によくしまり、土器粒、炭粒を全体的に含む。
- 2層：黒 (10YR2/1)。1層よりも一層しまり、土器粒を全体的に含む。
- 3層：黒褐 (10YR3/1)。非常によくしまり、土器粒を全体的に含む。黄褐色土粒を含む。

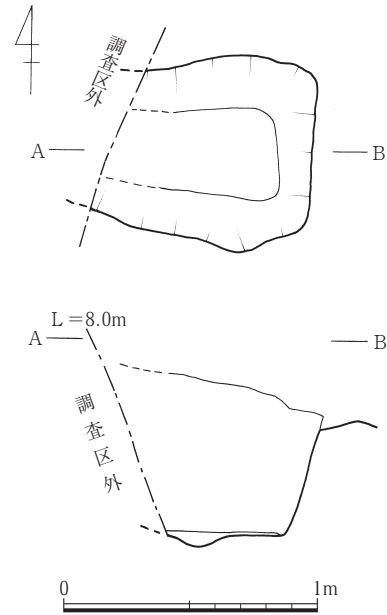
第74図 Ⅲ区 11号土壌実測図(S=1/30)

12号土壙 (第75図)

切り合い関係 2号竪穴の西辺を切る位置の土壙。当初2号竪穴の検出時は確認されておらず、2号竪穴の貼り床を掘り下げ完掘したことによって調査区の基盤V層で検出された。

形態 全体のうち半分近くが調査区外に外れていたが、平面形態は東西に長い隅丸長方形で、規模は東西長辺が72cm以上、南北短辺は40cmで、検出面からの深さは70cmと深く、方位角は東西を軸にして3度であった。

出土遺物 遺物は破片も含め1点も出土しておらず、埋土は黒褐色土の単層で、非常に硬くしまり層中に黄褐色の粘質土が粒子状に少量混ざっていた。この12土壙も底が深く、埋土は非常に硬くしまり、形態も含めて6・10・11号土壙とよく似ており、やはり同時期に掘りこまれた関連性のある遺構と考えられる。

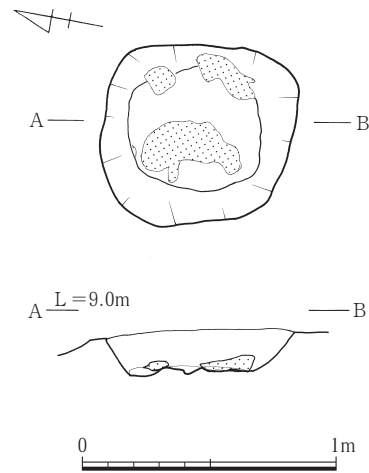


第75図 Ⅲ区 12号土壙実測図(S=1/30)

13号土壙 (第76図)

位置と規模 14号竪穴建物の南東角を切る位置で検出された土壙。平面形態はかなり丸みをもった方形で、断面は逆台形状を呈した。規模は南北辺が80cm、東西辺は70cmで、検出面からの深さは18cmを測った。

出土遺物 この土壙の底面から炭化木片と焼土片が固まりで出土しており、何らかの燃焼を目的とした土壙であることは判ったが、具体的に日常的な生活に伴う土壙なのか、非日常的な突発的に燃焼を必要とした遺構なのかは不明。遺物の出土は無かったので時期は特定できなかった。



第76図 Ⅲ区 13号土壙実測図(S=1/30)

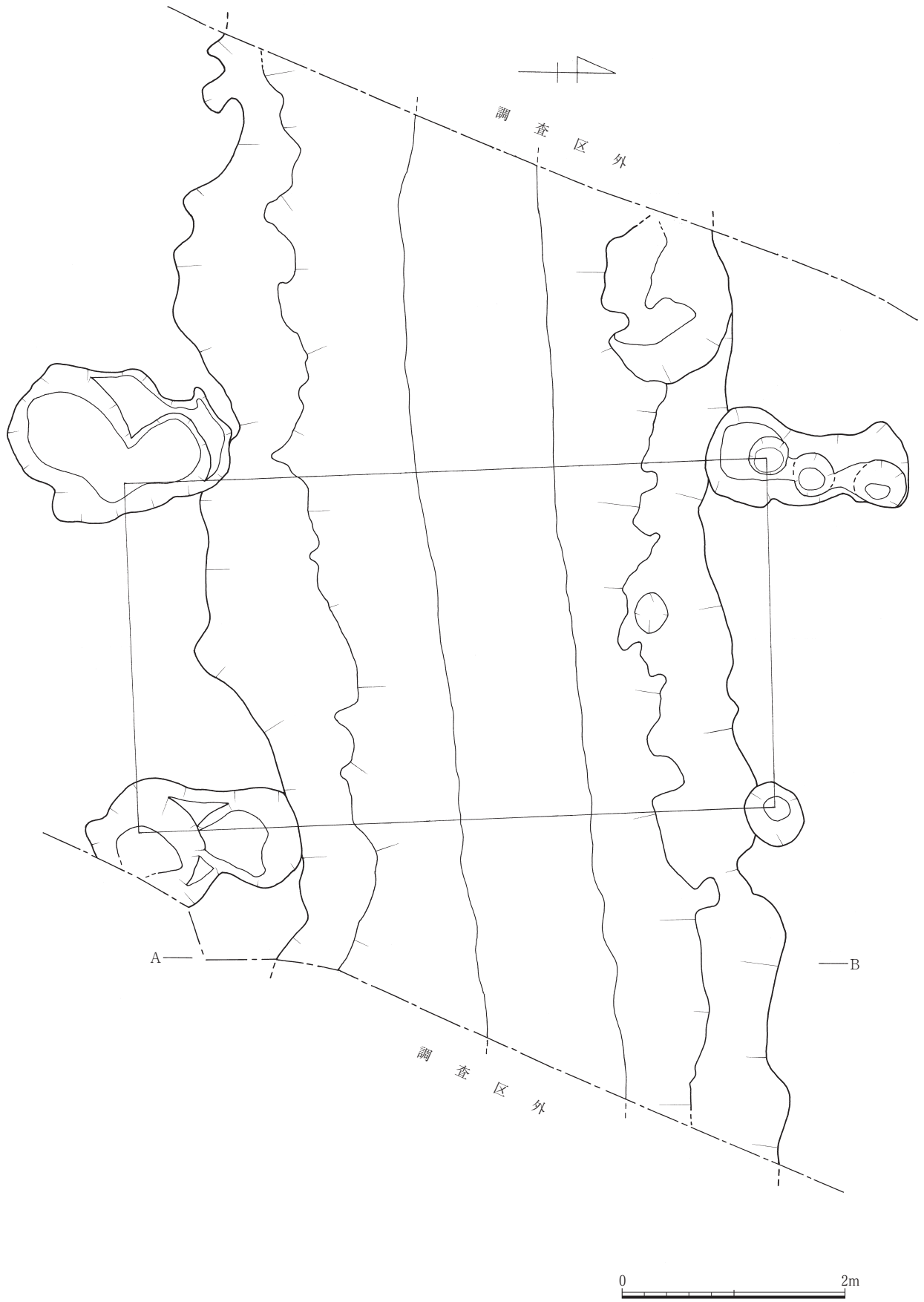
④溝遺構

1号溝 (第77図~第79図)

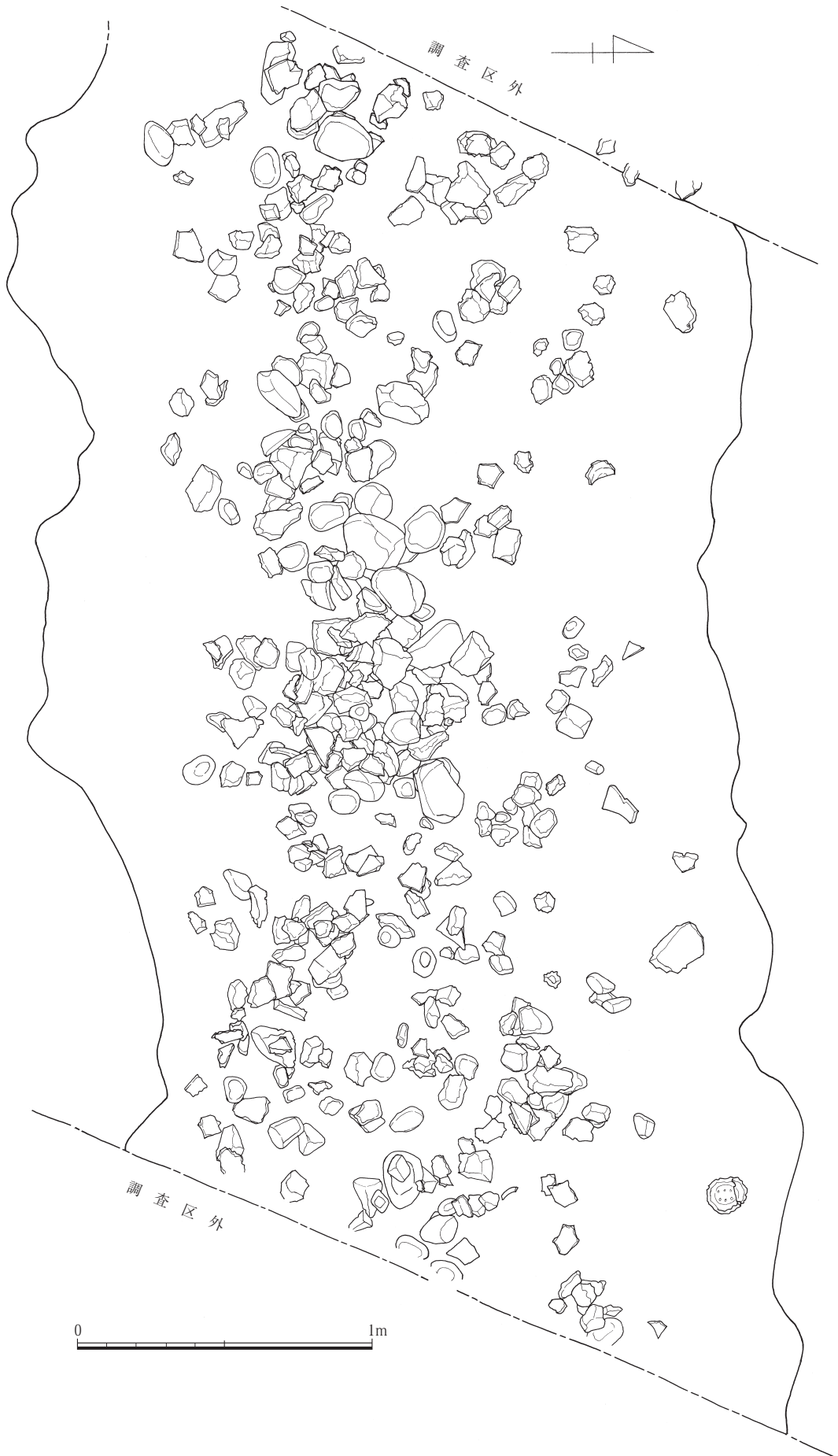
検出状況 1号掘立柱建物の2m50cm南に位置し、平面は調査区を横断する形の東西方向に走って検出された。方位角は東西を軸にしての6度で、溝の方向と1号掘立の梁間にはほぼ平行している。

規模 規模は、幅が約2m30cm、深さは検出面から1m23cmを測り、検出された範囲は狭いもの底の深く規模の大きな溝であった。断面形は深いU字形を呈し、底面から上端に近づくにしたがって外側に広がっていた。平面の溝の上端の北側と南側にはそれぞれに2本ずつ大きめのピット

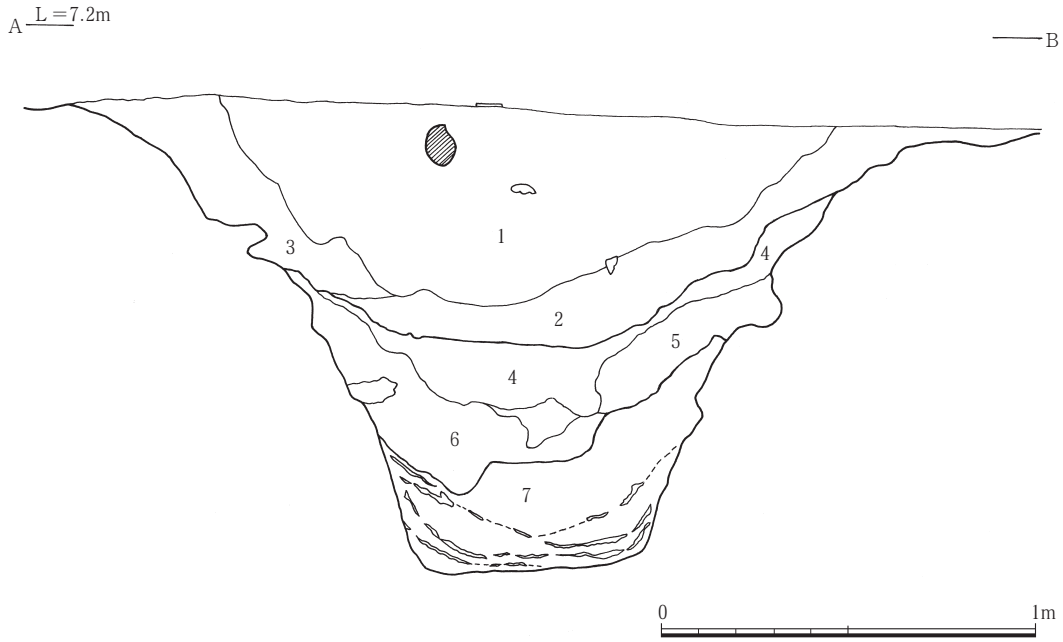
第4節 江津湖東-Ⅲ区



第77図 Ⅲ区 1号溝実測図(S=1/50)



第78図 III区 1号溝実測図(S=1/20)

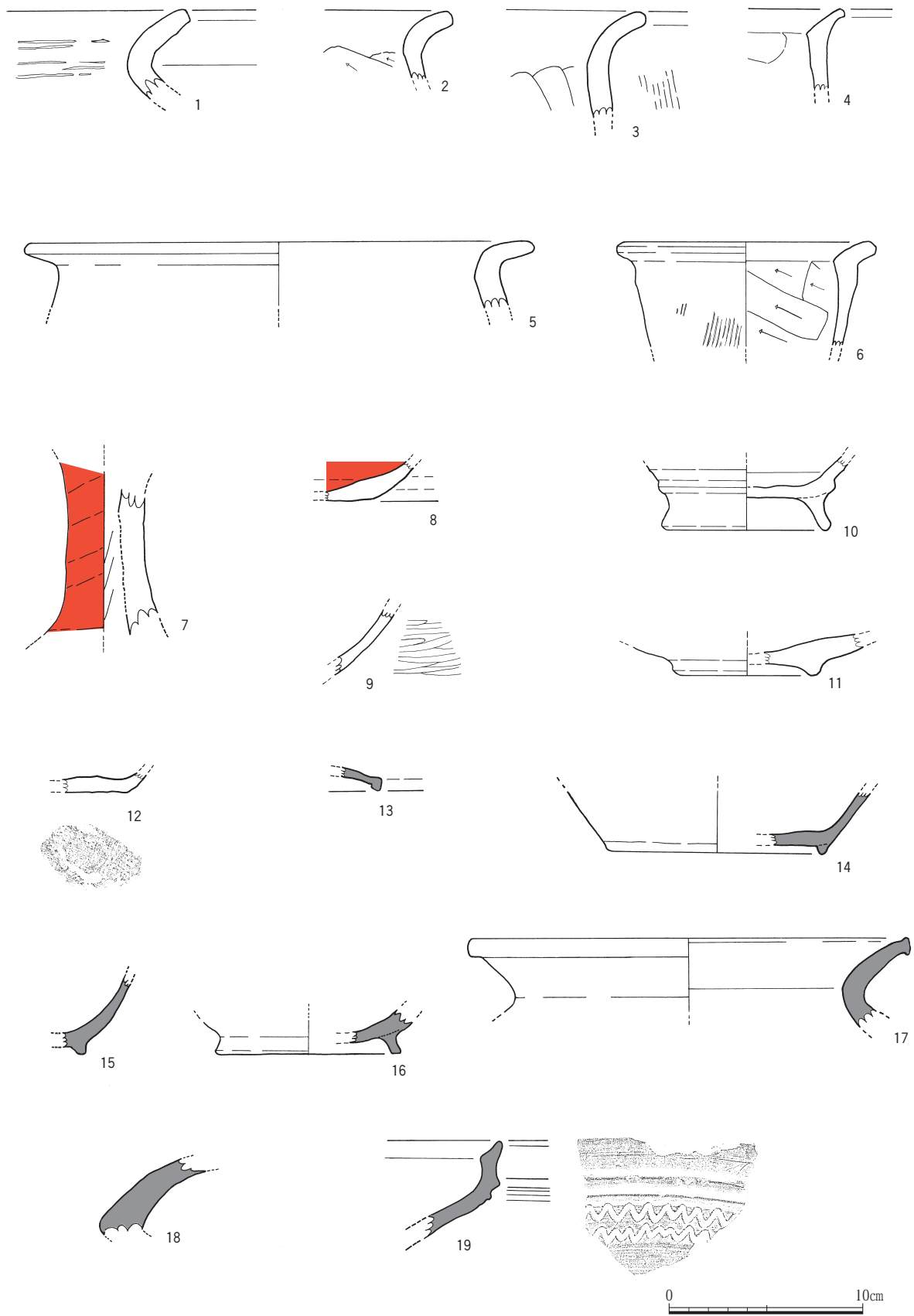


- 1層：オリブ黒 (5Y3/1)。バサバサした目の細かな砂質土。他の層に比べ、若干粘性がある。遺物の大部分はこの層より出土。
- 2層：灰オリブ (5Y4/2)。バサバサした砂質土で周りの1、3、4層に比べて土粒子密度が薄い。径5mm程の鈍い橙色粒子がわずかに4層との境目付近に混じる。
- 3層：オリブ黒 (5Y3/2)。バサバサした砂質土。2層に比べ土粒子密度が濃い。粘性なし。土色も2層に比べやや濃い。
- 4層：暗灰黄 (2.5Y4/2)。バサバサした砂質土。2層に比べ土粒子密度が濃い。層中の15%ほどが5mm～2cmほどの黄色粒子で、土色やや明るい。
- 5層：黄灰 (2.5Y4/1)。バサバサした砂質土。土粒子密度は4～6層間であまり差がないが、4、6層に比べて黄橙色土粒子の量が増え、径3cmと大きな物も混じる。
- 6層：黒褐 (2.5Y3/2)。バサバサした砂質土。層中の40%程が径5mmの黄橙色土粒子。
- 7層：地山の黄褐色土と黒褐色砂質土と灰黄褐粘土質土が交互に堆積。良く締まる。

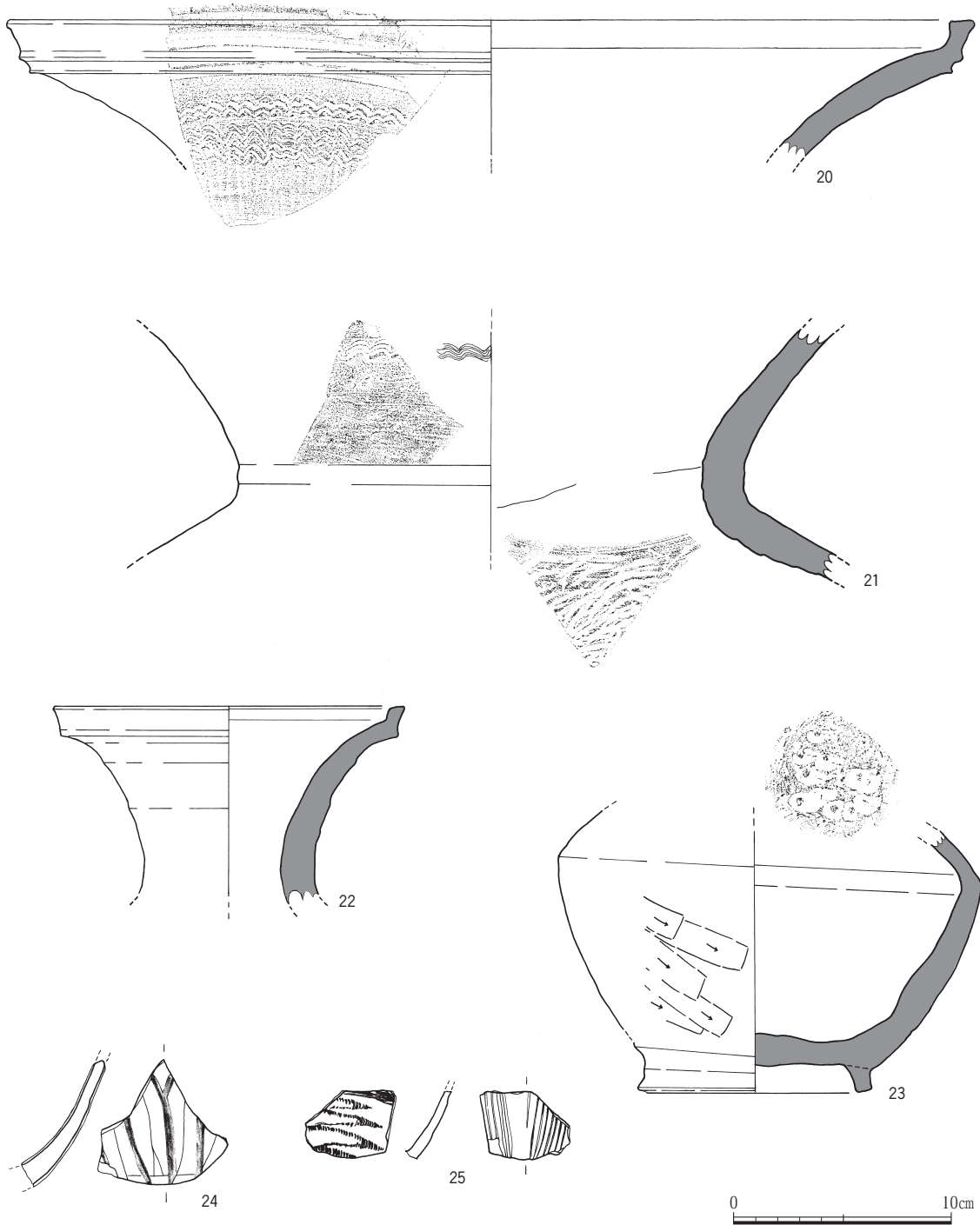
第79図 Ⅲ区 1号溝実測図(S=1/20)

状遺構が直角に検出されており、柱痕こそ確認できなかったが、位置的には溝に橋脚が建てられていた可能性も想定させる位置でのピットであった。しかしその範囲が狭すぎるために確実とはいえず、あくまで可能性を指摘する域を越えない。

埋土は7層が確認されたが、その埋没状況と土質・土色から上・中・下の3つの層位に大きく分類できた。内訳は1～3層が上層、4～6層は中層、7層は単独の下層を指し、それぞれの層位の状況は、上層がレンズ状にはなだらかに堆積して、やや乱れ気味に埋没する中層とは明らかな違いが見られる。また1号溝出土の遺物はこの上層の内の特に1層から全て出土している。中層の4・5・6層は前述したように上層に比べてやや乱れて埋まり、さらに4層と6層の間には調査区基盤Ⅳ層の黄橙色粘質土が入り込んでいることから、中層がさほど時間を掛けずに埋まったことを窺わせ、人為的に埋め込まれたであろうことを想定させる。下層である7層は、バサつく黒褐色土の層内に基盤Ⅳ層の地山の黄褐色土が薄く硬くしまつて黒褐色土と交互に堆積しており、黄褐色土は直上で検出して平面でも観察したが、道路状遺構のように非常に硬く絞まっていることから、踏みしめられていたと考えられる。またどの層からも水流の



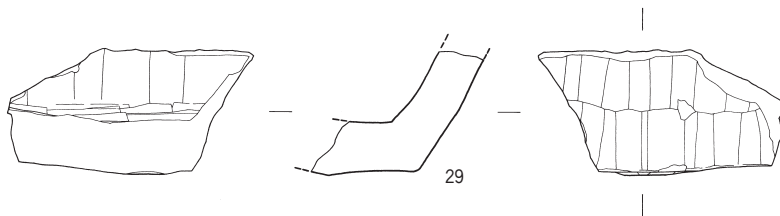
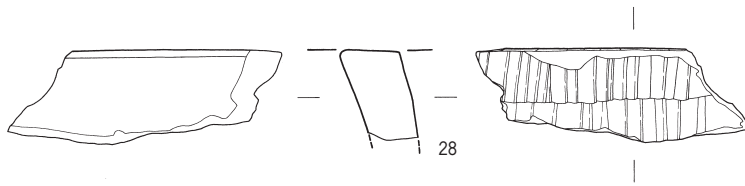
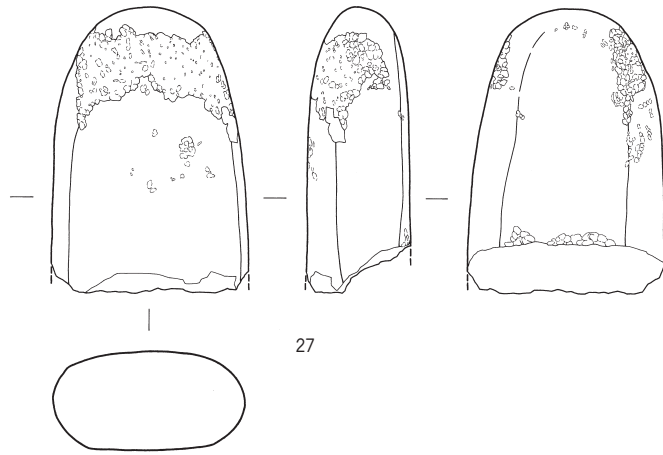
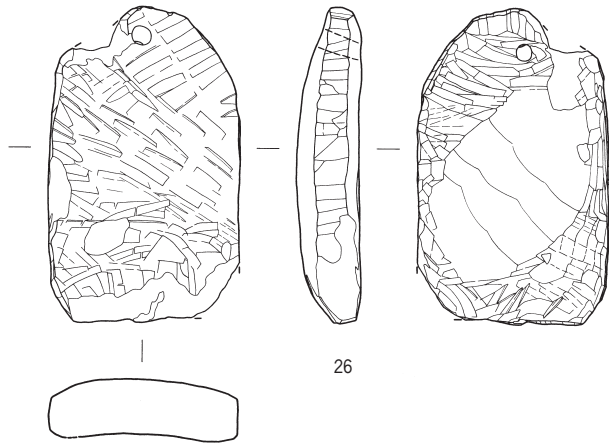
第80图 Ⅲ区 1号沟出土遗物实测图(S=1/3)



第81図 Ⅲ区 1号溝出土遺物実測図(S=1/3)

痕跡となる砂層や水流時に沈殿する粘土層は確認されておらず、これ等のことからこの1号溝は、規模こそ大きいが灌漑等の水を通すために構築された遺構とは考えにくく、溝の本来の目的は不明なもの、底面まで掘り下げられた後に序々に自然埋没しては踏み固められて道として活用され、それがどの位の期間であったのかは判らないものの、その後中層の時期に人為的に埋められ、最終的に中層までが埋まり溝が浅く凹んでいた時期に廃棄目的で遺物や礫群を投げこんだと考えられる。

遺物は多くの土器片と礫群が混在しての一括出土で、土器は1～11までが土師器、13～23が 出土遺物



0 5cm

第82図 Ⅲ区 1号溝出土遺物実測図(S=1/2)

須恵器、24・25が青磁、12のみ土師質土器、他に26～29は石製品であった。石製品のうち26は滑石製で図面上での上方に穿孔した孔があることから温石であることが判り、さらにこの温石はゆるやかに丸みを帯びていることから元は石鍋として活用されていた製品であったことが判明した。27は磨製石斧で、生活に使用された時期は縄文期であろうと想定されるも、1号溝の他の遺物群と混在しての出土であった。28と29は石鍋の口縁片と底部片で、元は同一固体である可能性を考えたが、器面の成形時のはつりの幅がそれぞれ違うことから同一固体ではないと調査員間では判断した。そして溝から出土の礫群は平均的に人頭大の大きさで、その総数のうちの約1/3近くの表面が焼けて赤色に変化しており、カマド側壁などの生活で使用した礫が多く含まれていた(第80・81・82図)。

溝の廃絶時期はまず前述したように、埋没過程に時間が掛かっていることが土層からも読み取れ、埋まり始めた時期と最終的に上層まで埋まった時期にどの位の時期差があるのか判らず、さらに上層での一括性を帯びて出土した土器群の各遺物の時期にも幅があり、明確には解らなかった。しかし一概には判断できないものの、考古学の基本にもとづいて、明らかに混入と考えられるものを除いて、製作年代が最も新しい遺物の時期を1号溝の廃絶年代とすると、24・25の青磁片から12世紀中頃～終盤の溝遺構となる可能性が高い。

廃絶時期

2号溝(第83図)

3・5号竪穴の2m50cmほど北に位置し、平面は調査区を横断するように東西方向に走って

位置関係

規模は、幅が75cmで、断面は底面が平坦な逆台形状を呈し、深さは検出面から7cmを測るが、

規模

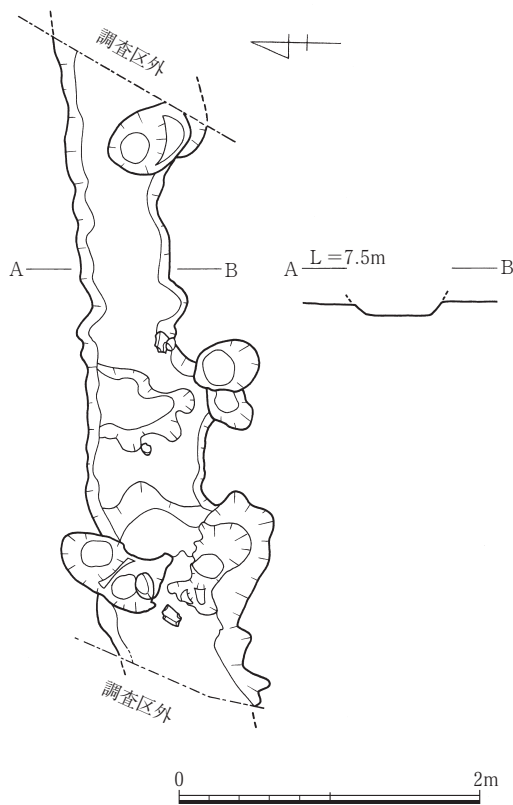
検出された溝の底面の東西両端の絶対高が西端のほうが東端に比べ6cm低かった。

土層はパサつく黒褐色土の1層で、

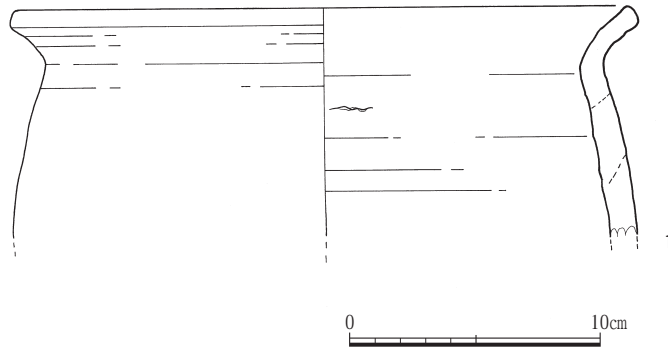
土層

明確な水流の痕跡は認められなかった。遺物は土師器の甕片が出土した。この溝の埋没時期は、出土した土器の特徴からは9世紀前葉の可能性を示唆しているが、土器片1点だけの出土ということ考えると、必ずしも断定はできない(第84図)。

埋没時期



第83図 Ⅲ区 2号溝実測図(S=1/50)

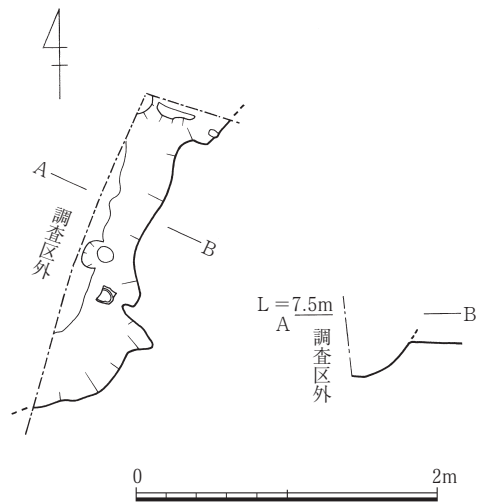


第84図 Ⅲ区 2号溝出土遺物実測図(S=1/3)

3号溝 (第85図)

位置関係

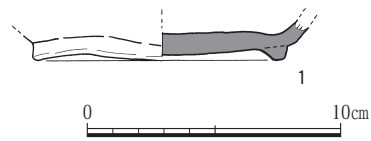
Ⅲ区中央付近のコンクリート製水路の南に位置し、南北に長く検出され、平面はやや入りくんだ形態をしており西辺は調査区外に延び、北側はコンクリート製水路に切られてその全容は不明である。断面は半円形を呈し、深さは最も深い地点で検出面から20cm前後を測った。しかし、西側の区外で底面もさらに深くなっている可能性もあり必ずしも溝遺構とは断定できず、単に大きめの土壌の一部の可能性も有る。また溝遺構で北方向に長く延びた場合、コンクリート製水路の北側の6号溝は2号溝の延長の可能性も考えられたが、平面形態、断面、深さが違うことから今報告では別遺構と考えて報告する。



第85図 Ⅲ区 3号溝実測図(S=1/50)

土層

土層はパサつく黒褐色土の1層で、明確な水流の痕跡は認められなかった。遺物はゆがみのある須恵器の高台付坏片が底面直上で1点だけ出土した(第86図)。埋没時期は出土した遺物からは判断できなかった。



第86図 Ⅲ区 3号溝出土遺物実測図(S=1/3)

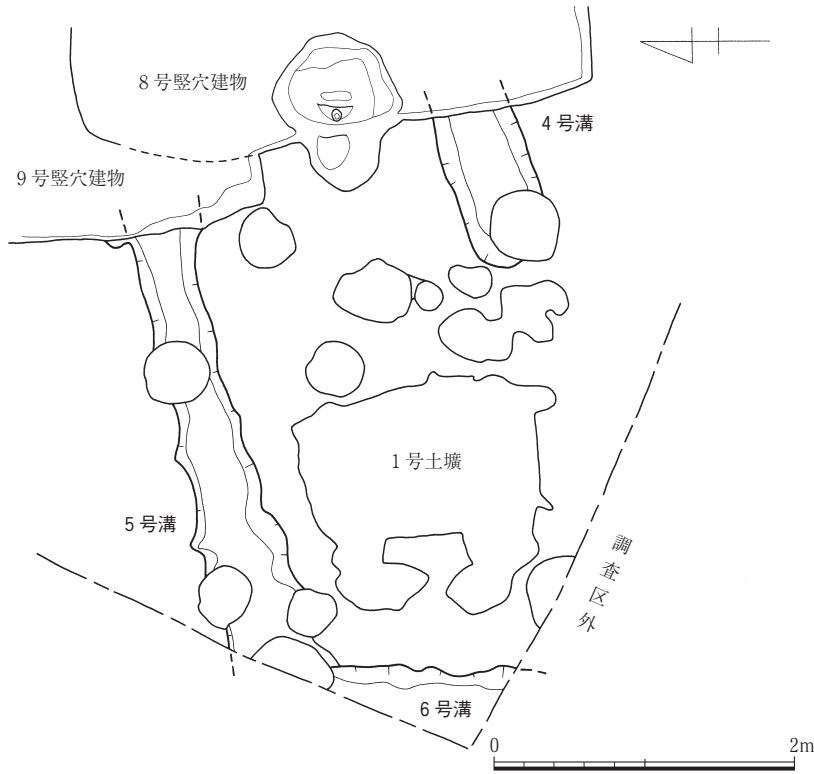
4号溝 (第87図)

位置

8号竪穴の西側に位置し、平面は東西方向に走り1m20cm分直線に延びて消失している。8号竪穴との切り合いはどちらが切っているか不明であった。

規模

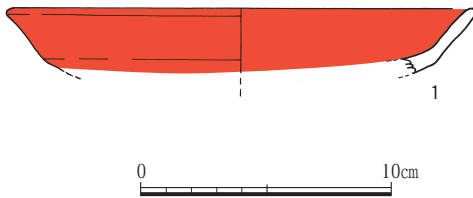
規模は、幅が57cmで、断面は浅い皿状を呈し、深さは検出面から4cmであった。方位角は東西を軸にしての15度である。埋土はパサつく黒褐色土の1層であった。



第87図 Ⅲ区 4～6号溝実測図(S=1/50)

この溝の埋没時期は不明であるが、1点出土した1の赤彩土師器坏に近い時期であろう(第88図)。さらに、北に1 m80cmの位置で平行するように5号溝が検出されていることから、同溝とは関連性のあることが想定される。

出土土器
5号溝との関係



第88図 Ⅲ区 4号溝出土遺物実測図(S=1/3)

5号溝(第87図) 位置と切り合い関係

9号竖穴の西側に位置する。平面は東西方向に延び、検出されたのは3 m分のみで、9号竖穴とはどちらが切っているかの切り合い関係は不明。方位角は東西を軸にしての15度で、4号溝と全くの同角度であった。

規模は、幅が平均で36cmを測り、
規模
断面は浅い皿状を呈し、深さは4 cmを測った。埋土はパサつく黒褐色土の1層で、遺物は破片
埋土
も含め1点も出土しておらず、溝の埋没時期も不明であった。

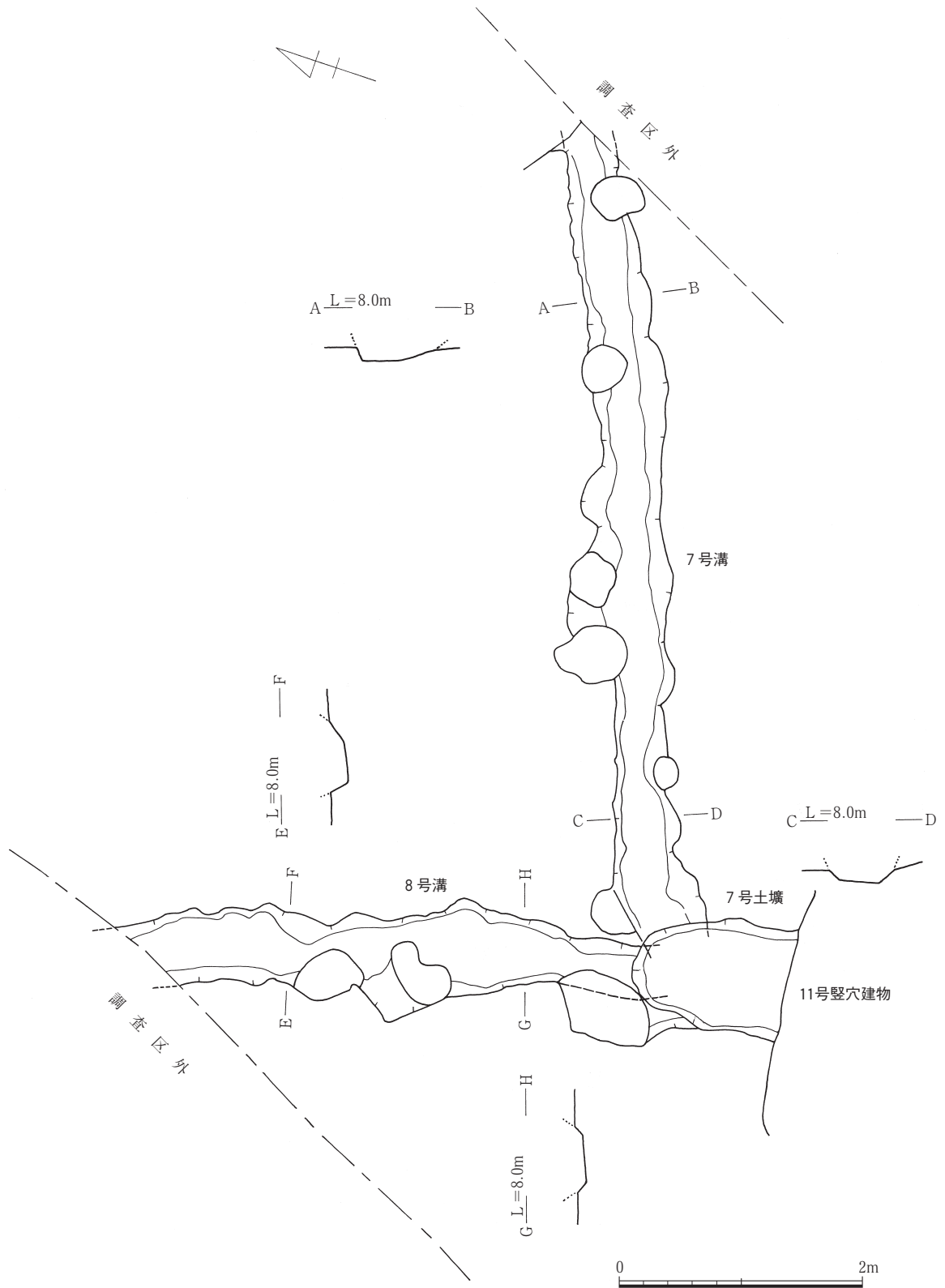
この5号溝と4号溝は前述したように1 m80cm離れた間隔で同じ方位角度を向き、その形態も非常によく似ており、本来4・5号溝はセットの遺構として捉え、考えるべきなのかも知れないが、今調査ではその関係は明確には解らなかった。

4号溝との関係

6号溝(第87図)

Ⅲ区中央付近のコンクリート製水路の北に位置する。平面は南北方向に走り、検出されたのは1 m40cm分で、方位角度は南北を軸にして0度であった。断面は浅い皿状を呈し、深さは8 cmを測った。幅は西辺が調査区外のため不明。この遺構は調査区角でわずかに検出されたのみで、その西辺も確認されていないが、長く延びる平面形態と深さも浅いことから、溝遺構と判断した。遺物は破片も含め1点も出土しておらず、溝の埋没時期は不明。

位置関係と構造



第89図 III区 7号・8号溝実測図(S=1/50)

7号溝 (第89図)

12号竪穴と8号土壇の中間に位置する。平面は北東から南西方向に直線状に走り、検出されたのは6m80cm分で、東は調査区外に延び、西は8号溝と合流する付近で消失している。方位角度は東西を軸にしての25度であった。幅は上端がやや凸凹していたが平均で42cm、断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さは8～11cmを測った。底面の東端と西端での絶対高の差は西端の方が6cmほど低く、このことから溝が使用されていた当時、水流があったとしたら東から西方向であったと想定される。

埋土はしまりのない黒褐色土の1層で、黄褐色土粒子をわずかに含んでいた。遺物は土師器と須恵器が1点ずつ出土した。1は全面に赤色顔料が塗布された土師器坏で内外面に回転ナデ調整がされている。2は須恵器坏で底面の外側に板状圧痕があり、高台が付いているのではない。また、胎土が精緻で砂粒を殆んど含んでいなかった (第90図)。

溝の埋没時期は出土した2点の土器からは明確には判明しなかった。



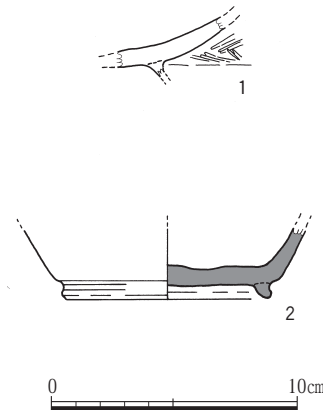
第90図 Ⅲ区 7号溝出土遺物実測図(S=1/3)

8号溝 (第89図)

11号竪穴の北側に位置し、平面は南北方向にほぼ直線状に走り、検出されたのは4m20cm分で、北は調査区外に延び、南は7号土壇に切られていた。方位角度は南北を軸にしての18度であった。

溝の幅は埋没時に上端が一緒に崩れたのか上端が部分的に削られて、平面でやや不整な形態をしていたが平均で60cmであった。断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さは7～14cmを測った。底面の北端と南端での絶対高の差は北端の方が6cmほど低かった。

遺物は土師器と須恵器が1点ずつ出土している。1は土師器の高台付坏、2は須恵器の高台付坏で、焼成が甘かったのか中世前期の瓦器椀のような焼き上がりであった (第91図)。溝の埋没時期は出土した2点の遺物からは判明しなかった。

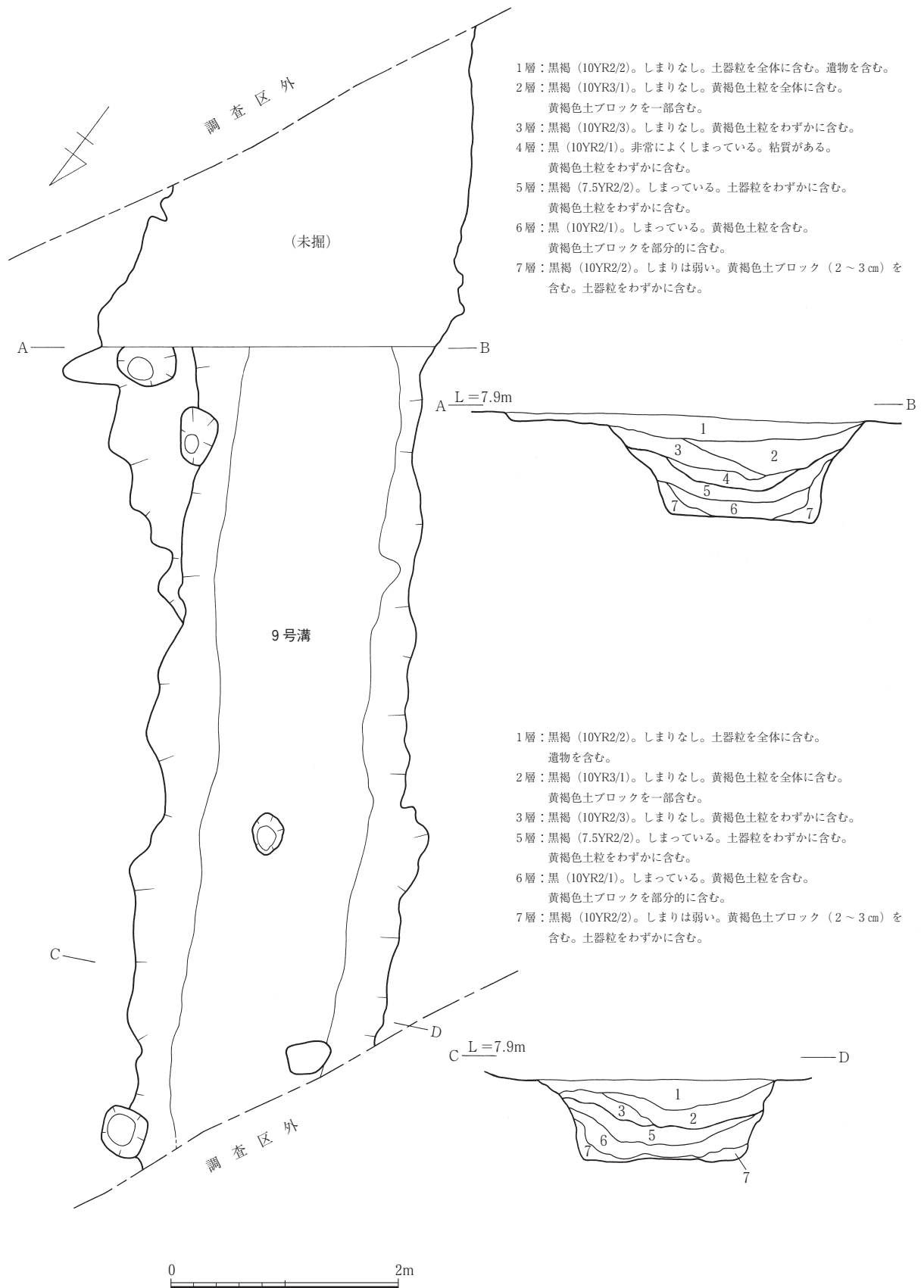


第91図 Ⅲ区 8号溝出土遺物実測図 (S=1/3)

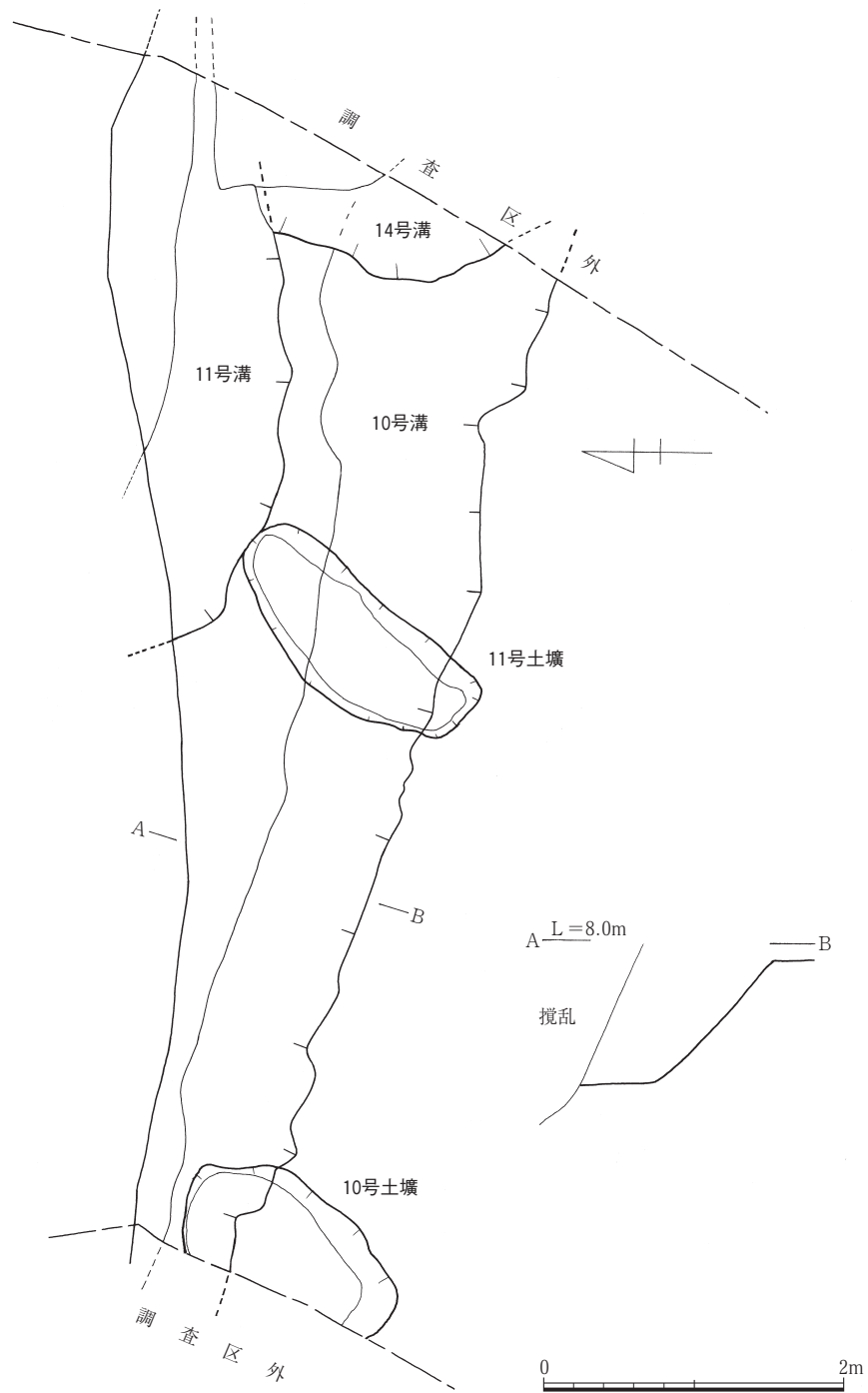
9号溝 (第92図)

Ⅲ区やや北寄り位置する大型の溝遺構。

大型の溝を横断する形で北西から南東方向に直線状に延び、検出されたのは8m60cm分で、方位角度は南北を軸にしての35度を示していた。溝の幅は埋没時に一緒に崩れたのか上端が一部削られていたが、その部分を除くと平均で2m10cmであった。断面は逆台形状を呈し、検



第92図 Ⅲ区 9号溝実測図(S=1/50)



第93図 Ⅲ区 10～13号溝実測図(S=1/50)

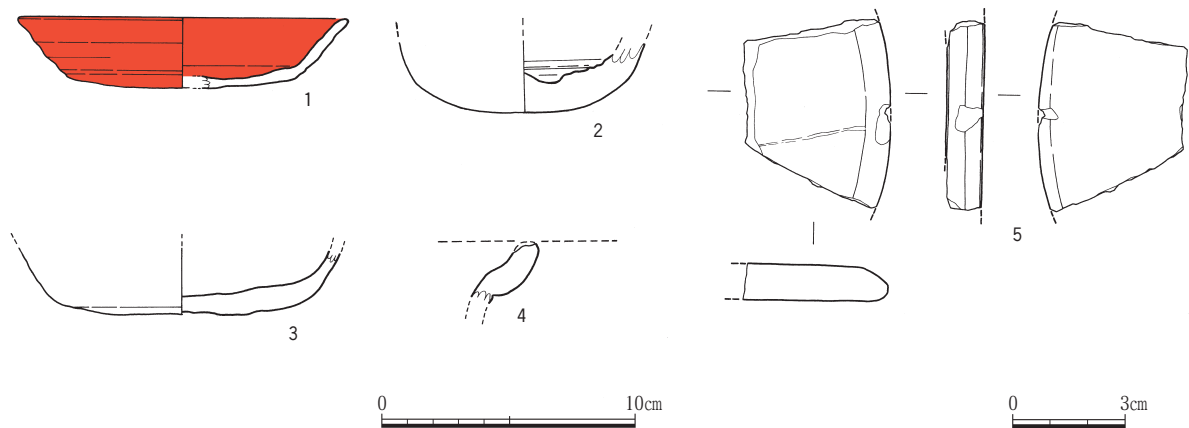
出面からの深さは80cmを測った。底面は平坦で、その両端での絶対高の差はなかった。

土層は7つの層が確認され、その7層の中で上層と下層に大きく分類できた。上層は1～3 埋土層で下層は4～7層を指し、上層は黒褐色で締まりのないパサつく土質に対し、下層は黒色にしまりのある粘質土で、明らかに上層と下層では埋まり方の違うことが読み取れる。しかし遺物は最上層である1層から土師器の破片が数点出土しているのみで、さらに図化できる土器はなく、そのため大型の溝遺構であったにも拘らず埋没時期も遺構の存続期間も不明であった。

10号溝 (第93図)

位置と形態 Ⅲ区北端付近のコンクリート製水路に全体の半分近くを削られ、西端で14号溝と切り合い、完掘した底面からは11号溝と10・11号土壌が現れた。10号溝の平面は緩やかな曲線を帯びながら調査区を横断する形で東西方向に走り、方位角度は東西を軸にしての8度を指し、幅は最も残存していた部分で1 m70cmを測り、断面は半分近くを削られていたが、断面図からも観て取れるように本来ゆるやかな逆台形状をして、深さは80cm前後であった。

出土遺物 遺物は土師器と陶器と石製品が出土し、1と3は土師器の坏で、2は土師器の壺の底部片、4は陶器の口縁片で、口縁唇部は削れ、口径も復元できないほどの小破片であったが、1～3の土器片とは時期を画していることから、ここに報告しておく。5は砥石であった (第94図)。溝の埋没時期は出土遺物からは明確には判断できなかった。



第94図 Ⅲ区 10号溝出土遺物実測図(S=1/3) (5のみS=1/2)

11号溝 (第93図)

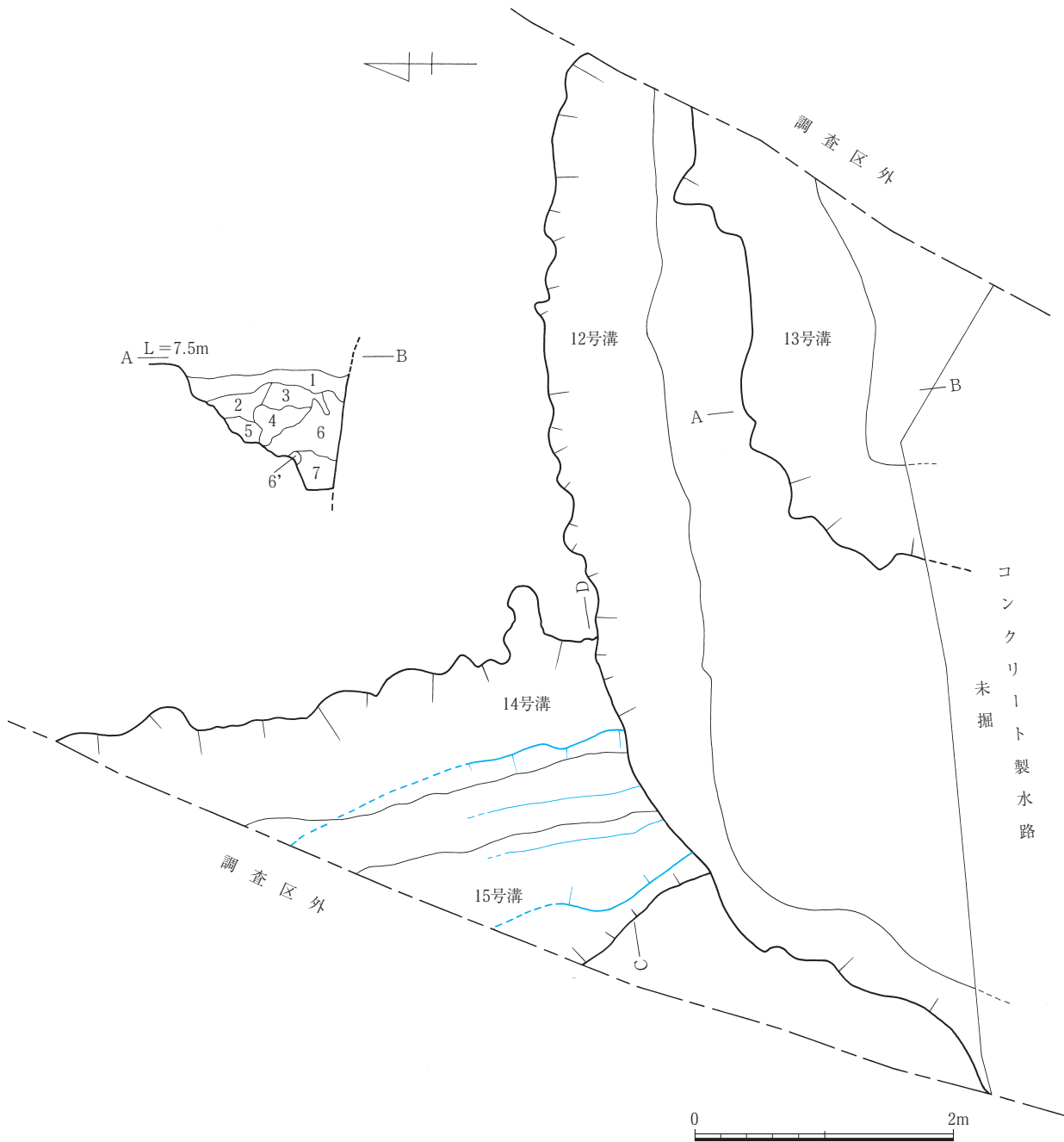
位置と状況 Ⅲ区北端付近のコンクリート製水路の南側に位置し、10号溝の底面から検出された。その大半が現代の攪乱と10号溝によって削除されており、検出されたのは全体のうちで極一部と考えられるが、10号溝に沿うように延びる残存部の形態から溝遺構と判断した。また方位角度は検出された範囲が狭すぎるため不明、幅は最も残存していた部分で1 m40cmを測り、10号溝の底面からの深さは約60cmであった。遺物は破片も含め1点も出土していない。

出土遺物

12号溝 (第95図)

位置と形態 Ⅲ区北端付近のコンクリート製水路の北側に位置する。大型の溝で南側はコンクリート製水路により削除されていたが、平面では調査区を横断しながら大きくうねるように東西に延び、最も残存していた部分での幅は約2 m20cmを測り、検出面からの深さは40cmで、断面形態は逆台形状を呈し、完掘すると底面から13号溝が現れた。また方位角度は平面でうねっているため不明。

溝から出土した遺物は少なく小破片が数点のみで、実測できたのは1の土師器高台付坏だけ (第96図) で、この1点のみでは溝の埋没時期も特定できなかった。

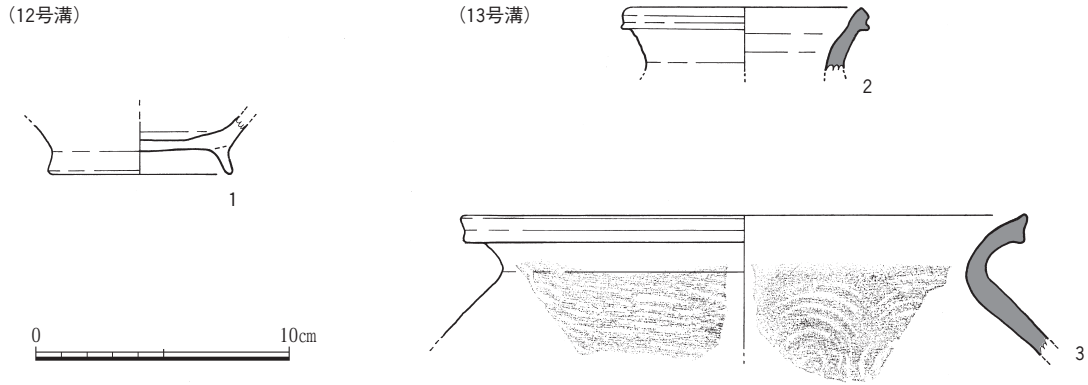


第95図 Ⅲ区 12～15号溝実測図(S=1/50)

13号溝 (第95図)

12号溝を完掘した底面から検出された。現れたのは全体のうちの極一部と想定され、その大部分は調査区外に延びていた。平面は東西方向に延びながら不整な形態をしており、**検出状況** 厳密に言えば溝遺構なのか土壙状の遺構なのかよく判らない点もあったが、コンクリート製水路の反対側の11号溝とは土層が違うため同一の遺構ではなく、11号溝と同様に上部の溝に沿うように検出されていることから、溝遺構と判断した。

規模は、幅が最も残存していた部分で1 m80cmを測り、断面形態は低面が段落ちしていたが、**規模と形態** 全体的にやや凸凹しながら半円形状を呈し、深さは12号溝の底面から約1 m10cmであった。



第96図 Ⅲ区 12号・13号溝出土遺物実測図(S=1/3)

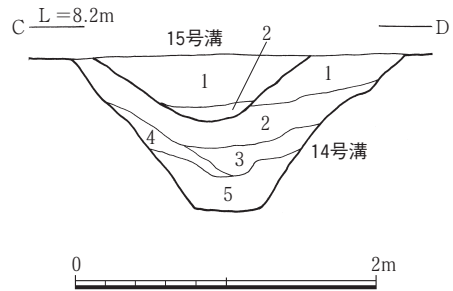
出土遺物 遺物は2点出土し、2・3はいずれも須恵器で、3は甕、2は横瓶の口縁部かと思われるものである(第96図)。この2点からは溝の詳細な埋没時期はわからなかった。

14号溝(第95図)

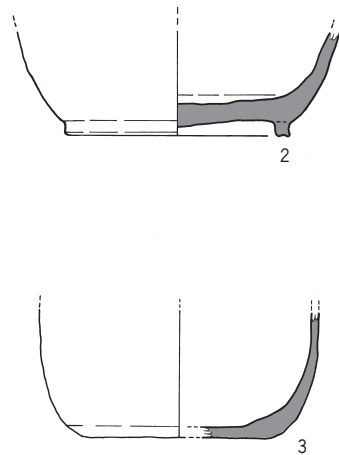
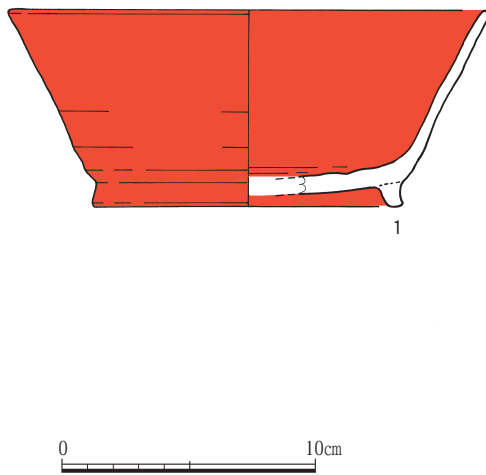
位置と切り合い関係 12号溝の北側を南北に走って検出された。12号溝と切り合っていたが、どちらが先に掘りこまれた溝であるか判らなかった。また、内面では15号溝がほぼ同じ方向で切って掘りこまれていた。

規模と形態 規模は、幅が2mで、断面形態は鋭い逆台形状を呈し、深さは検出面から1m 5cmを測り、方位角度は南北を軸にしての9度であった。

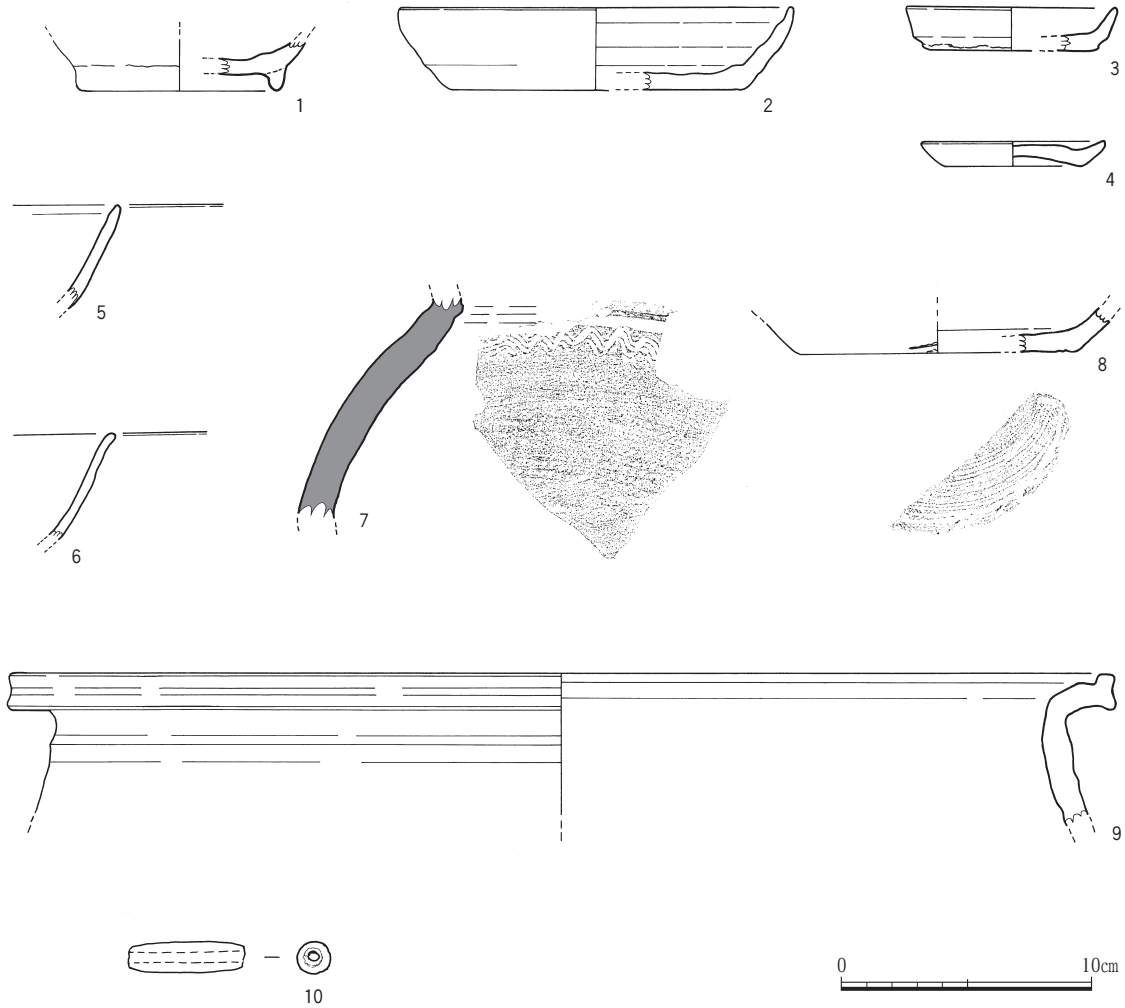
出土遺物 遺物は須恵器と土師器が出土(第98図)し、そのうちの1と2の土器の高台の位置と形態から溝の埋没時期は9世紀前葉と想定される。



第97図 Ⅲ区 14号・15号溝土層断面実測図(S=1/50)



第98図 Ⅲ区 14号溝出土遺物実測図(S=1/3)



第99図 Ⅲ区 15号溝出土遺物実測図(S=1/3)

15号溝 (第97図)

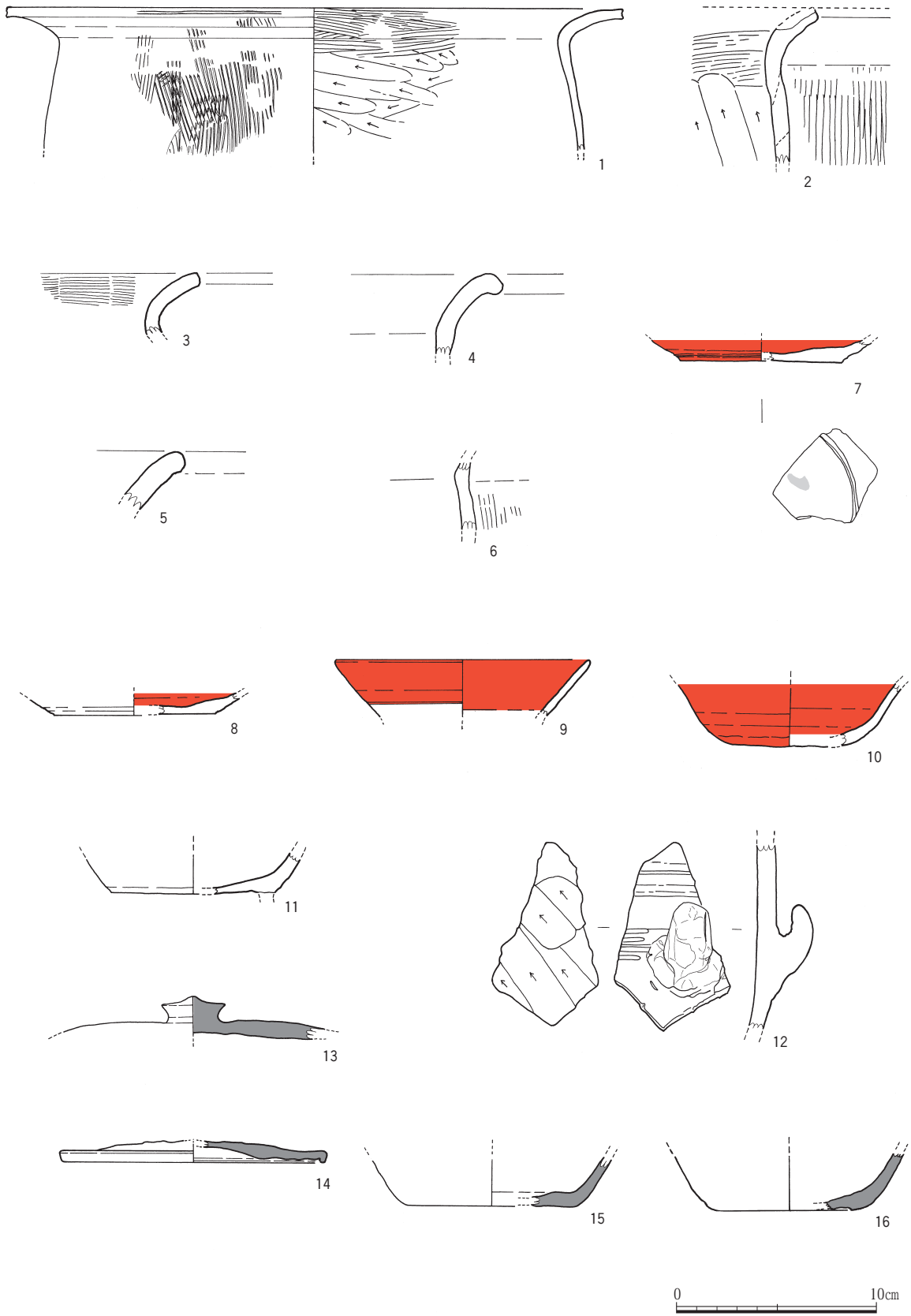
14号溝を切って完全に内面に位置し、平面での検出当初15号溝は認知しておらず、14号溝の位置と検出状況
土層確認の際に15号溝が在ることが判明した。そのため部分的に15号溝の底面まで掘り下げて
おり記録していない範囲がある。

規模は、幅が1m45cm、深さは44cmを測り、断面形態はやや深い皿状を呈し、方位角度は検出された範囲が狭いため不明。遺物は中世期の土師質皿、須恵器甕、瓦器椀、陶器の甕、土垂
規模と形態
出土遺物
が出土した (第99図)。これらの遺物から溝の廃絶時期は13世紀代であることが想定される。

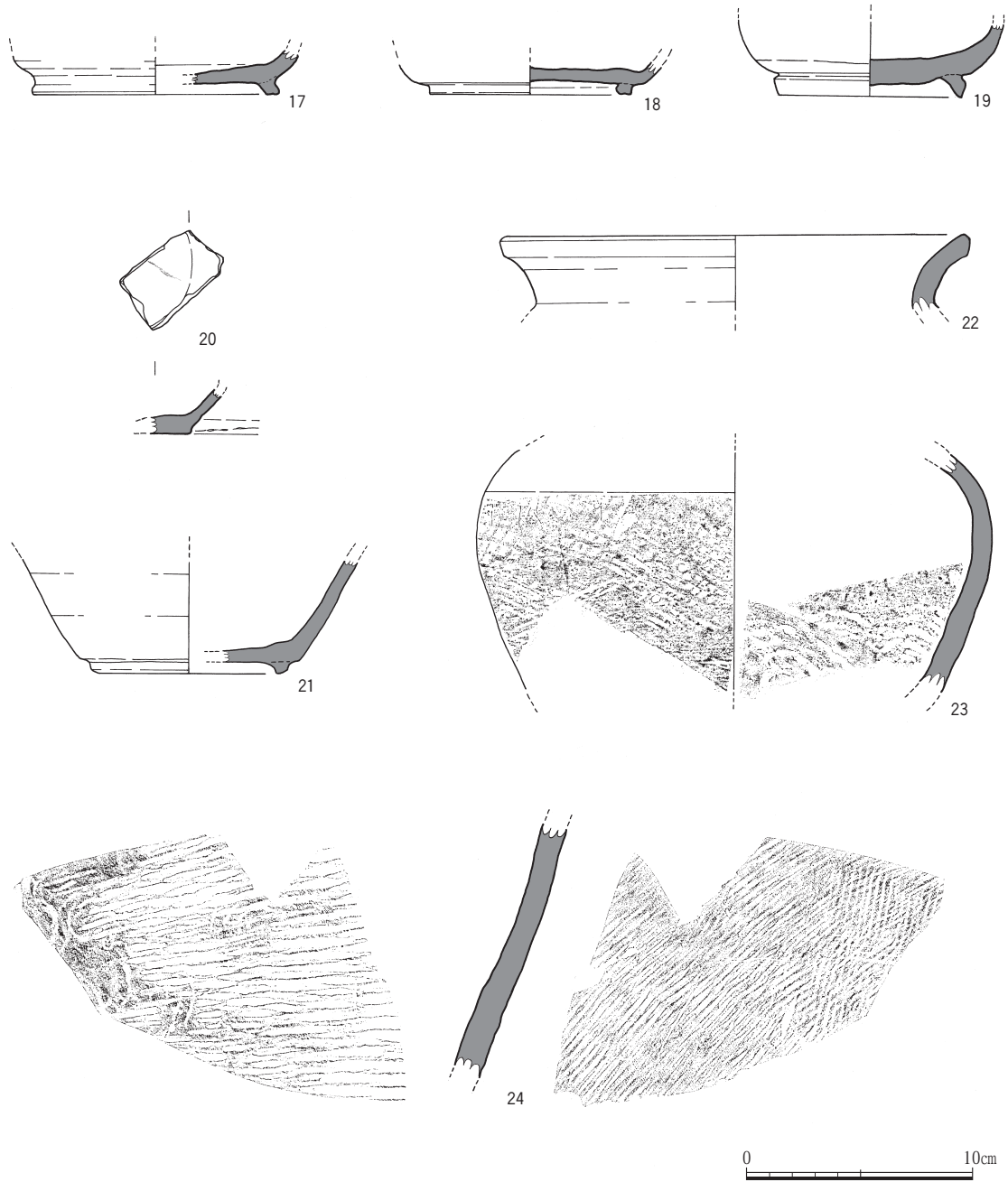
柱穴の遺物 (第100・101図)

今回の調査では、明らかに柱跡と考えられるが、調査区の制約のため、並びがうまく掴めず、ピットの遺物
掘立柱建物等と確認ができないピット群が多々あった。そのピット中からもいくつかの遺物が
出土しており、それらについてここで触れておく。

ピットから遺物が出土したのは、21個あった。1～12までは土師器で、13以降は須恵器である。土師器のうち1～6は甕の破片で口縁部が頸部から急激に外反するものである。7～10は、赤色顔料の塗布された坏である。7・8は底部がナデ調整が施される。11は高台付坏である。

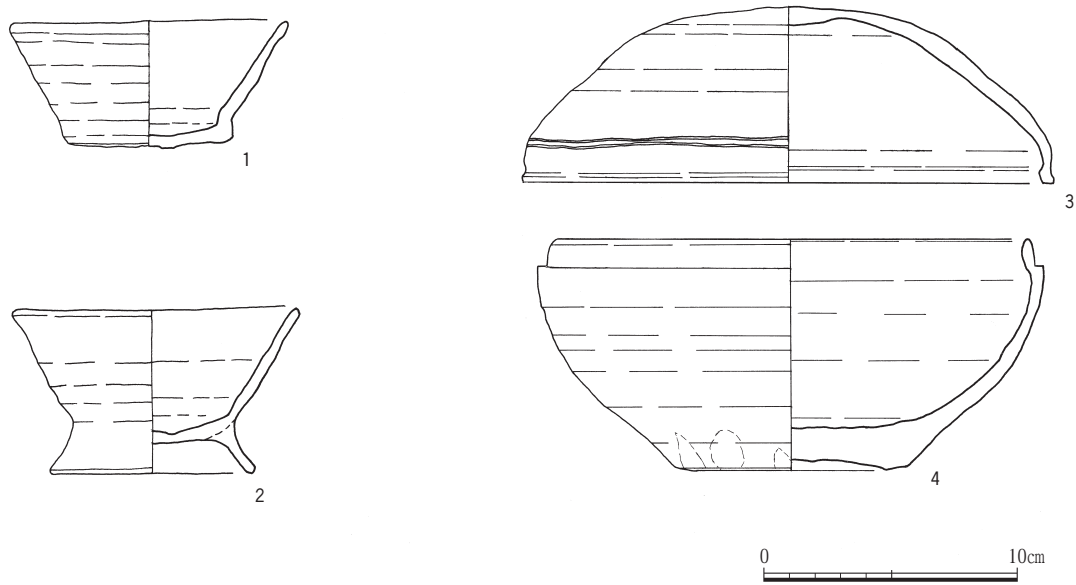


第100図 Ⅲ区 ピット出土遺物実測図(S=1/3)



第101図 Ⅲ区 ピット出土遺物実測図(S=1/3)

12は甌の把手である。須恵器は13・14の坏蓋、15・16・20の坏、17～19・21の高台付坏22の小型甕、23の壺、24の大甕などがある。このうち13のツマミは退化した宝珠形である。18・19は宇土郡内の窯の可能性はある。



第102図 Ⅲ区 火葬墓出土遺物実測図(S=1/3)

「火葬墓」について

検出状況

この遺構はⅢ区の中央部、Ⅲ-A区の北側付近に構築されていたコンクリート製の埋設物によって遺跡が分断されていた。その構造物の傍らを土層確認をかねて掘り下げていたところ、ほとんど構築物間際付近で、客土層を過ぎ、包含層に入ったあたりで、第 1 図の土師器の碗類と越州窯系の合子が出土した。調査時には構築物の傍らであり、しかも遺構確認面より50cmほど上位で出土したので、構築物工事に際し攪乱を受けた土中に混じったものと判断していた。

火葬骨

ところが、調査終了間際に詳細に観察したところ、炭化物が混じり、火葬骨と思われる骨片が伴っていた。遺物も破壊されてはいるが本来の器形を留め、土師器はほぼ完形に復元できるものであることが分かった。そこで急遽遺構の有無を確認し、遺物を取り上げることにした。残念ながら黒褐色の土に何らかの遺構が掘り込まれているように見えたが、時間的な猶予がなかったため、確認するには至らなかった。遺物採集と炭化物・骨片は取り上げた。

出土遺物

第102図に図化した遺物は1・2が土師器の碗で、1が底部が横に張り出す特徴を持つ。2は高く延びた高台を持つ碗で底部がやや丸みを帯びている。これらの特徴は9世紀後半～10世紀初頭のものであることを示す。また、3・4の合子はあまり出土例のないものである。内外器面とも全体的に施釉され、色調は全体的に茶黄色を呈し、胎土は淡黄灰色を呈し、密で精良である。蓋の合わせ面と、体部の返し外部の釉を剥いでいる。外底部の接地面も剥いでいる。

越州窯系青磁

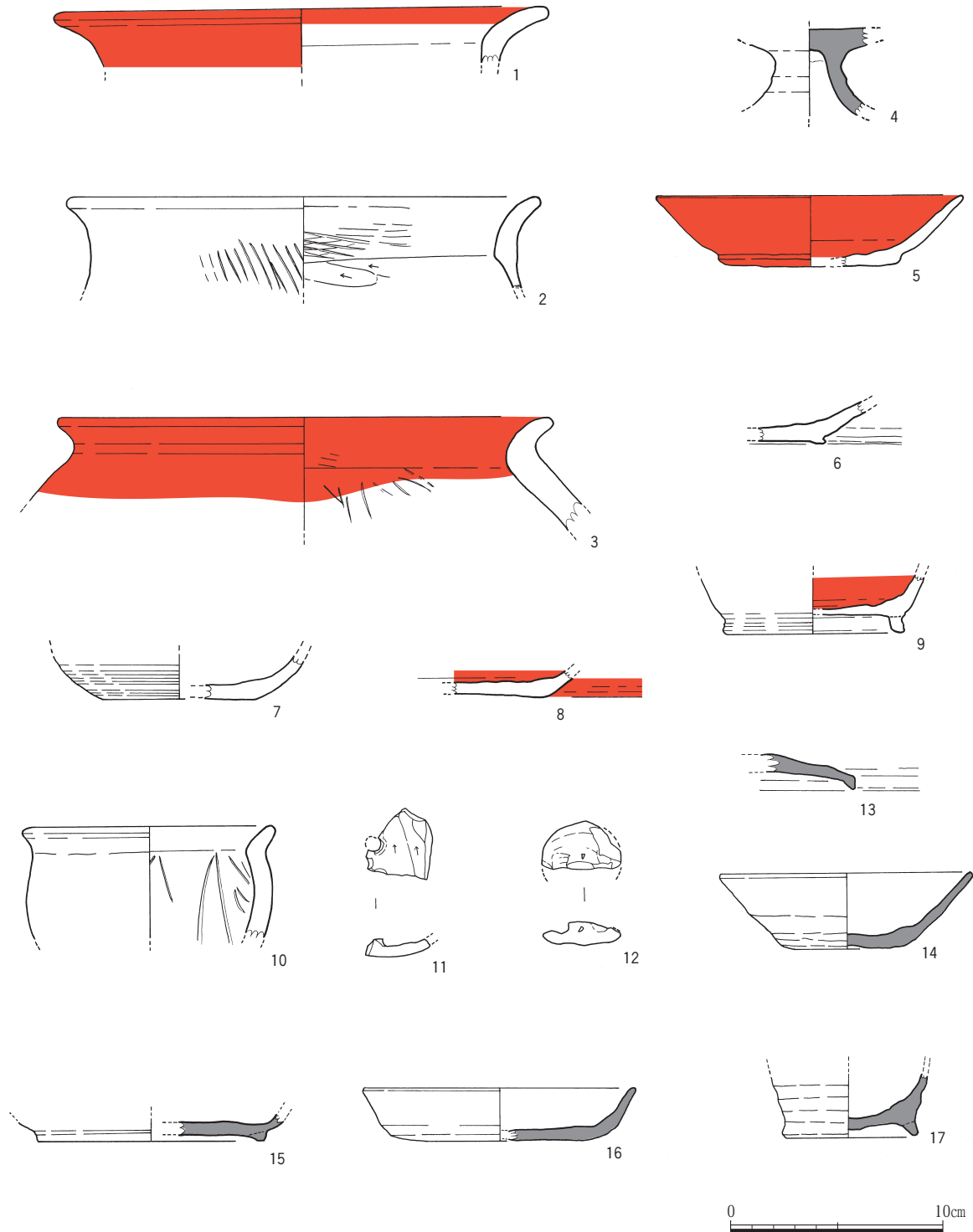
また、外底部には焼成時の胎土目の痕跡が接地面から体部下位まで薄く残る。これらの特徴から大宰府編年の越州窯系青磁のⅠ類の範疇に含まれそうである。年代的には8世紀末～10世紀中頃に比定されているが、土師器との関係から10世紀ごろまでのものとした。

この遺構の出土状況が明確でないので、想定に過ぎないが、この遺構の出土した層位付近に墓壙などの掘り込みの底面とすると10世紀代の生活面はその上ということになる。

Ⅲ区内出土遺物 (第103図)

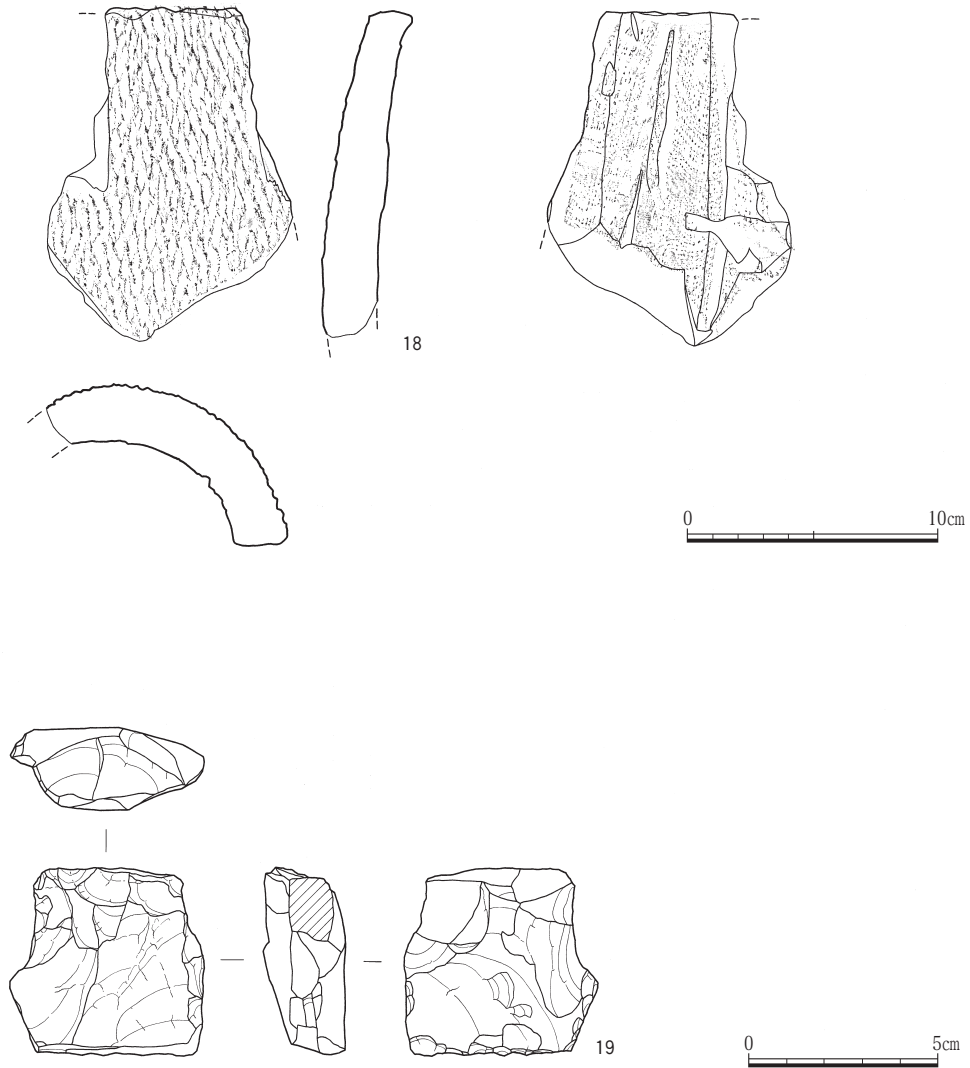
調査区内遺物

Ⅲ区内からは包含層中から多くの遺物が出土している。ここでは、それらの中から注目すべ



第103図 Ⅲ区内出土遺物実測図(S=1/3)

きものを載せた。1～11までは土師器、12は土製模造鏡、13～17までが須恵器である。1～3は甕の口縁部で、1・3は外器面、口縁内器面まで赤色顔料が丁寧に塗布されている。かなり厚く塗られ煮炊き以外の用途に利用されたものか。5・8・9の坏類も赤色顔料が塗布されるが、先のものに比べ発色が異なり、器形以外に用途の違いもあったと考える。10は小型の甕で模造品の可能性あり。11も穿孔され、甑の底部様を呈する。12は破損し半分になっているが、



第104図 Ⅲ区内出土遺物実測図(S=1/3)(19のみS=1/2)

模造鏡として、紐はしっかり残っている。須恵器類は13が強く口唇部が屈曲する蓋である。14・15・16は坏である。形態的に時期差がある。

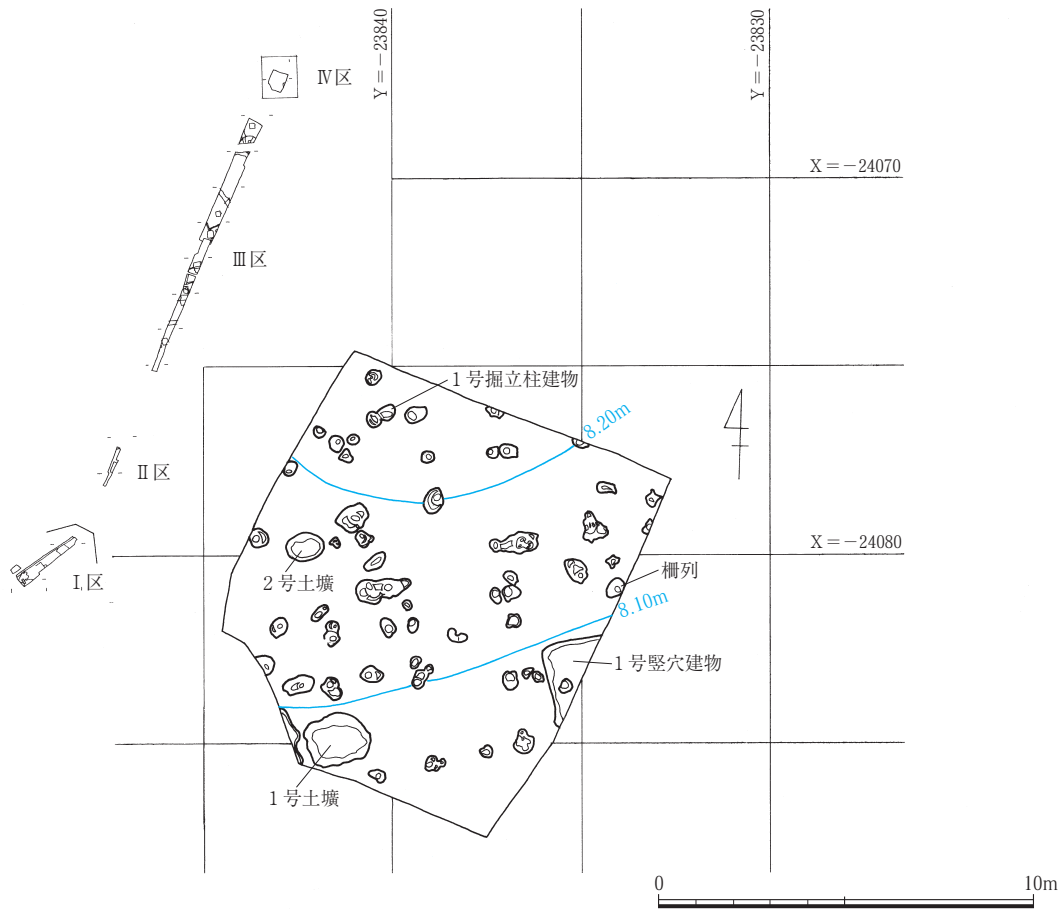
第104図には18の瓦片と19の石器を載せた。18は丸瓦片の上位部分である。凹面に桶巻きの跡が残り、凸面には縄目の敲き痕が残る。19は黒曜石の石核で縄文時代後晩期の剥片石器を作るために使用されたのであろう。

第5節 江津湖東-Ⅳ区

Ⅳ区の概要（第105図）

江津湖東Ⅳ区は、Ⅲ区から北東側に横断歩道をはさんで20m離れて位置する面積約350m²の位置
小規模な調査区である。区内の地形はほぼ平坦であるが、わずかに北から南にかけてゆるやかに傾斜して約10cmの高低差があった。

検出された遺構は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物1棟、土壇2基、柵列1条、ピット状遺構 検出遺構
が多数であった。このピット状遺構に関しては、その並びの一定の方向性はあったが確実に掘
立柱建物として構成されたのは1号掘立の1棟のみで、もう少し調査区が広いとさらに何棟か
建っていた可能性は高かったといえよう。

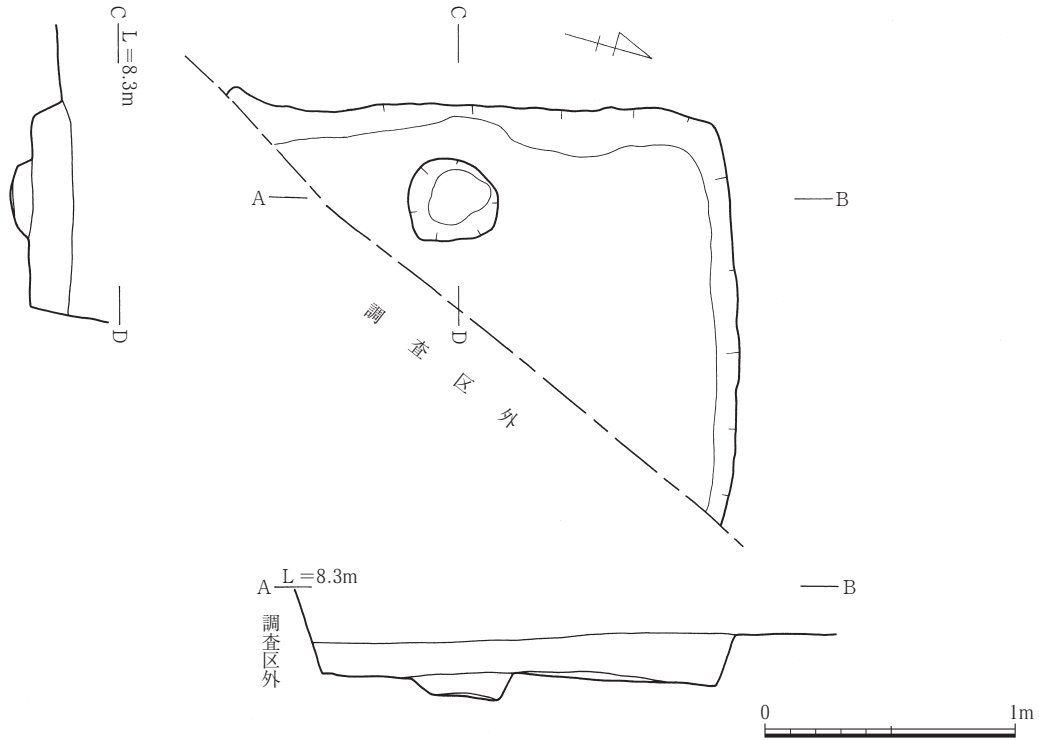


第105図 Ⅳ区 遺構配置図(S=1/200)

竪穴建物

1号竪穴建物（第106図）

Ⅳ区の東端に位置し、検出されたのは竪穴の角付近で、全体のうちの多くは調査区から外れ 遺構の位置
ていた。平面形態は方形もしくは長方形と推定され、残存していた規模は北辺が1 m65cm、西 規模と形態
辺は2 mで、検出面から床面までの深さは15cmを測り、床面積及び方位角度は不明であった。
床面は貼り床ではなくそのまま踏みしめられ、硬化面の範囲は検出された床面全体に広がって 床面
いた。カマドは検出されず、ピットは床面で1つ検出されたが、その深さが8 cm程度で、さら カマド



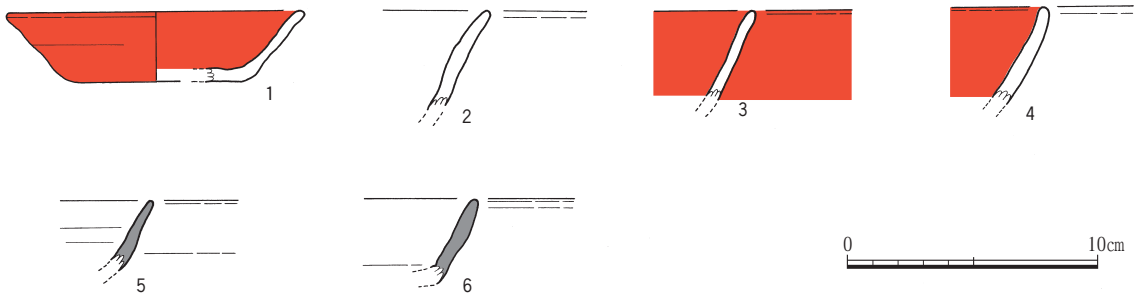
第106図 IV区 1号竪穴建物実測図(S=1/30)

に位置から見ても竪穴に伴う柱穴とは考えにくい。

埋土

埋土は、ややパサつきしまりのない黒褐色の単一層で分層はできなかった。遺物は小さな破片で6点出土し、1～4は土師器の坏、5・6は須恵器の坏であった。そのうち口径復元できたのは1の坏のみであった（第107図）。これらの出土状況はいずれも床面直上ではなく検出面に近い位置であったことから、竪穴の土層は1層のみであるが、遺物は竪穴廃絶後に自然埋没して凹んだ穴の時にごみ穴として利用されて混入した土器片と考えられる。

出土遺物



第107図 IV区 1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

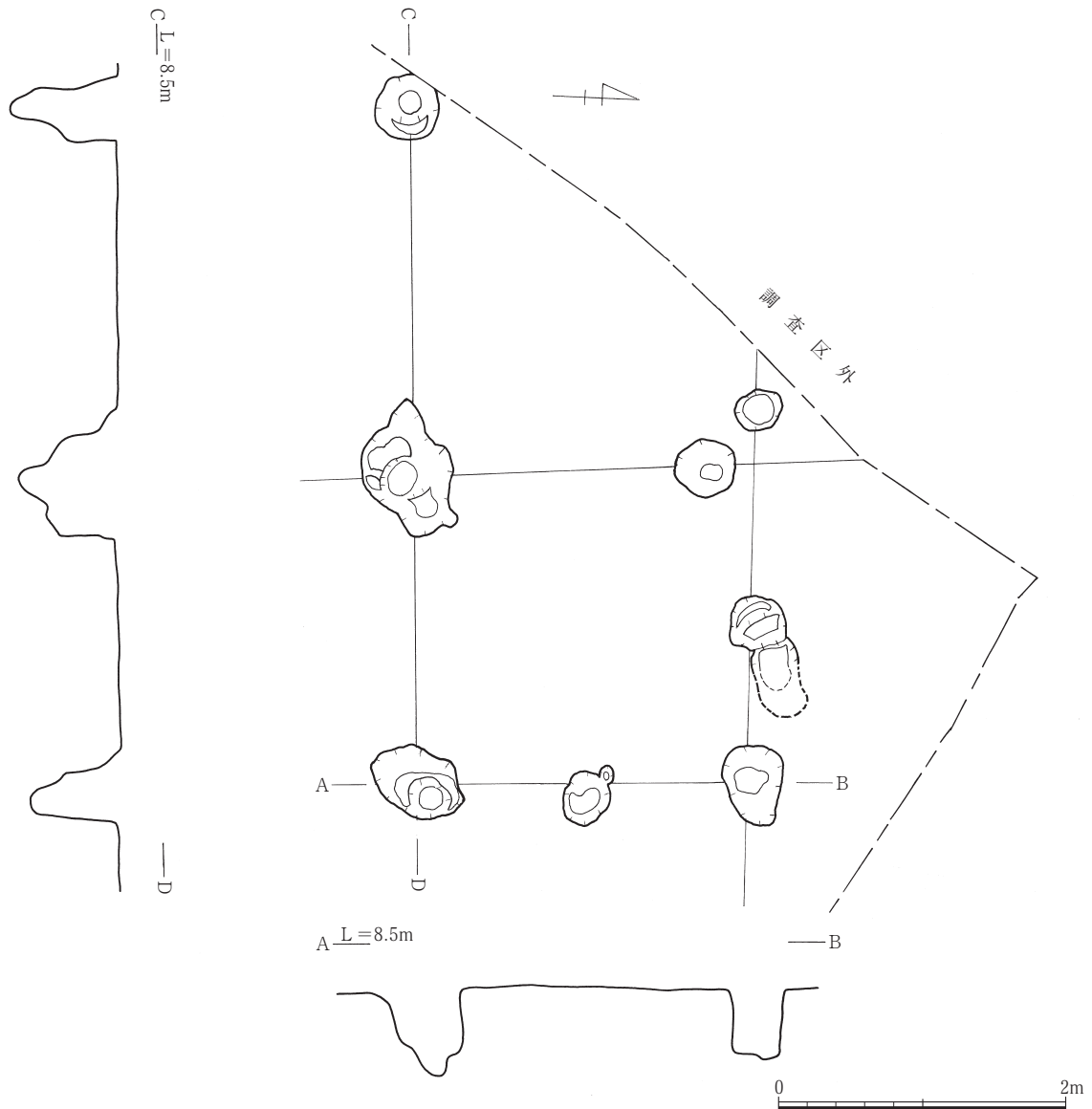
掘立柱建物

1号掘立柱建物(第108図)

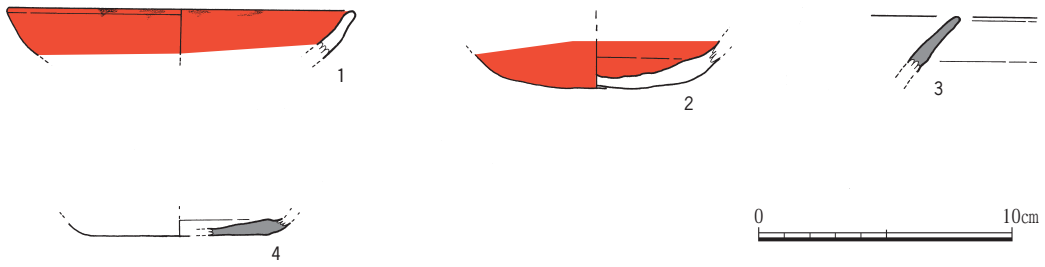
IV区の北西角で全体の1/3程が検出できたと想定される掘立柱建物。中央に束柱を持ち、掘立柱建物建物内面ではこの束柱とした柱穴5以外にもピットは数基検出されたが、位置的に柱穴2と柱穴4のほぼ対角線上に在ることと、さらに柱穴5のみが建物の並びの柱穴と同じ深さを測り、周りのピットは束柱より30cm程浅かったことから、この建物の束柱と判断した。

建物の寸法は、梁間2間以上、桁行3間で、桁行と考えられる南辺が5m分、梁間の東辺は3m分のみ検出され、東西を軸にしての方位角は13度を指し、床面積は調査区境に位置するため不明であるが、残存していた範囲だけでも15m²あり、そこから中型以上の建物であることが想定される。

5本の柱穴の平面形態はいずれも円形で、その径は平均で42cmを測り、深さはどれも70cm前後と揃っていた。柱痕はどの柱穴からも確認できず、埋土はバサつく砂質土に若干の粘性を帯びた濃い茶褐色土の単一層であった。



第108図 IV区 1号掘立柱建物実測図(S=1/50)



第109図 IV区 1号掘立柱建物出土遺物実測図(S=1/3)

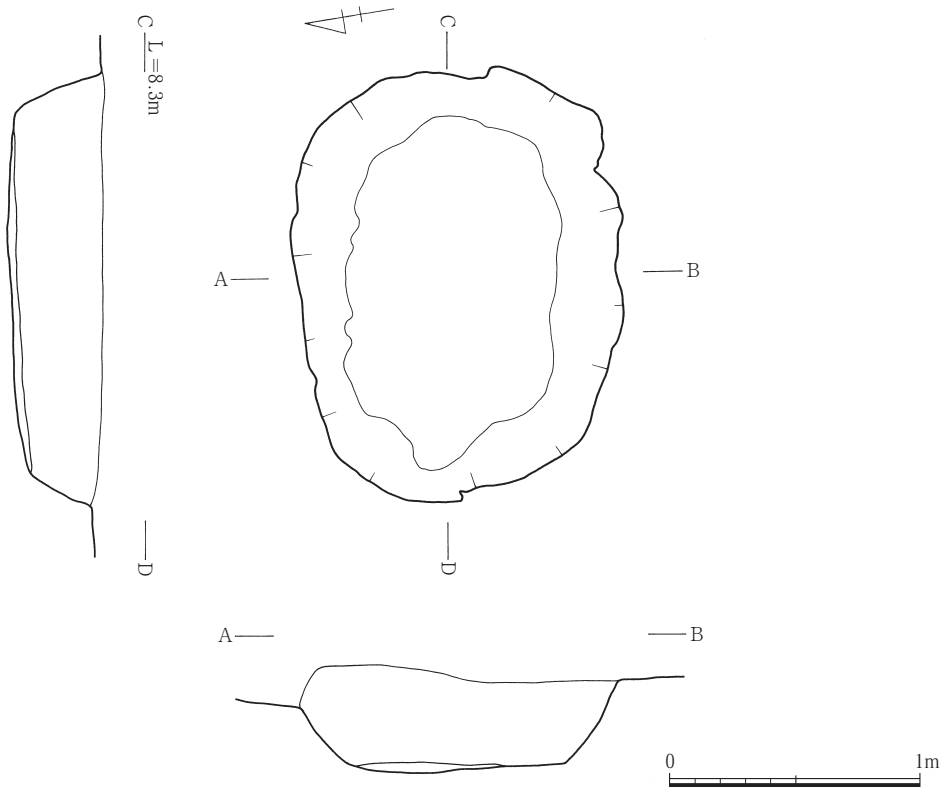
出土遺物 遺物は、各柱穴から総数4点出土したが、いずれも小さな破片で建物の時期を特定することは困難だった(第109図)。

土壌

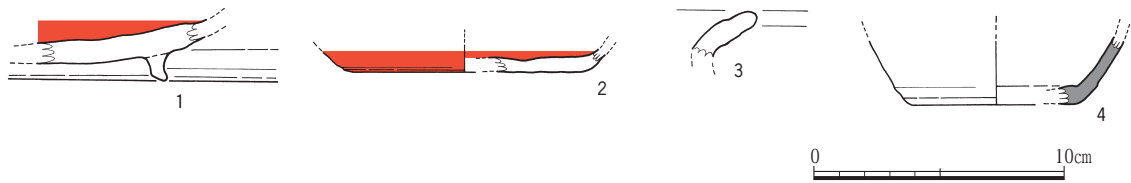
1号土壌(第110図)

位置と形態 IV区の南端に位置する土壌。平面形態は東西方向にやや長い長円形を呈し、断面形態は底面が平坦で壁面がゆるやかに立ち上がる逆台形状をしていた。規模は東西長辺が1m80cm、南北短辺は1m30cm、深さは検出面から32cmを測りやや大きめの土壌である。方位角は東西を軸にしての1度であった。

埋土 埋土はパサつくしまりのない黒褐色の単一層で分層はできなかった。遺物は土壌内を小さな破片で散在して出土し、そのうち5は鉄滓片であったが、他に鍛冶に伴う遺物はなく、周辺にもそのような遺構は確認できなかった(第111図)。

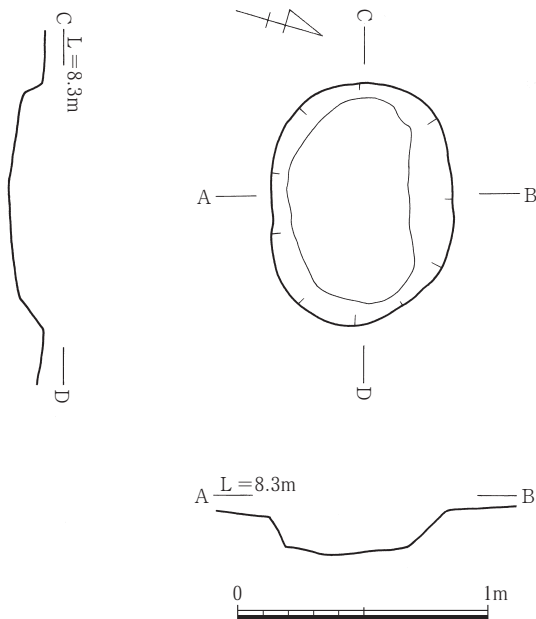


第110図 IV区 1号土壌実測図(S=1/30)



第111図 Ⅳ区 1号土壌出土遺物実測図(S=1/3)

2号土壌 (第112図)



第112図 Ⅳ区 2号土壌実測図(S=1/30)

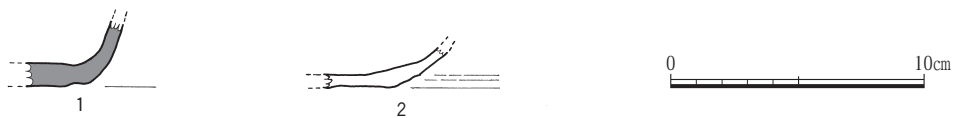
位置と形態

1号掘立柱建物の南脇で検出された。平面形態は東西方向にやや長い長円形を呈し、断面は底面が平坦でなく中央に向かって若干深くなりつつ壁面は鋭く立ち上がる形態をしていた。規模は東西長辺が98cm、南北短辺は72cmで、検出面からの深さは11~15cmを測り、方位角は東西を軸にしての10度であった。

埋土

出土遺物

埋土は分層のできないパサついた黒褐色の単一層で、遺物は層位の中ほどから小さな破片で土師器と須恵器片がそれぞれ1点ずつ出土した。どのような目的で掘り込まれた土壌であるのか明確には解らなかったが、1号掘立柱建物の脇に位置し、時期的にもほぼ同時期の遺構同士であることから、何らかの関連性があることが想定される (第113図)。



第113図 Ⅳ区 2号土壌出土遺物実測図(S=1/3)

その他の遺構と遺物

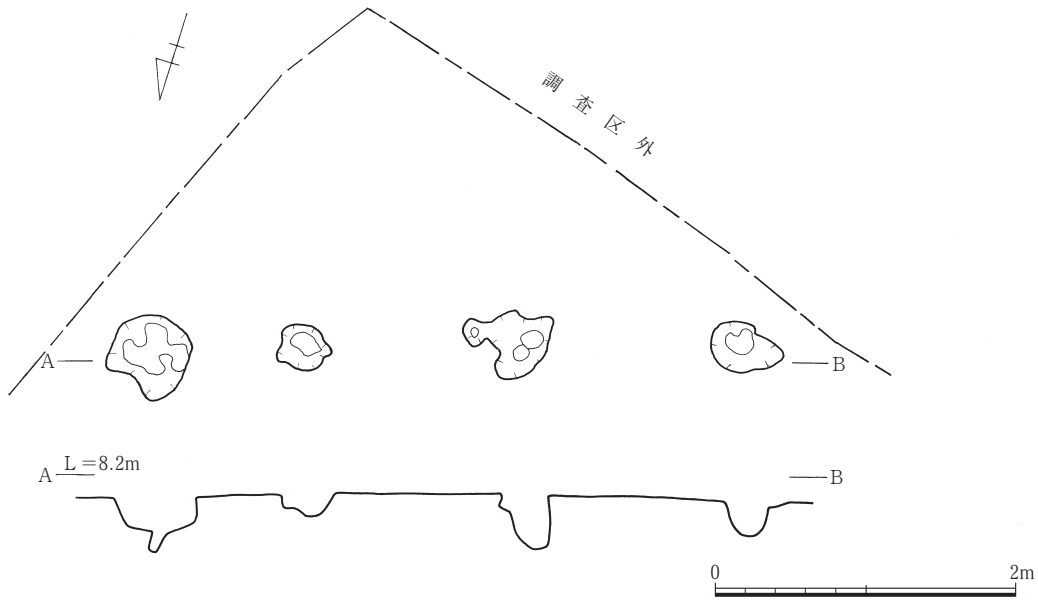
柵列状遺構 (第114図)

Ⅳ区の南東端付近で検出された東西方向に並ぶ3つのピットを指している。ピットの平面形態はやや崩れたものもあるがどれも円形で、その径は平均で32~35cmを測り、深さはいずれも検出面から20cm前後であった。ピット間はほぼ等間隔でそれぞれ1m20cmを測る。

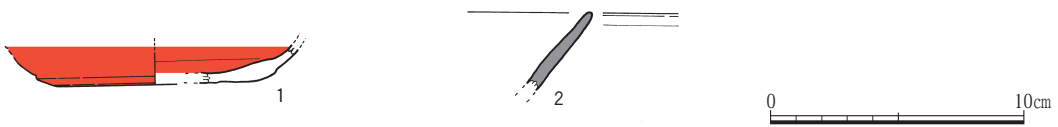
柵列

並んだ方位角は東西を軸にしての12度を示しており、これは1号掘立柱建物の方位角とほぼ同角度であった。3つのピットの並びの東延長上にさらにもう1つのピット状遺構が在るが、これは完掘してみると樹痕であることが確認されており、柵列の1つとしては認められなかつ

方位



第114図 IV区 柵列状遺構実測図(S=1/50)



第115図 IV区 柵列状遺構出土遺物実測図(S=1/3)

埋土と遺物 た。埋土はパサつく黒褐色土の単一層で、遺物はピット1と2から小破片が1点ずつ出土していた(第115図)。

柵列と掘立柱建物との関係 上記してきたように柵列としたものの検出されたのは3つのピット状遺構のみで、その径も小規模で深さも浅く、柵列遺構とするには根拠が薄いとも考えられるが、あえて報告したのは、まず同じ調査区で検出されている1号掘立柱建物とその方位角度がほぼ同じ角度であることからなんらかの関連性が想定されることと、3つのピットの径が柱穴としては小さすぎるが、柵列として考えれば相応の規模であろうことの2点から、柵列状遺構である可能性が高いと考えた。

検出面直上出土遺物 (第116図)

検出面出土土器 IV区の北端で須恵器の坏蓋が1点だけ出土した。形が10cmほどの小型のもので返しはほとんどなくツマミ断面方形の低い突起状のものである。



第116図 IV区 検出面直上出土遺物実測図(S=1/3)

第V章 健軍京塚下遺跡

第1節 調査経過と概要

健軍京塚下遺跡は、江津湖遺跡群と違い平成15年度の試掘調査によって新たに確認され、これまで遺跡地図に登録されていなかった新発見の遺跡である。発見の経緯の詳細は第1章第1節：「調査に至る経緯」を参照していただくとして、ここでは本調査の経緯と概要を述べていく。

新発見遺跡

当遺跡は幹線道路の中央に位置する分離帯の調査ということもあって、調査区の平面形態は南北に細長く、調査区の南端近くで健軍神社参道によって分断され、参道より南をⅠ区とし、北側をⅡ区とした。

調査は2004年度の9月中頃に重機による表土剥ぎから開始し、11月中頃まで掛かった。表土剥ぎはⅡ区の北端から始め順次南に移動しながら剥ぎ、引き続きⅠ区の表土剥ぎも終わらせた。Ⅰ・Ⅱ区共に面積自体はさほど広くはなかったが、調査区の幅の狭さと掘削する深さがⅡ区の途中から3.5mに達した点や、さらに幹線道路の真ん中ということから掘削した土砂を市外地まで搬送車で運び出さなくてはならなかった点などから予想外に時間と手間が掛り、表土剥ぎだけで実質二ヶ月近くの期間を必要とした。

調査経緯

表土剥ぎ後、Ⅰ区とⅡ区南端付近の遺構検出から本調査を始め、順次検出範囲を北に広げ、全体の遺構検出状況を把握した後、遺構の掘り下げ・記録保存を行い、翌2005年度の4月初頭までに終了した。調査中掘り出した埋土は一旦調査区端に仮置きし、土砂が溜まってくると定期的に搬送車に人力で詰め込んで市外地まで運び出しを行わざるを得ず、そのための時間と労力には困難した。

健軍京塚下遺跡の立地は託麻原台地の西端に位置し、江津湖東遺跡群とも合わせた今回の調査区全体の中で、最も標高の高い地区にあたる。標高は北端と南端で差があり、北端の標高は約12m20cm、南端は9m30cmとその差は約3mあった。調査区の全体的な地形は北から南に緩やかな傾斜を見せ、そのなかで僅かな平坦面と傾斜した面が交互に繰り返す地形をしており、平坦面毎に遺構が集中していたので、北から標高の高い順に高位平坦面、中位平坦面、低位平坦面と名付けた。またⅠ区の地形は平坦で、標高もⅡ区の低位平坦面と同一であり、当時から連続した地形であったようである。

遺跡の立地

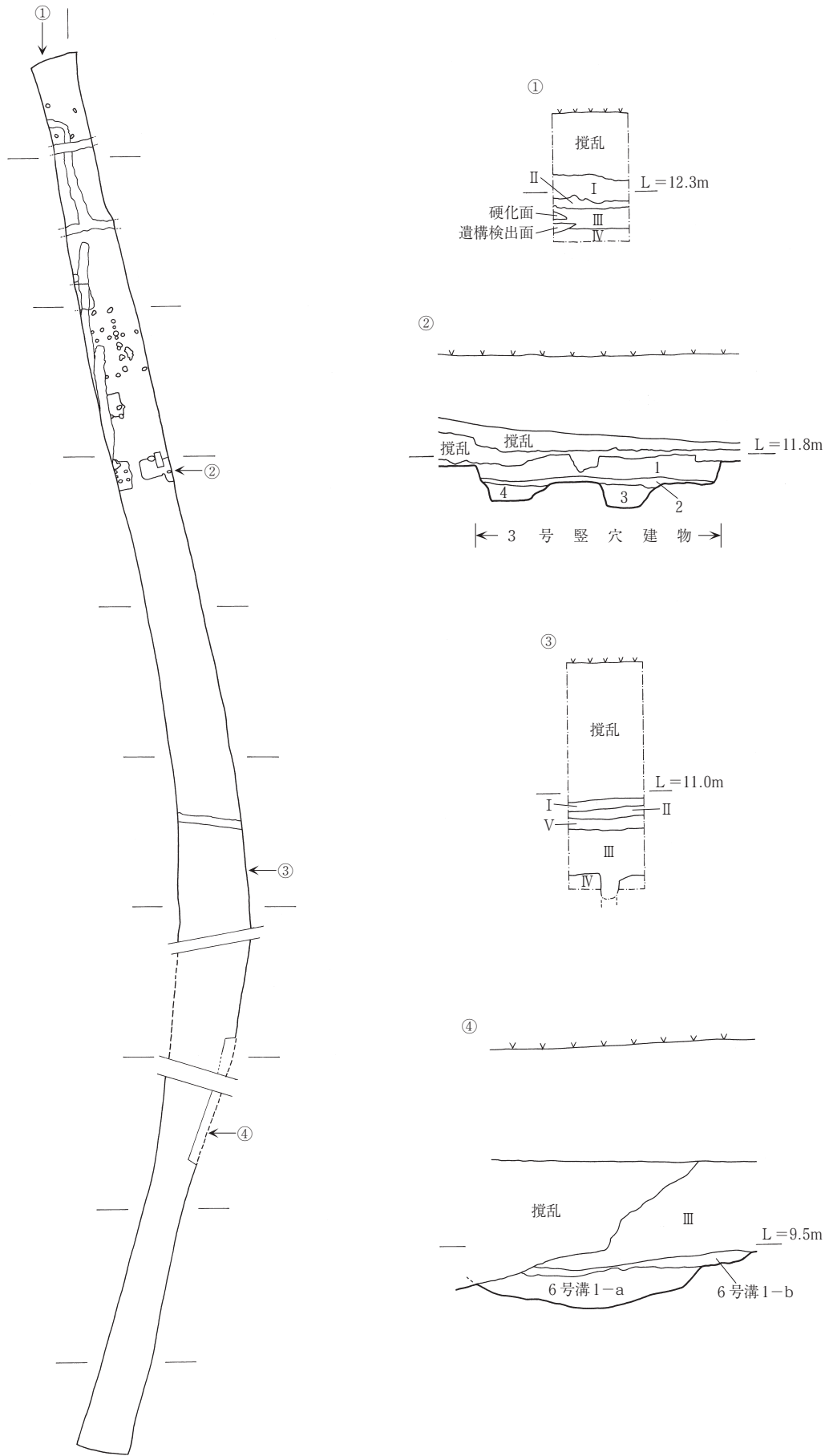
調査区内の層序は、現代層の下に、東バイパス開通時の客土・攪乱層が埋め込まれ、その下にⅠ～Ⅲ層が堆積していた。このⅠ～Ⅲ層は土器片を包含するが、いずれの層もその上面から遺構は検出されず、土質もパサパサした砂質粒子で、安定した当時の生活面でも遺構検出面ではないと判断できた。Ⅰ～Ⅲ層を除去すると、北から南にかけて緩やかに傾斜した地形で遺構検出面であるⅣ層直上面が表出した。この面が古代の遺構確認面である。

調査区層序

攪乱層とⅠ～Ⅲ層の厚みは、高位平坦面付近では攪乱層が約50cm、Ⅰ～Ⅲ層が約45cm堆積し、低位平坦面付近では攪乱層が約2m、Ⅰ～Ⅲ層が約1mと厚く、現況の地形からみると、低位平坦面付近はかなり埋没していることがわかる。

また、健軍川や現熊本市動物園沿いのような台地の所々で小谷状の地形が点在し、そのような地形の影響が調査区内に点在するようであった。

検出された遺構は、江津湖遺跡群湖東Ⅱ区以北以降と同様の律令期奈良～平安初期のものが



第117図 健軍京塚下遺跡II区基準土層図

第1節 調査経過と概要

健軍京塚下遺跡Ⅰ・Ⅱ区共にその多くを占め、双方とも遺跡的に連続性のあるものであった。

中位段丘面で検出された土壌の多くは掘り下げると、攪乱であるとわかった。

中位段丘面

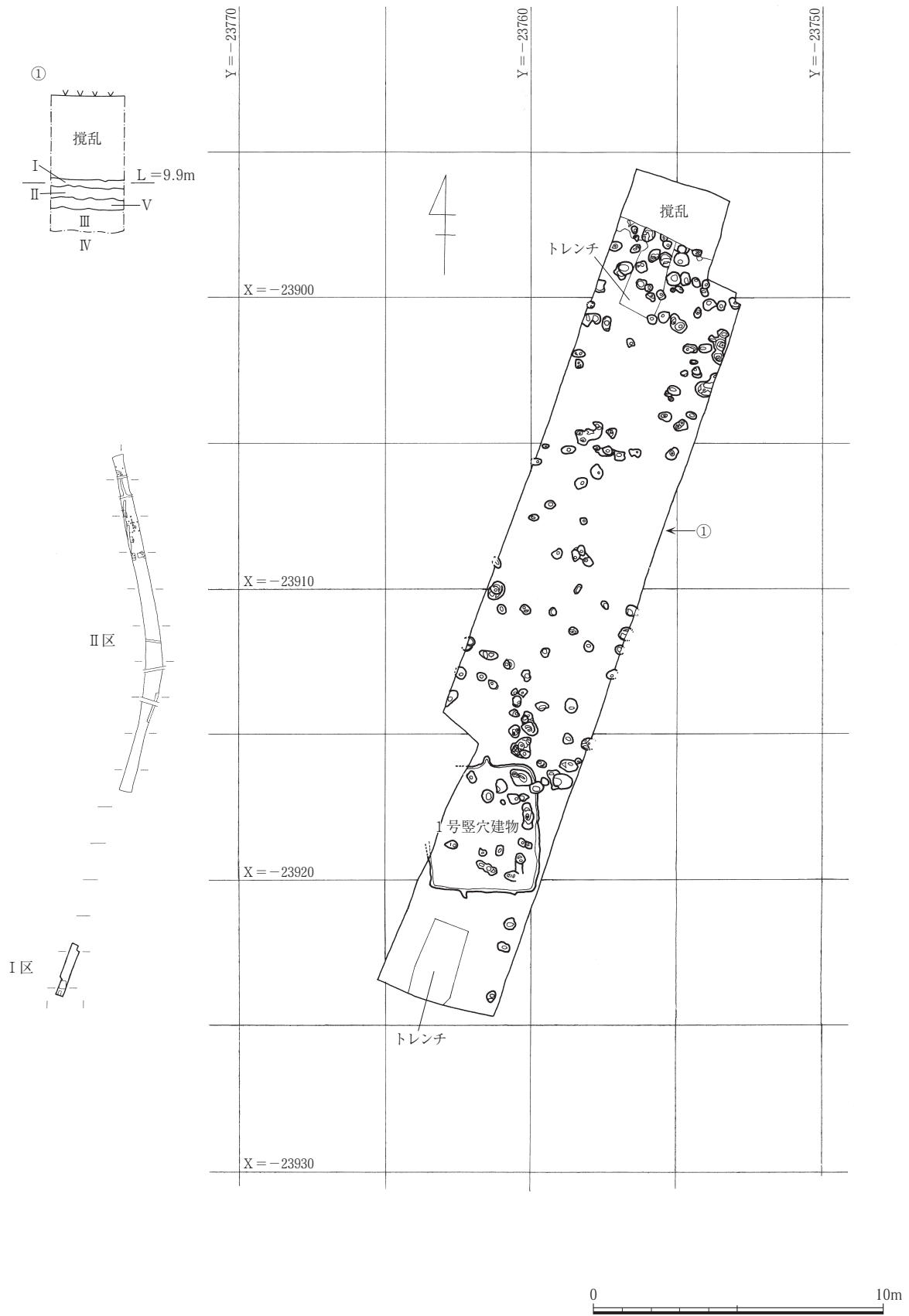
Ⅱ区内で竪穴建物は全部で5棟検出された。その内カマドを伴う竪穴は3棟であったが、他の2棟にカマドが付属していないということではなく、今回の調査区外に残存している可能性は高い。竪穴建物の特徴は、まず大型の竪穴は無く、小型か中型であったことと、カマドの直下には土壌が掘り込まれていたことである。

竪穴建物

また、Ⅱ区の低位平坦面には、幅が約6.5mの攪乱が北東から南西方向に縦断するように走っていた。これは内面からビール瓶やゴム草履が出土していることから旧健軍川が東バイパスの

旧健軍川

開通時に埋め立てられた跡であると考えられる。また、この健軍川は周辺住民の方の話では近世期の人口河川とのことではあるが、これ以前の健軍川の状況は明確には解からなかった。とはいえ低位平坦面の形成に旧健軍川と関係する自然水流によってできた地形であろうと考えられる。



第118図 I区 遺構配置図(S=1/200)

第2節 健軍京塚下-I区

I区の概要(第118図)

I区は健軍神社参道の南側に設定した調査区で、長辺長29m、短辺幅5m、調査面積は145m²ほどで、さほど広くない。旧地形

調査区内は表土剥ぎした時点での地形はほぼ平坦で、遺跡が形成されて以降の地形的変化は余りなされておらず、保存状況は比較的良好であった。

検出された遺構は、奈良時代後半～平安時代初頭の竪穴建物が1棟と、多数のピット状遺構群であった。

竪穴建物については後で詳述するので、ここでピット状遺構について、ここでやや詳細に記す。ピット状遺構は、I区内では約150箇所検出された。そのほとんどが竪穴建物を切る形で検出した。また、ほとんどの掘り形は深さ・規模共にかなりしっかりしており掘立柱建物の柱穴である可能性が高かった。しかし、調査区の狭さと時間的な制約があったため、掘立柱建物の柱穴として並びを確認することができなかった。ただ、ピット状遺構を大まかに観察してみると、その並び状況は東西南北の基準方位とは異なり、45度ほど振れる並び方向が認められる。II区の中でピット状遺構が掘立柱建物の柱穴とすれば、その方向での遺構の新たなとらえ方ができそうである。検出遺構

また、本調査区では竪穴建物1棟に比べ、この掘立柱建物の柱穴と考えられるピット群の数が多いことから、この付近一帯に掘立柱建物群が集中する場所である可能性が高い。一方、健軍京塚下II区の南端にもわずかながら柱穴らしいピット状遺構が存在することから、本調査区とII区との約70mほどの間に掘立柱建物が北方向に向かって徐々に減少していく可能性がある。ピット群

加えて、本調査区が健軍神社参道のすぐ脇ということで、中世以降の門前町が存在する可能性も考え、調査区内で奈良・平安時代以降の遺構・遺物に気を付けたが、確実な遺構等を確認することはできなかった。

①竪穴建物

本調査区では竪穴建物は1棟のみを検出した。調査区の設定の都合で範囲外に残さざるをえなかったが、遺構の5分の4ほどは確認できた。カマド付きの竪穴建物で奈良時代～平安時代初めのものである。

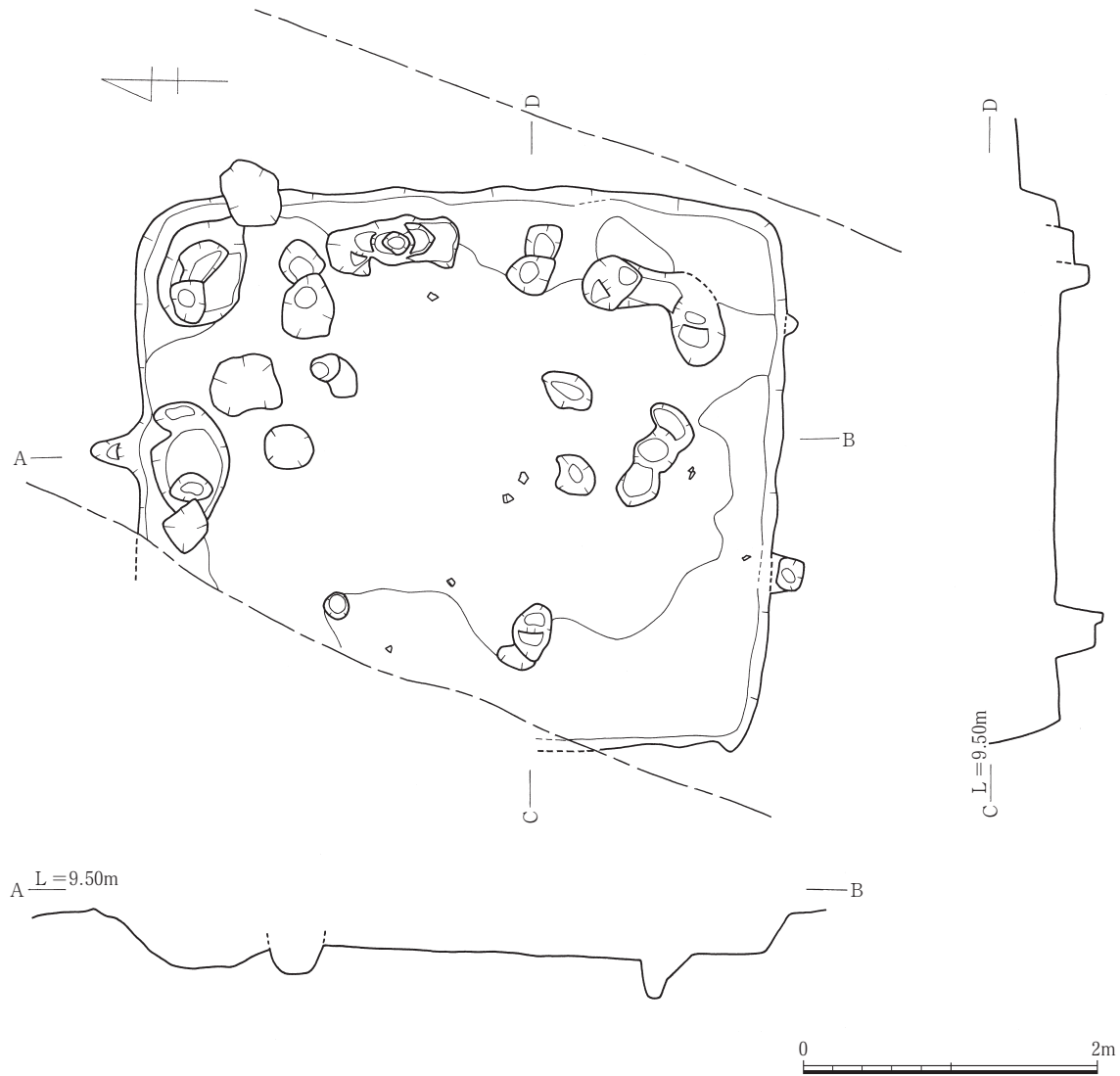
1号竪穴建物(第119図)

I区の中央南寄りで検出された竪穴建物。竪穴建物

遺構の南西角から西壁にかけての三角辺は調査区外に延びているため未掘。

竪穴の規模は、南北長辺4m40cm、東西短辺は3m80cmで、床面積は16.7m²を測り、中型に分類される。平面形態はやや南北に長い長方形であった。南北軸の方位角は西へ10度ほど振れるものの、ほぼ南北方向に近い。検出面から床面までの深さは、約30cmを測った。規模と形態

土層断面を調査時に記録していたが、中途半端であったためここでは記述のみに留める。埋土層は大きくは3層に分かれる。最初の埋土は壁際に認められる地山の混じった黒褐色土である。その後埋没した際の埋土である黒色土をベースとして、黒褐色や黄褐色、明黄褐色土などの混じった層がある。さらにその後の攪乱やピットの掘り込みによるパサパサした黒色土が上面土層



第119図 I区 1号竪穴建物実測図(S=1/50)

の一部に見られる。

床面

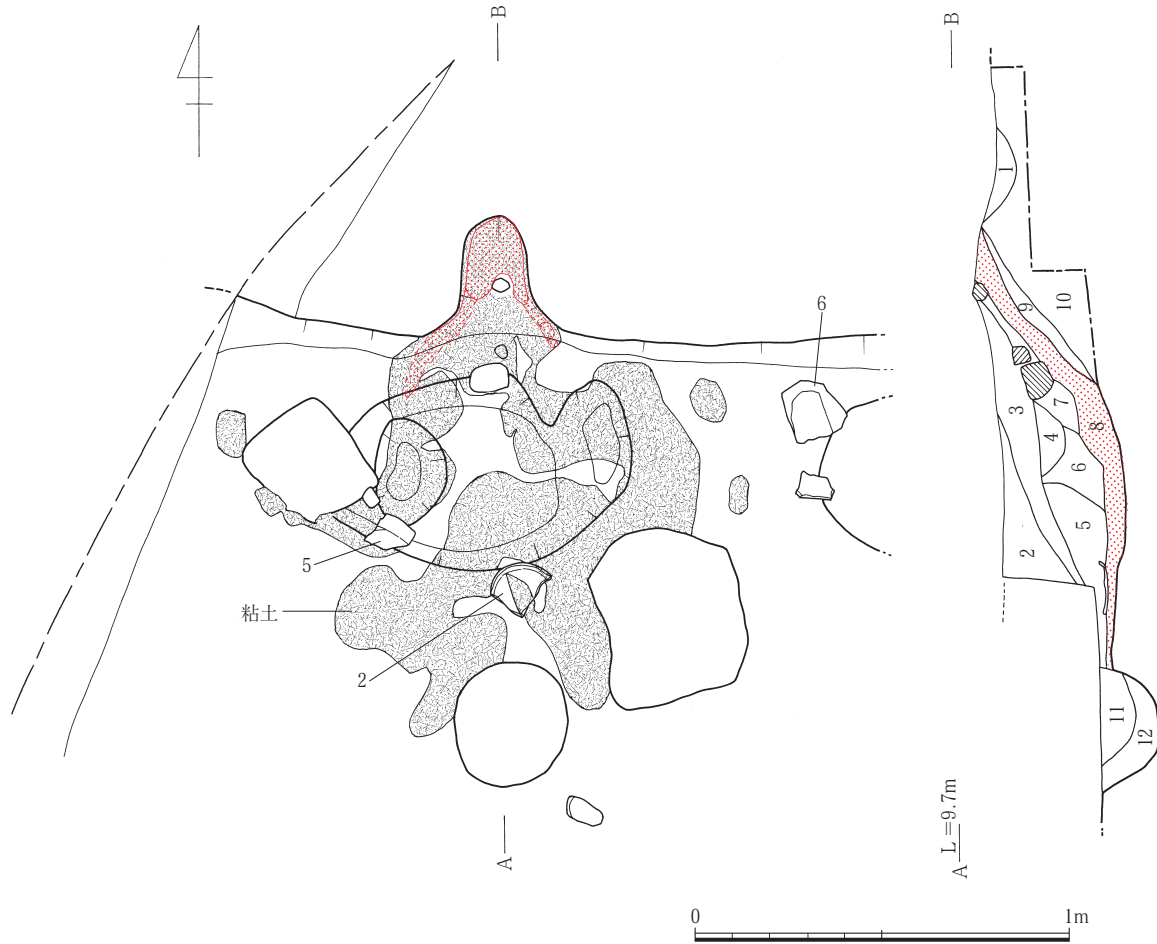
床面には硬化した面がカマド周辺や遺構中央部を中心に認められた。かなり締まっており、一定期間利用されたのであろう。ただ、南北中心線を境に両側壁部分には硬化面が見られなかったため、その部分は床面ではなく別の利用のされ方があったのであろう。

柱穴

本遺構で確認したピットは最終的には20個以上あった。しかし、大部分がこの遺構の廃絶後に掘り込まれていることが土層観察や掘削時の状況から掴んでいる。一方大部分をこの遺構に伴わないピットと判断したため、この遺構に伴う柱穴がどれかということが分からなくなってしまった。わずかに建物規模と床面の硬化面の状況から4本柱ではなかったかと想定しているが、この遺構では本来の柱跡を明確につかめてはいない。

**カマド
煙道部**

カマドは、既述のとおり北側に位置し、第120図のように煙道部が北側に幅20cm、長さ40cmほど出ており、非常に赤化し、火を激しく受けていた。煙道部は断面から観察する限り、その前面のカマド本体の燃焼部から斜め45度ほどの傾斜で屋外に突き出されていたものであろう。本来の状態が不明なため上部構造までは不明であるが、奥壁まで焼けているのでかなり燃焼効



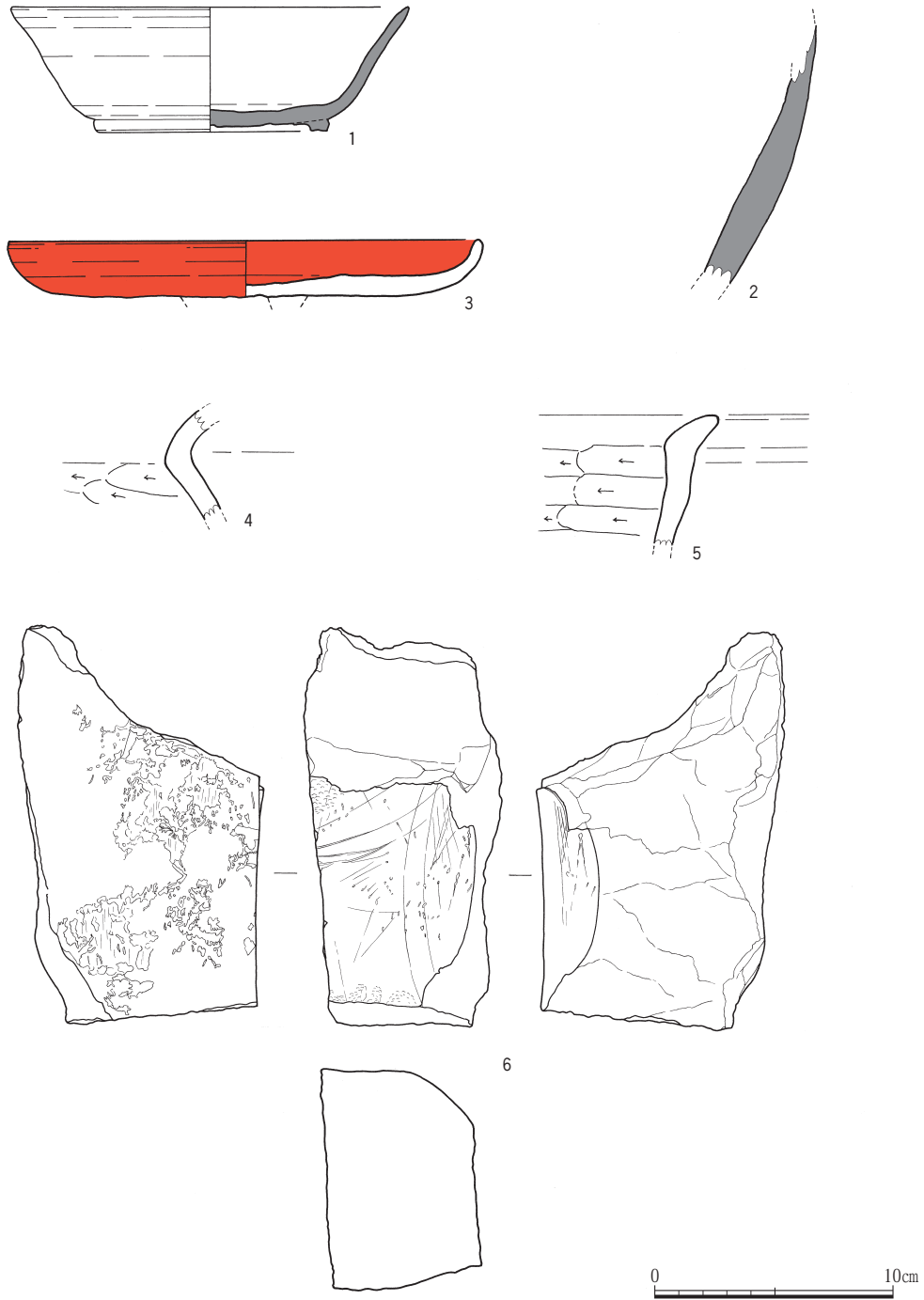
第120図 I区 1号竪穴建物カマド実測図(S=1/20)

率が良かったものと思われる。煙道部前方のカマド本体はほぼ破壊されていたが、さほど壊滅的ではなくカマド本体に使用されていた粘土や石などが割と集中した状態で出土した。そこから想定できるのはカマドの袖には石が使用されていた可能性があること、粘土により被覆されて体部が造られていたことである。また砂岩質の石材をカマドの体部の中に封じていたことも想定できる。カマド体部の粘土等を除去すると、火床面があらわれた。被熱の結果赤化していた。それと併せて火床面の両側に長径30cm、短径20cm、深さ10cmほどの浅い楕円形の掘り込みを確認した。これは他の類例から袖石を設置した跡と考えられる。江津遺跡群の調査に際して検出した火床面下の土壌を確認するまでに時間的制約のためできなかった。

掘り込み

次に出土遺物について触れる(第121図)。この遺構から出土した遺物は埋土中からのものがかなり多い。この遺構に本来伴うものとしてここでは、カマド周辺並びに破壊されたカマドの粘土などに絡まっていた遺物を取り上げる。1・2は須恵器である。1の高台付杯は底部高台が低く平坦なものである。2は甕の破片である。3～5は土師器である。3は内外器面とも赤彩された高坏の坏部である。脚部は剥離している。坏部内の底面には暗文に似たように赤彩の剥げた部分があるが、制作時の粘土巻き上げ痕の高まり箇所が使用により色落ちしたものと考えられる。ただ、丁寧な赤彩であるため特殊な使用があったと考える。4は甕の頸部片、5は小型鉢の口縁部で、ともに煮炊具である。6はカマドの一部の袖石に使用されたと考えられる

出土遺物



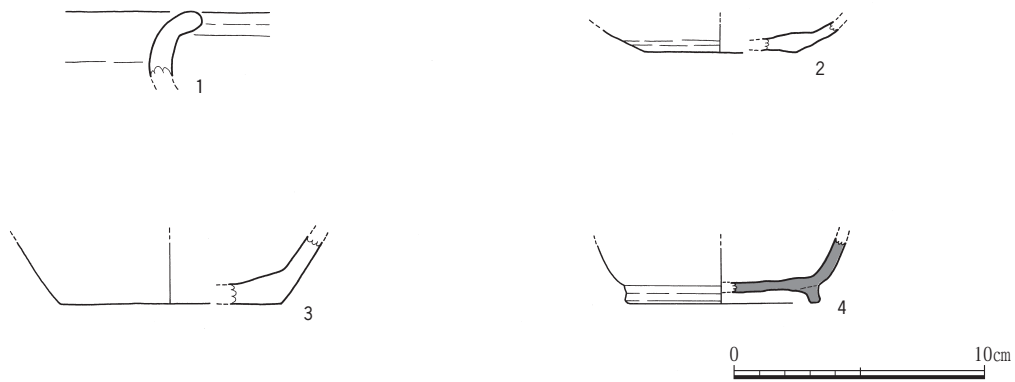
第121図 I区 1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/30)

安山岩で、かなり火を受け赤化している。詳細に観察すると表面の一部が研磨により滑らかになり、凹んでもいる。かなり使用期間の長い石皿か砥石を転用したものと思われる。これがこの遺構の形成された古代の同時期に使用されていたかは不明である。縄文時代や弥生時代の遺跡も周辺にあるので、その時代のものを利用した可能性が強い。

②ピット内出土遺物 (第122図)

ピット群の出土遺物 この調査区には多くのピットがあったが、それらをまとめて掘立柱建物として認識できるものはなかった。ただ、柱穴として十分なものもあり、掘立柱建物の一部がここに現れていると

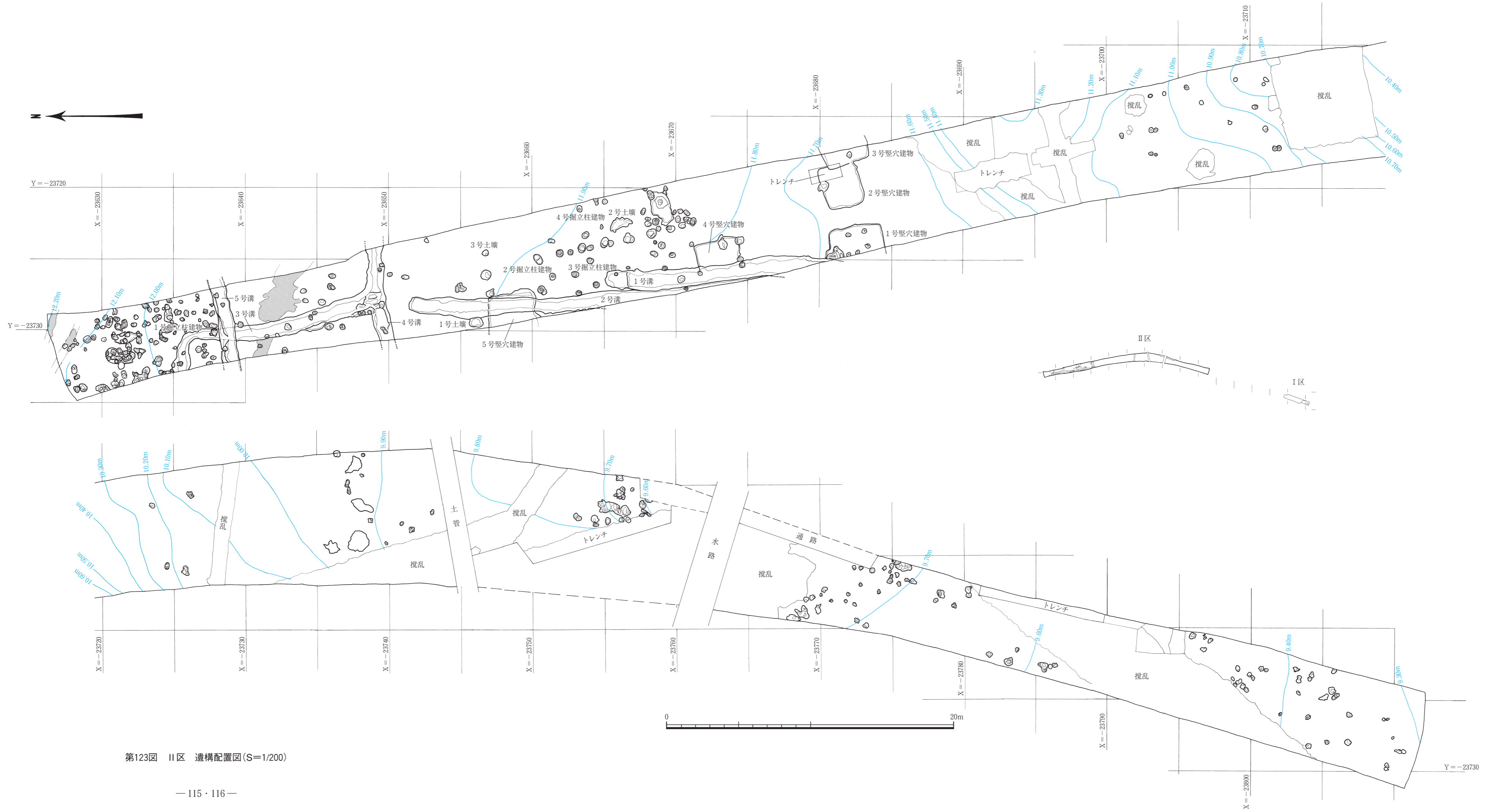
第2節 健軍京塚下-I区



第122図 I区 ピット内出土遺物実測図(S=1/3)

考えることができる。そのピット内から出土した遺物を以下に参考的あげる。

1～3は土師器で、1が甕の口縁部、2・3は坏片である。2は底部が狭く、体部が広く開くもの、3は底部が平坦で斜めに体部が立ち上がるものである。4は須恵器の高台付坏で、坏部が丸底気味で、高台もやや高い。



第123図 II区 遺構配置図(S=1/200)

第3節 健軍京塚下Ⅱ区

Ⅱ区の概要（第123図）

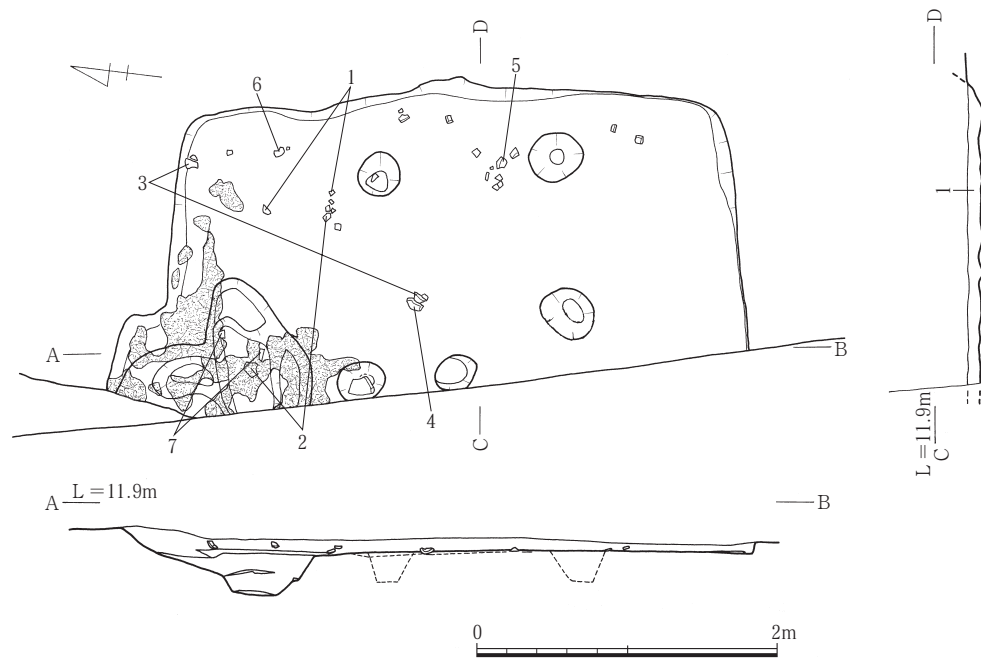
Ⅱ区の立地は、全体的に北から南にゆるやかに傾斜する中で、平坦な面と傾斜する面が交互に繰り返す地形をしており、その平坦面を北から標高の高い順に高位平坦面、中位平坦面、低位平坦面と名付けたことは前節で述べた通りである。遺構はⅡ区全体から傾斜面以外で検出されているが、**遺跡の立地** 堅穴建物や掘立柱建物といった生活に密着する遺構は高位平坦面より検出されており、中位・低位平坦面からはピット状遺構や土壇等しか確認されなかった。これは居住域と非居住域の違いによる遺構密度の薄さとも考えられるが、中・低位平坦面で検出されたピット状遺構のうちいくつかは深さ・形態共にかなりしっかりした構造を持つピットもあり、生活当時は掘立柱建物の柱穴であったが、今調査では現代の攪乱や調査区の狭さにより並ばなかった可能性は高い。

Ⅱ区で検出された遺構は、奈良～平安時代初頭の堅穴建物跡が5棟、掘立柱建物跡は4棟、**検出遺構** 土壇は4基、近世期と時期不明の溝状遺構が5条、不明遺構1、他に柱穴状のピットが約300基検出された。このうち掘立柱建物跡に関しては、調査中に現地での目視により、その並びが確認されたピットのみを掘立柱建物の柱穴跡と認め、調査終了後に記録した図面から復元できたピットの並びは、江津湖遺跡群の報告同様に目視による柱穴の確認が取れないので、今報告からは割愛した。

①堅穴建物跡

1号堅穴建物（第124図）

Ⅱ区の高位平坦面南端で検出された堅穴建物。カマド付近からの西側半分は調査区外に延びるため全掘できなかった。検出された範囲での規模は、南北辺3m70cm、東西辺2m10cm以上、**中型堅穴**



第124図 Ⅱ区 1号堅穴建物実測図(S=1/50)

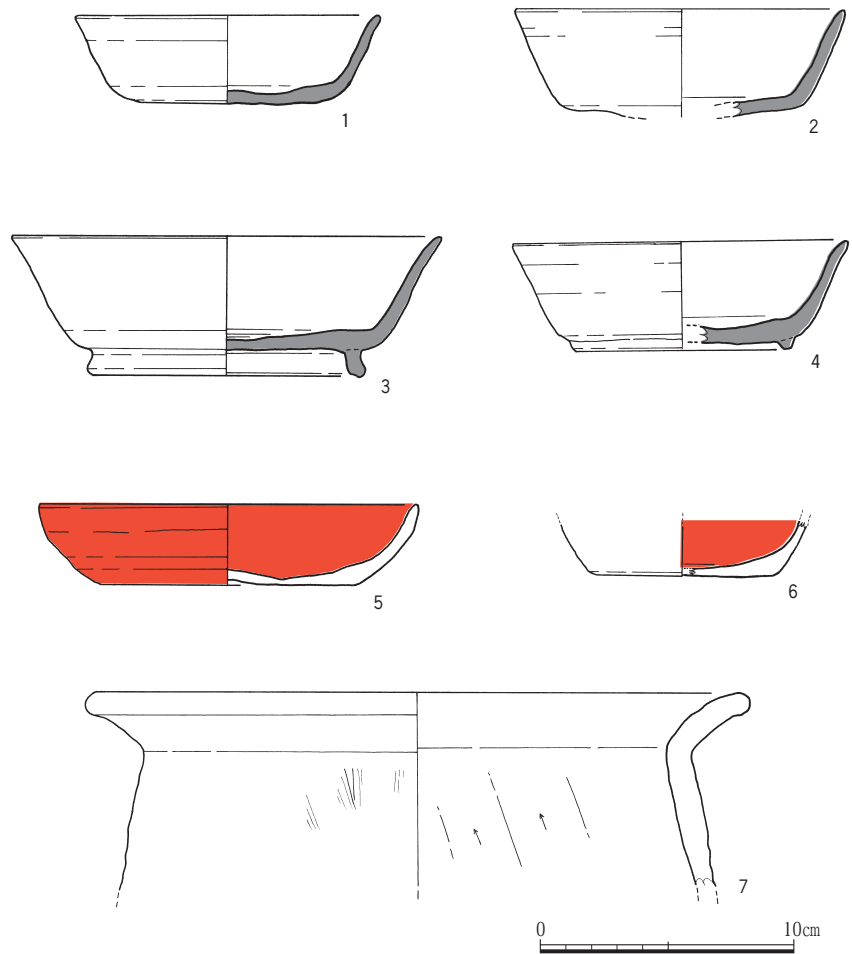
床面積は7.7㎡以上で、中型に分類され、平面形態は方形ないし長方形の竪穴であったと推定される。南北軸の方位角は 度で、検出面からの深さは8cmであった。床は貼り床を施しており、硬化面は床全体に広がっていた。床面からは5個のピット状の穴が検出されたが、深さがいずれも床面から10cm程度と浅く、位置的にも散在していることから支柱穴とは考えにくく、これを除くとこの竪穴は無柱穴の上屋であったと想定される。

カマド カマドは北壁に大きく削りこむ形で造り付けられていた。カマドの周辺には天井や側壁といった上部構造の粘土が崩落し形も残さず、部分的に焼土が混じり込みながら、散在した状況で検出された。自然埋没による崩落にしては、破壊の度合いが強すぎるので、カマド廃絶時の人為的な破壊の結果と考えられる。そして、これらの粘土片と竪穴埋土を除き、その下のカマド基底面まで掘り下げたが、基底面から明確な被熱面も検出されなかった。また、奥壁の削り込みは壁を斜め上方に伸びていることから煙道の跡であることが解かる。さらに、側石や天井石といった石も残っておらず、抜き取った痕跡もなかった。

カマド直下土壌 カマドの直下には、土壌が掘り込まれていた。平面形態は西側が調査区外に伸びるため完掘していないが、東西に長い楕円形を呈しており、その規模は、東西長辺が90cm以上、南北短辺が60cmを測り、床面からの深さは20cmに達した。内部からは、遺物や焼土は出土しておらず、このことからカマドを造る前段階に掘られた土壌であることが解かり、断定はできないがカマドの防湿効果を目的とした構造と考えられる。

遺物 遺物は土師器片と須恵器片が出土した。いずれの遺物も床面直上もしくはそれに近い状況で出土している。

ただし、3・4の須恵器坏が竪穴中央付近で重なって出土しているが、それ以外は散在して出土していた。土器を供献する形式でのカマド廃絶祭祀の痕跡までは確認できなかった。3・4は高台付きの須恵器坏で、1・2は高台の付かない須恵器坏である。7の土師器甕は散在したカマド粘土内より出土していることから、カマ



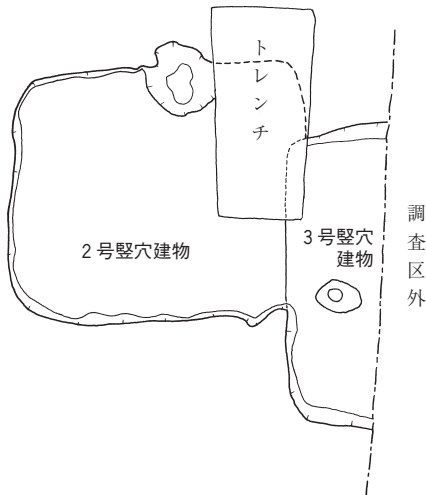
第125図 II区 1号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

ト廃絶時に混入した物であろう（第125図）。

須恵器高台付坏と土師器坏の形態からみて、この竪穴建物の廃絶時期は8世紀後葉にあたりと推定される。

2号竪穴建物（第127図）

1号竪穴建物の1m50cm東に位置する竪穴建物。東側を3号竪穴建物に切れ、さらに北東 **小型竪穴**



側を試掘時のトレンチに大きく削り取られている。しかし直下の貼り床の掘方からある程度復元できた。規模は南北短辺2m70cm、東西長辺3m10cm、床面積は約8.3㎡の小型方形に分類される。南北軸の方位角は15度で、検出面から床面までの深さは15cm程であった。柱穴となるピット状遺構は無く、硬化面はほぼ床全面に広がる。

床面は貼り床である8層を貼ってあり、その **貼り床**
貼床をはぎ、さらに堆積する床下の9・10層を掘り下げると、調査区第IV層とした凸凹の地山面があらわれた（第127図）。これは竪穴を造るために最初に掘り下げた時の痕跡であろう。この凸凹した床下面の竪穴中央には、ほぼ円形の

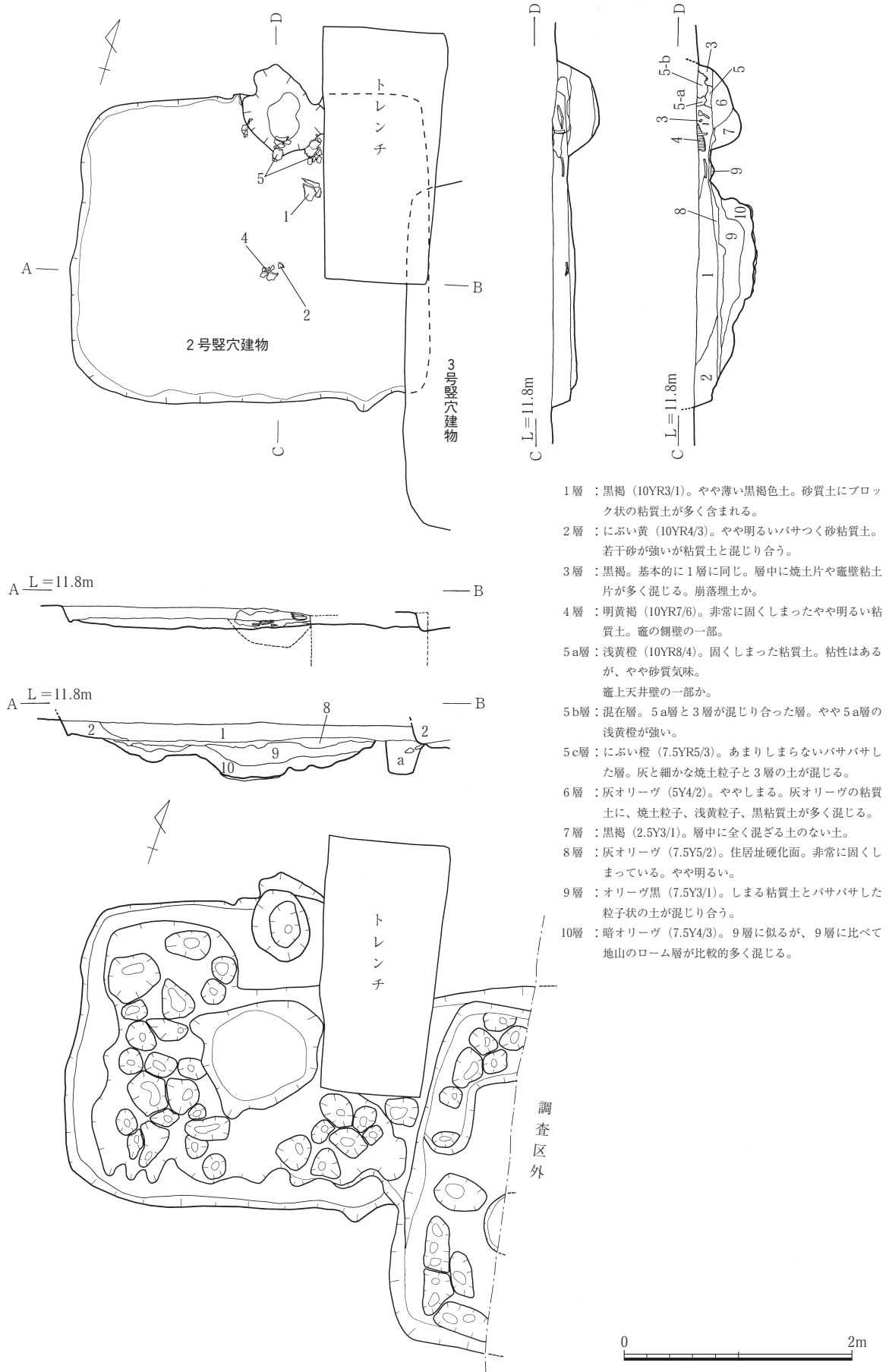
第126図 II区2号・3号竪穴建物切合関係図(S=1/80)

土壌が掘り込まれており、その規模は一辺100cm×90cmを測る楕円形で、深さは竪穴床面から30cmに達し、底面は固く踏みしめられていた。土壌内からの出土遺物は何もなく、その位置が竪穴中央ということは、竪穴全体を意識して掘られた土壌であろうが、掘削目的は不明である。

カマドは北壁中央に造り付けられていた。ここでは健軍京塚下遺跡から検出された竪穴建物 **カマド**
に付属するカマドの中では比較的残存状況が良好であるので、調査経過を振り返りつつカマドの詳細を述べていく。まず、竪穴を検出した際に、北壁中央の外側に半円形の飛び出しとその前面の埋土中に粘土片がいくつか見えたことから、カマドの残存であろうことが想定されたので、ここにカマドの中央と竪穴の中心を通るように土層観察用ベルト（2号竪穴A-B）を設定し、ベルトを残しながら数cmずつ上面より掘り下げを行った。すると崩落した天井と側壁の粘土がやや大きめの土器片と2～3cmの大きさの粒子状の焼土を混入しつつ散在した状況で検出された。これは1号竪穴同様にカマド廃絶時の人為的な破壊を覗わせる。これらを記録後、基底面まで掘り下げ、丁寧に精査を行った。しかし、本来あるべきカマド使用時の明確な被熱面は確認できなかった。また、側石等の石やその抜き取り痕も無かった。

カマド基底面を精査した際、カマドの直下には土壌の在ることが確認された。その規模は一 **カマド直下土壌**
辺が60cm×70cm、深さは30cmを測り、平面形態はやや南北に長い長円形で、断面形態は半円形を呈し、底部が皿状にやや窪む形状であった。

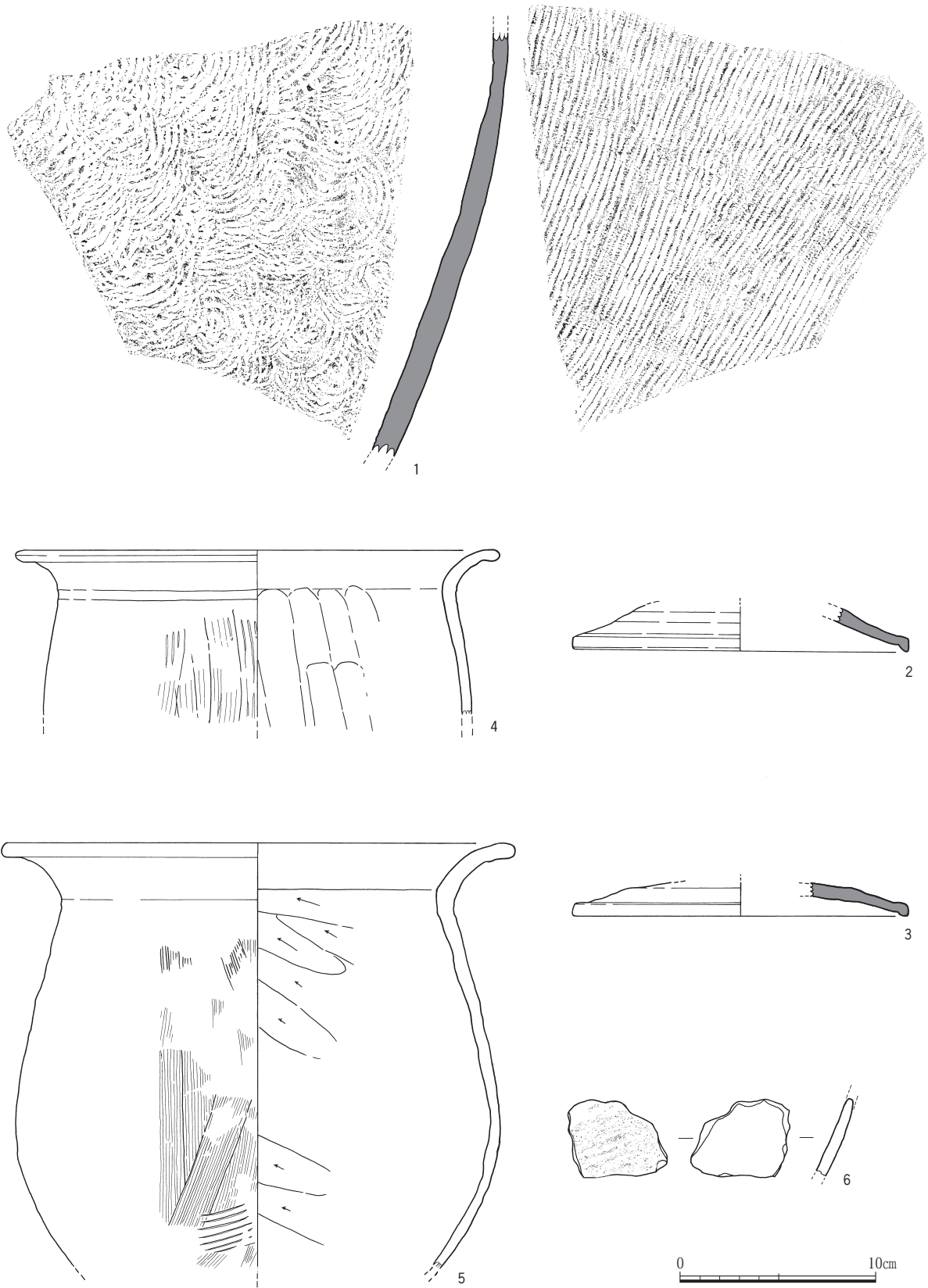
カマド直下土壌は平面では解からなかったが、断面土層の観察から、カマド構築以前とカマド使用中に掘られた二つの土壌が切り合っていることが解かった。それは、土壌の埋土は第6・7層の二つの層に分層され、その内第6層には、焼土や炭片が多く含まれていたが、第7層にはまったく含まれておらず、また、土層断面から見ても二つの土壌が切り合う形態をしている



- 1層：黒褐 (10YR3/1)。やや薄い黒褐色土。砂質土にブロック状の粘質土が多く含まれる。
- 2層：にぶい黄 (10YR4/3)。やや明るいバサつく砂粘質土。若干砂が強い粘質土と混じり合う。
- 3層：黒褐。基本的に1層に同じ。層中に焼土片や竈壁粘土片が多く混じる。崩落埋土か。
- 4層：明黄褐 (10YR7/6)。非常に固くしまったやや明るい粘質土。竈の側壁の一部。
- 5a層：浅黄橙 (10YR8/4)。固くしまった粘質土。粘性はあるが、やや砂質気味。竈上天井壁の一部か。
- 5b層：混在層。5a層と3層が混じり合った層。やや5a層の浅黄橙が強い。
- 5c層：にぶい橙 (7.5YR5/3)。あまりしまらないバサバサした層。灰と細かな焼土粒子と3層の土が混じる。
- 6層：灰オリーブ (5Y4/2)。ややしまる。灰オリーブの粘質土に、焼土粒子、浅黄粒子、黒粘質土が多く混じる。
- 7層：黒褐 (2.5Y3/1)。層中に全く混ざる土のない土。
- 8層：灰オリーブ (7.5Y5/2)。住居址硬化面。非常に固くしまっている。やや明るい。
- 9層：オリーブ黒 (7.5Y3/1)。しまる粘質土とバサバサした粒子状の土が混じり合う。
- 10層：暗オリーブ (7.5Y4/3)。9層に似るが、9層に比べて地山のローム層が比較的多く混じる。

第127図 II区 2号竪穴建物実測図(S=1/50)

第3節 健軍京塚下-II区



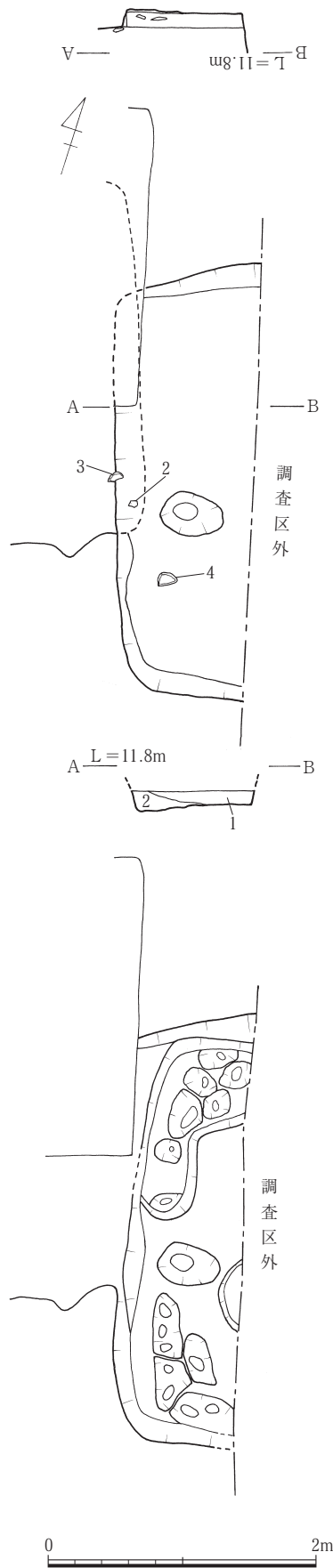
第128図 II区 2号豎穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

出土遺物

中型方形

埋没土層

出土遺物



第129図 II区 3号竪穴建物実測図 (S=1/50)

ことが解かる。理由は解からないが、カマド使用期間中になんらかの理由で、土壇埋土を掘り返し、土の入れ替えを行っていたようである。そのためカマド基底面の被熱面の残存状況が良好でなかったと考えられる。

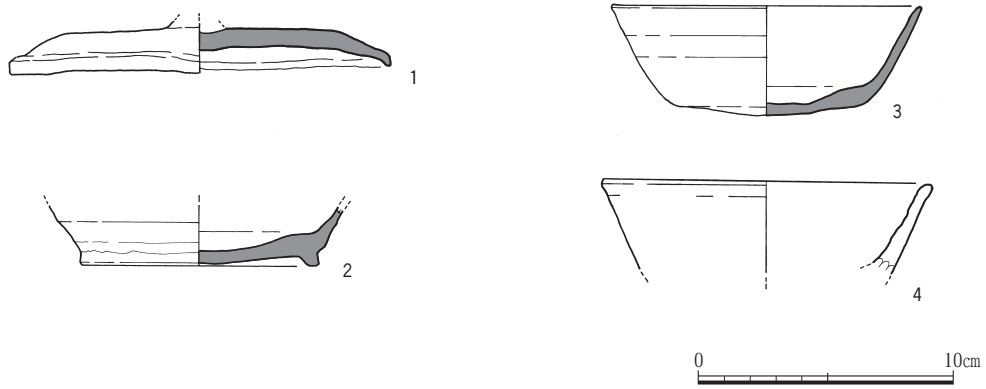
遺物は、竪穴中央とカマド周辺で出土している。1の土師器甕と5の須恵器坏蓋は竪穴中央で、床面より2~3cm高い位置から出土していた。2の土師器甕はカマドの崩落粘土に混入しつつ出土しており、生活時に使用されていたか、もしくはカマド廃絶祭祀に伴った甕と考えられる。6は須恵器の大甕片で、カマド前面の床面直上で出土した。他に一括出土遺物の内に、3の縄文土器片が1点だけ混じりこんでいた(第128図)。

3号竪穴建物 (第129図)

2号竪穴建物の東側を切る位置で検出された竪穴建物。本体の2/3近くが調査区外に延び、全掘できなかった。規模は南北辺3m20cm、東西辺は不明で、床面積も不明。残存部分から、形態は中型の方形と推定される。検出面からの深さは10cmを測り、南北軸の方位角は 度であった。柱穴は東壁寄りで1つだけ検出され、その深さは床面から95cmに達した。竪穴床面は貼り床で硬化面は検出された範囲内ではほぼ全体に広がっている。貼り床を除去し床下の埋土3層を掘り下げると、第117図のような基盤IV層の凸凹した地山面が表れた。2号竪穴と同様な状況でありこちらも竪穴掘削時の痕跡であろう。

竪穴の埋土は、1・2層が確認され、2層が西壁際に斜めに堆積した後、その上から1層が埋まっていた。2層は自然による埋没か人為的なものかは判断できなかったが、南北の土層(第117図)からは確認されておらず、西側からのみの堆積であった。

遺物は、西壁付近に偏って出土しており、図化した4点のみの出土であった(第130図)。いずれも床面より10数cm上で、さらに埋土2層の上面に位置した出土であることから竪穴廃絶後の2次堆積時の流れ込みと考えられる。2・3は須恵器坏で、3は高台付坏であった。1は、須恵器坏蓋で、焼成時に歪んだと考えられる。4は土師器坏の口縁片であった。

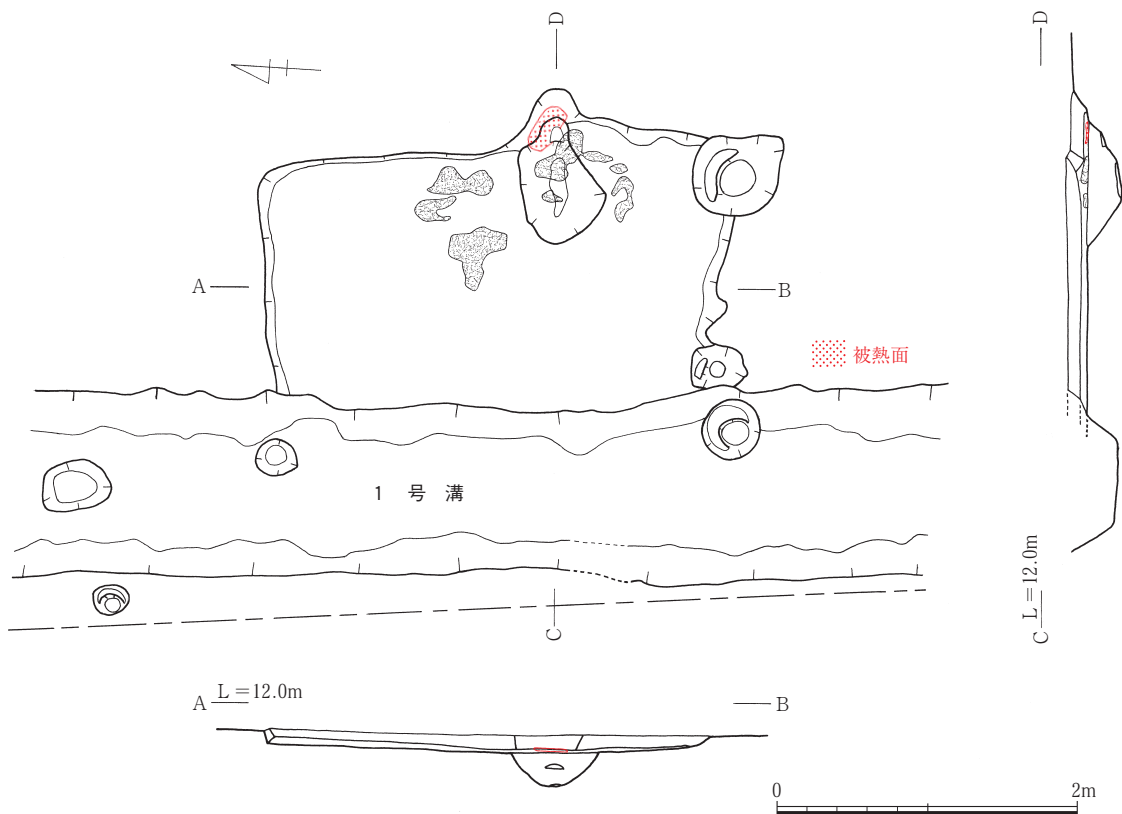


第130図 II区 3号竪穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

4号竪穴建物 (第131図)

高位平坦面の中央やや南寄りで検出された竪穴建物。2号溝によって竪穴の西側1/3程を切られ、他にも大型の柱穴に南東隅を切られていた。全体的に上面にかなり削平を受けており、残存深度は4～6cmであった。竪穴の規模は、平面形態が削平の影響のためやや不整形を呈し、南北辺が3m10cm、東西辺は2m以上、床面積は6㎡以上で、残存した竪穴の3辺の形態から小型の方形に分類される。南北軸の方位角は88度で、床面からピット状遺構の検出はなく、無柱穴の上屋であった。床は貼り床ではなく、固く踏みしめられ、硬化面は床全面に広がっていた。しかし、竪穴中央の土層観察用ベルトのトレンチから貼り床ではないことは判明したが、硬化面の除去は時間がなくてできなかったため、全体的な床面下の状況は不明である。

東壁中央に造り付けられていたカマドは、こちらも上面の削平が著しく、カマド上半の構造



第131図 II区 4号竪穴建物実測図(S=1/50)

は解からないが、残存部分では、煙道が竪穴床面から斜め上方に延び、壁面からややとびだす形で残存していた。周辺には形の崩れた側壁の粘土片が散在して残っており、1・2号竪穴のカマド同様に、竪穴廃絶時の人為的な破壊と推定される。竪穴床面の最も奥まった地点には長辺34cm×短辺18cm、厚さ2～3cmの規模で、被熱面が残っていた。

カマド直下土坑 カマドの被熱面より下には、東西に長い不整形な土壙が検出された。土壙の規模は、不整形ながら東西長辺84cm、南北短辺の最も広い部分で55cmを測る船底形の土壙で、深さは床土壙面から24cmであった。埋土は上下の2層に分層され、両層共にやや締まりのある土層であった。遺物や焼土の出土はなかった。この土壙の掘削目的や具体的な用途は明確には解からないが、被熱面の下であり、やはりカマドの防湿効果を高めるためと考えられる。

埋土 竪穴の埋土は分層できず、粒子状のやや締まりのある暗褐色土の単一層であった。

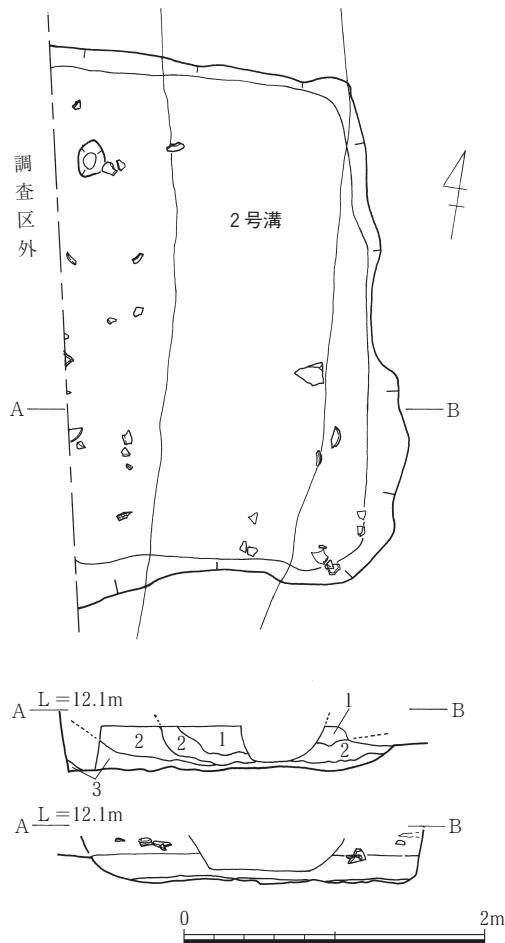
出土遺物 遺物の出土は破片も含め1点も無い。

5号竪穴建物（第132図）

中型方形 高位平坦面の中央付近で検出された竪穴建物。西辺が調査範囲外に延びており、全掘できなかった。さらに南北に走る近世の2号溝が竪穴の中央やや東寄りを縦断するように切っていたが、竪穴の床面にまでは達していなかった。竪穴の規模は南北辺3m20cm、東西辺2m10cm以上で、検出面から床面までの深さは約25cm程であった。検出された範囲での床面積は6.7㎡以上で、これから推定して中型の方形に分類される。主柱穴は無く、床面の北西側で小さなピット状遺構が1つ検出されたが、その規模と深さから柱穴とは考えにくい。床面は貼り床ではなく、固く踏みしめられ、硬化面は床全面に広がっていた。硬化面の除去は調査期間の都合上できなかったため、床面下の状況は不明。カマドは検出されなかったが、他の竪穴建物の構造からみて北壁にカマドが設けられていた可能性はあるが今調査の範囲内からは検出されなかった。

竪穴の埋土は、竪穴の壁際から中央に向けて皿状に堆積する3つの層位が確認された。いずれの土層も、砂質粒子土ながらやや締まる土質であった。また、最下層にあ

埋土

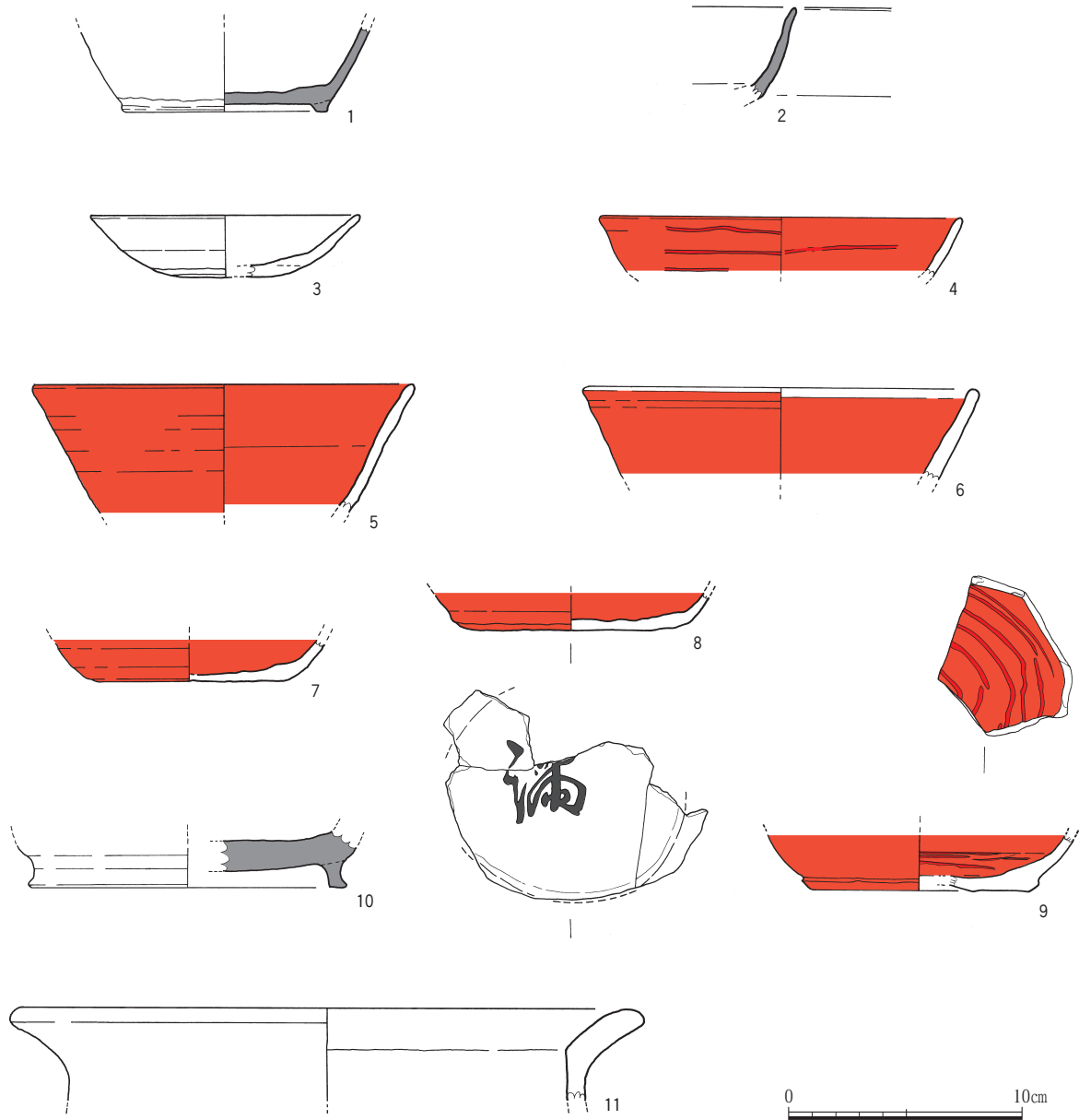


5号竪穴建物埋土

- 1層：暗褐（7.5YR3/3）。粒子が粗く、若干しまる。明橙色の焼土粒子（径2～3mm）や固くしまった黄橙色粘質土（径1cm前後）が混じる。
- 2層：やや薄い黒褐（10YR3/1）。粒子が粗く、しまる。明橙色の焼土粒子（径2～3mm）や固くしまった黄橙色粘質土（径1cm前後）が混じる。
- 3層：オリーフ黒（5Y3/2）。粒子が粗く、しまる。

第132図 II区 5号竪穴建物実測図(S=1/50)

第3節 健軍京塚下-II区



第133図 II区 5号豎穴建物出土遺物実測図(S=1/3)

たる第3層には、地山の基盤IV層の黄色土がブロック状に含まれていた。これは、豎穴の壁面が部分的に崩落していることから、5号豎穴の廃絶後に、崩落した壁面と同時に自然堆積した土層であることが想定される。

遺物の出土状況は、床面から高い位置になる第1～2層の限られた層位で出土し、遺構内で偏ることなく豎穴全体に散在していた。また、いずれも破片で、その内の数点は立った状態での出土もあった。このような土層の堆積状況と遺物の出土状況から、出土した遺物はこの豎穴が廃絶した直前や直後に遺棄されたものではなく、しばらく放置された後凹み穴となった中に第1～2層が堆積する頃に、廃棄もしくは流入したものと考えられる。したがって、出土遺物によって、当遺構の廃絶時期を直接特定できないことが解かる。

遺物は1・2・10が須恵器で、それ以外は土師器であった。2は坏口縁片で、1は高台付坏であった。土師器は11の小型甕、他はすべて坏で、3以外の坏は全て赤色顔料を塗布されてい

遺物出土状況

遺物

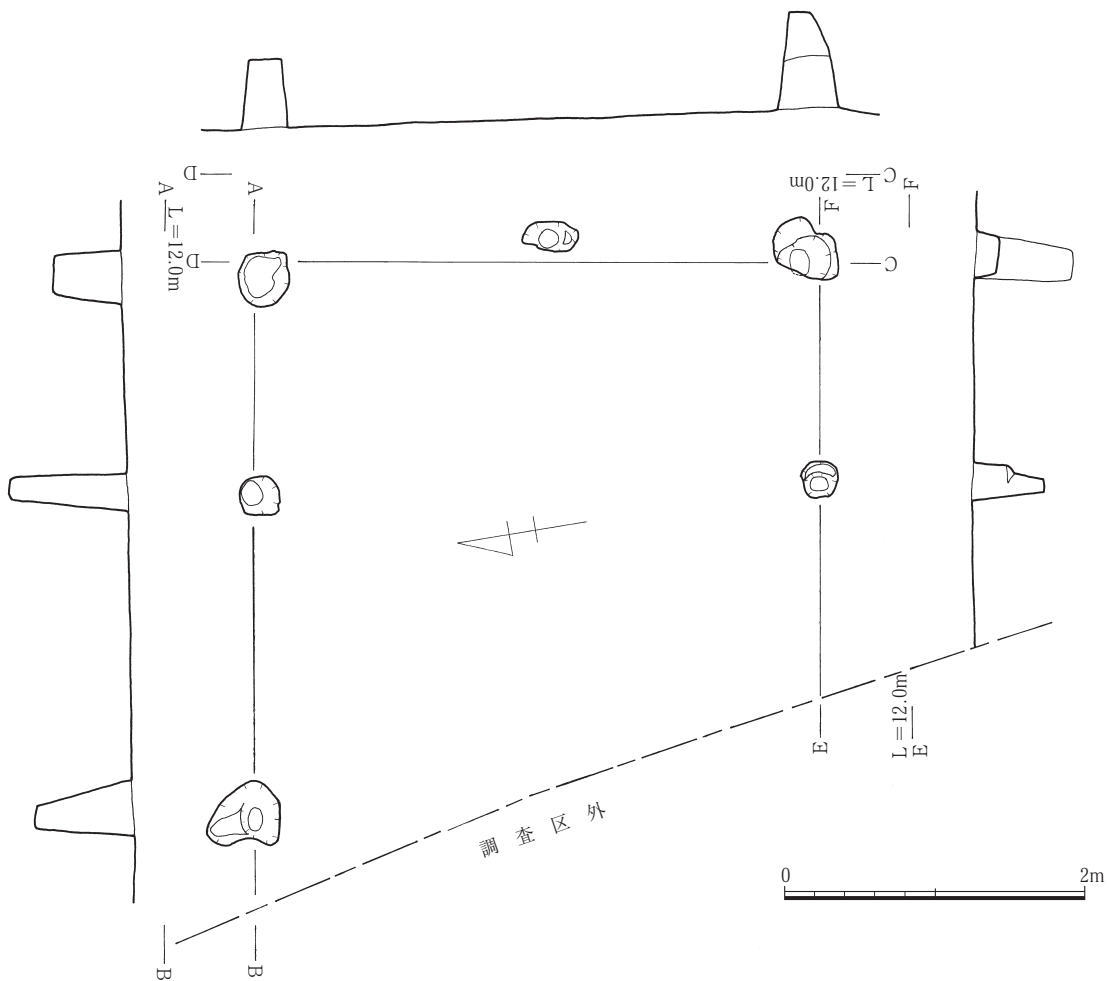
墨書土器 墨書土器 4～6は坏口縁片で、4には内外面に暗文状のヘラミガキが施されていた。7～9は坏底部片で、底部外面には「酒」もしくは「満」と墨書されていた(第133図)。

②掘立柱建物跡

掘立柱建物状況 ピット状遺構は、健軍京塚下遺跡Ⅱ区内から数多く検出されているが、掘立柱建物として検出された遺構の周辺では、建物の並びの柱穴とは別に多くのピットが検出されている。その中でも1号掘立柱建物の検出された調査区北端周辺は、ピット状遺構の密度がⅡ区中で最も高く、掘形も掘立柱建物の並びの柱穴になっても申し分のない遺構も多かった。調査区が広ければ、掘立柱建物の柱穴に構成されていたであろう。

1号掘立柱建物(第134図)

位置と形態 Ⅱ区で最も北方に位置する掘立柱建物跡。建物全体のうち西側半分近くが調査区外に延びているため、全容は不明である。建物の形態は、東西方向棟の梁間2間、桁行3間以上の桁行が長い長方形であった。方位角は東西長軸の10度で、この建物の内側にあたる面から多くのピット状遺構が検出されたが、いずれも1号掘立柱建物の東柱になる位置での検出はなく、よって1号建物は側柱建物であった。建物の寸法は、桁行の東西長辺が4m以上、梁間の南北短辺が



第134図 Ⅱ区 1号掘立柱建物実測図(S=1/50)

3 m60cmで、床面は14㎡以上となった。検出部分から推定して小型建物に分類される。検出された6本の柱穴の平面は、やや不整形ながら円形で、径は柱穴4が20cmを測り、これ以外はいずれも26cmほどであった。柱痕はどの柱穴からも検出されなかった。

柱穴の埋土は、いずれの柱穴もパサパサした砂質粒子状のあまり締まりのない黒褐色土の単一層で、遺物はどの柱穴内からも出土しなかった。 **柱穴埋土**

2号掘立柱建物（第135図）

高位平坦面の中央付近で検出された掘立柱建物跡。建物全体のうち北東側半分のみを検出でき、その対面にあたる南西側のうち桁行は調査区外であろうが、在るはずの南側梁間の柱穴を検出することは出来なかった。建物の形態は、南北方向棟の梁間2間以上、桁行7間以上の桁行が長い長方形であった。南北長軸の方位角は18度で、東柱はない側柱建物である。寸法は桁行の南北長辺が8 m90cm以上、梁間の東西短辺が2 m80cm以上で、検出された範囲での床面積は25㎡以上であった。これを基に調査区外に延びた部分も推定すると、建物全体で50㎡前後の床面積の大型に分類される建物である。検出された7本の柱穴の平面形態はすべてほぼ円形で、その径は平均55cmを測る。深さは10cm程度のバラツキがあったが、概ね検出面から平均で70～80cmを測った。柱と柱の間の距離の統一性は高く、それぞれの各柱穴間一辺の距離はいずれも約1 m15cmを測った。どの柱穴も大きさ深さ共によく揃っており、企画性が高く、建物・柱穴共に規模の大きな遺構であったことを窺わせる。また、柱穴1と柱穴2のそれぞれ南西側で、柱穴1・2に切られるようにピット状の遺構が在るが、これを調査中はピットの切り合いと想定していたが、これに対応するピット状の遺構が周辺に無いことから、柱穴1と2の柱自体の引き抜き痕の可能性を考えられる。 **位置と形態**

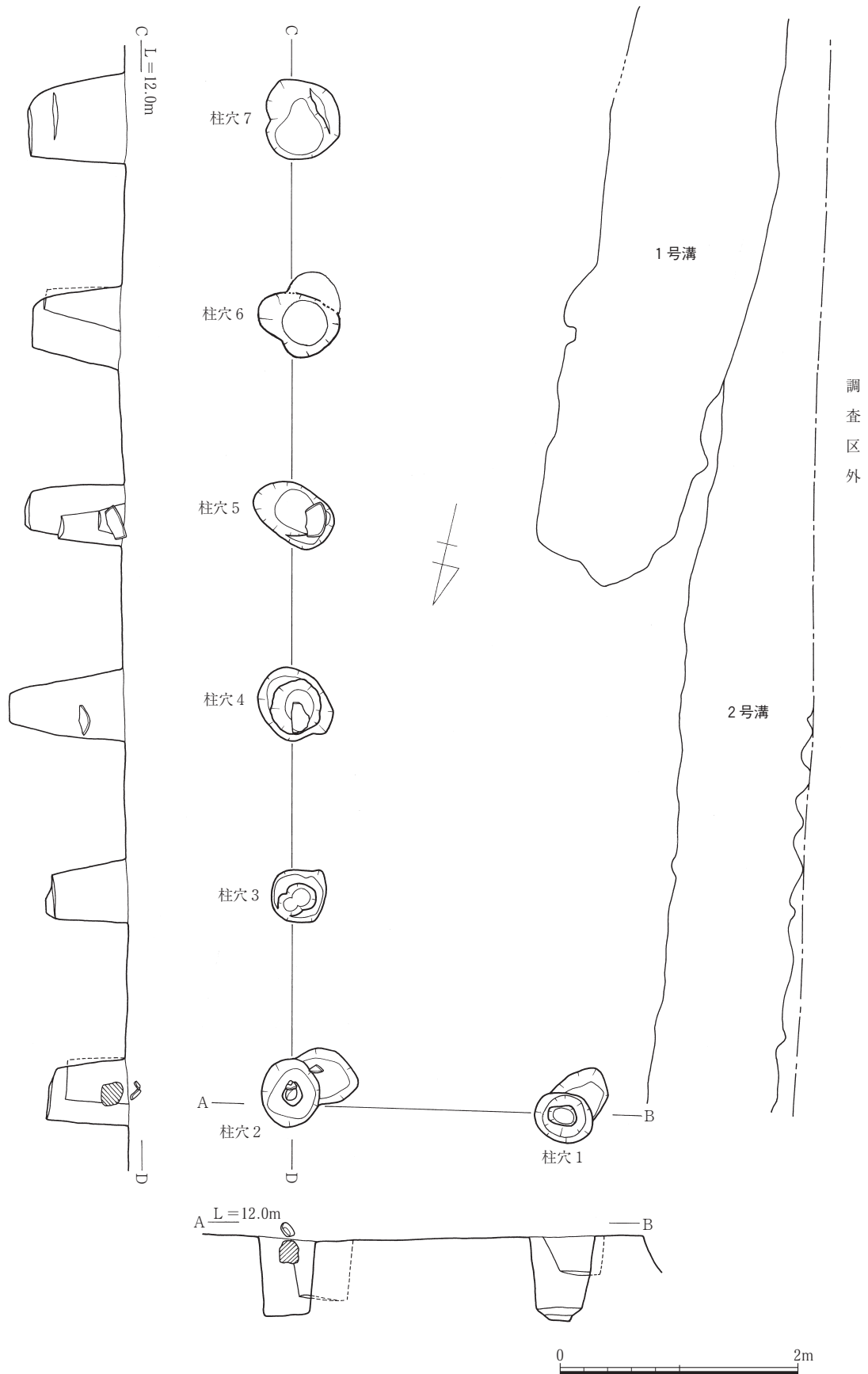
柱穴の埋土は、柱穴1・3・4・5が、やや締まるパサパサしたオリーブ黒色の粘質粒子土に極少量のオリーブ色の粘質土が混じる単一層で、柱穴2・6・7がオリーブ黒と基盤Ⅳ層の明黄褐と暗オリーブの土が分層できずに混在する層で、土質はやや締まる粘質土であった。柱痕はいずれの柱穴からも確認できなかった。 **柱穴埋土**

遺物の出土は、柱穴1～5・9で小破片化した土器片を含む多くの遺物が出土したが、その大半は断面見通し図に示した通り各柱穴の上部付近から出土していた。これは土層で柱痕が認められなかったことから、最終段階で柱を抜き取り後、遺物を伴う何らかの祭祀があったのかもしれない。 **遺物**

柱穴1からは土師器の細片が、隅柱である柱穴2からは、2号掘立の柱穴の中では最も多く、須恵器坏の2、須恵器坏口縁片の1、須恵器甕口縁の6、土師器はいずれも赤色顔料が塗布されており、4・5は坏、3は皿、7は高坏脚底部が出土した。2は完形で、検出面直上から出土しており、この須恵器坏より6 cm下にほぼ円形の石が出土している。この石に人為的な工作の痕跡はなく自然石であったが、表面には角がなく、直径で16～18cmで持ち運びはさほど困難ではなかったと考えられ、何らかの形で生活に使用されたものと推定される（第136・137図）。

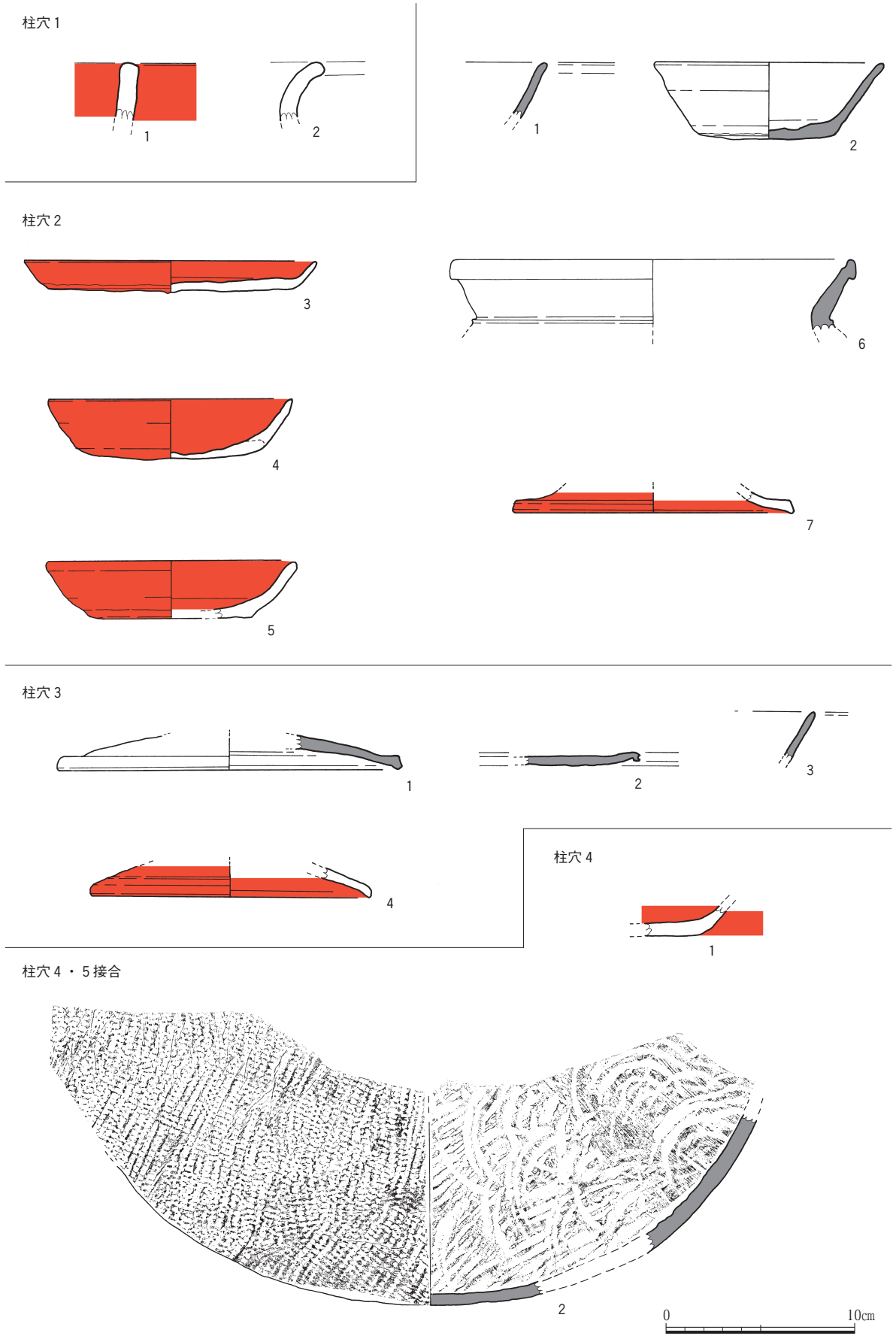
3号掘立柱建物（第138図）

高位平坦面の中央付近で、2号掘立の中央付近で重なるように切り合っただけで検出された掘立柱建物跡。3号掘立の隅柱が2号掘立の柱穴3と4の間で検出され、桁行はそのまま2号掘立の桁行の柱穴に沿うように、ほぼ平行して延びている。建物全体のうち北東側半分を検出し、そ **立地と形態**

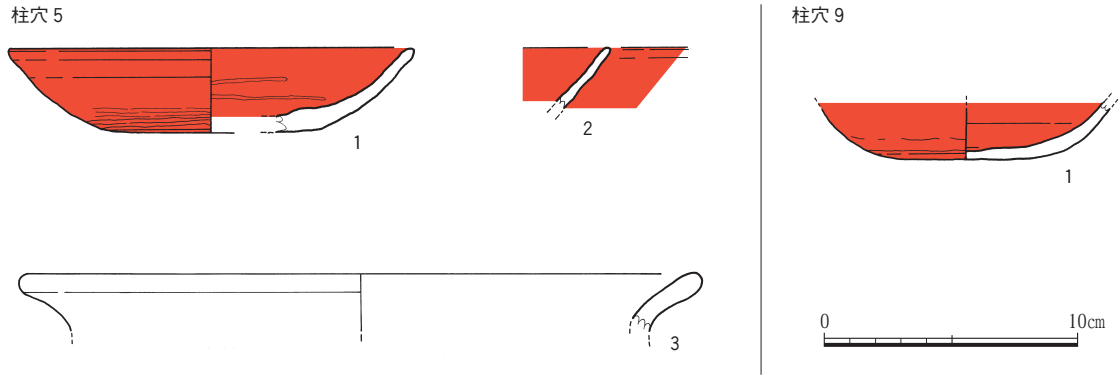


第135図 II区 2号掘立柱建物実測図(S=1/50)

第3節 健軍京塚下-Ⅱ区

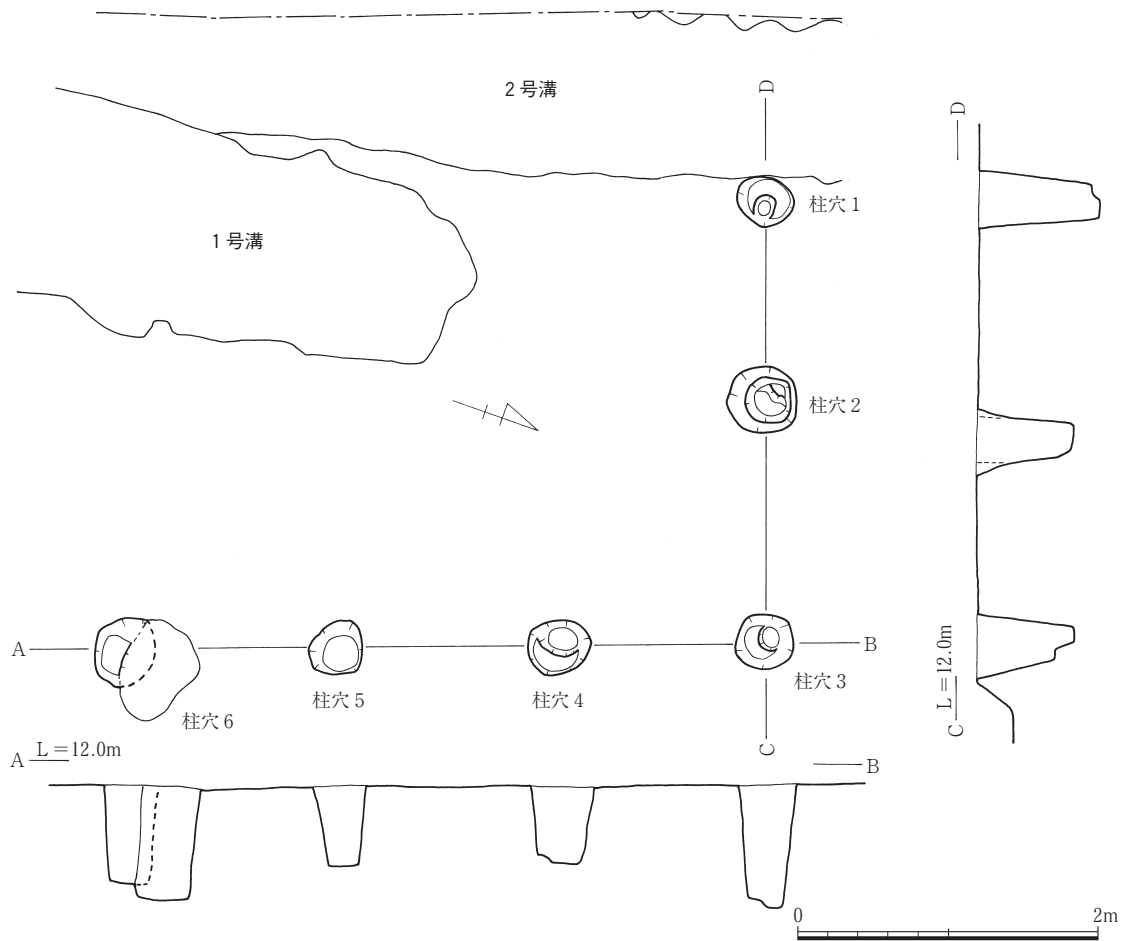


第136図 Ⅱ区 2号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(S=1/3)



第137図 II区 2号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(S=1/3)

の対面にあたる南西側のうち桁行は調査区外であろうが、在るはずの南側梁間の柱穴を検出することは出来なかった。建物の形態は南北方向棟の梁間2間以上、桁行3間以上の長方形と推定される。方位角は17度で、束柱はなく側柱建物であった。建物の寸法は、桁行の南北長辺が4 m64cm以上、梁間の東西短辺が3 m30cm以上で、検出された範囲での床面積は15m²以上であった。これを基に調査区外に延びた部分も推定すると、建物全体で30m²前後の床面積の中型に分類される。検出された6本の柱穴の平面形態はすべて円形で、その径は平均で35~40cmを測り、



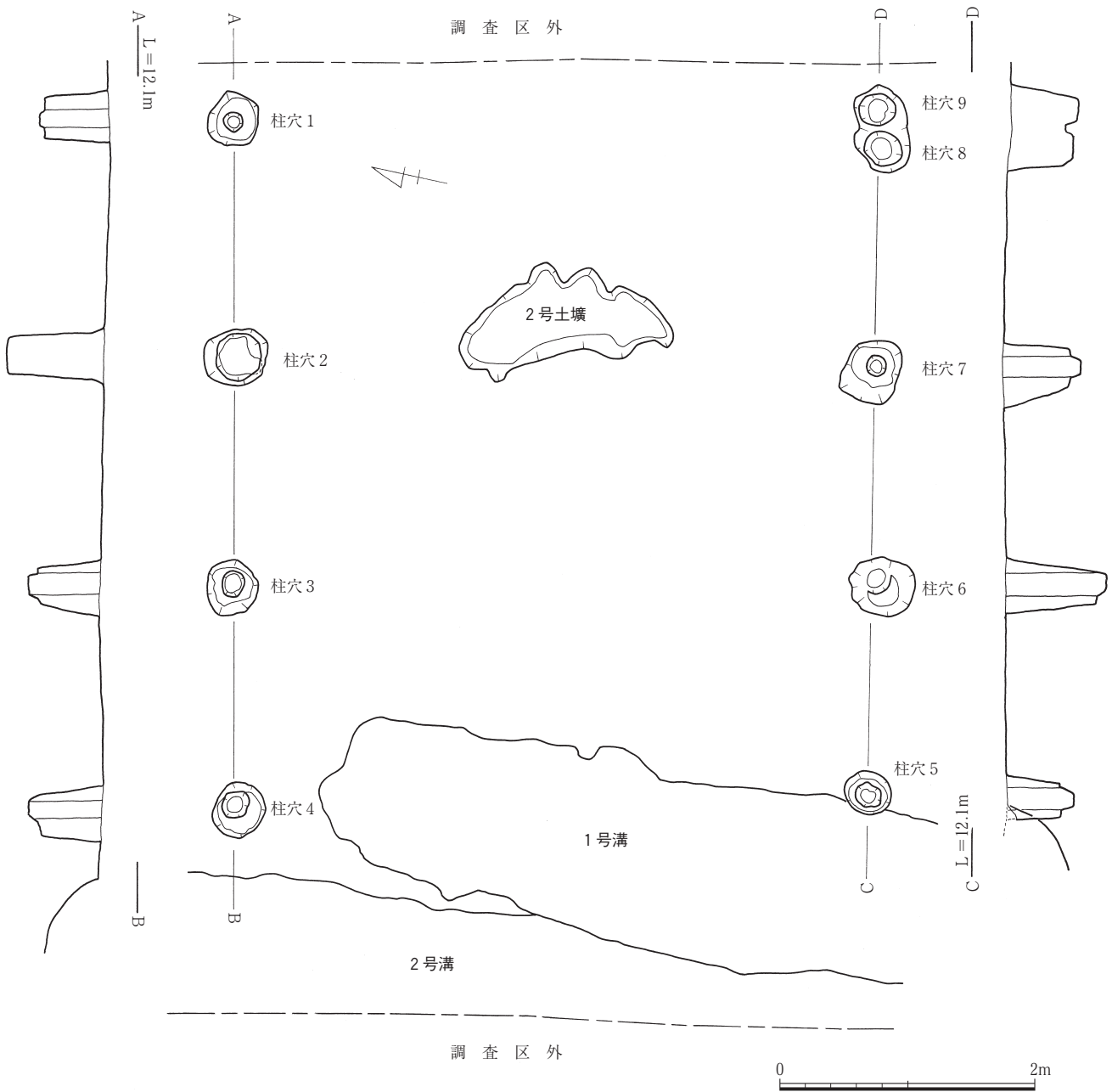
第138図 II区 3号掘立柱建物実測図(S=1/50)

第3節 健軍京塚下-II区

深さは隅柱が他の柱穴より深く、隅柱以外は検出面より平均で55~60cmを測り、隅柱と考えられる柱穴3・6は検出面より約70cmの深さであった。柱痕は、平面で確認できなかったが、土層から柱穴5でのみ確認できた。

柱穴の埋土は、各柱穴共にやや締まりのあるパサパサした黄灰色の砂質粒子土の単一層であるが、層中の30%程は基盤IV層の黄色土がブロック状に混じりこんでいた。

この建物の柱穴から遺物は土器片も含め1点も出土していない。



第139図 II区 4号掘立柱建物実測図(S=1/50)

4号掘立柱建物（第139図）

切り合い関係 高位平坦面の中央付近の2号・3号掘立柱建物跡の棟方向に対し、ほぼ90度角で2・3号建物を東西方向に横断する形で切り合って検出された掘立柱建物跡。建物の形態は、東西方向棟の桁行3間以上、梁間は東西両方の隅柱がそれぞれ調査区外のため不明。東西軸の方位角は25度で、東柱はない側柱建物であった。寸法は、桁行の東西長辺が約5m70cm以上、梁間の南北短辺は約5m30cm、検出された範囲での床面積は約30㎡で、全体は建物の両隅が調査区外のため不明だが、残存した範囲から推定して大型建物に分類される。検出された9本の柱穴の平面形態はすべて円形で、その径は平均で約40cmを測る。深さは9本中の7本は検出面から平均60cmを測るが、柱穴2・6はさらに15~20cm程掘り込まれていた。柱痕は9本の柱穴のうちの6本から検出された。

柱穴埋土 柱穴の埋土は、やや締まるがパサパサした粘質粒子の暗オリーブ色土の単一層で、分層はできなかった。遺物の出土は、破片も含め全く無かった。

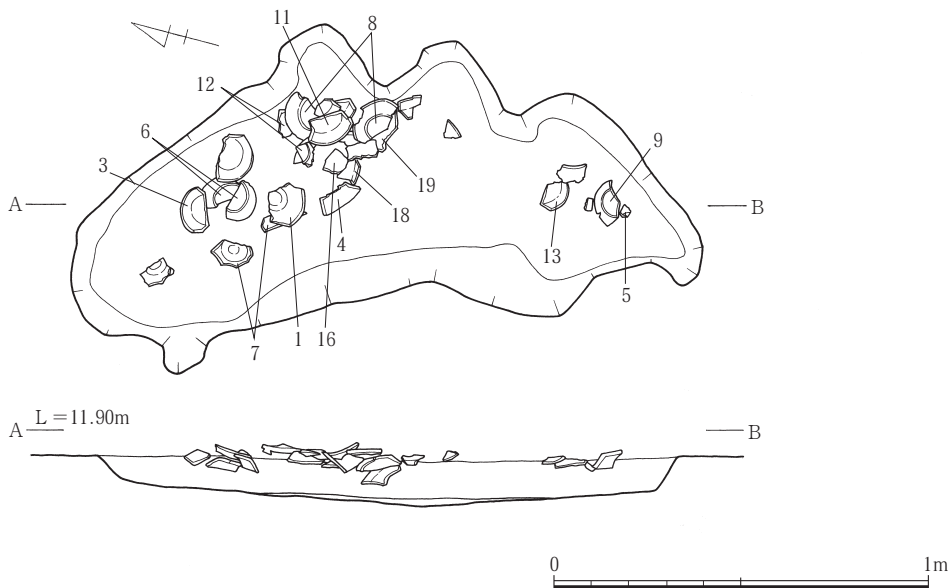
土壌との関係 検出された建物の内側中央やや東寄り、隅丸不整形の2号土壌が検出された。その位置と出土遺物から4号掘立柱建物と関連があることが考えられるが、2号土壌の詳細は次の土壌の項で、4号掘立柱建物との関連性の検証は総括で述べることとする。

③土壌

土壌の概要 健軍京塚下遺跡II区内から土壌状の遺構は多数検出されたが、底面付近で無数の小穴に分かれる樹根跡や、平面で検出されたが、掘り下げると遺物の出土も無く、また遺構の壁が明確でない単なるシミ状の土色・土質の変化であったものも在り、ここで報告するのは確実に土壌と確認できた4基のみとした。

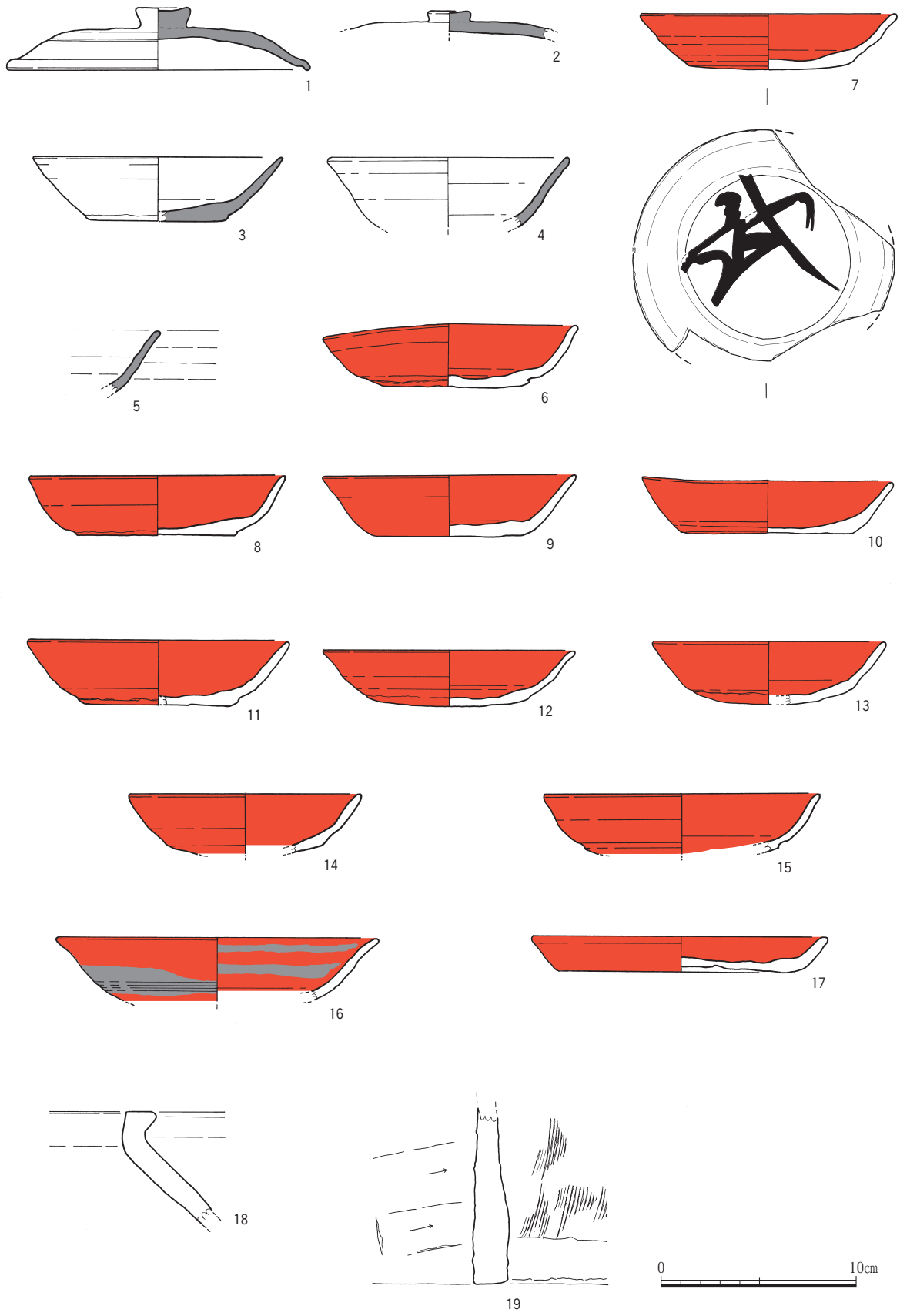
2号土壌（第140図）

位置・形態 4号掘立柱建物の内面中央やや東寄り、隅丸不整形の2号土壌が検出された。平面形態は隅が丸い不整形な長形で、断面はほぼ平坦であるが、土壌中心に向かって若干低くなる浅い皿状の形態であった。規模は、



第140図 II区 2号土壌実測図(S=1/20)

第3節 健軍京塚下-II区



第141図 II区 2号土壙出土遺物実測図(S=1/3)

南北長辺が3 m35cm、東西短辺の最も膨らむ箇所、1 m50cm、検出面からの深さは平均で21 cmの最も深い所で24cmを測った。上面は多少の削平を受けているのであろうが、4号掘立の柱穴が深く、残りが良いことから、掘削当時から浅い土壌であったと推定される。

- 埋土** 土壌埋土は、黄褐色でやや絞まるがパサパサした砂質粒子土の単一層であった。
- 出土遺物** 遺物は多く出土しており、須恵器坏蓋2個体、須恵器坏3個体、土師器坏11個体、土師器皿1個体、土師器壺口縁片1つ、移動式カマド破片1つが出土していた。ほぼ完形になるのは7・6・10・8・17の5点のみであったが、これ以外のほとんどの個体も、その半分以上が残存していた。出土状況は必ずしも整然と並んでいるとは言えないが、遺存状況は良く、少なからず秩序だっているようにもみえる。中でも坏は内底面を下にした、いわば伏せた形で出土したものが多く、土師器坏は出土したほとんどに赤色顔料が塗布されていた。
- 墨書土器** 7の土師器坏外底面には「武」と考えられるの文字が墨書されており、6にも非常に薄く墨書の痕跡はあるが、墨書直後に消したのか、それとも消えたのか文字は判読できなかった。
- 16には、内外器面に炭化物が付着しており、灯明皿としての利用も考えられるが、外底面近くにも付着しており廃棄後のものかもしれない。19の移動式カマドの破片は、全体像がつかめないが、4号掘立柱建物との関係を考えるうえで重要である。

1号土壌

- 位置と形態** 6号堅穴の北で近接した位置で検出された土壌。平面形態はやや不整な長円形で、断面は底面の東側が若干深くなるが、ほぼ平坦な逆台形。規模は南北長約90cm、東西長約75cm、深さは約14cmで、土壌埋土はオリーブ黒の単一層に、基盤IV層の黄色土が少量混じる。
- 出土遺物** 遺物は土器破片が1点のみ出土していたが、調査中の霜の降った翌日の精査中に失われてしまった。土壌の時期は不明。また堅穴に近接することから廃棄土壌の可能性も想定されるが、結論としては遺構の性格は不明。

3号土壌

- 位置と形態** 2号掘立柱建物の北東に3 m離れた位置から検出された土壌。平面形態は不整な円形で、規模は南北42cm、東西40cm、底面は南から北に10cm程深く、最も深い所で検出面から60cmを測った。遺構内からは大量の貝が出土した。その他に遺物は出土していない。このことから、この遺構は食用に使った貝の一括廃棄のための土壌であることを視わせる。
- ポケット貝塚** 土壌からは貝以外の遺物が出土していないための時期は解からないが、調査区土層で示したように検出面より上層は近・現代の攪乱層が2 mほど堆積しており、また9世紀以降の時期の遺構としては、後に述べる近世の溝遺構が在るのみで、柱穴等の生活に直結する遺構は無いことから9世紀代の遺構である可能性が高いので報告することにした。

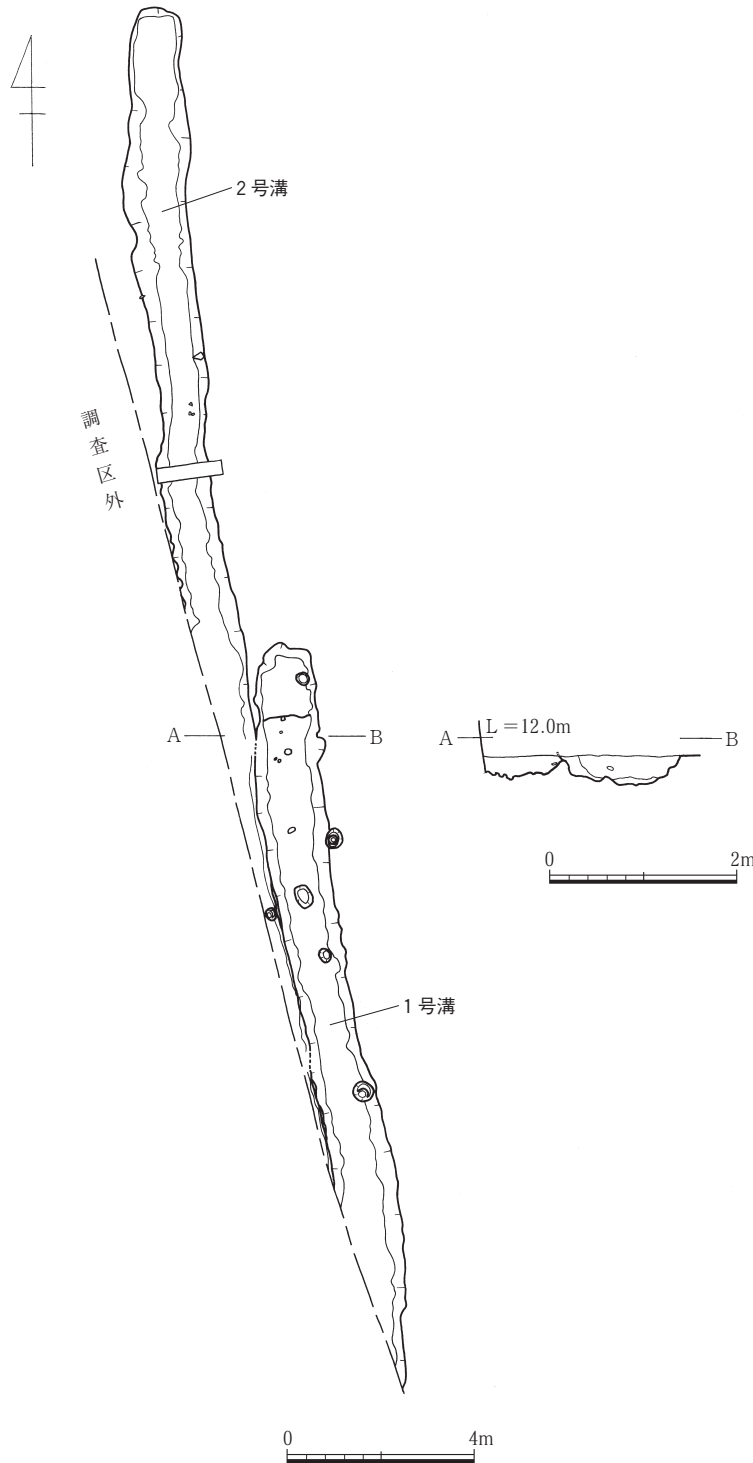
④ 溝遺構

1号溝（第142図）

- 位置と形態** 高位平坦面の調査区西端を南北方向に走る溝遺構。2号掘立柱建物付近から南に向かって始まり、4号堅穴を切って、平行して走る2号溝の上面を数cm程度切りつつ、ゆるやかに西方向に湾曲し調査区外に延びている。調査区内で検出されたのは17m程であった。規模は、幅が平均で約1 m35cmを測り、断面は半円形のU字形をなし、深さは検出面から37cm前後を測った。

溝の底面の北端付近には段差が在り最底面より20cm程高くなっていた。その段差以外で底面の北端と南端での絶対高の差は南端の方が10cm程低かった。

埋土は2層からなり、上層はやや締まるパサパサしたオリーブ黒色土で、この層中から須恵器・土師器片や磁器片が出土した。下層はあまりしまらない黄灰色土で、基盤Ⅳ層の黄色土がブロック状に含まれている。粘性はなく、また砂流の痕跡も無かったので、水を流しての使用はなかったようである。



出土遺物
遺物は2の土師器口縁片と1の須恵器小壺口縁屈曲部片の2点の破片が出土しているが、この凶化した以外に近世陶器片が2点出土していた。しかし、この近世陶器片2点は調査期間中に霜が降った翌日の精査中に失われてしまった(第143図)。

時期
1号溝の時期は近世～近代と想定される。それは上記の紛失した遺物以外に、

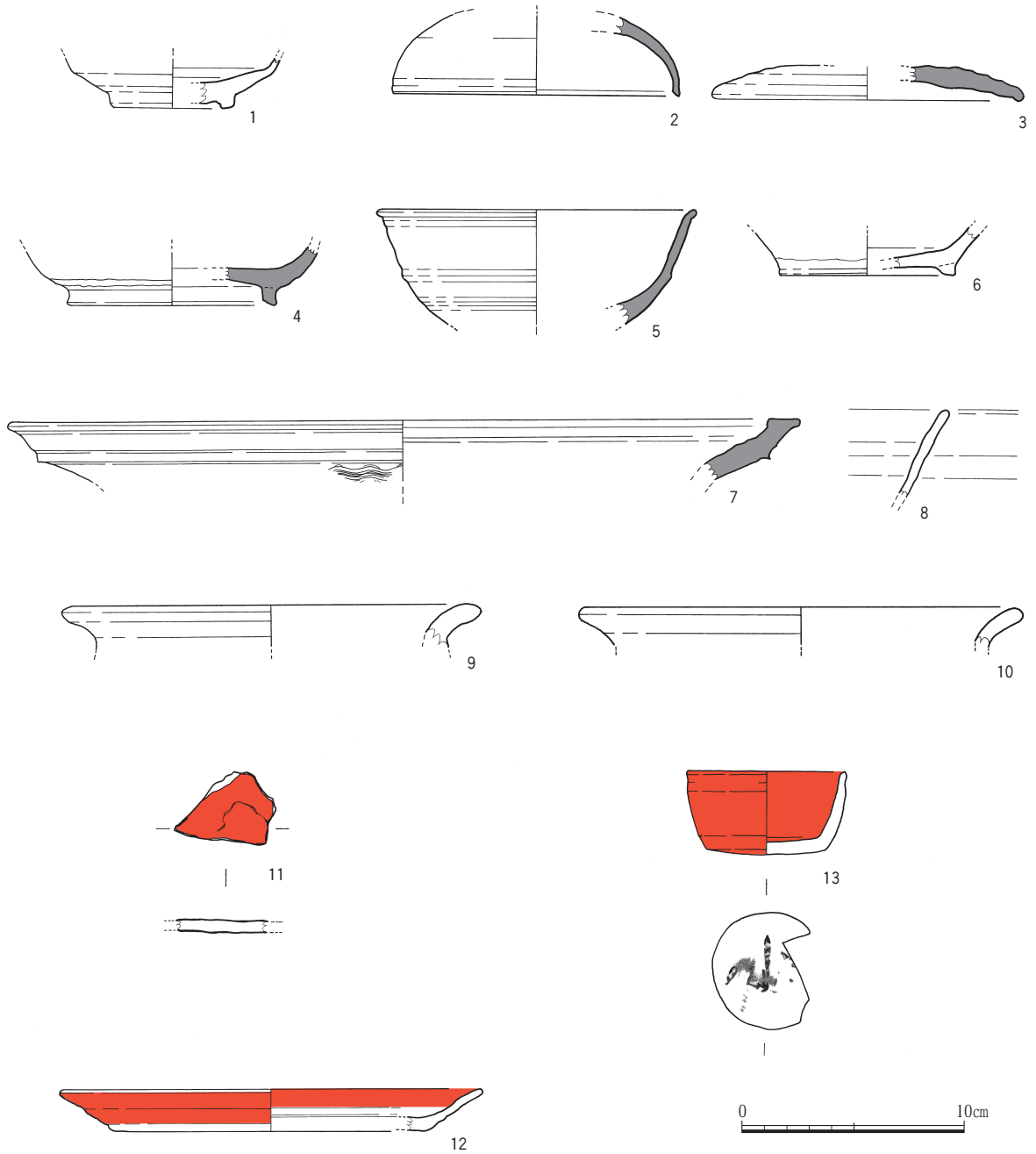
地籍図
この地区を明治期初頭の地籍図と現代の地籍図内の番地の照合から遡ると、Ⅱ区高位平坦面付近は旧健軍村と神水村の村境付近に位置し、明治地籍図の畑地境界線と1号・2号溝の平面ラインの方向がほぼ合致していることから、1号溝は近世～近代の畑地境界線と想定される。

第142図 Ⅱ区 1号・2号溝実測図(平面図：S=1/80・断面図：S=1/40)

1号溝



2号溝



第143図 II区 1号・2号溝出土遺物実測図(S=1/3)

2号溝 (第142図)

1号溝に平行し、1号溝よりさらに北方に延びながら南北に走る溝遺構。検出されたのは約22m分で、延長線上に3号溝がある。1号土壙と5号竪穴建物を切り、1号溝に切れつつ調査区外に延びる。規模は、幅が平均で1m20cmを測り、断面は半円形のU字形をなし、検出面からの深さは12~20cmを測る。底面の絶対高は検出された底面の北端と南端では南端の方が約20cm低かった。これは調査区の地形の傾斜にも合致している。

状況

規模

埋土は分層できない単一層で、やや締まるがパサパサした暗灰黄色土であった。底部付近での粘性・砂流の痕跡は無く、水を流しての使用はなかったようである。

埋土

遺物は多く出土しており、大部分が8世紀代のものである。須恵器の坏類、遺物としてはかなり豊富であることから、この周囲にあった遺構をこの溝遺構が破壊した際に混入したものとする。11・13には墨書が認められる。特に13は内外器面とも丁寧に赤色顔料が塗布されたほぼ完形の小杯である。器形が特殊であるので何か特別な用途があったと考えられる (第143図)。

出土遺物

3号溝 (第144図)

2号溝の延長上を南北方向に走り1号掘立柱建物跡の付近から西に直角に曲がる溝遺構。検出されたのは約17m分で、1号掘立柱建物と4号溝と道路遺構と考えられる硬化面-1を切り、5号溝には切られていた。幅は80cm~1m40cmを測り、断面は皿状のU字型をなし、深さは底面が緩やかに凸凹し、最も深いところで検出面より30cm、浅いところでは、5cm程を測った。

位置

形態

埋土は2層確認したが、どちらもパサパサした粒子状の土質で、溝底部付近での粘性・砂流の痕跡は無く、水を流しての使用はなかったようである。

埋土

出土遺物は小片が多かったが、5点図化した。いずれも古代の遺物で混入品である (第145図)。

出土遺物

4号溝 (第144図)

3号溝の南端で直交するように切り合っただけで検出された溝遺構。3号溝との前後関係は平面と土層から観察したが、判然としなかった。溝の方向は東西に走り、東西両端は調査区外に延びている。検出された規模は、長さが6m30cm、幅は1m15cm前後を測り、深さは検出面から約20cmで、断面は緩やかな逆台形状をなし、絶対高は検出された範囲内での差は無かった。

位置と形態

埋土は2層確認され、上層はオリブ黒のやや絞まる砂質土。下層は灰オリブでパサパサするが絞まった砂質土で、層中に基盤IV層の黄色粘質土がブロック状に含まれていた。溝底部付近での粘質・砂流の痕跡はなく、水を流しての使用はなかったようである。

埋土

出土遺物はやはり古代のもので、ここでは須恵器を3点図化した (第145図)。8世紀代後半のものである。

出土遺物

5号溝 (第144図)

3号溝を直角に切る溝遺構。方向は東西に走り、その両端は調査区外に延びている。検出された規模は、長さが5m30cm、幅は平均で1m10cmを測り、検出面からの深さは17~19cmを測る。底面の絶対高は東西で差は無くほぼ平坦で、断面は皿状のU字型を呈していた。

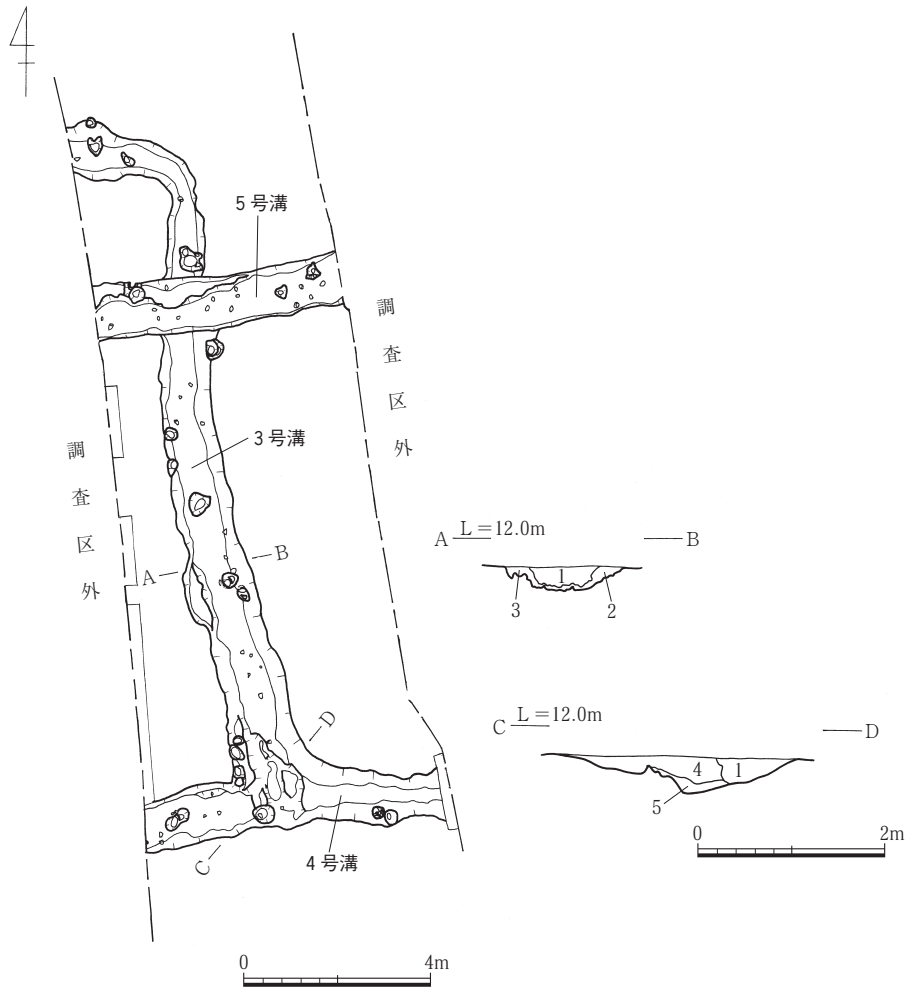
位置と形態

埋土はオリブ黒の単一層で、パサパサした粒子状の砂質土であったが、水流の痕跡は無かった。

埋土

出土遺物

遺物は須恵器の長頸壺の頸部、中型甕の口縁部の2点を図化した(第145図)。いずれも8世紀末のものである。



第144図 II区 3～5号溝実測図(平面図：S=1/80・断面図：S=1/40)

調査区内出土遺物

⑤ 調査区内の出土土器(第146図)

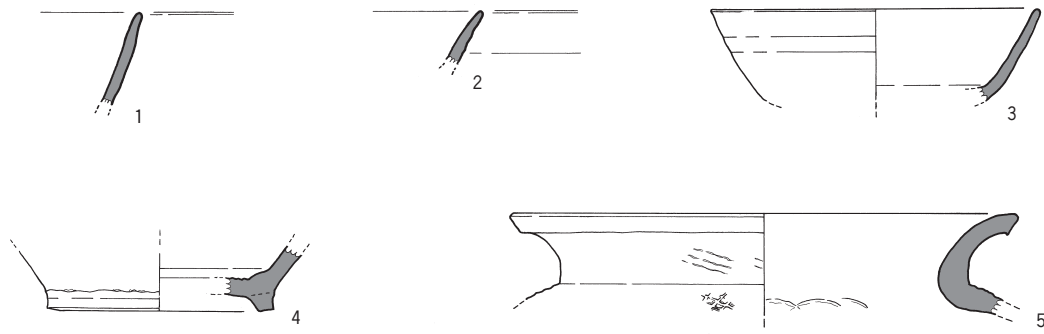
II区では包含層から多くの遺物が出土しており、遺構の伴うものではないため、省略しようとしたが、遺物としてはこの調査区の特徴を示すものと考えたので、以下に紹介することとした。

第146図にひとまとめにした。出土地点は取り上げの状況から詳細には不明であるが、大部分は遺構の集中する調査区北川のものである。したがって、本来は確認した遺構と何らかの関係があった可能性がある。

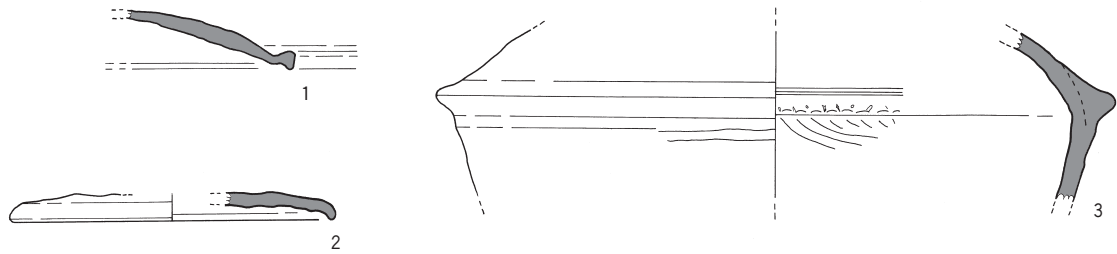
1～7は土師器で、1の甕、6の鍋が煮炊具である。2～5は坏類で供膳具として使用されたものであろう。特に2・3は内外器面とも赤彩が施されている。7は小型の短頸壺で内外器面に赤色顔料が丁寧に塗布され、特殊な容器として利用されたのであろう。

8～9は須恵器で8・10・11は坏蓋、高台付椀、坏など容器類で、食器として使用されたの

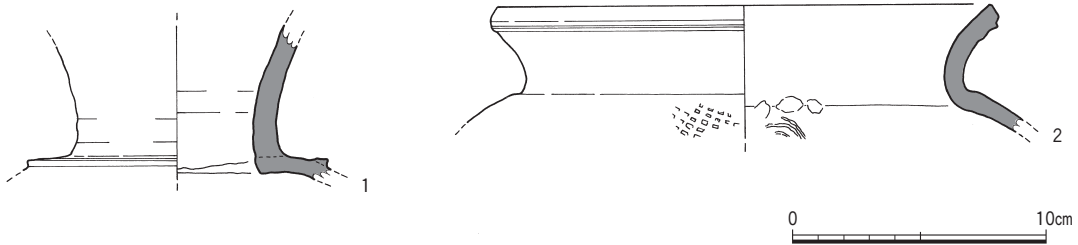
3号溝



4号溝



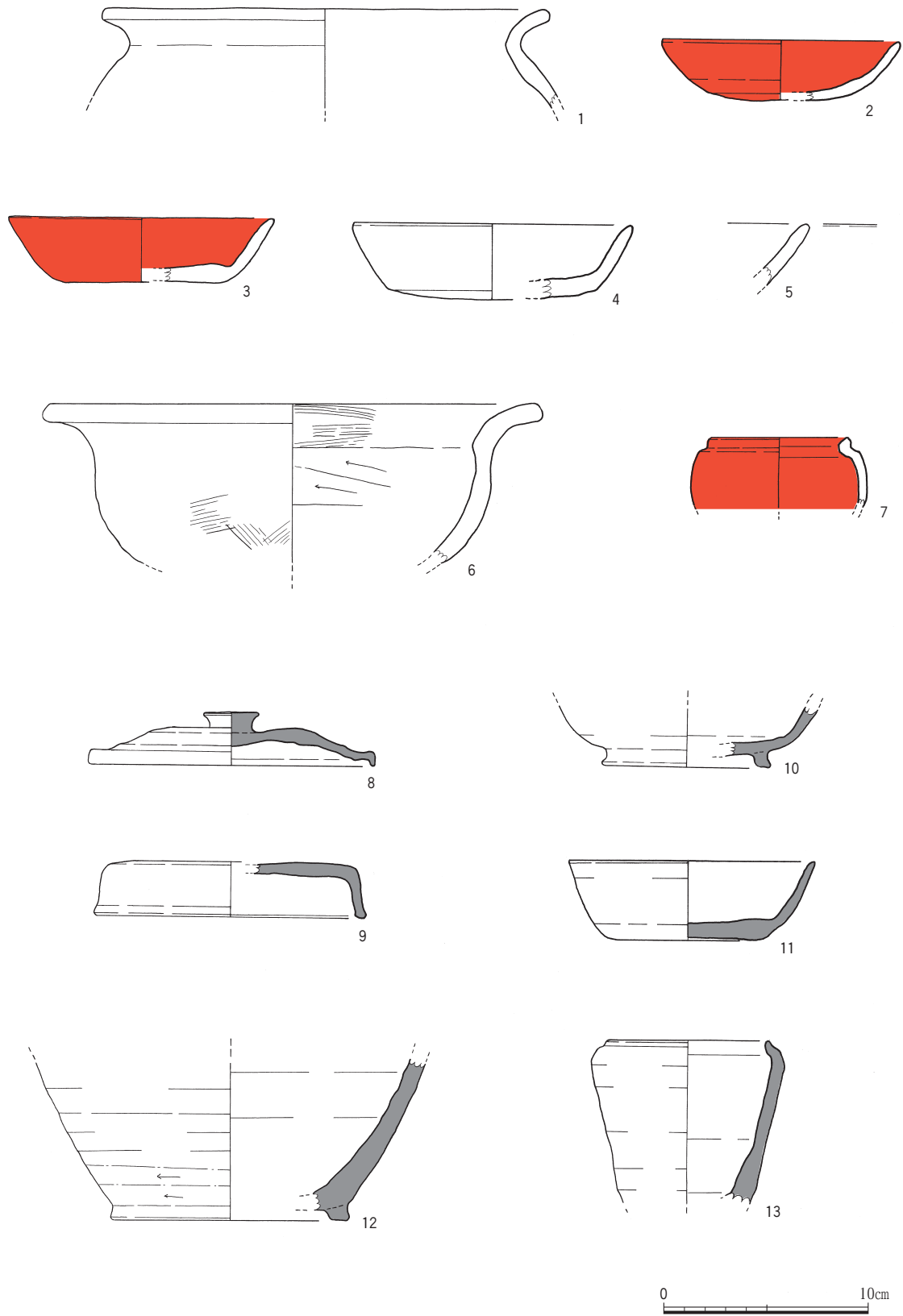
5号溝



第145図 II区 3～5号溝出土遺物実測図(S=1/3)

であろう。9は短頸壺の蓋で貯蔵容器に伴うものである。12・13は長頸壺の一部で、やはり貯蔵容器の一部である。

以上のように生活具が多いが、たまに特殊用途を考えることのできる土器があり、この遺跡の特徴に加えてもよいようである。



第146図 II区内出土遺物実測図(S=1/3)

第Ⅵ章 総括

ここでは判明した調査区の歴史を時代毎にまとめておきたい。

江津湖東Ⅰ区のトレンチ一括遺物として、ナイフ形石器が1点のみ出土した。しかし遺構は伴わず、層位も確認されなかった参考資料である。 **旧石器時代**

試掘時に早期の押型文土器が出土し、本調査では各区の遺構内や一括遺物として小破片が混ざりこんで数点出土していた。遺構としては江津湖東Ⅲ区で、調査した検出面より下層の深く掘り込んだトレンチや10号溝の底面の調査区基盤Ⅴ層直上から、他の遺構とは検出層の明らかに違う土壌（6・10・11・12号土壌）として検出された。形態も他の土壌とは違い深く掘り下げられ、遺物こそ伴わなかったが現江津湖周辺の湧水に集まる動物を捕獲するための縄文期の落とし穴遺構ではないかと推測される。 **縄文時代**

今調査では弥生時代の遺構・遺物は検出されなかった。

湖東Ⅰ区からのみ古墳時代前期の集落が検出され、他の区ではこの時期の遺構は検出されなかった。Ⅰ区の調査範囲は約140㎡と小規模であったため、集落全体の広がりや不明だが、堅穴同士での切り合いが少ないことから、大規模な集落ではなかったのかもしれない。 **古墳時代**

現在のⅠ区の景観はすぐ横に江津湖が広がっている。この江津湖自体は近世頃に築堤工事として江津塘が造成されてから出現した湖であり、当時は沼沢地が広がっていたと想定される。そのように考えるとこの集落が農地開発のために進出してきたとしても、農地として利用できる周辺の湧水谷は現健軍神社裏から市動植物園までの谷位しかない。しかしこの谷までは距離があり過ぎることから、沼沢地であった江津湖もしくは対岸の画図町付近を開発しようとしたがうまく展開できず、元の集落に撤退し、そのため短期間の集落となり、その後もここに営まれることはなかったのかもしれない。

湖東Ⅱ区～健軍京塚下Ⅱ区までで検出された遺構・遺物の大半はこの時期にあたる。遺構は、両遺跡合わせて堅穴建物23棟・掘立柱建物8棟・土壇9基・溝は9ないし12条であった。遺物は出土状況から遺構の廃棄直後と、廃棄後に流入した2次資料とに分かれるが、いずれも時期は8世紀中葉～9世紀中葉を示し、集落の存続期間は約100年間であった。 **奈良時代
～平安時代**

ここでは、調査によって判明した各遺構の特徴について述べていきたい。

検出された堅穴の特徴として、平面形態はやや崩れたものもあったが、いずれも方形プランを呈し住居用として使用されたと考えられる。床面積は調査区自体の幅が狭かったために全体が検出された堅穴は少なかったが、復元して想定しても約14㎡前後の中型と約8㎡前後の小型に分類される。主柱穴は2本と3本と無柱穴の3パターンに分れたが、湖東Ⅲ区の9号堅穴のように全4本中の2本は掘り込み、後の2本は床面に直接建てたと考えられる堅穴もあった。また、柱穴の本数と堅穴床面積の大小は比例していなかった。 **堅穴建物**

カマドの認められる堅穴は13棟であったが、他の堅穴のカマドは位置的に調査区外になってしまっただけでほとんどの堅穴に造りつけられていたと考えられる。検出されたカマドは設置に先立って、いずれもその直下に土壌が掘り込まれており、底面には被熱面が残っていないものが多かった。これは他県の調査事例からカマドの湿気対策のための土壌で、使用中に度々掘り返されたために被熱面は残らなかったようである。また、袖石として使用された石には砂質岩のものが多かった。残存状態としては天井部や壁面は著しく破壊され、それ以外の遺存状態がよかったことから、堅穴廃絶時にはカマドの本体のみを破壊する祭祀行為が行われていた可

能性も考えられる。

また堅穴の配置状況から、江津湖東地区は多数の堅穴の建て替えが同じ場所で行われており、グループ毎に分けられた。それは1と2号堅穴、3・4・5・6・7号堅穴、8・9・未掘の堅穴、10・11・12号堅穴、14・15・16号堅穴の5グループで、このことは家族などの単位集団が代替わりをしても同じ場所で引き続き居住した土地所有の概念のあったことを現し、境界は不明瞭ながら「宅地」が成立していたとも考えられる。

掘立柱建物

掘立柱建物として並んだのは8棟であった。そのうち湖東Ⅲ区の2号掘立と健軍京塚下の1号掘立の2棟は、柱穴と建物の規模が他の6棟と比べて小規模で、遺物は出土しなかったが時期の異なる建物と考えられる。これ以外の6棟は柱穴の径がいずれも55～65cmと共通し、建物の規模も掘り方もよく似ていた。しかし地区毎に時期差があり、湖東地区は8世紀の中葉から後葉、健軍京塚下は9世紀の前葉で、必ずしも同時に建てられていた建物ではなかったようである。また東柱の存在が認められ、倉庫の可能性があったのは湖東Ⅳ区の1号掘立のみであった。

土壌

この時期の土壌は9基が検出された。その大半は平面形態が楕円形で、深さが浅いものとやや深いものの2パターンに分れた。何のために掘られたのか判然としなかったが、そのなかでも、湖東Ⅳ区の2号土壌は掘立柱建物のすぐ脇に位置していることから、同掘立の廃棄用の穴ないしは何らかの関連が想定される。

また特徴的な土壌として、湖東Ⅲ区の8号土壌は枡形に丁寧に掘り込まれ、その用途は土取り用と想定される。その他に健軍京塚下Ⅱ区の3・4号土壌は内面から土器片は出土せず、貝殻のみが充填して出土した。これは当初昭和期の廃棄用の穴であろうと想定していたが、調査を進めていくうちに、昭和期の層から4号土壌の検出面までの間は2m近くあって、これを昭和期に廃棄用に掘られた穴と考え、わざわざ3mの深さの細長い穴を掘って貝殻を廃棄したことになり、最終的には9世紀前半に貝殻を廃棄した土壌と認定した。

祭祀土壌

さらに特筆すべき土壌として健軍京塚下Ⅱ区の2号土壌がある。この土壌はやや不整形な平面形態で、深さも浅かったが、内面からは土師器坏12点、須恵器坏3点、須恵器坏蓋2点が重なりあう様に出土し、いずれも完形もしくは半完形と遺存状態は良かった。土師器坏は12点中11点が内外面に赤色顔料が塗布され、そのうち1点は墨書がなされていた。さらに須恵器坏と坏蓋もセット関係を窺えた。そして何よりも、この2号土壌は4号掘立柱建物の内面のほぼ中央に位置していた。

このように掘立柱建物中央部に位置し、墨書土器を含む土師器を主体として出土する土壌は、官衙的性格の強い遺跡でみることができ、兵庫県の但馬国府の北東部に位置する上石遺跡において同様な遺構が検出され、地鎮行為に伴う祭祀遺構とされている。律令期において国衙や郡衙といった官衙施設には当時の祭祀を取り仕切っていく場としての性格もあり、2号土壌が確実に同様な性格を持った遺構であるのかはさらなる検討が必要であろうが、律令期の祭祀行為を考える上で重要な遺構である。

墨書土器

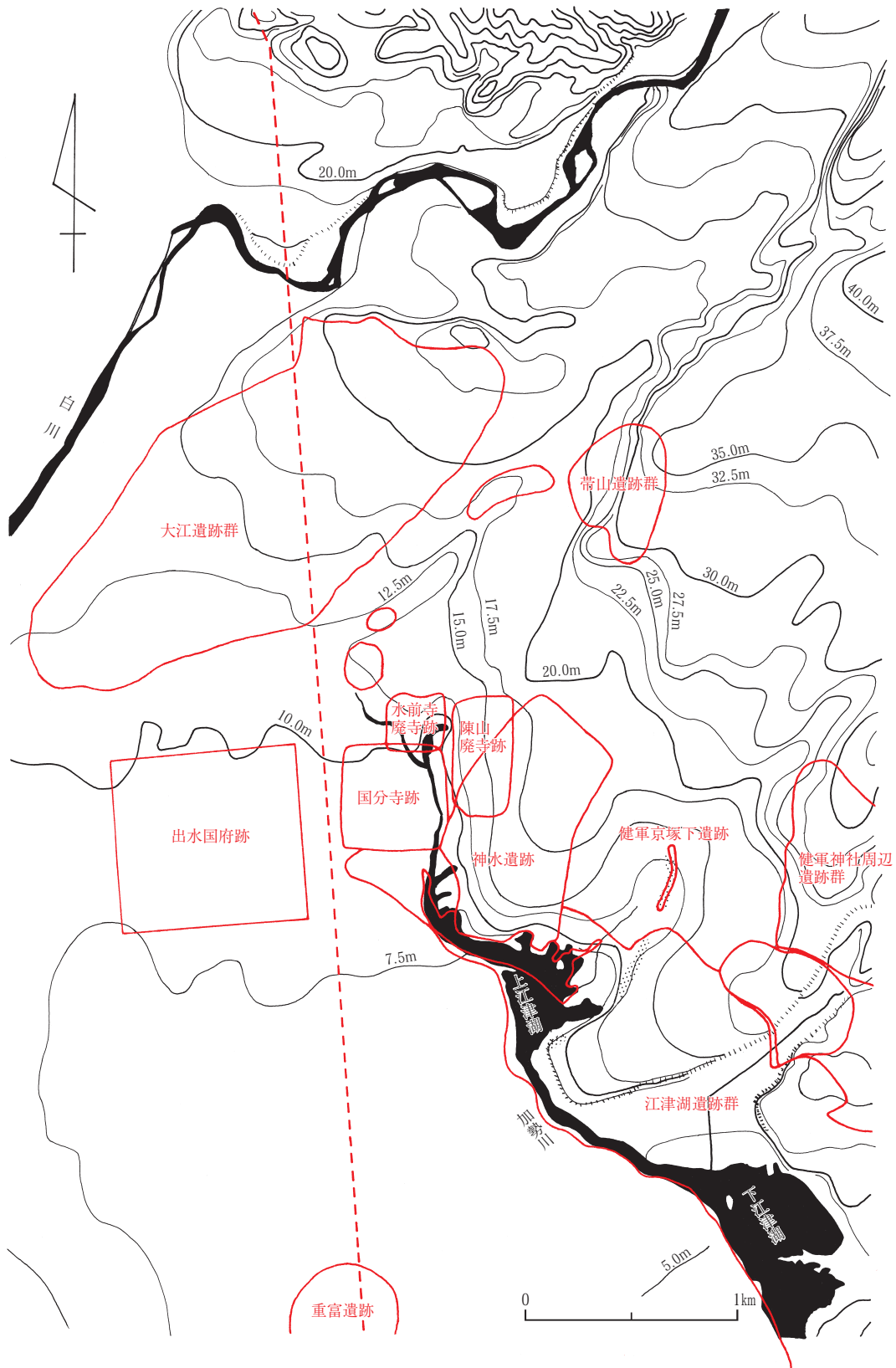
各遺構から出土した土器のうち、今調査では3点の墨書土器を確認した。そのうちの1点は文字が不鮮明であった。他の2点に書かれた文字はかなり手慣れた書き方をしており、集落の住民に日常的に文字を使用していた階層の人物がいたことを示している。

平安時代

湖東Ⅲ区の1号溝と2号土壌から12世紀の遺物が出土している。1号溝は大規模な溝で、土層を精査したが、水流の痕跡は全く無く、底面付近がガチガチに硬化していることから、道路

第3節 健軍京塚下-II区

遺構として使用された可能性が指摘される。また内面からは律令期の遺物が数多く出土したが、その中に青磁片が含まれていたことから、12世紀末の遺構と推定した。2号土壌は本文に書い



第147図 周辺の遺跡状況図

た通りで、平安時代の土壙墓と推定される。墓は他にも、参考資料であるが、越州窯系青磁の内部に火葬した人骨が湖東Ⅲ区から出土していた。これら以外にこの時期の遺物はほとんど無く、墓地に伴う少数の掘立は建っていたかもしれないが、積極的な集落自体は形成されず、基本的に原野に小規模な墓地があったという状況が推定される。

中世 鎌倉時代の遺構として湖東Ⅲ区で15号溝が検出された。溝の底面付近で若干の水流の痕跡がみられ、灌漑用の溝であった可能性はあるが、現れたのは全体のうちのごく一部であったため判然としなかった。他にこの時期の遺構は無くやはり基本的には原野あるいは畑地として利用されていたようである。

近世 健軍京塚下Ⅱ区で検出された各溝からは、律令期の土器片が多く出土したが、極少数だけ近世の磁器片が出土した。そして明治十年の地籍図を見ると、この地区は広く畑作地として利用されていたことが分かり、畑地の境界線と各溝の方向が一致していることから、1～5号溝は近世以降の畑地境界溝と窺い知れる。この状況は少し遡った近世期もさほど変化していないであろう。また、他に近世・近代の遺構が存在していないことから、畑作地としての利用はこの付近が昭和期に市街地化するまで続いていたようである。

遺跡の性格 以上、調査区の歴史と遺構の状況を時代毎に述べてきたが、最後に遺跡の性格について考えていきたい。江津湖東・健軍京塚下遺跡で居住を目的として積極的に集落を展開させていた時期は、その大半が律令期にあたる8世紀半ば～9世紀半ばまでの約100年間のみであった。

この時期の集落は、「大宝令」によって、郡一郷一里の体制が敷かれ、一里は五十戸をもって構成されることになっている。ここで周辺の遺跡をみると西へ数百メートルの地点で、託麻郡衙と想定される神水遺跡が在り、当遺跡から検出された①郡衙と同時期の集落、②墨書土器、③ある程度企画性のある掘立柱建物群、④墨書土器とこれを伴う祭祀土壙等から観て、神水遺跡との強い関連性が指摘できよう。郡衙の施設というのは、郡司が政務を執ったり儀式を行う郡庁と、それに付属する館・厨家・正倉・工房から構成される。当遺跡がこれ等のどの施設に当たるかまでは判明しなかったが、そのうちのいずれでもないにしても、郡衙の役人ないしは関連する集団の集落ではないかと十分に想定できる。

また今回の調査の結果は、文献史料から見ても符号する点がある。それは全国的に9世紀半ばの平安前期はそれまで郡衙が担ってきた徴税体制が崩れ、徴税は主に富豪層が請け負うようになる。このことは徴収した正稲である「租」をそれまでは郡倉に貯蔵していたが、徴収者が富豪層に変わると、租は里倉に貯蔵されるようになる。そのために郡衙はその機能の半分近くを失い郡衙自体も消滅し、この結果郡衙と関連する当集落も消失する。

今調査は本文中に述べたように、幹線道路の中央分離帯のみであったことは、調査区の幅が狭くほとんどの遺構が部分的な掘り下げしかできず、いわば長大なトレンチといっても過言ではない調査区の設定であった。しかしこのことを言い換えれば、当該地区である託麻台地上の広い範囲を広く浅く調査できたことにもなる。それにも係わらず唯一検出された集落は律令期のみで、その様相は突然始まり、忽然と消えるものであった。これ以外の時期の遺構は縄文期の落とし穴や、近世期の畑作地の境界溝のみであったことは、この台地が水田を展開する農村経営には不適格であることを現していると言え、そのため律令期の郡衙に関連する遺跡のみが検出されたのであろう。

觀 察 表

江津湖遺跡群湖東地区Ⅰ区

1号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備考	写真 図版	
			口 径	底 径		器 高	外 面						内 面
5	1	縄文土器 深鉢	—	—	(3.9)	—	縄文	ナデ	角閃石・長石等の小砂粒多く含む	橙	—	—	PL.4
5	2	縄文土器 深鉢	—	—	(2.4)	—	条痕	磨耗のため不明	雲母・角閃石他の小砂粒多く含む	内：暗褐 外：橙	—	—	PL.4
5	3	土師器 甕	(11.6)	—	(5.1)	—	ヨコ方向ノナデ・磨耗 刷毛後ナデ	ヨコ方向ノナデ 刷毛後ナデ	角閃石・長石・茶色粒子極少量含む	にぶい黄橙	—	—	—
5	4	土師器 甕	(13.6)	—	—	—	刷毛後ナデ・横ナデ	ナデ・横ナデ	角閃石・砂礫	にぶい赤褐	—	—	—
5	5	土師器 甕	(11.3)	—	(6.4)	—	刷毛目後ナデ 横ナデ	ナデ・横ナデ	角閃石・長石・赤褐色粒子・小礫	にぶい黄橙	—	—	—
5	6	土師器 高坏	(14.8)	—	(6.1)	—	刷毛目後ミガキ・横ナデ	ナデ	角閃石・長石・赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	—

2号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備考	写真 図版	
			口 径	底 径		器 高	外 面						内 面
7	1	土師器 甕	16	—	14	積み上げ	横ナデ・タタキ・刷毛目	ナデ・刷毛目	雲母・石英・角閃石・長石	にぶい橙	—	内面に板ナデ有り	PL.4
7	2	土師器 甕	(13.0)	—	17.0	—	横ナデ・刷毛目	横ナデ・刷毛目	長石・石英・角閃石・金雲母	明赤褐	—	—	PL.4
7	3	土師器 甕	—	—	(2.0)	—	横ナデ	横ナデ	角閃石・長石・砂粒	にぶい橙	—	—	—
7	4	土師器 甕	(3.5)	—	—	—	横ナデ	ナデ	石英・輝石	にぶい黄橙	—	—	—
7	5	弥生式土器 壺	—	—	(2.8)	—	横ナデ	横ナデ	砂粒・角閃石・茶色粒子	内：灰黄 外：にぶい黄橙	—	—	—
7	6	土師器 壺	—	—	(3.4)	—	横ナデ	横ナデ	角閃石・砂粒・茶色粒子・黒色粒子	内：にぶい黄 外：にぶい黄橙	—	—	—
7	7	土師器 甕	(13.8)	—	—	—	刷毛目・横ナデ	刷毛目・横ナデ	角閃石・長石・砂礫・砂粒	内：明黄褐 外：にぶい黄橙	—	—	—
7	8	土師器 浅鉢	10.7	—	3.3	手づくぬ 粘土紐巻上げ	ナデ	ナデ	砂粒・長石・角閃石	内：明赤褐 外：にぶい橙	—	—	PL.4
7	9	土師器 高坏	—	—	(5.2)	—	横ナデ	刷毛目	砂粒・砂礫	橙	—	脚部	—
7	10	土師器 台付鉢	—	—	(4.6)	—	刷毛目後ナデ	刷毛目後ナデ	長石・石英・輝石	明赤褐	—	脚部一部	PL.4
7	11	土師器 椀	(11.0)	—	5.4	積み上げ	ヘラ削り・ナデ	ミガキ・ナデ	長石・石英・角閃石	内：灰黄褐 外：にぶい黄橙	—	黒斑有り	PL.4
7	12	土師器 皿	—	—	(1.4)	積み上げ	ケズリ・横ナデ	横ナデ	輝石・雲母・砂粒	にぶい橙	—	—	—

3号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
9	1	土師器 甕	—	—	—	ナデ	ナデ	砂粒・黒色粒子・茶色粒子	浅黄	—		—
9	2	弥生式土器 台付鉢	—	14.7	—	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	砂粒・黒色粒子・茶色粒子	内：黄橙 外：橙	—		—

4号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
12	1	土師器 高坏	16.6	—	積み上げ	横ナデ	横ナデ	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	煤付着		PL.4
12	2	土師器 高坏	16.3	12.1	積み上げ	ミガキ・ナデ	ナデ・ヘラ削り	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄橙	—		PL.4
12	3	土師器 高坏	17.8	12.5	積み上げ	ナデ・ミガキ	ケズリ・ナデ	長石・輝石	橙	煤付着		PL.4
12	4	土師器 高坏	17.3	11.6	積み上げ	ナデ・ミガキ	ヘラ削り・刷毛目	角閃石・長石・石英・雲母	明赤褐	—		PL.4
12	5	土師器 高坏	17.9	11.2	積み上げ	ナデ・ミガキ	ナデ・ヘラ削り	長石・石英	暗灰黄	煤付着		PL.4
12	6	土師器 高坏	16.4	13.1	積み上げ	刷毛目・ケズリ・ナデ	刷毛目・ケズリ・ナデ	雲母・角閃石・長石・石英	橙	—		PL.4
13	7	土師器 甕	17.2	—	積み上げ	刷毛目・横ナデ	ヘラ削り・横ナデ	長石・石英・角閃石	内：灰黄褐 外：にぶい黄橙	煤付着		PL.5
13	8	土師器 甕	15.4	—	積み上げ	刷毛目・横ナデ	刷毛目・ヘラ削り 横ナデ	雲母・輝石・長石	橙	煤付着		PL.5
13	9	土師器 甕	17.1	—	積み上げ	刷毛目・横ナデ	ヘラ削り・横ナデ	角閃石・砂粒・砂礫	橙	—	黒斑有り	PL.5
13	10	土師器 甕	16.4	—	積み上げ	刷毛目・横ナデ	ヘラ削り	長石・石英・角閃石・輝石	内：黄褐 外：にぶい黄	煤付着	黒斑有り	PL.5
13	11	土師器 甕	—	—	積み上げ	刷毛目	ヘラ削り・指頭圧痕	雲母・角閃石・石英	内：黒褐 外：赤	煤付着		—
14	12	土師器 甕	15.3	—	積み上げ	刷毛目・ナデ	ナデ	輝石・長石・角閃石	内：にぶい黄橙 外：にぶい赤橙	煤付着	穿孔有り	PL.5
14	13	土師器 甕	13.4	—	積み上げ	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	雲母・石英・長石	内：にぶい褐 外：にぶい黄橙	煤付着	穿孔有り・黒斑有り	PL.5
14	14	土師器 甕	12.4	—	積み上げ	刷毛目	刷毛目・ヘラ削り	輝石・長石	内：灰黄褐 外：橙	煤付着		PL.5
14	15	土師器 甕	10.8	—	積み上げ	刷毛目	刷毛目・指頭圧痕	長石・石英・角閃石	暗灰黄	煤付着		PL.5
14	16	土師器 甕	13.9	—	積み上げ	刷毛目・横ナデ	ヘラ削り・横ナデ	長石・石英	内：暗灰黄 外：灰黄褐	—	黒斑有り	PL.5
14	17	土師器 甕	15.8	—	積み上げ	刷毛目・横ナデ	ヘラ削り・横ナデ	長石・石英・角閃石	暗灰黄	煤付着		PL.5

15	18	土師器 甕	—	—	(10.5)	積み上げ	刷毛目	ケズリ	雲母・石英・長石	にぶい褐	—	黒斑有り	—
15	19	土師器 甕	11	—	13.7	積み上げ	横ナデ・刷毛目・ミガキ	刷毛目・ケズリ・横ナデ	雲母・長石・石英	にぶい橙	煤付着	黒斑有り	PL.5
15	20	弥生式土器 壺	—	—	(3.1)	積み上げ	刷毛目・横ナデ	刷毛目	赤色酸化	橙	—	刻み目文	—
15	21	弥生式土器 壺	—	—	(3.9)	積み上げ	横ナデ	摩滅	輝石	浅黄	—	刻み目文	—
15	22	土師器 高坏	—	—	(3.0)	積み上げ	ミガキ	ナデ	雲母・石英・角閃石・長石	橙	—	3カ所穴が開いている 脚台	—
15	23	土師器 台付甕	—	—	(5.8)	積み上げ	ケズリ・刷毛目	ナデ	雲母・石英・角閃石・長石	にぶい橙	—	—	—
15	24	土師器 高坏	16	—	(12.5)	積み上げ	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ	長石・砂粒	にぶい褐	—	—	—
15	25	土師器 鉢	10.6	4.1	5.3	—	横ナデ	横ナデ	石英・石英	暗灰黄	—	黒斑有り	PL.5
15	26	土師器 小型丸底壺	12	—	(6.9)	積み上げ	ナデ・ミガキ	ミガキ・ナデ	輝石・長石・砂粒	にぶい黄橙	—	—	—
15	27	土製模造品 鉢形	3.6	—	3.0	積み上げ	ナデ	指ナデ	雲母・長石・石英	にぶい橙	煤付着	爪あと有り	PL.5

4号竪穴建物土製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm, g)		胎土	色調	写真 図版	
			長さ	最大孔径				
15	28	土鉢	4.7	1.3	0.45~0.35	6.7	にぶい黄褐	—

I区内出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版	
			口径	底径		器高	外面						内面
16	1	縄文土器 深鉢	—	—	(5.8)	積み上げ	工具によるナデ	工具によるナデ	雲母・石英・長石	—	貝殻条痕	—	
16	2	弥生式土器 甕型土器	—	—	—	—	摩滅	摩滅	長石・砂粒・茶色粒子	—	—	—	
16	3	土師器 甕	—	—	(8.1)	積み上げ	刷毛目・横ナデ	刷毛目・ケズリ・ナデ	長石・輝石	—	内：橙 外：にぶい黄褐	—	
16	4	土師器 甕	—	—	(3.5)	積み上げ	横ナデ	横ナデ	雲母・石英・角閃石・長石	—	にぶい赤褐	—	
16	5	土師器 甕	—	—	(4.5)	積み上げ	横ナデ	横ナデ	輝石	—	にぶい黄橙	—	
16	6	土師器 甕	—	—	(4.0)	積み上げ	横ナデ	横ナデ	雲母・石英・角閃石	—	にぶい黄橙	—	
16	7	土師器 壺	—	—	(4.4)	積み上げ	刷毛目・ナデ	刷毛目・横ナデ	長石・金雲母・輝石	—	内：橙 外：明赤褐	刻み目文	—

16	16	8	土師器 甕	—	—	(4.5)	—	ナデ		刷毛目・ナデ		輝石・長石	橙	—	—
16	16	9	土師器 甕	—	積み上げ	(3.3)	刷毛目			刷毛目・指頭圧痕		雲母・石英・角閃石	にぶい黄橙	—	流水文
16	16	10	土師器 坏	(11.6)	積み上げ	(4.0)	横ナデ			横ナデ		長石・砂粒・茶色粒子・黒色粒子	にぶい黄褐	—	底部：糸切り痕
16	16	11	土師器 坏	—	—	(1.1)	ヘラ削り・ナデ			横ナデ		輝石・角閃石・石英	にぶい黄橙	—	—
16	16	12	土師器 坏	—	—	(1.7)	ヘラ削り			回転ナデ		長石・石英	内：明褐 外：橙	—	—
16	16	13	土師器 鉢	—	—	(3.5)	ミガキ			ミガキ		輝石・長石・赤色酸化	にぶい黄橙	—	—
16	16	14	須恵質土器 甕	—	積み上げ	(5.2)	タタキ・格子目文			ナデ		輝石	内：灰 外：にぶい黄	—	—

I 区内瓦観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	長さ・直径	幅・外縁幅	厚さ・瓦当厚	瓦当高・外縁高	凹面・瓦当裏	凸面・瓦当表	連結側面	凹面・広端面	側面	備考	写真 図版
16	15	瓦	不明	1.9	—	2.0cm	布目状痕	—	ナデ	—	—	—	—	—

I 区内石製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	石材	法量 (cm, g)			角度 (えぐり)		備考	写真 図版
				長さ	幅	厚み	角度 (刃部)	角度 (えぐり)		
16	16	石鏃	黒曜石	4.15	2.3	0.65	4.2	52.0°	33°	—
16	17	ナイフ形石器(?)	黒曜石	(4.1)	2.2	(1.1)	6	40.0°	—	—

江津湖遺跡群 江津湖東一Ⅲ区

1号竪穴建物出土遺物実測図

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
24	1	土師器 高坏	—	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒少(茶少・白少)	浅黄橙	—		—

2号竪穴建物出土遺物実測図

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
27	1	須惠器 鉢	—	—	積上げ	回転ナデ→沈線	回転ナデ	砂粒多(長少・茶少・白多)	浅黄橙	—		—
27	2	土師器 甕	—	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	砂粒多(茶多・白多)	にぶい黄橙	—		—
27	3	須惠器 坏	—	—	ロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰白	—		—
27	4	土師器 甕	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・白少)	にぶい橙	有り	外面に煤付着	—
27	5	土師器 坏	—	(9.9)	積上げ	横ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒多(長多・茶少・白少)	橙	—		—
28	6	須惠器 壺	—	—	積上げロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・黒多)	外：灰白 内：灰オリーブ	—	胴部最大径(19.8cm)	—
28	7	土師器 甕or銅	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・長多)	黒褐	有り	外面に煤付着	—
28	8	土師器 甕	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(長少・白多)	にぶい黄橙	—		—
28	9	土師器 坏	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・茶少・白多)	橙	—	赤彩	—

3号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
31	1	土師器 鉢	—	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：下から上への荒いナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	砂粒多(長多・白多)	外：黄橙 内：黄褐	有り	外面頸部に煤付着	—
31	2	須惠器 高台付坏	—	(10.2)	積上げロク口 貼付け高台	回転ナデ 底部：ヘラ切り後未調整	回転ナデ	砂粒少(白少)	緑灰	—		—

3号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
34	5	土師器 甕	—	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	砂粒やや多(長少・茶多・白多)	にぶい黄橙	—		—

34	6	土師器 銅	—	—	—	積上げ	口縁～胴部上半：横ナデ 胴部下半：ハケ 回転ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ 回転ナデ	砂粒多(角少・長多・白多)	外：黒褐 内：黄橙	有り	外面全体に煤付着	—
34	7	須恵器 鉢	—	—	—	積上げロクロ 貼付け高台	胴部下半：タタキ→全体 回転ナデ	回転ナデ	砂粒多(長少・白多・砂レキ少)	灰	—	—	—
34	8	須恵器 壺or鉢	—	(12.6)	—	積上げロクロ 貼付け高台	回転ナデ 底部：ハラ切り後ハラケズリ	ナデ	砂粒多(角少・長少・黒多・白多)	明オリーヴ灰	有り	転用硯	—
34	9	須恵器 鉢	—	(11.4)	—	積上げロクロ	ハラケズリ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰	—	—	—
34	10	須恵器 壺	—	—	—	積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰黄褐	—	—	—
34	11	須恵器 坏蓋	—	—	—	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白少)	灰	—	—	—
34	12	須恵器 坏蓋	—	—	—	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白少)	にぶい赤褐	—	—	—
34	13	土師器 坏	(10.4)	6.0	4.7	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・茶少)	橙	—	—	PL.13
34	14	土師器 坏	(12.4)	(7.0)	5.0	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・白少)	にぶい橙	—	—	—
34	15	土師器 坏	—	(8.0)	—	積上げ	横ナデ 底部：ハラ切り後ナデ→線刻	横ナデ	砂粒少(角少・長少・茶少)	橙	—	—	—
34	16	土師器 坏	—	(9.4)	—	積上げ	ナデ	ナデ	砂粒少(白少・砂レキ少)	橙	—	—	—
34	17	須恵器 坏	—	(6.2)	—	積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒やや多(長少・白多)	灰	—	—	—
34	18	須恵器 坏	—	—	—	積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白少)	暗赤褐	—	—	—
34	19	須恵器 坏	—	—	—	積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・白やや多)	オリーヴ灰	—	—	—
34	20	土師器 高台付坏	(13.4)	8.4	7.3	積上げ 貼付け高台	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(角少・長少・茶やや多・ 白多)	橙	—	—	PL.13
34	21	土師器 高台付坏	(13.6)	9.0	7.7	積上げ 貼付け高台	横ナデ 底部：ハラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長多・白多)	橙	—	—	PL.13
34	22	土師器 高台付坏	—	(8.6)	—	積上げ 貼付け高台	横ナデ 底部：ハラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・長少・茶少・白多)	にぶい橙	—	—	—
34	23	土師器 高台付坏	—	8.2	—	積上げ 貼付け高台	横ナデ 底部：ハラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・金少・長少・茶多)	橙	—	—	—
35	24	須恵器 高台付坏	—	(9.4)	—	積上げロクロ 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白極少)	灰オリーヴ	—	—	—
35	25	須恵器 高台付坏	—	(9.0)	—	積上げロクロ	回転ナデ 底部：ハラ切り→ハケ→ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰	—	底部外面にハケメ痕跡	—
35	26	須恵器 高台付坏	—	—	—	積上げロクロ 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	外：灰 内：にぶい橙	—	—	—

6号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
32	3	土師器 甕	—	—	—	口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ	口縁：横ナデ 頸部：横ハケ 胴部：ハラケズリ	砂粒極多(角多・長多・茶少)	にぶい黄橙	有り	黒斑有り 煤付着	—
32	4	須恵器 椀	(14.6)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰白	—	—	—

8号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
38	1	土師器 甕	—	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・長少・白多)	浅黄	—	—	—
38	2	土師器 甕	—	—	—	横ナデ	口縁：横ナ 胴部：ハラケズリ	砂粒多(角少・長多・白多)	暗灰黄	有り	外面に煤付着	—
38	3	土師器 甕	23.8	—	15.8	口縁：横ナデ 胴部：斜め、縦ハケ→ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ハラケズリ	砂粒多(角多・金多・茶多・白多・ 砂レキ多)	外：淡黄 内：にぶい黄橙	有り	内外面に部分的に煤付 着	PL.13
38	4	土師器 甕	—	—	—	ナデ	ハラケズリ	砂粒多(長少・茶多・白多)	外：浅黄 内：暗灰黄	有り	胴部中位付近に帯状に 煤付着	—

9号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
41	1	須恵器 坏	(13.4)	(6.3)	3.7	回転ナ 体部下位：ハラケズリ 底部：ハラ切り後ハラナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰白	—	—	PL.13
41	2	土師器 鉢	(17.4)	—	—	口縁：横ナデ 体部下位：ハラケズリ	横ハケ→ナデ	砂粒多(角多・長多・金少)	赤褐	—	赤彩	—
41	3	須恵器 盤(?)	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(黒少)	浅黄	—	—	—
41	4	土師器 鍋	26.4	—	(12.6)	口縁：横ナデ 胴部上半：ナデ 胴部下半：ハラミガキ	口縁：横ナデ 胴部：ハラケズリ	砂粒多(長少・白多・砂レキ極多)	外：にぶい黄橙 内：黄褐	有り	内外の全面に部分的に 煤付着や吹きこぼし痕 有り	PL.13
41	5	土師器 小型壺	—	(6.8)	—	横ナデ 底部：ハラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・長少・茶多・金多・ 白多)	浅黄橙	—	—	—
41	6	土師器 高坏	—	(10.3)	—	横ナデ 接合部：円盤 充環	横ナデ 胴部：横ナデ 坏部：同心円状のナデ	砂粒少(角少・長少・白多)	浅黄橙	—	—	PL.13

111号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版		
			口径	底径		器高	外面						内面	
45	1	土師器 坏	13.8	8.3	3.0	積上げ	横ナデ	横ナデ→一部ヘラミガキ 底部：ヘラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒やや多(角少・長少・白多・茶多)	橙	—	体部と底部外面にヘラミガキ赤彩	PL.13
45	2	土師器 坏	(14.8)	(9.4)	3.2	積上げ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(金多・長多・茶少)	浅黄橙	有り	口縁に帯状に薄い煤付着、赤彩	—
45	3	土師器 坏	—	—	—	積上げ	横ナデ	体部上半：横ナデ 体部下半：ヘラ削り	横ナデ	砂粒少(金多・角少・長少)	橙	—	体部外面に黒斑有り	—
45	4	土師器 甕	—	—	—	積上げ	横ナデ	ハケ(6本/cm)	縦方向のヘラ削り	砂粒多(長多・石多)	外：黒褐 内：にぶい黄橙	—	—	—
45	5	須恵器 高台付坏	—	(7.6)	—	積上げ 口クロ 貼付け高台	横ナデ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・黒少・多)	灰	—	底部外面に一部指頭圧痕	PL.13
45	6	須恵器 高台付坏	(15.2)	(8.9)	5.8	積上げ 口クロ 貼付け高台	横ナデ	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒多・長少・小)	灰白	—	—	—
45	7	須恵器 鉢	18.8	—	10.6	積上げ 口クロ 貼付け高台	横ナデ	ヘラ削り→回転ナデ	上半：回転ナデ 下半：不定方向のナデ	砂粒多(黒多・白多)	灰	—	体部外面に重ね焼き痕	PL.13
45	8	須恵器 甕	—	—	—	積上げ 口クロ 頸部：円蓋閉塞	横ナデ	格子目タタキ	平行タタキ	砂粒少(白少・黒少)	外：淡黄 内：灰	—	頸部径：(9.8cm)	PL.13
45	9	須恵器 壺	—	—	—	積上げ 口クロ 頸部：円蓋閉塞	横ナデ	回転ナデ	同心円文→回転ナデ	砂粒少(黒少・白極少)	オリーヴ褐	—	肩部径：(17.0cm)	—
46	10	須恵器 甕	—	—	—	タタキ成形	—	—	—	砂粒少(角少)	外：オリーヴ灰 内：灰白	—	—	—
46	11	須恵器 壺	—	12.7	—	口クロ 貼付け高台	横ナデ	回転ナデ 体部下半：ヘラ削り	回転ナデ 底部：不定方向のナデ	砂粒少(白多・黒少)	灰	—	—	PL.13
46	12	須恵器 壺	—	12.2	—	口クロ 貼付け高台	横ナデ	タタキ→回転ナデ 同心円文	タタキ→回転ナデ 指押さえ	砂粒やや多(黒多・白少)	鈍い淡黄	—	—	PL.13
46	13	土師器 坏	13.6	(9.5)	3.15	積上げ	横ナデ	横ナデ→一部ヘラミガキ 底部：ヘラ切り後ナデ	横ナデ→一部ヘラミガキ	砂粒少(白少・角少・少)	明赤褐	—	赤彩	PL.13
46	14	土師器 坏	11.8	7.0	3.4	積上げ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(茶やや多・石多)	橙	—	口縁に灯明跡	PL.13

13号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版		
			口径	底径		器高	外面						内面	
49	1	土師器 甕	—	—	—	積上げ	横方向のナデ	横方向のナデ	横方向のナデ	砂粒極多(角多・長多・茶多)	外：暗灰黄 内：黄橙	—	外面に薄く煤付着	—
49	2	土師器 坏	—	(7.4)	—	積上げ	ナデ	ナデ	ナデ	砂粒少(茶少・白少)	外：明黄褐 内：暗褐	—	—	—
49	3	土師器 坏	(13.0)	(8.8)	2.5	積上げ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(白少・金少・茶少)	外：にぶい褐 内：橙	有り	体部外面に煤?	—
49	4	須恵器 坏蓋	(18.8)	—	—	積上げ 口クロ	横ナデ	横ナデ	回転ナデ	砂粒少(角少・白少)	明オリーヴ灰	—	外面の一部に自然袖上面に重ね焼き痕	PL.14
49	5	須恵器 坏	12.6	18.2	3.5	口クロ	横ナデ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(金多・白少)	灰黄	—	完形、全体やや歪んでいる	PL.14

49	6	須恵器 高台付坏	—	—	槽上げロクロ口 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒多(長多・白少)	灰白	—	破損箇所が多く法量不明	—
49	7	須恵器 高台付坏	—	(9.2)	槽上げロクロ口 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒やや多(長やや多・白やや多・ 黒やや多)	灰	—		PL.14
49	8	須恵器 高台付坏	(14.6)	(7.8)	6.1 槽上げロクロ口 貼付け高台	回転ナデ 底部へラ切り後ナデ	回転ナデ 底部：不定方向のナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰白	—		—
49	9	須恵器 坏	(14.0)	—	— 槽上げロクロ口	回転ナデ 体部に指先による横ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白少)	灰	—		—

13号竪穴建物土製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm, g)		胎土	色調	備考	写真 図版
			長さ	最大孔径 最大孔径 重量				
49	11	土鉢	5.58	1.57 0.6	9.7	にぶい黄橙		PL.14

13号竪穴建物鉄製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm, g)			備考	写真 図版
			残存長	最大幅	重量		
49	12	鉄鎌?	(4.63)	(1.88)	(5.2) 11°		PL.14

13号竪穴建物石観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	石材	法量 (cm, g)				備考	写真 図版
				長さ	幅	厚み	重量		
49	10	石鎌	チャート	2.25	1.9	0.4	1	47° 120°	—

14号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
53	1	土師器 坏	(13.6)	(9.0)	3.5 槽上げ	横ナデ 底部：へラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・白少・黒やや 多)	橙	—		—
53	2	土師器 坏	—	—	— 槽上げ	ハクリのため不明		砂粒少(白少・茶少)	浅黄橙	—		—
53	3	土師器 壺	—	—	— 槽上げ	横ナデ	へラ削り	砂粒やや多(長少・黒多)	浅黄橙	—	赤彩	—

14号竪穴建物土製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm, g)		胎土	色調	備考	写真 図版
			長さ	最大孔径 最大孔径 重量				
53	4	土鉢	6.4	1.35 0.4	11.3 雲母・輝石	にぶい橙		—

1号掘立柱建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
56	1	土師器 環	(14.4)	(8.0)	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒・金雲母・茶色・白色粒子	橙	—	—	—
56	2	土師器 小型甕	(12.6)	—	—	横ナデ	ヘラケズリ・横ナデ	砂粒・長石・角閃石・白色粒子	にぶい橙	—	—	—
56	3	須恵器 高台付環	(10.7)	(6.4)	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒・白色粒子	外：オリーブ黒 内：灰	—	—	—

2号掘立柱建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
58	1	土師器 甕	(33.6)	—	—	口縁：横ハケ 胴部：縦ハケ	口縁：横ハケ 胴部：ヘラケズリ	砂粒多(長多)	にぶい黄橙	—	—	—

2号土壙出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
62	1	土師質 小皿	7.6	6.4	1.1	回転ナデ 底部：糸切り離し後未調整	回転ナデ	砂粒少(茶少)	浅黄橙	—	—	PL.14
62	2	土師質 小皿	8.5	7.3	1.5	回転ナデ 底部：糸切り離し後未調整	回転ナデ	砂粒やや多(茶やや多)	浅黄橙	—	—	PL.14
62	3	土師質 小皿	8.4	6.9	1.2	回転ナデ 底部：糸切り離し後未調整	回転ナデ	砂粒やや多(茶やや多・白やや多)	橙	—	—	PL.14
62	4	土師質 小皿	7.7	6.3	1.4	回転ナデ 底部：糸切り離し後未調整	回転ナデ	砂粒やや多(茶やや多・白少)	橙	—	—	PL.14

5号土壙出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
66	1	須恵器 高台付環	—	8.2	—	回転ナ 底部：ヘラ切り後同心円状のナデ	不定方向のナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰	—	—	—

8号土壙出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
70	1	土師器 環	(10.4)	(6.6)	2.35	横ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒極少(金少)	内外：橙 外底部：明黄褐	—	—	—
70	2	土師器 環	—	(7.6)	—	横ナデ 底部：ヘラ切り後未調整	横ナデ	砂粒少(金少・茶少・砂レキ少)	橙	—	—	—
70	3	土師器 碗	(7.2)	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・白少)	明赤褐	有り	—	—

内外面に薄く煤付着
赤彩

70	4	土師器 坏	(15.0)	(8.8)	2.8	積上げ	横ナデ・下半：ヘラ削り 底部：ヘラ切り後未調整	横ナデ	砂粒少(角少・茶少・白少)	外：橙 内：浅黄橙	—	底部外面に墨書「東」か 赤彩	—
70	5	土師器 坏	12.6	8.8	3.4	積上げ	横ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(金極多・茶少)	明褐	有り	外面に薄く煤付着 内面赤彩	—
70	6	土師器 坏	(13.0)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(長少・茶多・白少)	にぶい黄橙	—	—	—
70	7	土師器 坏	(14.0)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・白少)	橙	—	13号竪穴出土と接合	—
70	8	土師器 甕	—	—	—	積上げ	縦ハケ	横ナデ	砂粒多(角多・白多)	浅黄橙	—	—	—
70	9	土師器 甕	—	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・金少・茶少・白少)	橙	—	—	—
70	10	須恵器 坏蓋	—	—	—	積上げロクロク	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少・黒少)	灰	—	—	—
70	11	須恵器 高台付坏	—	—	—	積上げロクロク 貼付け高台	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	不定方向のナデ	砂粒少(長少)	灰白	—	底部外面に墨書	—
70	12	須恵器 坏	(13.8)	(7.6)	3.9	積上げロクロク	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	砂粒少(白少・黒少)	灰白	—	体部外面と底部外面に 墨書	—

1号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
80	1	土師器 甕	—	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ→横ナデ 胴部：ケズリ	横ナデ	橙	—	—	—
80	2	土師器 甕	—	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	横ナデ	にぶい黄橙	—	—	—
80	3	土師器 甕	—	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：縦ハケ	横ナデ	横ナデ	淡黄	—	—	—
80	4	土師器 鉢	—	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	横ナデ	灰黄	有り	内面に煤付着	—
80	5	土師器 甕	(26.0)	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	横ナデ	橙	有り	外面頸部に煤付着	—
80	6	土師器 小型甕	(13.2)	—	積上げ	上半：横ナデ 胴部下半：縦ハケ	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	有り	内面に帯状に煤付着	PL.14
80	7	土師器 高坏	—	—	—	横ナデ	横ナデ	横ナデ	橙	—	外面赤彩、脚部	—
80	8	土師器 黑色碗	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	ナデ	外：黒 内：橙	—	内面赤彩	—
80	9	土師器 碗	—	—	積上げ	ヘラミガキ 体部下位：ケズリ	横ナデ	横ナデ	外：灰白 内：黒	—	—	—
80	10	土師器 高台付坏	—	(8.6)	積上げ 貼付け高台	横ナデ	横ナデ	横ナデ	橙	—	—	PL.14
80	11	土師器 鉢(?)	—	(7.6)	—	横ナデ	横ナデ	ハクリのため不明	外：にぶい褐 内：ハクリ	—	—	—
80	12	土師質 小皿	—	—	積上げ	横ナデ 底部：糸切り離し	横ナデ	横ナデ	橙	—	—	—

80	13	須恵器 坏蓋	—	—	—	口クロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰	—	—
80	14	須恵器 高台付坏	—	(11.0)	—	積上げ口クロ 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・黒少・白少)	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	—	—
80	15	須恵器 壺	—	—	—	口クロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰オリーブ	—	—
80	16	須恵器 壺(?)	—	(9.4)	—	積上げ口クロ	回転ナデ	不定方向のナデ	砂粒少(黒多・白少)	灰	—	—
80	17	須恵器 甗	(22.7)	—	—	タタキ成形	格子目状タタキ→回転ナデ	タタキ当て具痕→回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	外：明赤褐 内：にぶい褐	—	—
80	18	須恵器 甗	—	—	—	—	タタキ→回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・黒少・白少)	外：明黄褐 内：にぶい橙	—	頸部片
80	19	須恵器 大甗	(47.3)	—	—	積上げ口クロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰	—	—
81	20	須恵器 大甗	(43.8)	—	—	積上げ口クロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(砂レキ少)	外：灰 内：暗灰黄	—	—
81	21	須恵器 大甗	—	—	—	積上げタタキ	格子目状タタキ→回転ナデ	同心円文→回転ナデ	砂粒少(黒極少)	外：オリーブ黒 内：灰オリーブ	—	口縁上部に波状紋
81	22	須恵器 長径壺	16.0	—	—	積上げ口クロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒やや多(黒やや多・白少)	灰	—	頸部最小径：7.8cm
81	23	須恵器 壺	—	10.7	—	積上げ口クロ	斜めヘラケズリ→回転ナデ 底部：底部切り離し後未調整	回転ナデ	砂粒やや少(角少・長少・白少)	外：灰 内：にぶい橙	—	内面に竹管文による刺 突痕
81	24	青磁 碗	—	—	—	口クロ成形	ナデ	横ナデ	黒色・黒灰色粒子	内外：C-216 すずかけ の樹の色	—	鎗蓮弁文 龍泉窯系青磁
81	25	青磁 碗	—	—	—	口クロ成形	ヘラ削り	ナデ	灰色硬質胎土	内外：C-228 焦茶色	—	縦の樋描文・点描文 同安窯系青磁

1号溝石製品等観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	石 材	法 量 (cm, g)			備 考	写真 図版
				長さ	幅	厚み		
82	26	温石	滑石	(12.55)	(7.7)	(2.6)	(405.6)	—
82	27	磨製石斧	安山岩	(11.35)	(7.9)	(4.0)	(567.4)	—
82	28	石鍋	滑石	(3.5)	—	—	(165.4)	—
82	29	石鍋	滑石	(5.0)	—	—	(220.6)	—

2号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
84	1	98 土師器 甕	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・茶やや 多・白少)	明黄褐	—	—	—

3号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
86	1	99 須惠器 高台付壺	—	(10.0)	積上げロク口 貼付け高台	回転ナデ 底部：へら切り後同心円球のナデ	同心円状のナデ	砂粒少(黒少・白少)	緑灰	—	全体的に歪んでいる	—

4号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
88	1	106 土師器 坏	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(茶少)	橙	—	赤彩	—

7号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
90	1	土師器 坏	(13.8)	(7.4)	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒やや少(角少・長少)	黄橙	—	赤彩	—
90	2	須惠器 坏	—	(6.8)	積上げ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰白	—	底部外面に板状圧痕	—

8号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
91	1	瓦器 椀	—	—	貼付け高台	へら状工具によるミガキ 底部：横ナデ	ミガキ(道具不明)	砂粒極少(白少)	浅黄	有り	小破片のため瓦器椀か 判別不明・内面の一部 に陳付着	—
91	2	須惠器 高台付坏	—	(8.4)	積上げロク口 貼付け高台	回転ナデ 底部：へら切り後ナデ	回転ナデ	砂粒極少(黒極少・白少)	緑灰	—	—	—

10号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
94	1	土師器 坏	(13.7)	(8.6)	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・長多・茶多・白多)	橙	—	赤彩	—
94	2	土師器 壺	—	—	—	ハクリのため不明	回転ナデ	砂粒やや多(茶やや多・白少)	黄橙	—	—	—

94	3	土師器 坏	—	(9.4)	—	積上げ	ハクリのため不明 底部：へら切り	ハクリのため不明	砂粒多(茶多・石多)	外：浅黄橙 内：橙	—	—
94	4	陶器 鉢	—	—	—	—	横方向のナデ	横方向のナデ	砂粒少(白少)	褐灰	—	—

9号溝石観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	石材	法量 (cm, g)			備考	写真 図版
				長さ	幅	重さ		
94	5	砥石	砂岩	(7.5)	(5.9)	(1.45)	(92.2)	—

12号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
96	1	土師器 高台付坏	—	(7.3)	—	貼付け高台	横ナデ 底部：へら切り後円状ナ デ→一部ハテ	横ナデ	砂粒少(白少・茶少)	明赤褐	—	—

13号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
96	2	須恵器 小壺	(9.2)	—	—	ロク口	回転ナデ	砂粒極少(黒少・白少)	口縁：暗赤褐 頸部：赤褐	—	—	—
96	3	須恵器 甕	(22.4)	—	—	タタキ成形	平行タタキ→回転ナデ	砂粒やや多(茶多・黒多・白少)	外：橙 内：浅黄	—	焼成不良	—

14号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
98	1	土師器 高台付坏	(19.0)	12.3	7.75	積上げ 貼付け高台	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	砂粒少(金少・茶少・白少)	橙	—	内面赤彩	—
98	2	須恵器 高台付坏	—	(9.0)	—	積上げロク口 貼付け高台	回転ナデ 底部：へら切り後ナデ	砂粒少(白少)	灰	—	—	—
98	3	須恵器 小鉢	—	(7.6)	—	ロク口	回転ナデ 底部：へら切り後ナデ	砂粒極少(白少)	灰オリーヴ	—	外面に自然釉	—

15号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
99	1	土師器 高台付坏	—	(7.8)	—	貼付け高台	横ナデ	砂粒少(長少・白少)	浅黄橙	—	底部外面はナデ、へら 切りかは明確には不明	—
99	2	土師質 皿	(15.6)	(11.6)	3.3	積上げロク口	回転ナデ 底部：回転糸切り	砂粒極多(角少・長少・黒極多)	明黄褐	—	底部糸切り痕	—

99	3	土師質 小皿	(8.4)	(7.0)	1.7	口ク口	回転ナデ 底部：回転糸切り	回転ナデ	砂粒多(黒多・茶多・長多)	浅黄橙	—	底部糸切り痕	PL.15
99	4	土師質 小皿	(7.4)	(5.4)	1.0	口ク口	回転ナデ 底部：回転糸切り	回転ナデ	砂粒少(茶少)	浅黄橙	—	底部糸切り痕	PL.15
99	5	土師器 坏	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(角少・長多・茶多)	黄橙	—	—	—
99	6	瓦器 椀	—	—	—	—	回転ナデ→ミガキ 下半：へら削り	回転ナデ→全面へらミガキ	砂粒少(長少・茶やや多)	明黄褐	有り	—	—
99	7	須恵器 大甕	—	—	(9.0)	—	横ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・白多)	にぶい黄褐	—	波状文	—
99	8	土師器 坏	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(角少・長多・茶多)	黄橙	—	—	—
99	9	陶器 甕	(43.8)	—	—	口ク口	回転横ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	暗赤灰	—	—	PL.15

15号溝土製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm, g)		胎土	色調	備考	写真 図版	
			長さ	最大孔径					
99	10	土鉢	4.6	1.2	4	7	雲母・輝石	にぶい黄橙	—

ピット出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版	
			口径	底径		器高	外面						内面
100	1	土師器 甕	(30.8)	—	—	積上げ	縦ハケ→横ナデ	口縁：横ハケ→横ナデ 胴部：斜めへら削り	砂粒多(角多・長多・茶多・白少)	外：灰黄褐 内：浅黄橙	有り	外面に薄く煤付着	—
100	2	土師器 甕	—	—	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：縦ハケ(3~4本/cm)	頸部：横ハケ 胴部：へら削り	砂粒多(角多・長やや多・茶やや多)	外：浅黄 内：浅黄橙	有り	外面の一部に黒班	—
100	3	土師器 甕	—	—	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：縦ハケ	口縁：横ハケ	砂粒多(角多・長多・茶少)	浅黄橙	—	—	—
100	4	土師器 甕	—	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(長少・茶多・白多)	外：いぶい赤褐 内：橙	有り	外面に煤付着	—
100	5	土師器 甕	—	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角少・長多)	にぶい褐	—	—	—
100	6	土師器 甕	—	—	—	積上げ	縦ハケ→横ナデ	頸部より上部：横ナデ 頸部より下：へら削り	砂粒多(長多・白多)	橙	有り	外面に煤付着	—
100	7	土師器 坏	—	—	—	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒多(金多・茶少)	橙	—	赤彩	—
100	8	土師器 坏	—	(8.0)	—	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(金少・茶少・白少)	外：にぶい赤褐 内：橙	—	内面赤彩	—
100	9	土師器 坏	(12.8)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・白少)	橙	—	体部外面に沈線 赤彩	—
100	10	土師器 坏	—	(7.0)	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・白少)	橙	—	赤彩	—

100	11	黒色土器 椀	—	(8.3)	—	—	横ナデ	ミガキに近いナデ	砂粒多(金多・白極少)	外：灰褐 内：オリーブ黒	有り	外面全体にクスミ(煤?) 付着	—
100	12	土師器 甗	把手部分：手 つくね貼付け	—	—	横ナデ	横ナデ	ヘラ削り 上部：横ナデ	砂粒多(角多・長多・茶少・白多)	橙	—	把手	—
100	13	須恵器 坏蓋	横上げロクク口	—	—	回転ナデ	回転ナデ	不定方向のナデ	砂粒極少(白極少)	外：にぶい赤褐 内：褐灰	—	—	—
100	14	須恵器 坏蓋	—	(13.6)	—	ヘラ切り後ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少・茶少)	外：灰黄 内：灰白	—	—	—
100	15	須恵器 坏	横上げロクク口	—	(8.6)	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少・黒少)	オリーブ灰	—	—	—
100	16	須恵器 坏	横上げロクク口	—	(8.4)	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ 底部：不定方向のナデ	砂粒少(長少・白少)	灰白	—	—	—
101	17	須恵器 高台付坏	横上げロクク口 貼付け高台	—	(10.8)	回転ナデ 底部：ヘラ切り後未調整	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・白少)	灰白	—	—	—
101	18	須恵器 高台付坏	横上げロクク口 貼付け高台	—	(8.8)	体部：ヘラ削り 底部：ヘラ切り後ナデ	横ナデ→平行横ナデ	横ナデ→平行横ナデ	砂粒極少(茶極少・白極少)	外：灰 内：黄灰	—	—	—
101	19	須恵器 高台付坏	横上げロクク口 貼付け高台	—	8.0	体部上半：回転ナデ 体部下半：ヘラ削り 底部：ヘラ切り後ナデ	体部：回転ナデ 底部：不定方向のナデ	体部：回転ナデ 底部：不定方向のナデ	砂粒極少(白極少)	外：灰白 内：灰オリーブ	—	—	—
101	20	須恵器 坏	ロクク口	—	—	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰白	—	—	内面に墨痕
101	21	須恵器 高台付坏	横上げロクク口 貼付け高台	—	(8.6)	回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	外：灰 内：灰白	—	—	—
101	22	須恵器 甗	—	(20.6)	—	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰	—	—	—
101	23	須恵器 壺	タタキ成形	—	—	格子目タタキ→横ナデ	上半：横ナデ 下半：同心円文→横ナデ	上半：横ナデ 下半：同心円文→横ナデ	砂粒少(白少)	灰	—	—	胴部最大径：(22.8)cm
101	24	須恵器 甗	タタキ成形	—	—	平行タタキ→ナデ	平行タタキ→ナデ	同心円文→平行当て具	砂粒極少(白極少)	外：灰オリーブ 内：灰黄	—	—	—

火葬墓出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		高 器	外 面					
102	1	椀	11.1	6.6	横上げ	胴部：横ナデ 底部：回転ヘラキリ	回転横ナデ	長石・石英・輝石	橙	—	—	PL.15
102	2	高台坏甗	11.4	8.0	横上げ	回転横ナデ	回転横ナデ	長石・石英・輝石	外：黄橙 内：橙	—	—	PL.15
102	3	青磁 蔵骨器	(21.0)	—	横上げ	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	砂粒	外：C-107 白茶色 内：C-218 ページュ色	—	越州窯系青磁 蓋	PL.15
102	3	青磁 蔵骨器	(19.2)	—	横上げ	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	砂粒	外：C-107 白茶色 内：C-107 白茶色	—	越州窯系青磁 身	PL.15

III区内出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
103	1	土師器 甕	(23.4)	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ケズリ	砂粒少(角少・長少)	浅黄橙	—	赤彩	—
103	2	土師器 甕	(22.4)	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：縦ハケ	口縁：横ハケ 胴部：ヘラケズリ	砂粒少(角少・長少)	にぶい黄橙	—	—	—
103	3	土師器 短頸壺	(23.6)	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	砂粒少(角少・長少)	にぶい橙	—	赤彩	—
103	4	須恵器 高坏	(11.8)	6.3	積上げロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒多(白多)	オリーヴ灰	—	—	—
103	5	土師器 坏	(14.4)	(8.5)	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(長多・金少)	明赤褐	—	赤彩	—
103	6	土師質 皿	—	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒少(茶少・白少)	にぶい橙	—	底部糸切り痕	—
103	7	土師器 椀(?)	—	(7.2)	積上げ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	砂粒多(長多・茶少・白少)	外：灰褐 内：橙	—	—	—
103	8	土師器 坏	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(金多・黒少・白少)	橙	—	赤彩	—
103	9	土師器 高台付坏	—	(8.6)	積上げ 貼付け高台	横ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・金多・白少)	外：灰褐 内：にぶい赤褐	有り	外面に煤付着 赤彩	—
103	10	土師器 小甕	(12.0)	—	積上げ	横ナデ	横方向のヘラケズリ	砂粒多(角少・長少・輝少)	外：にぶい黄橙 内：灰褐	有り	外面は被熱が強く部分的に崩落	—
103	11	甗?	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	白砂等の細砂粒	にぶい褐	—	底部?外面より径6mm 前後の工具による穿孔	—
103	12	土製模造鏡	(3.7)	—	手づくね	ナデ	ナデ	白砂等の細砂粒	にぶい黄橙	—	紐部分は貼付け 穿孔は細い棒状工具による	—
103	13	須恵器 坏蓋	—	—	ロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	オリーヴ灰	—	—	—
103	14	須恵器 坏	(11.8)	6.3	積上げロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒多(白多)	オリーヴ灰	—	—	—
103	15	須恵器 高台付坏	—	(10.8)	積上げロク口 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白極少)	灰白	—	—	—
103	16	須恵器 坏	(13.0)	(10.4)	積上げロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少・茶少)	にぶい黄橙	—	—	—
103	17	須恵器 小壺(?)	—	(6.2)	積上げロク口 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少)	浅黄	—	—	—

III区内石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	石 材	法 量 (cm, g)			備 考	写真 図版
				長さ	幅	厚み		
104	19	石核	チャート	(3.35)	(3.45)	1.45	節理有り	—

川区内瓦観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	部 位	長さ・直径	幅・外縁幅	厚さ・瓦当厚	瓦当高・外縁高	凹面・瓦当裏	凸面・瓦当表	連結側面	凹面・広端面	側面	備考	写真 図版
104	18	丸瓦		(13.2)	—	2.4	—	ナデ	布目状痕	—	—	—		—

江津湖遺跡群 江津湖東一Ⅳ区

1号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
107	1	土師器 杯	(12.0)	(6.6)	2.8 積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(茶少・白少)	橙	—	赤彩	—
107	2	土師器 杯	—	—	— 積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(茶少・白少)	にぶい黄橙	—	—	—
107	3	土師器 杯	—	—	— 積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(茶少)	橙	—	赤彩	—
107	4	土師器 杯	—	—	— 積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(白少・茶多)	橙	—	赤彩	—
107	5	須恵器 杯	—	—	— 積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰	—	—	—
107	6	須恵器 杯	—	—	— 積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	オリーグ灰	—	—	—

1号掘立柱建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
109	1	土師器 皿	(13.9)	—	— 積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(金少・白少)	橙	有り	口縁に灯明痕 赤彩	—
109	2	土師器 杯	—	(7.6)	— 積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・茶少)	にぶい黄橙	—	赤彩	—
109	3	須恵器 杯	—	—	— 積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(角少・白少)	灰白	—	—	—
109	4	須恵器 杯	—	(7.0)	— 積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(黒少・白少)	灰白	—	—	—

1号土壇出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
111	1	土師器 盤	—	—	— 積上げ 高台貼付け	横ナデ	同心円形のナデ→暗文状 のへらミガキ	砂粒多(茶多・金多)	橙	—	赤彩	—
111	2	土師器 杯	—	(9.0)	— 積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒多(茶多・白多)	黄橙	—	赤彩	—
111	3	土師器 甕	—	—	— 積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角多・長多)	浅黄橙	有り	外面に煤付着	—
111	4	須恵器 杯	—	(6.6)	— 積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白極少)	灰白	—	—	—

2号土壙出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
113	1	須恵器 坏	-	-	-			砂粒少(黒少・白少)	にぶい黄橙	-		-
113	2	土師器 坏	-	-	槽上げ	横ナデ 底部：へラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒やや多(角少・長多・茶多)	にぶい黄橙	有リ	外面の赤色顔料の上に 煤付着	-

棚列状遺構出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
115	1	土師器 坏	-	(8.2)	槽上げ	横ナデ 底部：へラ切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・金少・白少)	橙	-	赤彩	-
115	2	須恵器 坏	-	-	槽上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒極少・白少)	灰オリーヴ	-		-

5層一括出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
116	1	須恵器 坏蓋	(11.0)	-	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・白少)	灰	-		-

健軍京塚下Ⅰ区

1号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
121	1	須恵器 高台付坏	16.8	9.9	5.2	襷上げロク口 高台貼付け	回転ナデ 底部：へら切り後ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰	—	PL.21
121	2	須恵器 甕	—	—	—	タタキ成形 格子目状タタキ	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(金多・長少・茶多・白多)	橙	—	—
121	3	土師器 高坏	(20.0)	—	—	襷上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・白少)	浅黄橙	—	PL.21
121	4	土師器 鉢	—	—	—	襷上げ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ	口縁：横ナデ 胴部：へら削り	砂粒多(角少・茶多・白多)	灰黄褐	有り	外面に煤付着
121	5	土師器 甕	—	—	—	襷上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：へら削り	砂粒多(長少・黒多・白少)	橙	—	—

1号竪穴建物出土遺物(石)観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	石材	法量 (cm, g)			備考	写真 図版	
				長さ	幅	厚み			
121	6	カマドの袖石	砂岩	(16.8)	(10.0)	(9.2)	(1640)	台石の転用	PL.21

ピット出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
122	1	土師器 甕	—	—	—	襷上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角多・長多・白少)	にぶい橙	有り	内面に炭化物付着
122	2	土師器 坏	—	(8.7)	—	襷上げ	ナデ	横ナデ	砂粒多(金少・長少・茶多・白少)	橙	—	—
122	3	土師器 坏	—	(7.6)	—	襷上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(金多・茶少・黒多)	外：にぶい黄橙 内：橙	—	—
122	4	須恵器 高台付坏	—	(7.6)	—	襷上げロク口 高台貼付け	回転ナデ 底部：へら切り後未調整	回転ナデ	砂粒極少(黒少)	灰白	—	—

健軍京塚下II区

1号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
125	1	須恵器 坏	(12.0)	(7.4)	3.45 積上げロクロ 口	回転ナデ 体部下半：へら削り 底部：へら切り後	回転ナデ	砂粒少(白少)	外：灰 内：灰黄褐	—		PL.21
125	2	須恵器 坏	(13.1)	(9.6)	— 積上げロクロ 口	回転ナデ 底部：へら切り後未調整	回転ナデ	砂粒少(角極少・白少)	灰白	—		—
125	3	須恵器 高台付坏	(17.0)	(11.0)	5.5 積上げロクロ 貼付け高台	回転ナデ 底部：へら切り後	回転ナデ	砂粒極少(黒少・茶少・白少)	外：赤褐 内：にぶい黄	—	荒尾産	PL.21
125	4	須恵器 高台付坏	(13.2)	(8.8)	4.3 積上げロクロ 貼付け高台	回転ナデ 底部：へら切り後ナデ	回転ナデ	砂粒少(長極少・白少)	灰	—		PL.21
125	5	土師器 坏	(15.1)	(10.2)	3.2 積上げ	横ナデ・底部：	横ナデ	砂粒やや多(黒多・茶多・白多)	浅黄橙	—	赤彩	PL.21
125	6	土師器 坏	—	(7.0)	— 積上げ	横ナデ・底部：	横ナデ	砂粒少(長少・茶多)	浅黄橙	—	内面赤彩	—
125	7	土師器 甕	(26.2)	—	— 積上げ	口縁：横ナデ 胴部：縦ハケ→横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：へら削り→横ナデ	砂粒多(長多・茶多・黒多)	浅黄	—		PL.21

2号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
128	1	須恵器 甕	—	—	— タタキ成形	タタキ	円形当て具痕	砂粒やや多(黒少・白多)	灰白	—		PL.21
128	2	須恵器 坏蓋	(17.0)	—	— ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(黒少・白少)	灰	—		—
128	3	須恵器 坏蓋	(17.0)	—	— ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・黒少・白少)	灰白	—		—
128	4	土師器 甕	(26.0)	—	— 積上げ	口縁：横ナデ 胴部：縦・斜めハケ	口縁：横ナデ 胴部：へら削り	砂粒多(角やや少・茶多・白少)	浅黄橙	有り	頸部径：(19.9cm) 胴部最大径：(24.6cm)	PL.21
128	5	土師器 甕	(24.4)	—	— 積上げ	口縁：横ナデ 胴部：縦ハケ	口縁：横ナデ 胴部：へら削り	砂粒多(茶多・黒少・白多)	浅黄橙	—	頸部径：(20.0cm)	PL.21
128	6	縄文土器 深鉢	—	—	—	貝殻染痕	貝殻染痕	砂粒・白砂粒	橙	—		—

3号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
130	1	須恵器 坏蓋	15.0	—	— 積上げロクロ 口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒やや多・白少)	灰	—		PL.22
130	2	須恵器 高台付坏	—	9.5	— 積上げロクロ 貼付け高台	回転ナデ 底部：へら切り後	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰白	—		PL.22

130	3	須恵器 坏	(12.3)	(7.4)	4.3	積上げロクロ	回転ナデ 底部：へら切り後	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰白	—	—
130	4	土師器 坏	(13.0)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(長少・茶多・白少)	浅黄橙	—	—

5号竪穴建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
133	1	須恵器 坏	—	(8.8)	—	積上げ 貼付け高台	横ナデ 底部：	横ナデ	灰白	—	—	—
133	2	須恵器 坏	—	—	—	積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	外：暗灰黄 内：灰黄	—	—	—
133	3	土師器 坏	(11.6)	(5.6)	2.7	積上げ	横ナデ	横ナデ	橙	—	—	—
133	4	土師器 坏	(15.6)	—	—	積上げ	横ナデ→へらミガキ	横ナデ	橙	—	赤彩	—
133	5	土師器 椀	(16.4)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	橙	—	赤彩	—
133	6	土師器 坏	(17.0)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	橙	—	赤彩	—
133	7	土師器 坏	—	(8.6)	—	積上げ	へら削り→横ナデ 底部：	横ナデ→暗文状へらミガキ	橙	—	赤彩	—
133	8	土師器 坏	—	10.1	—	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	橙	—	底部外面に、「満」? 墨書 赤彩	PL.22
133	9	土師器 坏	—	(9.2)	—	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ→暗文状へらミガキ	橙	—	赤彩	PL.22
133	10	須恵器 壺	—	(13.6)	—	貼付け高台	回転ナデ	ハクリのため不明	青灰	—	—	—
133	11	土師器 甕	(27.2)	—	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 胴部：へら削り	橙	—	頸部径：(22.0cm)	—

2号掘立柱建物出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)			成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径	器高		外面	内面					
136	柱穴1	土師器 鉢	—	—	—	積上げ	ミガキに近いナデ	ミガキに近いナデ	砂粒多(角少・長多・白少・ 砂少)	—	赤彩	—	
136		土師器 甕	—	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(長多・黒多・白多)	—	—	—	
136	柱穴2	須恵器 坏	—	—	—	積上げロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白少)	—	灰オリーブ	—	
136		須恵器 坏	12.1	7.2	4.0	積上げロクロ	回転ナデ 底部：へら切り後ナデ	回転ナデ	砂粒多(黒多・白多)	—	灰	PL.22	
136		土師器 皿	(15.4)	(13.0)	(1.7)	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・黒少)	—	赤彩	PL.22	

136	柱穴2	4	土師器 坏	12.8	9.8	3.2	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・白少)	にぶい黄橙	—	赤彩	—
136		5	土師器 坏	(13.2)	(8.4)	3.0	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(金多・白少)	橙	—	赤彩	—
136		6	須惠器 甕	(21.2)	—	—	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白極少)	外：にぶい赤褐 内：黄灰	—	頸部径：(18.4cm)	—
136		7	土師器 高坏	—	(14.8)	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(黒少)	橙	—	赤彩、脚部	—
136	柱穴3	1	須惠器 坏蓋	(18.0)	—	—	ロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒多・白少)		—		—
136		2	須惠器 坏蓋	—	—	—	ロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒多・白少)	灰	—		—
136		3	須惠器 坏	—	—	—	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰オリーヴ	—		—
136		4	土師器 坏蓋	(14.8)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(金少・茶少・黒少・ 白多)	橙	—	赤彩	—
136	柱穴4	1	土師器 坏	—	—	—	積上げ	ナデ	ナデ	砂粒少(金多・角少・長少・ 茶少)	橙	—	赤彩	—
136	柱穴4・5	2	須惠器 横瓶	—	—	—	タタキ成形	平行タタキ	当て具痕 (平行・同心円)	砂粒少(黒少・白少)	外：灰 内：灰白	—		PL22
137	柱穴5	1	土師器 坏	(16.0)	(8.8)	3.3	積上げ	横ナデ→暗文状へらミガキ	横ナデ→暗文状へらミガキ	砂粒少(茶少・白少)	橙	—	赤彩	—
137		2	土師器 坏	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒少(金少・黒少)	橙	—	赤彩	—
137		3	土師器 甕	(27.0)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角多・長少・白少)	橙	有り	口縁外面に煤付着	—
137	柱穴9	1	土師器 坏	—	(8.0)	—	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後	横ナデ	砂粒少(角少・黒少・白少)	橙	—	赤彩	—

2号土壙出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
140	1	須惠器 坏蓋	(15.6)	—	3.2	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	砂粒やや多(金多・茶多・白少)	にぶい黄	—	PL22
140	2	須惠器 坏蓋	—	—	—	ロクロ	回転ナデ→一部へら削り	回転ナデ	砂粒少(白少)	灰オリーヴ	—	—
141	3	須惠器 坏	(12.8)	7.1	3.3	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒多(角少・茶多・黒少・白多)	外：灰 内：橙	—	PL22
141	4	須惠器 坏	(12.4)	—	—	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰黄	—	—
141	5	須惠器 坏	—	—	—	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	灰白	—	—
141	6	土師器 坏	(13.1)	(7.8)	(3.3)	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(茶少・白少)	橙	外底面に墨書痕跡	PL22

141	7	土師器 環	13.2	8.4	2.9	積上げ口クロク	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(金多・角少・長少・茶少)	橙	—	外底面に墨書「式」か 赤彩	PL.22
141	8	土師器 環	13.2	8.1	3.0	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(金少・茶少・長少・白少)	にぶい橙	—	体部外面の一部に黒斑 赤彩	PL.23
141	9	土師器 環	(13.0)	(7.4)	3.1	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(茶少・白少)	橙	—	赤彩	PL.23
141	10	土師器 環	12.9	8.7	2.9	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後未調整	横ナデ	砂粒少(長少・茶多・白少)	にぶい橙	—	赤彩	PL.23
141	11	土師器 環	(13.4)	(8.2)	3.3	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(金多・角極少・茶少)	橙	—	赤彩	PL.23
141	12	土師器 環	(13.0)	9.9	8.0	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(茶多・黒少・白少)	にぶい橙	—	赤彩	PL.23
141	13	土師器 環	(12.0)	(8.2)	3.25	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(茶多・白少)	橙	—	赤彩	—
141	14	土師器 環	(12.0)	(8.0)	—	口クロク	横ナデ	横ナデ	砂粒少(金少・角少・長少・茶少)	橙	—	—	—
141	15	土師器 環	(14.2)	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・白少)	にぶい橙	—	赤彩	—
141	16	土師器 環	(16.6)	—	—	積上げ口クロク	ミガキに近い回転ナデ	ミガキに近い 回転ナデ	砂粒少(金多・茶少・白極少)	にぶい黄褐	—	赤彩	PL.23
141	17	土師器 皿	15.2	11.8	1.8	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後未調整	横ナデ	砂粒少(金多・角少・長少・茶少)	橙	—	赤彩	PL.23
141	18	土師器 壺	—	—	—	積上げ	横ナデ	口縁：横ナデ 体部：縦方向へら削り	砂粒極多(角多・白多)	浅黄橙	—	—	PL.23
141	19	土師製 移動式カマド	—	—	—	—	縦ハケ→ナデ 下位：横方向のへら削り	横方向の削り	砂粒極多(角多・長多・金多・砂レ キ多)	外：淡黄 内：浅黄	—	焼成不良、全体的に造 りが荒い	PL.23

1号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
143	1	須恵器 小壺	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	にぶい橙	—	—	—
143	2	土師器 鉢	—	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒多(茶多)	にぶい橙	—	赤彩	—

2号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm)		成形	調 整		胎土	色 調	被 熱	備 考	写真 図版
			口 径	底 径		器 高	外 面					
143	1	磁器 (近世)	—	(5.6)	—	釉ハギ	釉ハギ へらケズリ	黒色粒子	にぶい黄褐 釉：オリーブ	—	—	—
143	2	須恵器 坏蓋	(14.0)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白多)	灰オリーブ	—	—	—
143	3	須恵器 坏蓋	(16.6)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	外：黄褐 内：暗灰黄	—	—	—

143	4	須惠器 高台付坏	—	(9.4)	—	襷上げロク口 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	外：灰白 内：にぶい黄	—	—
143	5	須惠器 椀	(14.4)	—	—	襷上げロク口	へラ削り→回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	外：黒褐 内：灰オリーブ	—	—
143	6	土師器 高台付坏	—	(8.0)	—	襷上げ 貼付け高台	横ナデ 底部：へラ切り後	横ナデ	砂粒多(角少・黒多・白少)	外：灰オリーブ 内：浅黄	—	—
143	7	須惠器 大甕	(35.6)	—	—	ロク口	回転ナデ→波状紋	回転ナデ	砂粒少(黒多・白少)	にぶい赤褐	—	—
143	8	土師器 坏	—	—	—	襷上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒やや多(茶多)	橙	—	—
143	9	土師器 甕	(18.8)	—	—	襷上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(長多・茶多・黒多)	浅黄橙	有り	頸部径：14.8cm 頸部外面に煤付着
143	10	土師器 甕	(20.0)	—	—	襷上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角多・長多・白多)	外：黄褐 内：にぶい橙	有り	口縁外面に煤付着
143	11	土師器 坏(?)	—	—	—	—	底部：へラ切り後ナデ	ナデ	砂粒少(長少・茶少)	橙	—	底部外面に墨書赤彩
143	12	土師器 皿	(19.0)	(14.0)	(1.9)	襷上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(金多・角少・黒少・白少)	橙	—	赤彩
143	13	土師器 小鉢	(7.2)	5.3	3.8	手づくね	横ナデ	横ナデ	砂粒少(角多・長少)	明赤褐	—	底部外面に墨書 赤彩

3号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	器高					
145	1	須惠器 坏	—	—	襷上げロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(白極少)	外：灰オリーブ 内：にぶい橙	—	—	—
145	2	須惠器 坏	—	—	ロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(白やや多)	外：黒 内：暗灰黄	—	—	—
145	3	須惠器 坏	(13.0)	—	襷上げロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(黒少・白多)	灰	—	—	—
145	4	須惠器 壺	—	(9.0)	襷上げロク口 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(黒極少・白少)	外：暗青灰 内：緑灰	—	—	—
145	5	須惠器 甕	(20.0)	—	タタキ成形	口縁：平行タタキ→回転ナデ 胴部：格子目状タタキ	口縁：回転ナデ 胴部：同心円紋→回転ナデ	砂粒極少(白極少)	灰	—	頸部径：(16.0cm)	—

4号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	器高					
145	1	須惠器 坏蓋	—	—	ロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒多(黒多・白少)	灰オリーブ	—	—	—
145	2	須惠器 坏蓋	(12.8)	—	ロク口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白多)	青灰	—	—	—
145	3	須惠器 壺	—	—	タタキ成形	同心円紋→回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒少・白少)	褐灰	—	—	—

5号溝出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
145	1	須恵器 長頸壺	—	—	円蓋閉塞(?) 突帯貼付け	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(黒少・白少)	外：オリーヴ黒 内：灰	—	頸部径：(8.0cm)	—
145	2	須恵器 甕	(19.6)	—	タタキ成形	口縁：回転ナデ 胴部：格子目状タタキ	口縁：回転ナデ 胴部：同心円紋→回転ナデ	砂粒少(茶少・黒少)	外：にぶい黄橙 内：暗灰黄	—	頸部径：(17.2cm) 頸部内側に指押さえ痕	—

II区内出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 (cm)		成形	調整		胎土	色調	被熱	備考	写真 図版
			口径	底径		器高	外面					
146	1	土師器 甕	(22.0)	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ	砂粒多(角多・長多・白多)	橙	—	頸部径：(19.2cm)	—
146	2	土師器 坏	(11.8)	(7.0)	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒少(長少・白少)	橙	—	赤彩	—
146	3	土師器 坏	13.0	7.6	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角多・長多・白多)	橙	—	赤彩	PL.23
146	4	土師器 坏	(13.6)	(10.0)	積上げ	横ナデ 底部：へら切り後ナデ	横ナデ	砂粒少(角少・長少・茶多・白多)	外：にぶい橙 内：橙	—	—	—
146	5	土師器 坏	—	—	積上げ	横ナデ	横ナデ	砂粒多(角多・長多・白多)	橙	有り	口縁内外に煤付着	—
146	6	土師器 鍋	(24.4)	—	積上げ	口縁：横ナデ 胴部：不定方向のハケ	口縁：横ハケ 胴部：へら削り	砂粒多(角多・長多・茶多)	にぶい橙	—	頸部径：(19.6cm)	—
146	7	土師器 小型壺	(7.0)	—	—	横ナデ	横ナデ	砂粒極少(角極少・長極少)	橙	—	赤彩	PL.23
146	8	須恵器 坏蓋	(14.0)	—	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(長少・砂レキ極少)	外：にぶい赤褐 内：褐灰	—	—	PL.23
146	9	須恵器 壺蓋	(13.4)	—	ロクロ右回り	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(角少・黒多)	黄灰	—	—	PL.23
146	10	須恵器 高台付坏	—	(8.2)	積上げロクロ口 貼付け高台	回転ナデ	回転ナデ	砂粒極少(長少・黒少)	灰白	—	—	—
146	11	須恵器 坏	12.0	7.6	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(長少・白少)	黄灰	—	—	PL.23
146	12	須恵器 壺	—	(11.6)	積上げロクロ口 貼付け高台	回転ナデ 胴部下位：へら削り	回転ナデ	砂粒極少(黒極少)	灰	—	—	—
146	13	須恵器 壺	(8.0)	—	積上げロクロ口	回転ナデ	回転ナデ	砂粒少(黒多・白少)	外：オリープ黒 内：灰	—	—	PL.23

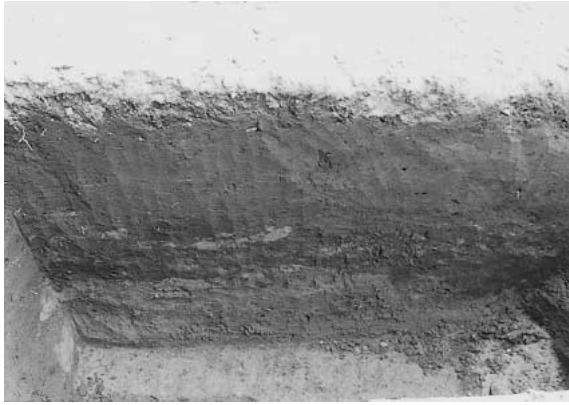
写真図版



4号竪穴建物一括遺物出土状況



4号竪穴建物一括遺物復元状態



橋脚1 トレンチ土層断面



橋脚2 トレンチ土層断面



I区調査区壁土層断面 (南東壁)



1号竪穴建物遺物出土状況 (南から)



2号竪穴建物遺物出土状況 (北から)



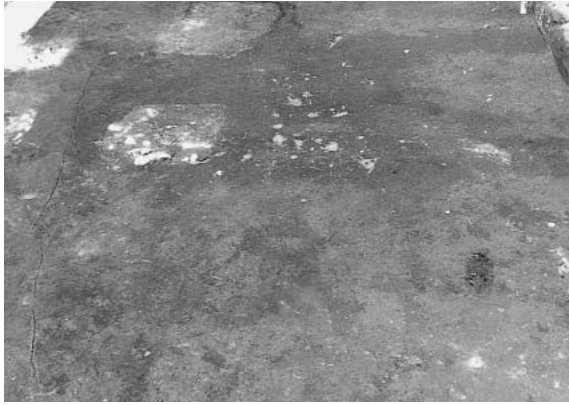
1号・2号竪穴建物切り合い土層状況 (南から)



1号竪穴建物柱検出状況 (南から)



2号竪穴建物完掘状況 (北から)



3号竪穴建物検出状況（北西から）



3号竪穴建物焼土出土状況（北から）



4号竪穴建物検出状況（北から）



4号竪穴建物遺物出土状況（北から）



4号竪穴建物遺物出土状況（北から）



4号竪穴建物遺物集中状況（北から）



I区完掘状況（南西から）



I区調査区全景（北東から）

PL. 4

1号竖穴建物



2号竖穴建物



4号竖穴建物



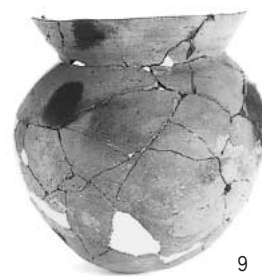
4号竖穴建物



8



7



9



10



14



13



12



15



16



13

12



17



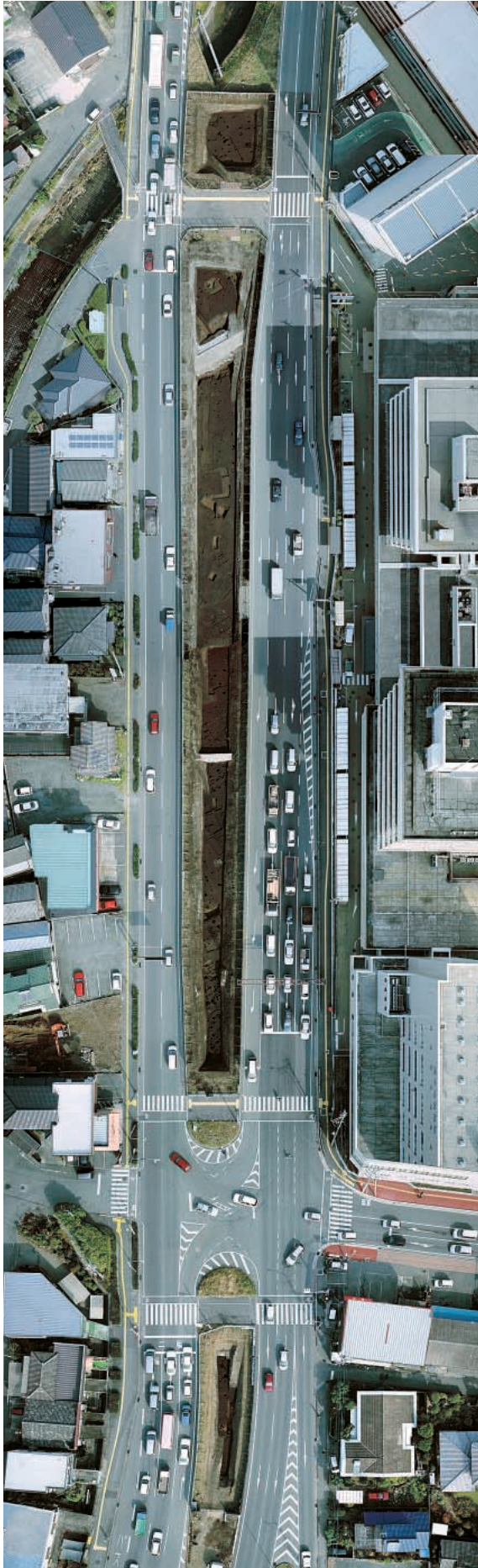
19



25



27



江津湖遺跡群

江津湖東-II・III・IV区空撮

江津湖東-IV区

江津湖東-III区

江津湖東-II区



江津湖東一Ⅱ区完掘状況（北から）



4号竪穴建物検出状況（北から）



4号竪穴建物検出状況（北から）

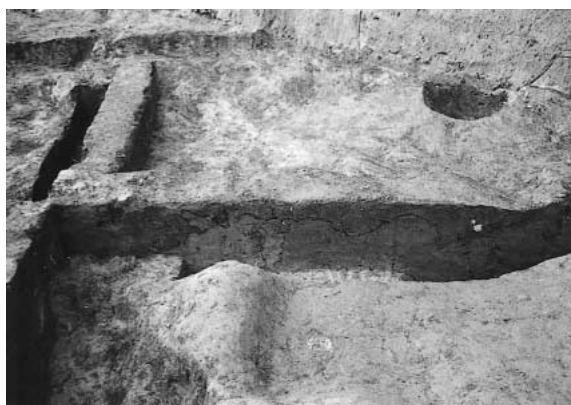
江津湖遺跡群 江津湖東一Ⅲ区



1号竪穴建物完掘状況（北から）



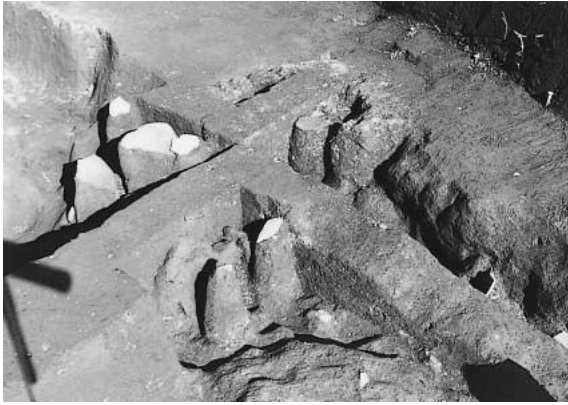
2号竪穴建物検出状況（北から）



2号竪穴建物貼床状況土層断面（東から）



2号竪穴建物貼床除去後状況（北から）



3号竪穴建物カマド状況（北西から）



6号竪穴建物カマド状況（南東から）



6号竪穴建物カマド粘土被覆状況（南東から）



6号竪穴建物カマド袖石検出状況（南から）



6号竪穴建物カマド火床下土壌検出状況（南から）



6号竪穴建物カマド完掘状況（南東から）



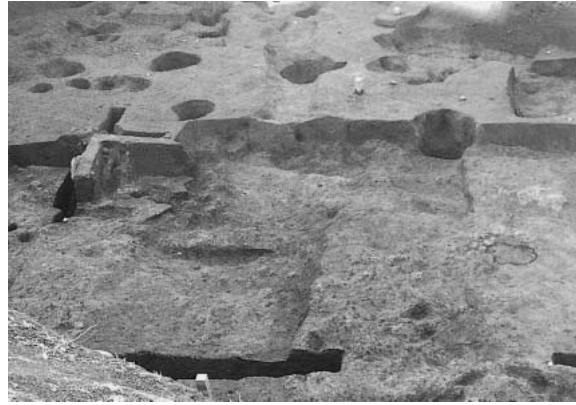
8号竪穴建物カマド状況（北北東から）



9号竪穴建物カマド完掘状況（北北東から）



8号竪穴建物完掘状況（西から）



9号竪穴建物完掘状況（西から）



11号竪穴建物状況（西から）



11号竪穴建物カマド状況（南から）



12号竪穴建物発掘状況（南東から）



13号竪穴建物発掘状況



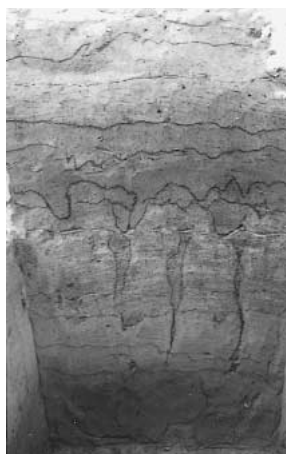
14号竪穴建物カマド粘土状況（西から）



14号竪穴建物カマド粘土土層断面（西から）



15号・16号竪穴建物完掘状況（東から）



Ⅲ区土層断面



2号掘立柱建物完掘状況（北西から）



3号掘立柱建物完掘状況（北から）



2号土坑完掘状況（北から）



3号土坑完掘状況（東から）



6号土坑完掘状況（北西から）



11号土壌発掘状況（東から）



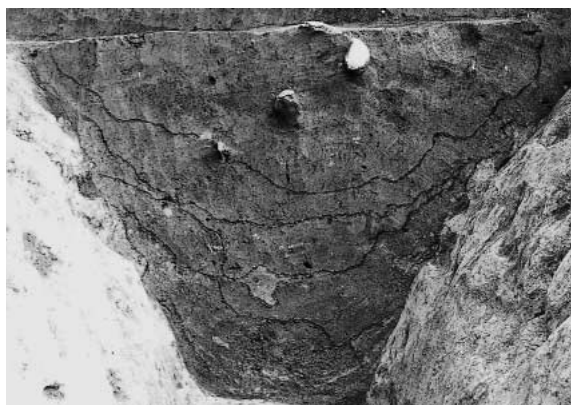
1号溝検出状況（東から）



1号溝石出土状況（東から）



1号溝石出土状況（西から）



1号溝土層断面（東から）



1号溝完掘状況（西から）



2号溝完掘状況



8号溝土層



14・15号溝状況（北東から）



14・15号溝土層断面（南から）

江津湖遺跡群 江津湖東一Ⅳ区



全体遺構検出状況（北西から）



1号竪穴建物検出状況（北西から）



1号土壇検出状況（北から）



1号土壇断面確認状況（南西から）



SP-02半裁状況



SP-06半裁状況

3～7号豎穴建物



13



20



21

8号豎穴建物



3

9号豎穴建物



1



6



4

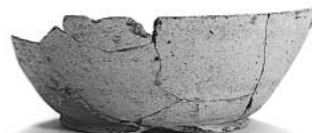
11号豎穴建物



1



5



7



8



11



13



14



12

PL.14

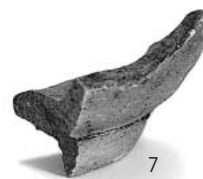
13号竖穴建物



4



5



7

14号溝



1



2



11



12

2号土境



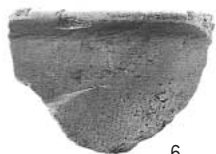
1

3

2

4

1号溝



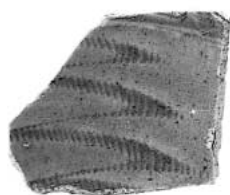
6



10



23

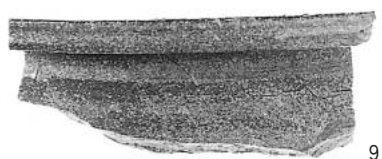


25



24

15号溝



火葬墓出土遺物





健軍京塚下遺跡一Ⅰ区

健軍京塚下遺跡一Ⅱ区



I区遺構検出状況（北西から）

健軍京塚下遺跡-II区



1号竪穴建物検出状況（南から）



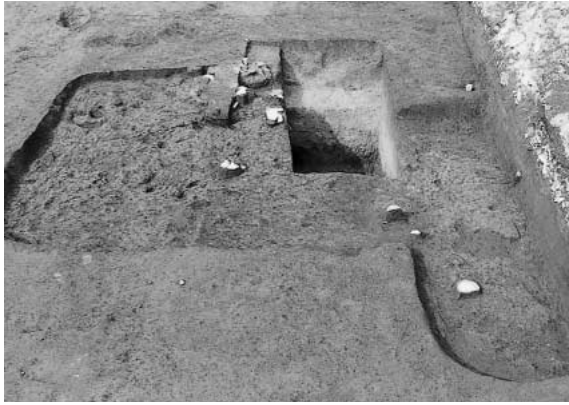
1号竪穴建物遺物出土状況（南から）



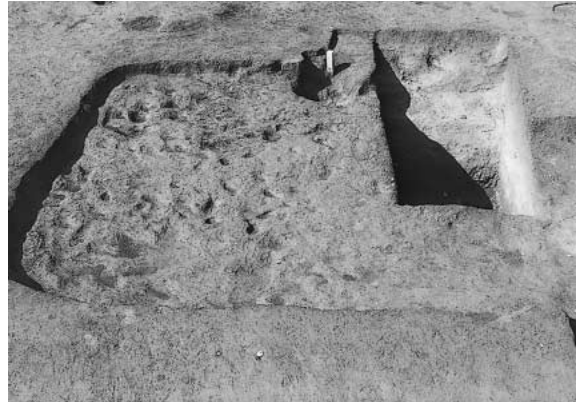
1号竪穴建物カマド検出状況（南東から）



1号竪穴建物カマド土層断面（東から）



2号竪穴建物・3号竪穴建物切合状況（南南東から）



2号竪穴建物完掘状況（南南東から）



2号竪穴建物貼床除去後状況（南南東から）



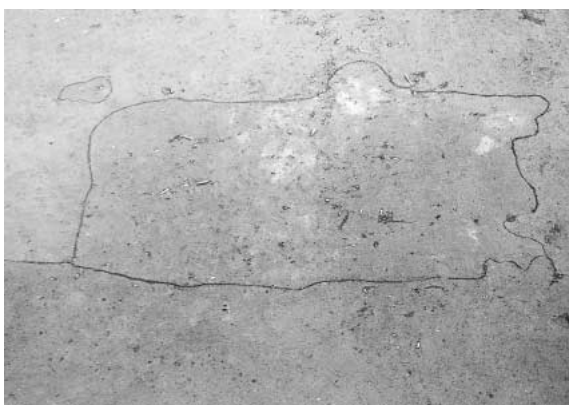
2号竪穴建物貼床下土層（西から）



2号竪穴建物カマド土層（東から）



3号竪穴建物完掘状況（南西から）



4号竪穴建物検出状況（西から）



5号竪穴建物検出状況（東から）



2号掘立柱建物柱穴半裁状況



3号掘立柱建物柱穴半裁状況



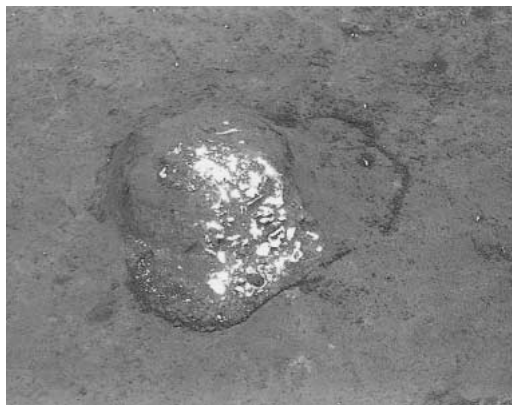
2号溝完掘状況（北から）



掘立柱建物完掘状況（南から）



5号溝遺物出土状況（西から）



3号土壙貝殻ピット



北側壁土層



A-12G付近土層



B-17・18G付近土層



土層断面

I 区 1号竖穴建物



II 区 1号竖穴建物



II 区 2号竖穴建物



P L .22

II区 3号豎穴建物



II区 5号豎穴建物



II区 2号掘立柱建物
柱穴4,5接合



II区 2号掘立柱建物
柱穴2



II区 2号土壇



II区 2号土坑



8



9



10



11



12



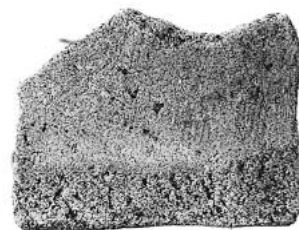
16



17



18



19

II区 2号沟



13

II区 出土遺物



3



8



7



9



11



13

あ と が き

平成16年度に事前調整、予備調査を、平成17年度に一般国道57号熊本東バイパスの中央分離帯を中心として本調査を実施した、「江津湖遺跡群」「健軍京塚下遺跡」の報告書をやっと平成19年度末に発行することとなった。

本調査時には主要幹線道路の中央分離帯内では、自動車の危険と騒音・排気ガス、さらに閉鎖的な空間と夏の炎天下等に悩まされた。調査員・作業員それぞれが、それらに耐えながら調査を行ってきた。平常の調査に比べかなり気を遣いながらであったことが思い出される。さらに工事工程に沿った調査であったため、各調査区の調査期間を制限することとなり、遺跡のボリュームに必ずしも期間を整合させることができなかったのも事実である。

翌年度から整理作業と報告書の作成を進めたが、単年度で終了することが諸般の事情でできず、平成18年度の印刷もできなくなった。そのため、何とか印刷を先送りしながら、不十分な箇所の実作業を実施し、今回の印刷・発行にたどり着いた次第である。

事前調整から報告書発行まで、足かけ4年度間要した発掘調査の各過程で多くの方々のお世話になった。最後に、本文中で触れることのできなかった実際の作業に携わられた方々の名を記して、謝意を表したい。(敬称略)

前田宏一郎、前田日出男、福田久美子、遠山英記、前田節子、早崎尚子、押方富江、小細工洋子、桃井哲夫、上田昌秀、森 健次、田中和博、溜渕俊子、小田須磨子、羅 美鳳、濱道美恵、林田恵子、松本和徳、吉野綾、岡本裕美、宮嶋 徹、児玉洋平、林 隆暢、安田節爾、武原富雄、上村隆太、一村文美江、高田啓介、林田謙二、吉武弘智（以上本調査）

吉本清子、益田久子、古閑知子、井上裕美、山田友子、坂本貴美子、島川千秋、境美和、松本和徳、赤星和美、戸田紀美子、岩下恵美子、清水千郷（以上整理作業・報告書作成）

報告書抄録

フリガナ	エヅコイセキグン・ケンゲンキョウヅカシタイセキ
書名	江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡
副書名	一般国道57号熊本東バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告 第245集
編著者	濱田教靖、坂田和弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2008年3月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
エヅコイセキグン 江津湖遺跡群	クマモトシコトウ 熊本市湖東	201	293	32°46'57.48"	130°44'43.79"	20040614	3,372m ²	一般国道 57号熊本 東バイパ ス六車線 化工事
	クマモトシクワミズ 熊本市神水			32°46'49.64"	130°44'39.77"	20050423		
ケンゲンキョウヅカシタイセキ 健軍京塚下遺跡		201	552	32°47'12.06"	130°44'47.97"			
				32°47'02.53"	130°44'46.83"			

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江津湖遺跡群 健軍京塚下遺跡	集落	縄文 古墳 古代 中世	住居跡 10 掘立柱建物跡 8 大溝状遺構 3 土壇 30	縄文土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	墨書土器 越州窯系青磁

熊本県文化財調査報告 第245集

江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡

発行年月日 平成20年 3 月31日

編 集

発 行 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市水前寺 6 丁目18番 1 号

TEL 096-383-1111

印 刷

製 本 白木メディア株式会社

〒862-0976 熊本市九品寺 5 丁目 9 番35号

19 教委 教文

② 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 245 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 江津湖遺跡群 健軍京塚下遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>